



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | <翻刻>札幌農学校第23期生川嶋一郎日記（1899～1904年）（北海道大学大学文書館資料叢書；3）全1冊                             |
| Author(s)        | 山本, 美穂子; 川嶋, 昭二   |
| Description      | 翻刻・編集: 山本美穂子. 補訂: 川嶋昭二  |
| Relation         | <翻刻>札幌農学校第23期生川嶋一郎日記（1899～1904年）  |
| Citation         | 北海道大学大学文書館資料叢書, 3   |
| Issue Date       | 2009-06-19  |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/43295">https://hdl.handle.net/2115/43295</a> |
| Type             | journal   |
| File Information | HMS003.pdf  |



〈翻刻〉

札幌農学校第23期生川嶋一郎日記

(1899～1904年)

山本美穂子 (翻刻)

川嶋 昭二 (補訂)

# 目次

---

〔口絵〕 i~xxii

〔目次〕

〔凡例〕

〔翻刻〕

〈当用日記〉

1. 明治三十六年当用日記（1903年）…………… 1
2. 明治三十七年当用日記（1904年）……………51
- 附録1：明治三十六年金錢出納録……………115
- 附録2：明治三十七年金錢出納録……………121
- 附録3：明治三十六年収支一覽表……………128
- 附録4：明治三十七年収支一覽表……………128

〈紀行日記〉

3. 鎌倉日記（1899年4月）……………129
4. 明治卅五年夏 東北遊記（1902年7月）……………135
- 附録5：金錢出納録……………157
5. 恵庭登山略記（1904年7月）……………159
6. 明治卅七年孟夏 北海紀行（1904年8月～9月）……………160
- 附録6：金錢出納録……………175

〔参考資料〕

1. 川嶋一郎略年譜……………178
2. 札幌農学校第23期生本科履修表……………179

〔解題〕……………180

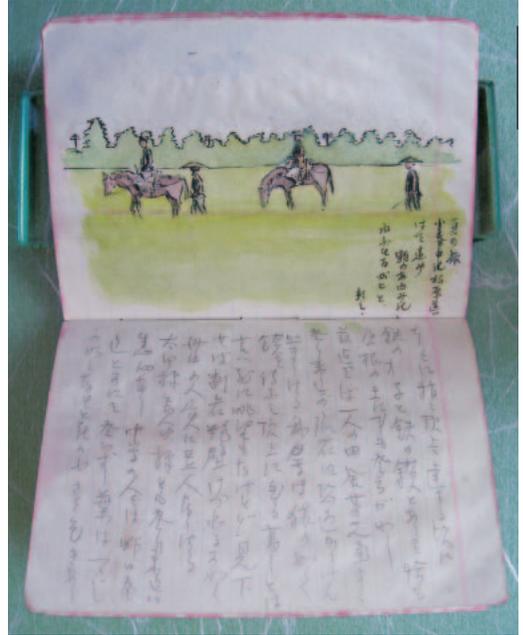
〔参考文献〕……………183

## 〔凡例〕

1. 適宜、句読点を付した。
2. 漢字の旧字・異体字は基本的に常用の新字に改めた。
3. 難読字には、読み仮名を振った（例：瓦<sup>ぐらむ</sup>）。
4. 明らかな脱字は、[ ] に入れて補った（例：出掛ケ [タ] ノデ）。
5. 文意の通じにくい誤字には、正字を [ ] に入れて誤字の上に記した（例：期<sup>[斯]</sup>く）。
6. 解読不能な文字は、字数分を□で表記し、推定可能な場合は [ ] に入れて□の上に記した（例：俸<sup>[給]</sup>□）。推測の域を脱しない場合は [ カ] と表記した。
7. 空欄は、字数分を□で表記し、その旨を [ ] に入れて□の上に記した（例：森川<sup>[二字空欄]</sup> □□）。  
なお、推定可能な場合は [ ] に入れて□の上に記した。。
8. カタカナ表記の外国語は、推定可能な場合、初出個所に原語のつづり字を記した。なお、意味が難解な場合には、つづり字の後に [ ] に入れて訳語を記した。
9. 「明治三十六年当用日記」、「明治三十七年当用日記」は通し番号を付して脚注を作成した。
10. 「金銭出納録」（附録1、2）、「収支一覧表」（附録3、4）では、基本的に漢数字を算用数字に改めた。
11. 「収支一覧表」（附録3、4）は、原表より収支合計、支出合計、残高、添え書きを抜粋して、1つの表にまとめた。
12. 紀行日記では、地名について、初出個所で、読み仮名をカタカナで振った。
13. 紀行日記中、当用日記にも登場せず、文章中重要な人物である場合は、姓名を [ ] に入れて上に記した。



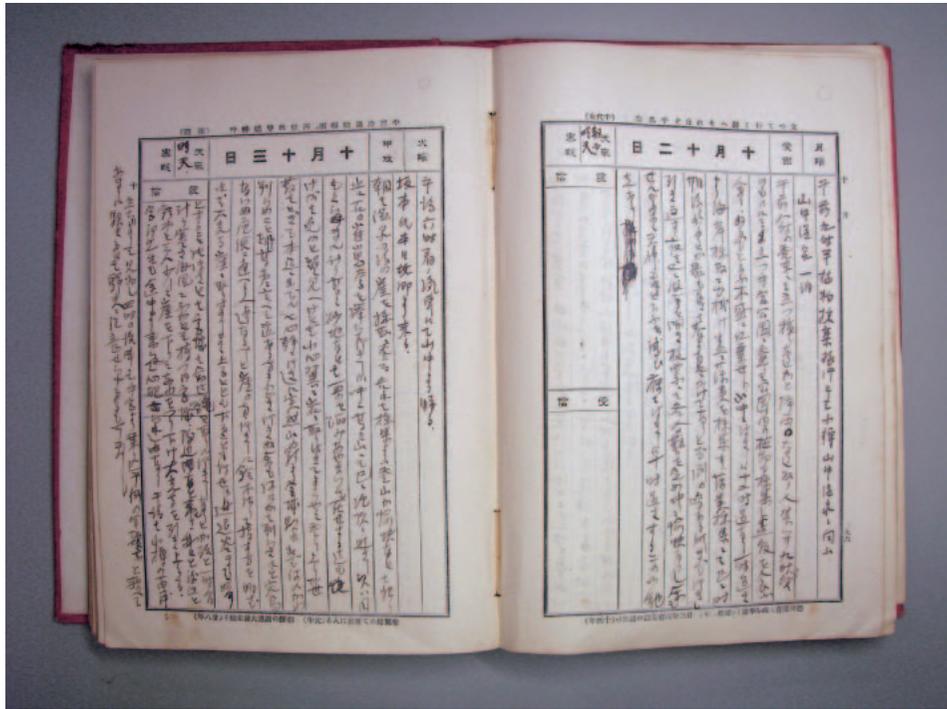
川嶋一郎 (1900年頃)



「東北遊記」(1902年7月)



「鎌倉日記」(1899年4月)



「明治三十六年当用日記」(1903年)



「明治三十七年当用日記」(1904年)

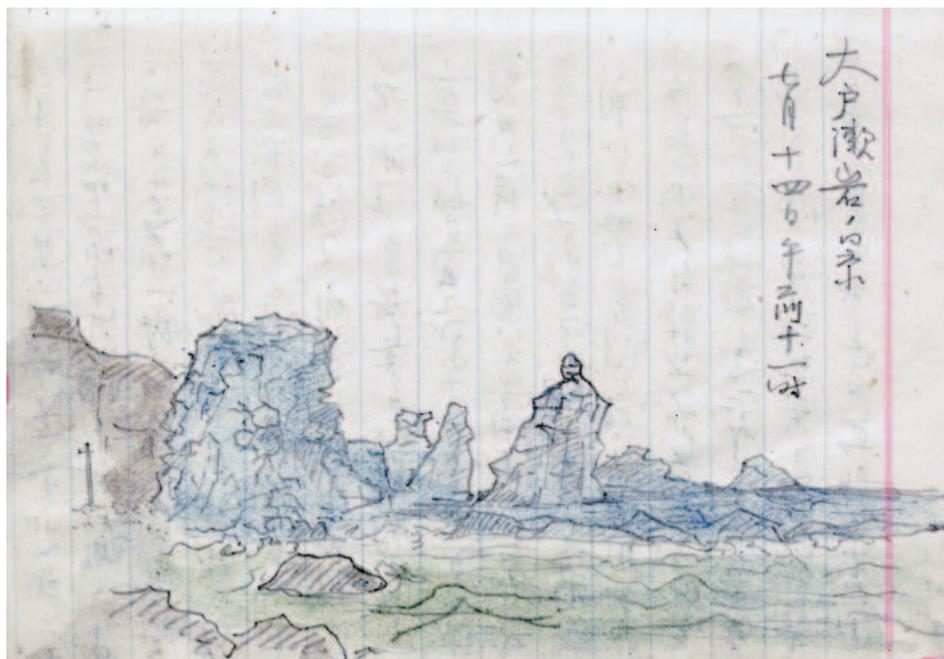


「北海紀行」(1904年8月)



遠友夜学校教師を務めた札幌農学校生 (1904年6月)  
後列左より川嶋一郎、河内完治、竹田茂、池田競、足助素一、前列は末光績

「東北遊記」スケッチ



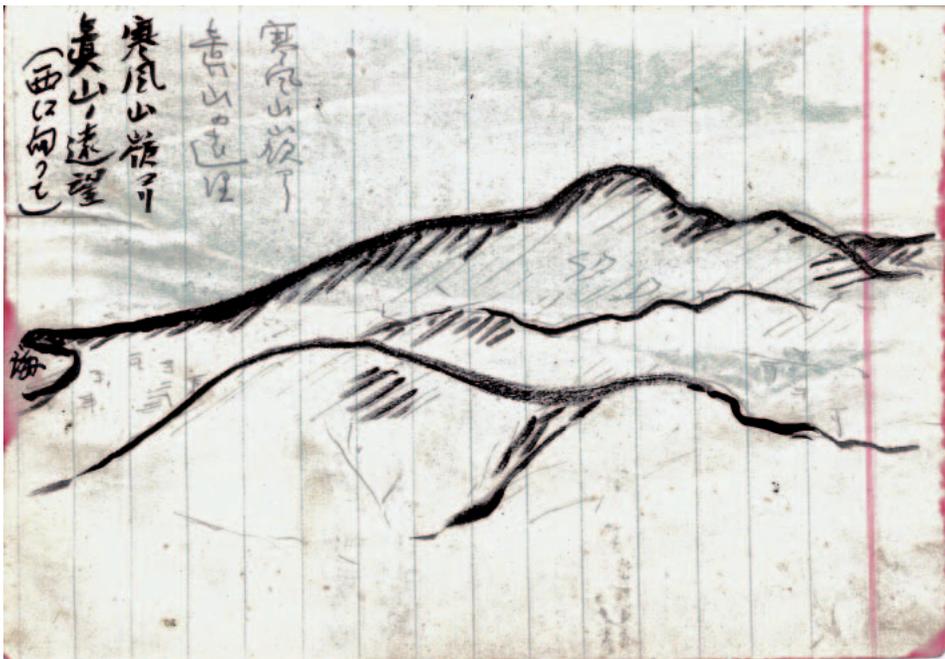
大戸瀬岩ノ景（「東北遊記」1902年7月14日条）



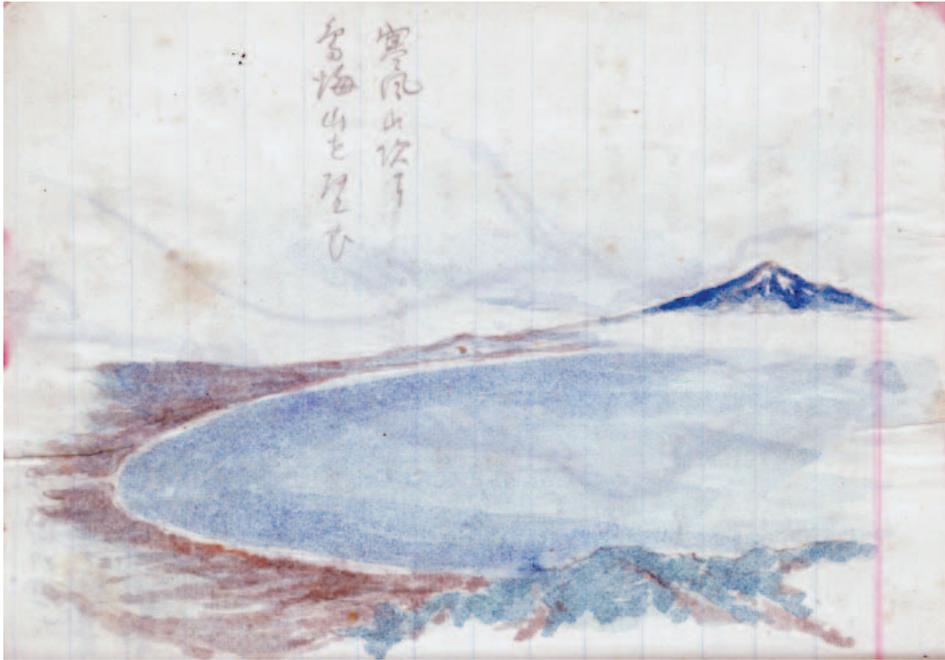
木標（「東北遊記」1902年7月15日条）



真山より寒風山ノ遠望（東に向つて）（「東北遊記」1902年7月20日条）



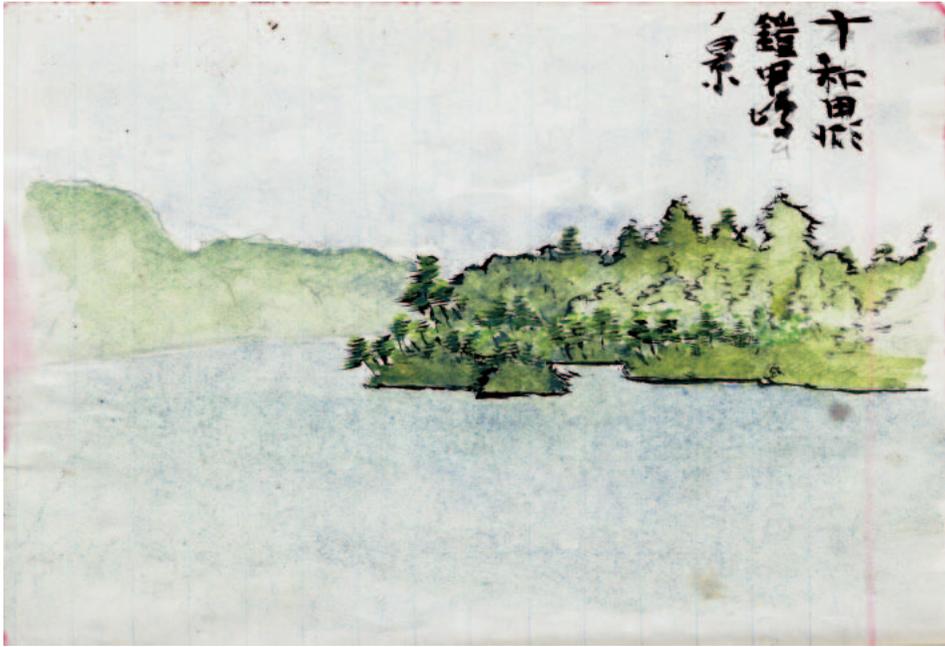
寒風山嶺ヨリ真山ノ遠望（西に向つて）（「東北遊記」1902年7月20日条）



寒風山頂より鳥海山を望む（「東北遊記」1902年7月20日条）



本山々頂ヨリ東ニ寒風山、八郎湖ヲ望ム（「東北遊記」1902年7月20日条）



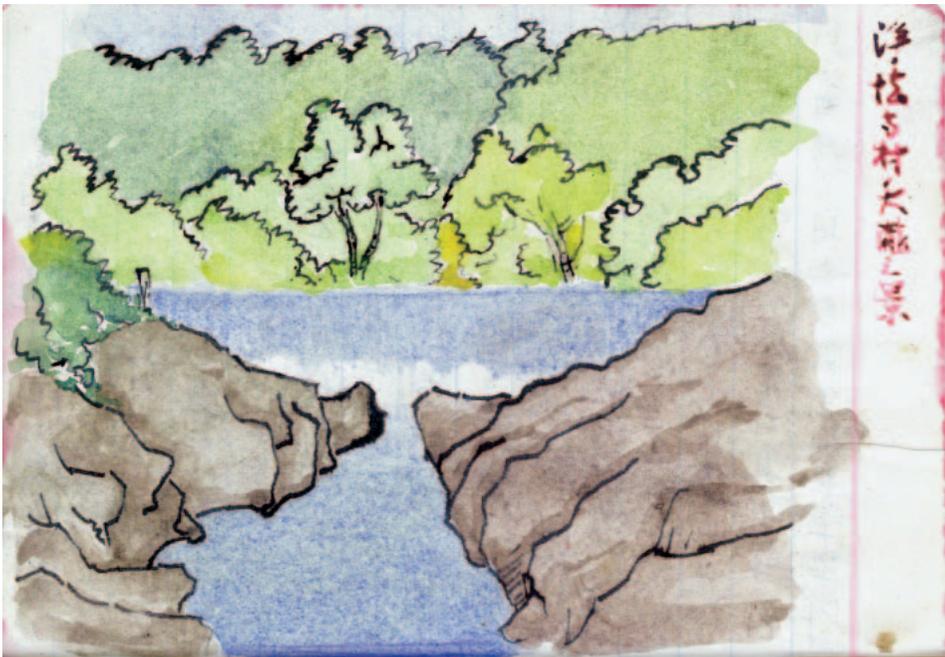
十和田湖鏡甲嶋ノ景（「東北遊記」1902年7月24日条）



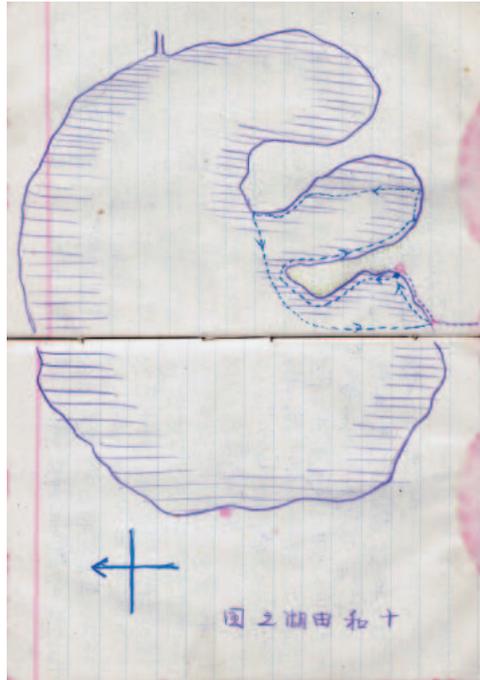
本社ノ景（「東北遊記」1902年7月24日条）



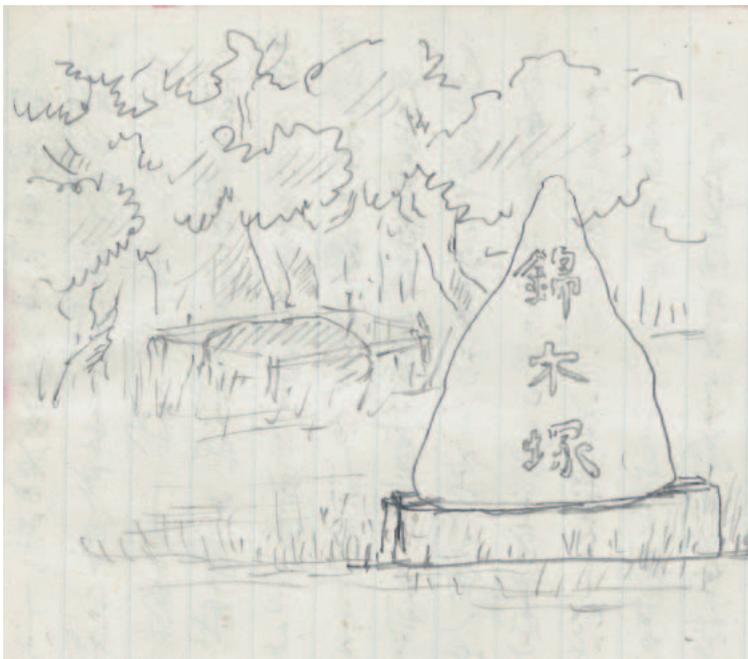
〔夏の旅〕  
小春日の 松原道のはて遠み 駒のあゆみの ねふれるがこと  
〔東北遊記〕1902年7月20日条



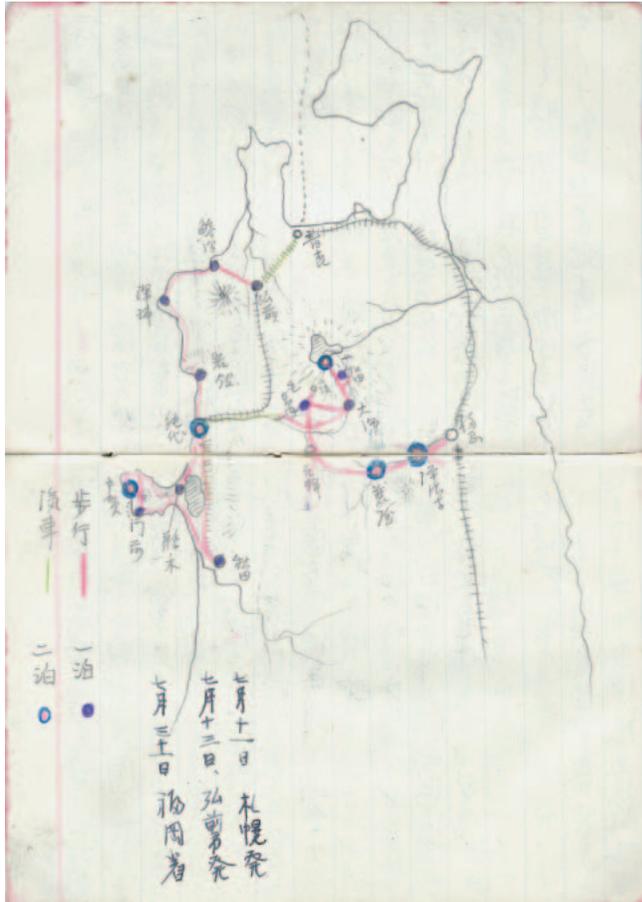
浄法寺村ノ大蔵之景 (〔東北遊記〕1902年7月29日条)



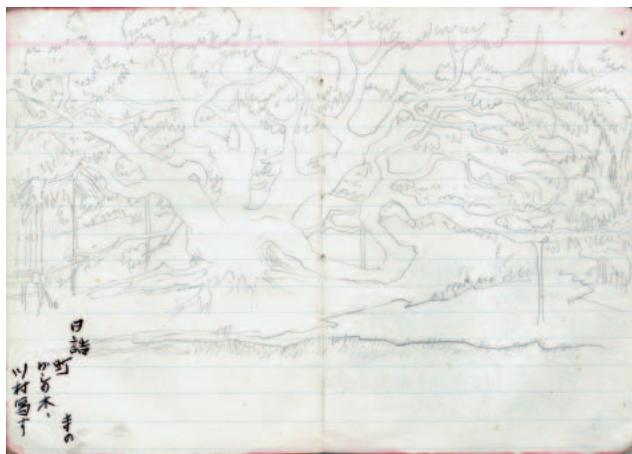
十和田湖之図（「東北遊記」1902年7月25日条）



錦木塚（「東北遊記」1902年7月27日条）



旅程図（「東北遊記」附記）

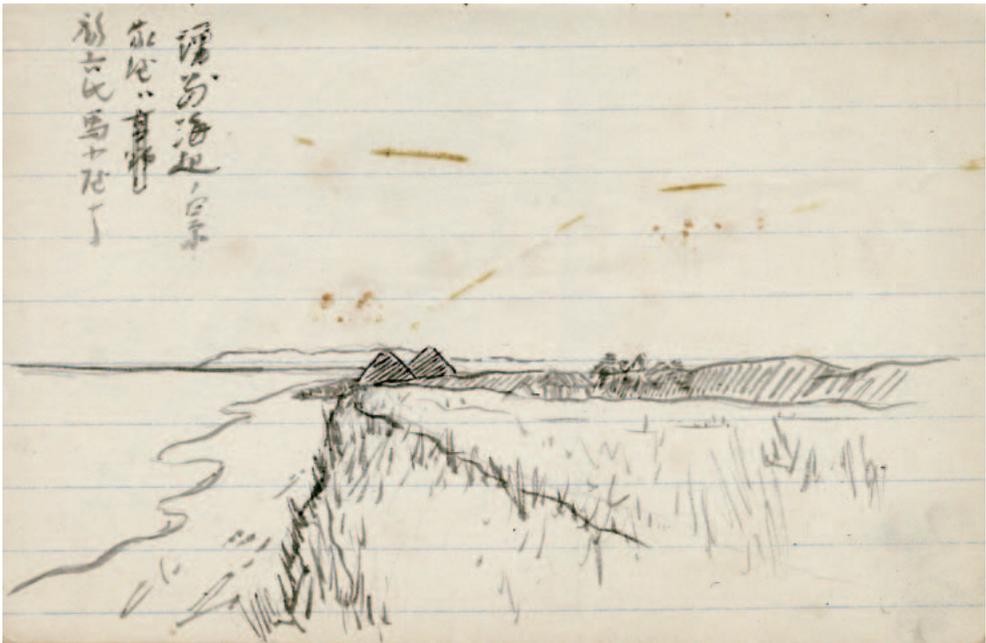


日詰町□□寺のかしの木、川村写す（「東北遊記」附記）

「北海紀行」スケッチ



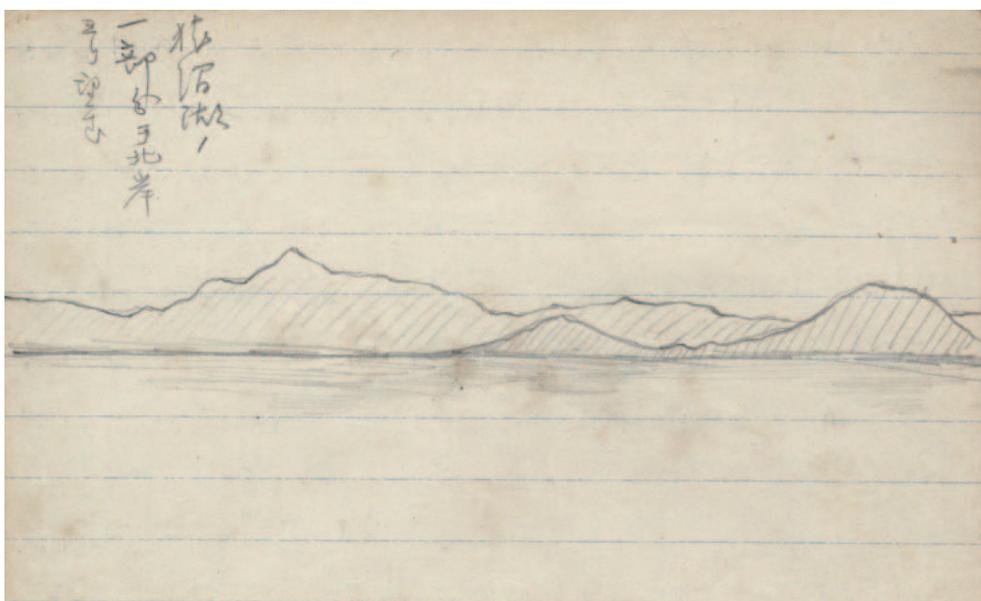
沙留街道より海岸を眺む（「北海紀行」1904年8月20日条）



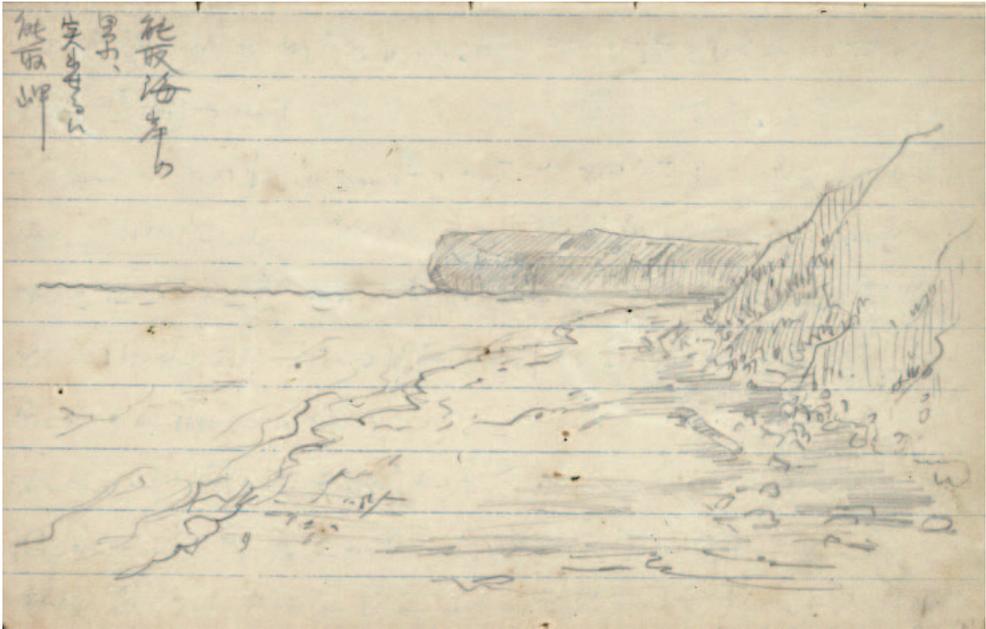
湧別海辺ノ景 家屋ハ福吉氏馬小屋ナリ（「北海紀行」1904年8月22日条）



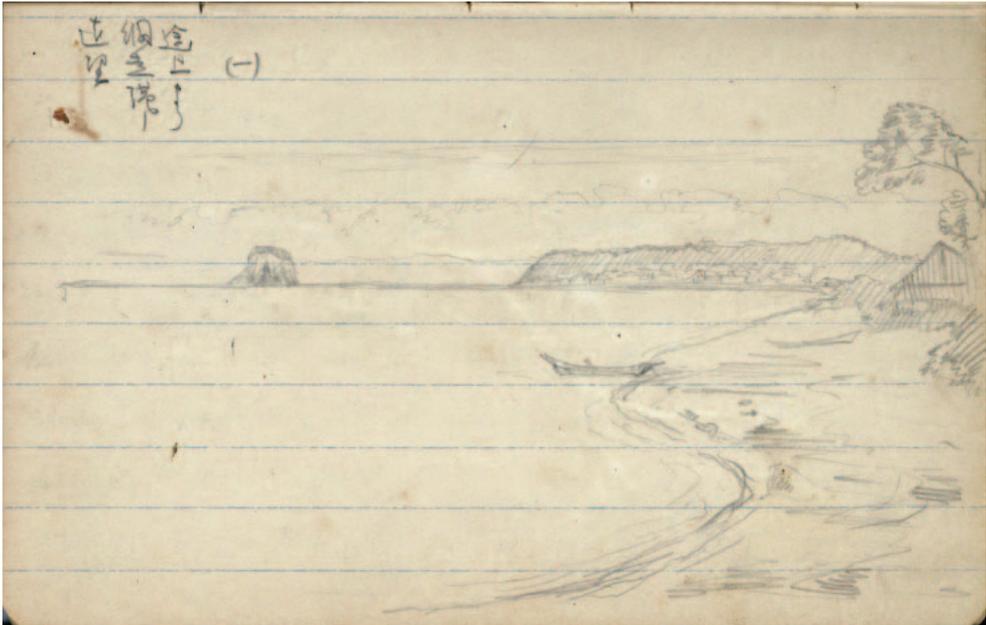
右 猿澗湖 左 海 (「北海紀行」1904年8月22日条)



猿澗湖ノ一部分ヲ北岸ヨリ望む (「北海紀行」1904年8月22日条)



能取海岸の景、突出せるハ能取岬（「北海紀行」1904年8月22日条）



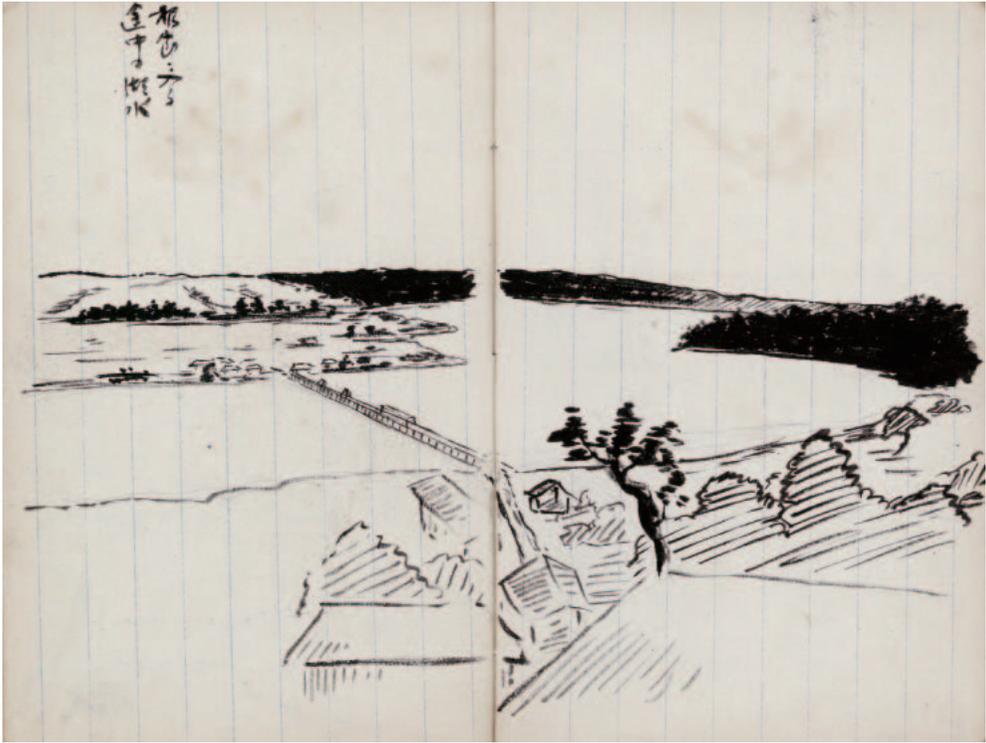
途上より網走港ノ遠望（一）（「北海紀行」1904年8月22日条）



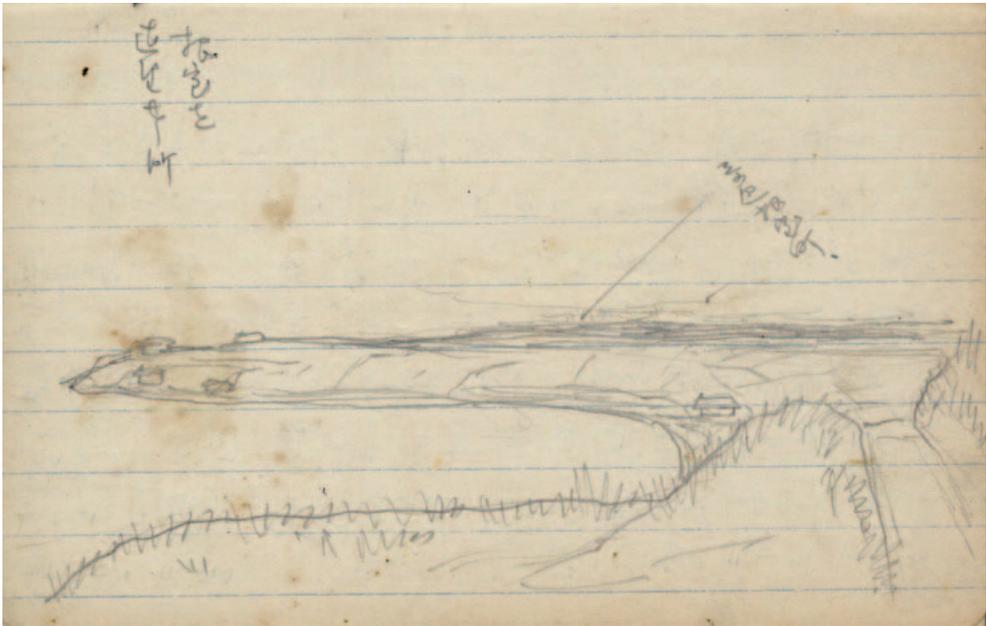
途上より網走港ノ遠望（二）（「北海紀行」1904年8月22日条）



藻琴附近の湖水（「北海紀行」1904年8月24日条）



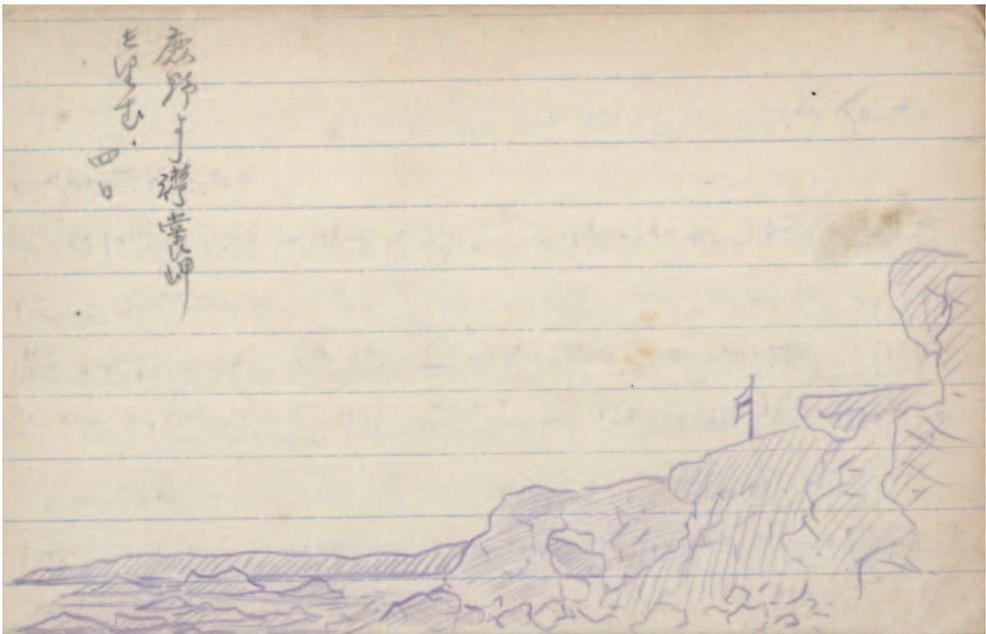
根室ニ入る途中の湖水（「北海紀行」1904年8月26日条）



根室を遠望せし所（「北海紀行」1904年8月26日条）



猿留海岸（「北海紀行」1904年9月4日条）



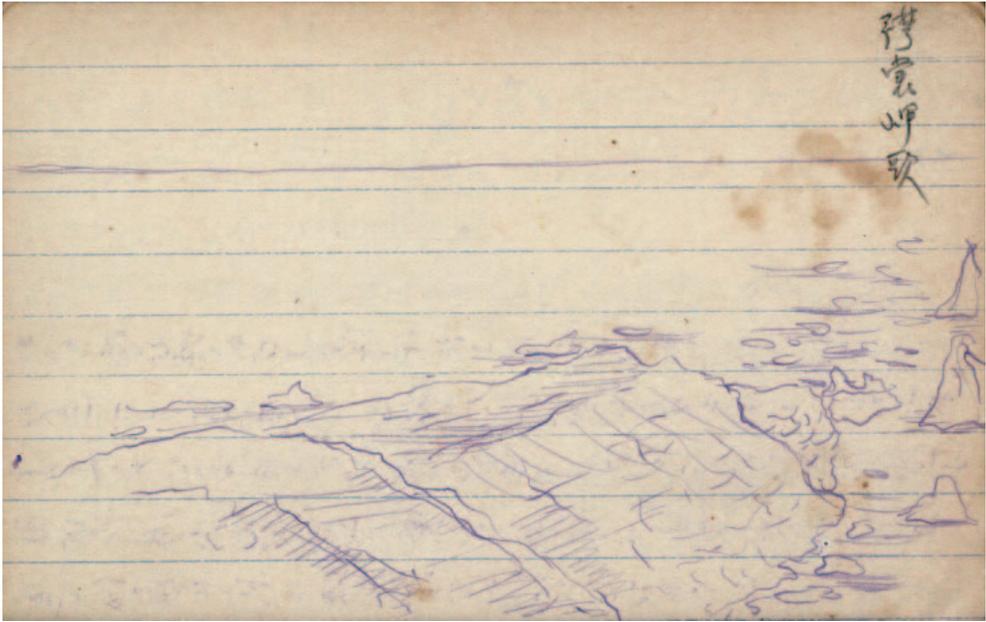
鹿野より襟裳岬を望む（「北海紀行」1904年9月4日条）



襟裳岬より庶野海浜を顧望す（「北海紀行」1904年9月5日条）



襟裳灯台（「北海紀行」1904年9月5日条）



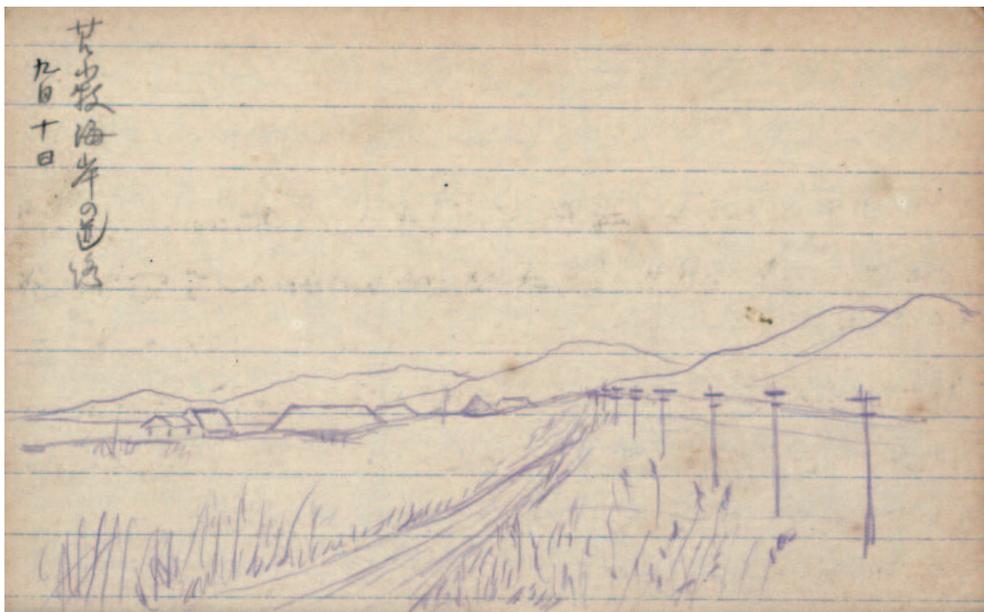
襟裳岬頭（「北海紀行」1904年9月5日条）



幌泉海岸の景 雨中ニ画ク（「北海紀行」1904年9月6日条）



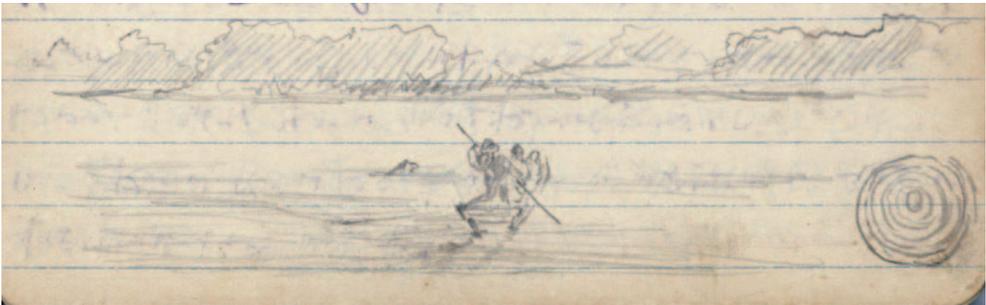
様似砂浜にて暴風雨ニ逢ふ（「北海紀行」1904年9月6日条）



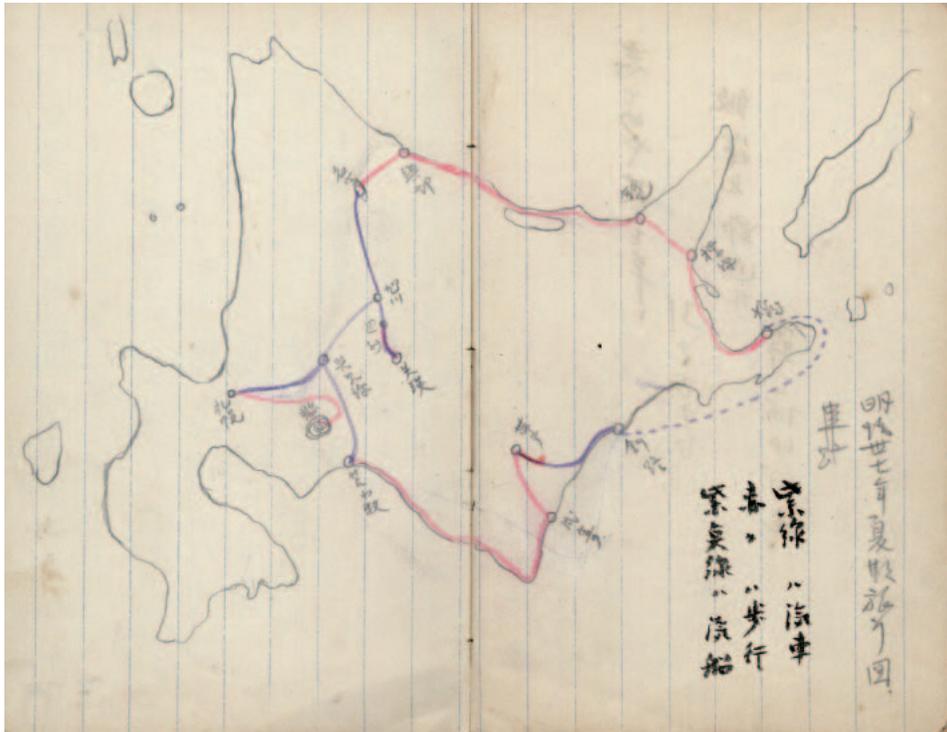
苦小牧海岸の道路（「北海紀行」1904年9月10日条）



襟裳灯台（「北海紀行」1904年9月5日条）

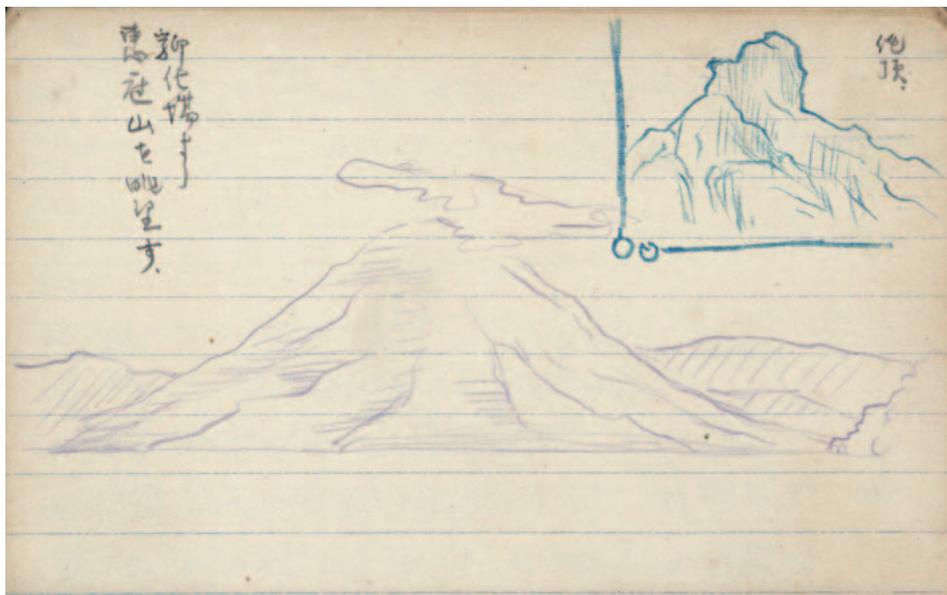


染退川を渡る（「北海紀行」1904年9月7日条）

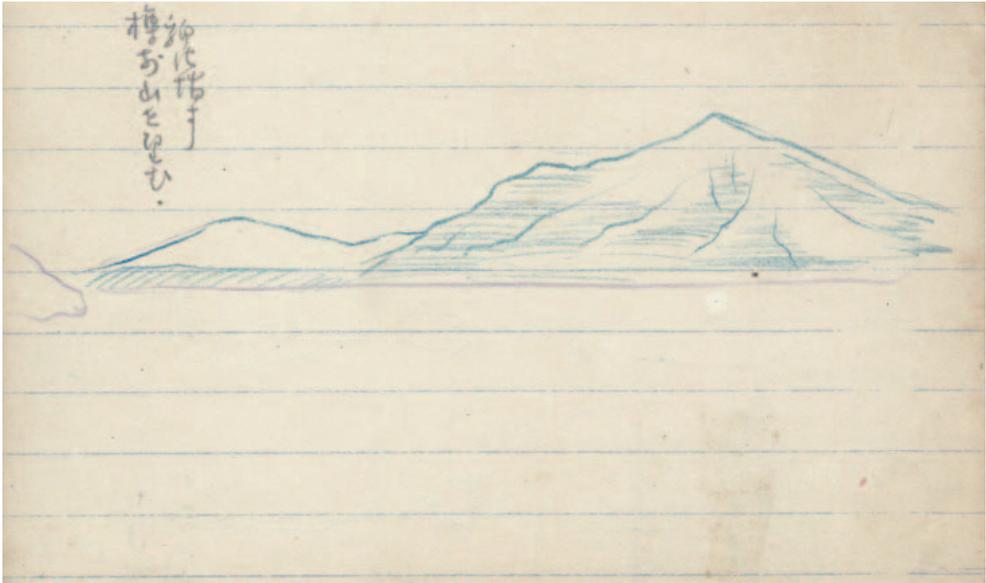


明治廿七年夏期旅行図（「北海紀行」巻末）

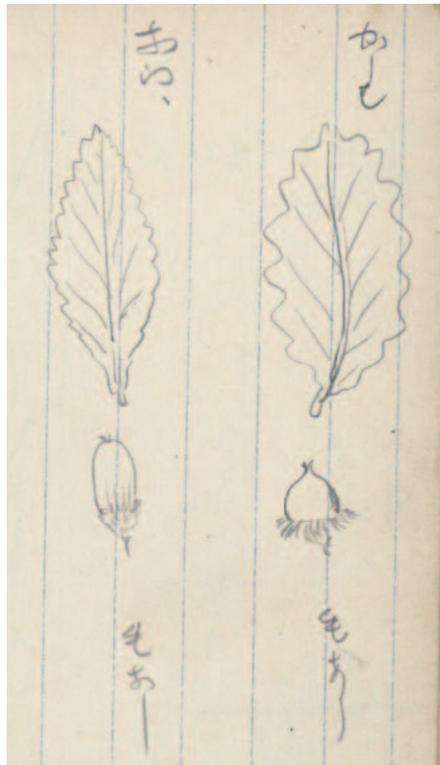
「恵庭登山略記」スケッチ



新化場より恵庭山を眺望す（「恵庭登山略記」1904年7月）



躰化場より樽前山を望む（「恵庭登山略記」1904年7月）



かしわ・なら（「恵庭登山略記」1904年7月）

## 明治三十六年当用日記

一月一日（木） 雪

《(二日) 売出しと云ふもの見ばやと十二時頃より大光寺氏<sup>1)</sup>と共ニ南一条<sup>2)</sup>ニ出で行く。丸井呉服店<sup>3)</sup>の前ニたゞづみて見物す。田舎ノ若者など装へ来りて慾の奴隷となす。をし合へし合へすること、いと浅まし》。九時半より学校演武場ニて拝賀式<sup>4)</sup>を行ふ。午後よりハ回礼ニをもむき、山鼻の齊藤氏<sup>5)</sup>宅を訪問す。夜は、市中を散歩して後、安東氏<sup>6)</sup>よりシエキスピヤ<sup>7)</sup>ノ劇の坪内先生<sup>8)</sup>ノ評訳<sup>9)</sup>を借れて見る。

一月二日（金） 晴

〔受信〕小島<sup>10)</sup>

(前の記事あり)

午前は大光寺氏と中島遊園地<sup>11)</sup>ニ散歩す。正月なれば各商家の売出して中々にぎわし。帰途、大光寺氏ハ富貴堂<sup>12)</sup>及び中野<sup>13)</sup>ニ立よりて買物をなせり。午後は一人にて円山の麓迄散歩し、南一条を通りて帰る。夜は、角館君<sup>14)</sup>来訪せらる。足助君<sup>15)</sup>も来られ談話ニ花が咲く。角館君ハ九時半頃迄居られたり。此の日午前午後共例年ニなき暖かさにて雪も降らざりしが、夜ニ入りて雨となれり。

一月三日（土） 曇

〔受信〕繁、貞三<sup>16)</sup>

午前一時頃北方ニ火事あり。小泉<sup>17)</sup>の辺ニ当るなれば洋服を着て飛び出す。場所は停車場<sup>18)</sup>構内の待ち合へ茶屋なり。午前中は室ニありて進化論を読む。午後一時頃より兼而足助氏と約ありて工藤君<sup>19)</sup>を訪ふ積りなれば出で行く。然し風雨烈しければ中座して、御国名物之柚子菓子ノ御馳走ニ預り、種々談論之未、教会ニ付て問合せ、帰舎せしは五時近くなりし。午後は無事。

一月四日（日） 晴

〔受信〕太布<sup>20)</sup>、貞三、河村

午前中は蟄居して進化論を読む。昼飯後散歩ニ出掛く。小泉氏を訪問せしかと不在なり。夜は安部氏<sup>21)</sup>と原先生<sup>22)</sup>ノ宅ニ参る。古風ノスゴロクを遊びカルタノ後ち恩地氏<sup>23)</sup>のうたへ、熊坂長範<sup>24)</sup>及び恩地君と先生ノ羽衣<sup>25)</sup>あり抱腹す。尚ほ先生ノ琴あり、十一時ニ辞して帰舎す。

一月五日（月）

〔受信〕貞五郎<sup>26)</sup>、壽郎<sup>27)</sup>、小太郎<sup>28)</sup>、諸氏ノ年賀状

朝は独りニて豊平川のバンク<sup>bank[土手]</sup>を散歩す。日々の天気なれば、已に堅た雪となり、雪上を渡るを得、風景中々好く、初めは好天気なりしか、急ニ風雪をもようす。帰途富貴堂ニ立ち寄りて書籍を求む。午後は少しく進化新論<sup>29)</sup>を読み、何に事もなし。夜は畜産反論<sup>30)</sup>を読み、其他雑読す。

一月六日（火） 晴

〔発信〕明八様<sup>31)</sup>へ手紙 直次<sup>32)</sup>、末藏様<sup>33)</sup>へ年賀状

〔受信〕父上より。内藤<sup>34</sup>、長五郎<sup>35</sup>、隼次郎<sup>36</sup>、兵吉<sup>37</sup>、直次 年賀状

朝は例之如く八時半迄臥床ニあり。休暇も早や明日のみなれば安眠をむさぼるも今日あすのみなればいと心細し。河内氏<sup>38</sup>来りて遠友夜学校<sup>39</sup>の受け持ちを手伝へくれずやと云ふ。吾れも左程忙しからざれば甘諾す。夜更にくわしく相談せんとして別る。家郷より書信あり。農作物の不作は三戸郡ト同しく、米穀は二分作位ならんとノ御話し。やがて農民の<sup>騒ぎ</sup>もあらずやと心配さる。午後は末光君<sup>40</sup>を訪問す。河内氏も来らる。四時頃辞し帰る。夜は末光、池田<sup>41</sup>諸氏と遠友夜学校ニ赴く。二人の新しき先生として余等を紹介せらる。吾等も又新任の挨拶として以後充分なる同情と能ふ丈けの心切と誠実を以て教鞭を取るべきむねを誓ふ。七時半頃帰舎。大光寺氏来る。

一月七日（水）

〔受信〕千葉<sup>42</sup>、大森孫四郎様 年賀状

今日は少しく雪降り出したれど十時頃小泉兄を訪問す。三年ノ小椋なる人<sup>43</sup>も来りて、種々談話ニ時を移す。昼飯之御馳走ニ預り、四時頃帰舎す。東郷君<sup>44</sup>病氣ノ為メ暫時外泊せんとして荷物を運ぶ。余も少しく手伝す。夜は末光、池田氏と夜学校ニ出掛く。未だ<sup>だ</sup>時間割も道具も備はされど学課を休みとして時間表だけを写さしむ。三年の方は宜けれども、二年級ハ中々書けず一時間もかゝる。遂ニ<sup>わ</sup>余れも筆とりて書き与ふ。帰舎後、畜産<sup>汎論</sup>を少しく読む。

一月八日（木）

〔受信〕貞治<sup>45</sup>様

朝、今日より始業あるべき日なれど、例之如く<sup>＜</sup>時間表と先生ノ御話しのみにて十時頃より終る。小泉、少<sup>し</sup>の間来り話す。南一条ニ<sup>で</sup>出て、買物す。角館氏来訪。午後は薪を切りて運び、風呂ニ入る。夜は学校ニ行く。

一月九日（金）

〔受信〕小島氏より小包着

朝は学校あり。顕微鏡にて物質の計り方及びプリズム<sup>prism</sup>を用へての写生機を実験す。午後よりハ安東氏と共に遊園地ニ散歩ニ出掛く。夜、先般小島氏ニ依頼せしトルストイ及びゴルキーの著書着す。夜学校ニ行く。今晚ハ寄宿舎ノカルタ会あるなれば、帰舎後縦覧室<sup>46</sup>ニ行き、種々ノ御馳走ニなる<sup>47</sup>。

一月十日（土）

〔受信〕明八、未藏、小島、森澤徳太郎<sup>48</sup>

習へ性となるにて、休み中よりノ朝寝のくせを付けしかは、<sup>は</sup>今となりても中々朝目か醒めじ。今日も八時頃ニ起床急きて教室ニ行く。尾泉氏<sup>49</sup>の農具論あり。先めてなれば御話しのみ。東京にて袂別後、更ニ住所様子共不明なりし森澤君より年賀状来る。矢張り山口高等学校ニ在学せり。夜は夜学校ニ行く。此日河内君の代理となりて教授す。安東氏室ニ行きて馳走になり十一時就寝。

一月十一日（日）

〔発信〕小島、森澤 故郷へ雑誌を送る

朝起きしは九時過ぎなりし。急ぎて飯を食へ、小島氏ニ手紙を書き、太陽<sup>50)</sup>及少年世界<sup>51)</sup>を故国ニ送る。午後は室内にあり。風呂ニ入りて学校ニ出掛く。今日は男生〔徒〕ノ新年ノ遊びをなすなれば、末光と竹田<sup>52)</sup>ノ演説ありて直ニ遊戯ニうつる。九時頃解散せんとせしかと皆々尚ホ余りをしげなれば、十時迄愉快ニ種々ノ遊びをなして帰る。就寝は十時半。一月十二日（月）

午前は授業例之如し。午後よりハ市の西を散歩し帰りて独逸語をさらう。今夜は夜学校余ノ番なれと竹田氏尚ホ未だ熟練せざれば、今晚は河内行きに余は明日行く事とす。雪降り中々烈し。トルストイの小説をニペーズ許り読み、其の他明日ノ学課をさらへ、床に入りて徳富氏ノトルストイ<sup>53)</sup>を読む。中々興味深く、十一時頃迄、傑作戦争と平和の梗概を読み終る。

一月十三日（火）

〔受信〕山谷<sup>54)</sup>、下斗米忠次郎 年賀状 古館<sup>55)</sup>氏より年賀状来る。

今朝ハ六時頃目覚めしか、再び眠りて八時半の鐘を聞いて起き出づ。急ぎ顔を洗へ、朝食もせずして学校ニ行く。午後は農園ニ行く。プラウの構造を見るなれば、一々分離して更ニ又之れを組み立て三時頃終る。夜は夜学校ニ行く。時間割を改正して、火木土の日を吾が受け持ち日と定む。作文を渡す。

一月十四日（水）

学校ニ行く。一昨夜より運動ノ節、左胸痛を覚へしかば、肺ニ関係せずやと心配されしかば、植物の実験を休みて札幌病院<sup>56)</sup>ニ行く。診察の結果、胃トリウマチスなりと言は[れ]、薬をとりて来る。実験は急ぎし為メ書き終れり。午後よりハ散歩として南七条辺ニ出て西七丁目を通りて帰舎す。夜は風呂あり。東郷氏来らる。学校の課業を複習し十一時過ぎ就寝す。

一月十五日（木）

朝は例の如く、八時朝食を終りて、学校ニ行く。午後よりハ散歩として農園ニ行き、角館君を訪問す。夜は学校ニ行き九時頃帰舎す。

一月十六日（金）

〔受信〕国分市郎様

朝は学校あり。午後は病院ニ行き、南一条を廻りて帰る。二時より級会の新年会あり。来会者二十二三名、カルタ等の遊戯をなし、菓子、林檎などの御馳走あり。夜食としてすし出で、それより例のゴロへ、名指しなどあり。又々トランプを一同に勝負し、散会せしハ九時なりし。

一月十七日（土） 寒冷

朝は学校ニ行く。午後よりは散歩ニ南の方ニ出掛けて、創成川側の大工に額縁を注文す。材はランコにて代価は壱円なり。此の日一時半より蠣崎君<sup>57)</sup>と松村松年氏<sup>58)</sup>の演説あり<sup>59)</sup>。松村氏ハハンガリ国の情況、人情、風俗、学生之事などに付て演べられたり。夜は夜学校

ニ行く。九時前ニ帰舎。安部の室ニ至り、暫時談話ノ後帰りて、レジュアレクション<sup>60</sup>を  
読み、十二時ニ至り就寝す。

一月十八日（日） 寒冷

〔受信〕小島

朝ハ室ニ籠りて徳富氏のトルストイを読む。午後はサツ<sup>〔捺〕</sup>筆画をかきて四時ニ至る。此の日  
夜は学校ニ行く積りなりしも、風呂ニ入り後れし為メ行かず。少許読書せしか、湯に入り  
てつかれの為メ睡眠<sup>〔眠〕</sup>をまようし、常ニ帯もとかずに床ニ入る。七時半なりし。八時を聞き  
てねむる。

一月十九日（月） 天気温

朝は例の如し。中飯後、一人にて散歩を東橋<sup>61</sup>ニ試む。天気よき日なれば、散歩には好適  
の日にて、馬車の陸続として往来するはうるさかりしも、橋上ニ立ちて東西を眺め、白皚々  
の偶ニ手稲、恵庭の諸山を遠望せり。北海の雄大なる雪の景色として茲も数へられぬべし。  
帰路は南一条ニ出で、富貴堂ニ立ち寄る。それよりはジヤマン<sup>German〔ドイツ語〕</sup>をしらべふ。夜は買物の為  
メ南二条<sup>62</sup>迄行く。

一月二十日（火）

朝は七時に起き出づ。顔を洗はんとする際、警鐘鳴る。女学校<sup>63</sup>前の火の見小屋焼けしな  
りとか。何にか昔し話の例へにでもありそうな話し。午後よりは農園に実習の為メ行く。  
ソルキプラウ<sup>sulky plough</sup>と播種器の分解を行へ、種々の播種器具を見て帰る。夜は遠友学校ニ行く。  
帰舎後、読書の後就床。

一月二十一日（水）

朝は例の如し。動物実験の前、郵便局<sup>64</sup>ニ行きて為替を取組み出す。動物実験はカスベの  
骨の写生なり。午後は少許<sup>すこしばかり</sup>図書館ニ行き帰りて化学の筆記をなす。夜食後風呂に入りジヤ  
マンを読み、ゼ・スピリット及びレジュアレクションを読む。大光寺氏来りて、マンヂユウ<sup>〔機頭〕</sup>  
の御馳走あり。談話十二時ニ至て漸く止む。

一月二十二日（木）

昨夜、晩<sup>おそ</sup>かりし為メ目を醒せしハ八時半近くなりし。急<sup>〔き〕</sup>き顔を洗へ、教室ニ出づ。高杉先  
生<sup>65</sup>は休みなり。午後は一人にて遊園地ニ散歩す。帰途、論理学<sup>66</sup>を求む。夜は学校迄逢  
坂君<sup>67</sup>と共ニ行く。帰りてレクチュア<sup>lecture</sup>の下読みをなし、少しく他の本をも読む。

一月二十三日（金）

七時半ニ起き出づ。英文典を読む。植物実験はダイアトム<sup>diatom〔珪藻〕</sup>の各種類を見る。本日午後より  
中学校<sup>68</sup>ニ雪戦あり。見物に安部君と行く。二十分計〔リ〕の後初まり<sup>〔か〕</sup>しか、引き別け<sup>〔分〕</sup>と  
なる。勝負を見ずして帰る。夜は南一条ニ行き買物をなす。

一月二十四日（土）

朝は英文典を読む。午後よりハ松村氏の欧州ニ於ける農業視察談あり<sup>69</sup>。聴衆百名にも上  
りたらんか、中々の盛況なりし。牧畜はハンガリー最も盛なりと云はる。夜は遠友学校ニ  
行く。八時より明後日東京明治学院ニ入学の為メ出発すべき福田姉の為メ高等科女生〔徒〕

一同と送別会を開く。諸先生方の訓話あり。余も朋友と労働とに付て少しく話す。それより名指しを行へ、文字探し<sup>[と]</sup>などをなし、愉快ニ遊び、十時半に解散す。数日前天候暖なりしか、此ノ日南風吹き初め、帰途ニて雨降りし。午前ニなりてハ風も烈しき様なりし。

一月二十五日（日）

八時ニ起き出づ。気候温し。レジアレクシオンを少しく読む。夜は学校に行く。高等科は倫古龍会<sup>70)</sup>ありて、足助君と高地氏<sup>[河内]</sup>の演説あり。それより処世の歌の稽古をなして帰る。

一月二十六日（月）

朝は学校例の如し。午後は大工屋の所ニ額縁を取りに行き、帰りて工合を試む。中の紙小さくして見悪るしければ未だ標<sup>[だ]</sup>げず。夜はトルストイの小説を試む。

一月二十七日（火）

〔受信〕小包

朝は急ぎて朝食をすます。尾泉先生は休みなれば、図書館に行きて雑誌を読む。今日の農業実習は先週乙組休みたりしを以て、今日行く組は甲なりと云へ、乙なりと云へ、判然せじ。吾れは散歩ながらなれば何れなりとも損のなき事なば出掛く。集りし人四人のみなれば休業とす。二年級諸氏の豚の奢殺<sup>[殺]</sup>するを見て、帰終。小泉氏を訪へ、四時半頃帰る。夜は学校ニ行く。今日は丸善<sup>71)</sup>ニ注文せし書、到着す。

三年 学校

二年 時計

一月二十八日（水）

〔受信〕丸善

朝は八時近くに起き出づ。午後よりは東の方を散歩して、南一条ニ出て富貴堂ニ立ちよりて本を購ふ。教育図書館<sup>72)</sup>ニ入り雑誌を見る。風呂あり。夜は北澤<sup>73)</sup>氏病気の為メ一時間目を余は受持つ事とせしニより学校ニ行く。授業はなく、処世の歌を書き取らしむ。二時間目ハ竹田氏来る。此の時間中ニ一生徒何かの争へより他の生徒の背部を小刀ニてさし出血せしむるに至らしむ。残りて高地氏<sup>[河内]</sup>意見するところあり。帰舎、ジヤマントラセロ<sup>[と]</sup><sup>74)</sup>を少しく読む。

一月二十九日（木）

朝よりの大雪なり。午後よりハ散歩もせじ。額縁をかゝげ初む。大光寺来りて議論を闘す。夜は学校ニ行く、例の如し。

一月三十日（金）

〔受信〕父上様より

朝は七時半ニ起き出づ。聖書を読み、レジアレクシオンを読む。午後よりは足助君来りて二時半頃去らる。それより南一条ニ行きて書籍を求め来りて読む。夜も又々南一条迄行く。雪降る。故郷より二月分の学費来る。無逸会<sup>75)</sup>諸氏は雪見会を遊園地ニ於て開かれし由。

一月三十一日（土）

朝は例の如し。午後より八角館氏来られ直ニ去る。博物学会<sup>76)</sup>の講演を聞くに行く。新島氏<sup>77)</sup>は林檎ニ付て害虫ニ付て述べられ、宮部先生<sup>78)</sup>はズムノスポラウジウム属の菌に付て新に名命せしもの二三種を發表せられたり<sup>79)</sup>。夜は学校ニ行く。此日河内氏より夜学校の報酬<sup>[が]</sup>を渡さる。余か最初のレーボア<sup>labor</sup>のレワード<sup>reward</sup>なりと思へは、何によりも有難し。

二月一日（日）

朝起きしハ七時半なり。聖書を少しく読み、鈴木氏<sup>80)</sup>の持ち来られし化学を筆記し、安部氏と逢坂氏ニ渡す。その後、中飯迄、論理学を読む。午後よりハ散歩に南七条迄行く。帰りは南一条を通りて帰る。夜は風呂あり。夜学校に出掛けて唱歌を一所に稽古す。高等科は論古龍会<sup>[論]</sup>ありて、農と工と孰れか拡張すべきと云ふ題にて討論ありき。帰りしは十時。十一時迄トルストイを読む。

二月二日（月）

朝は例の如し。午後は中飯後図書館ニ行きてインデペンデント紙上に出てたるトルストイ編を読む。散歩として道庁<sup>81)</sup>の構内を通りしに、池にて小泉、竹田、末光氏等盛ニスケートをなしをられたり。それより温室<sup>82)</sup>に行きて、北一条を通りて帰る。夜は室内にありて、ひたすら明日ノ課業を勉強、之れ迄不勉強の爲め一向筆記者にも手を付けざりしが、一通り読み了る。レシユアレクション<sup>[レシ]</sup>を読み、ゴルキー<sup>83)</sup>のフテマゴルディフ<sup>84)</sup>を二三頁読む。チエルカツシイ<sup>85)</sup>の人物性質と同じ人物画<sup>[描]</sup>かれたりと思ふ。例によりてゴルキー独特の筆なるべし。十一時就寝。

二月三日（火）

朝目を醒まし見れば八時半ニならんとす。例の事なれば<sup>[は]</sup>急きもせず、食堂に入りて新聞を読みつゝある間ニ時間ニ遅る。近頃めづらしき事なり。中食後は農園の実習に行く。雪降り、寒風吹きすさむ。牧草刈<sup>mower</sup>のモア<sup>[草刈機]</sup>とか云ふ器械を分解し、コンカルツベーター<sup>corn cultivator</sup>を説明せらる。今日予科二年のもようすにかゝるスケーニングクラブ<sup>skating club</sup>、遊園地にあるとか。夜は学校に行く。

病気見舞の文

鮭

二月四日（水）

〔発信〕父上ニ

朝は例の如し。昼飯後、遊園地迄散歩す。夜は竹田氏等と大黒座<sup>86)</sup>に浅羽氏<sup>87)</sup>の政談演説会ニ行く<sup>88)</sup>。中々の大入りにて政談演説は初めての事なれば愉快なりし。帰りは九時過ぎ。それより少しく書を読む。

二月五日（木）

〔受信〕小太郎氏より

朝は例の如し。中食後は西の方ニ散歩ニ出掛けて、帰路、教育図書館ニ立ちより教育本三冊計り貸りて<sup>[借り]</sup>四時迄読む。夜は学校ニ行きて三年級作文ニは之の前の返事を書かしむ。宮部先生御出でニなりたり。

二月六日（金）

今日の実験は鶏のskeleton〔骸骨〕にて頸の骨を写す。カスベはすみに非ず。品非らざればなり。午後は又々遊園地ニ散歩ニ出掛く。夜はランプのホヤを買ふ為メに南一条ニ行き、帰舎後明日ノ課業をしらべ、トルストイを読む。就寝は十一時過ぎ。

二月七日（土）

今日は高杉先生の授業のみにて休む。朝より中学校ニ武術大会ありとの事なれば、行きし人もありし様なり。午後より河内氏の室ニ行きし処、明日は夜学校にて何か御話しせよと言はる。一時半頃より散歩に出掛け、北五条を西ニ行き、円山街道ニ出で、南一条をもどる。夜は学校ニ行く。帰りは安部氏の室ニ行き談話す。狩野氏<sup>89</sup>も来らる。大黒座の演説の旭川新聞<sup>90</sup>ニ通信せし者出でしとて持ち来る。小説、論説、皆な狩野の文なりとか。十時頃、書を読むことなく就床。

二月八日（日）

朝は演説の草稿を書き二三の書を読む。午後よりは遊園地ニ行く。予科二年の人々スケーテングの為め大勢来り居られたり。原先生も便当御持参にて行きをられし由。帰りに風呂ニ入る。夜食後、河内、末光氏と共に学校ニ行く。余及び河内氏の御話し一時間計りありて例の通り唱歌を初む。散せしハ八時頃なりし。帰りにトルストイを読み十一時過ぎ就床。大光寺、安部氏ハ例の碁ニふけりて三時迄をき居たりしとか。

二月九日（月）

〔受信〕 牧師より為替着

今日の実験は、bacteria〔ど〕を殆ど千倍計りのツフイスにて見るにて高度ニなれば field は暗くなるにより、ライル、エマルジョンなる法方を用ふるなり。それより殺菌の諸器械及び培養法用などを説明せらる。中食後は南一条ニ行き理髪店ニよりに髪を刈り帰る。食〔後〕は明日ノ課業をしらぶ。

二月十日（火）

朝は例之如し。午後よりハ農園ニ行く。麦刈器械を見る。夜は学校ニ行く。三年には文例をうつさしめ、二年級には川なる題を出す。

二月十一日（水）

朝は九時半ニ演武場ニ於て拜賀式<sup>91</sup>あり。恩地氏を訪問せしかど不在の為メ南一条ニ行き雑誌を求めて帰る。帰路、角館氏と行き逢へ、正午迄話ニふけれり。午後、小泉氏訪へ来り。暫時談話の後ち遊園地ニ遊ぶニ行く。今日は気候温暖ノ為メ雪とけて氷の上に水出でたり。更らに丸山<sup>92</sup>ニ行きて小丘の木のかぶに腰かけて四方の景色を眺め、社殿<sup>92</sup>のある方より本道に出で北五条を通りて帰舎す。四時半頃なりし。風呂ニ入りて、食後、夜学校の茶話会ニ行く。女高等科の生徒の会ニして滝<sup>93</sup>、半沢<sup>94</sup>、<sup>〔無〕</sup>崎諸氏も来られ、諸氏の東京、仙台ニ行きし学校に関する事を談話をせられたり。それより種々の遊戯の後、散会せしハ十時なりし。十一時過ぎて、ジャマンをしらぶ。

二月十二日（木）

朝は例之如し。午後よりハ散歩に出でんと用意し外ニ出でたるに、天気は良けれども北風中々烈しく吹きて寒ければ<sup>〔は〕</sup>図書館ニ行きて雑誌を読み、帰りてアラビアンナイト<sup>Arabian Nights</sup>を読む。夜は学校あり。

三年級 川

二月十三日（金）

朝は例の如し。午後よりは教育図書館ニ行きて二三の教育書を<sup>〔借り〕</sup>かかれて見る。家ニ帰りしは三時過なりし。それより又あらびあんないと読む。夜は開識社あり。来会者は少なく十三四名の者なりし。大光寺氏の<sup>〔時〕</sup>じ間は勤労の集合なり。米山氏の自活、竹田氏の Boys be ambitious、安部氏の学生と交際なる題に付き一時間計りの演説あり。其の後、二三の発議ありしも人数少なき為メ中止となり、茶菓の饗応あり。談話の後ち散会せし八十時なりし。直ニ就寝す。

二月十四日（土）

朝は例の如し。午後よりハ博物学会に松村氏と野澤氏<sup>95)</sup>の講演あり。傍聴ニ行く。松村氏ハ浮塵子の分布に就て、野澤氏ハハゼの分類ニ就て述べられたり<sup>96)</sup>。夜は学校あり。

二月十五日（日）

午前は室ニありて読書す。午後より足助氏を訪問し二時頃迄談話し、話つくるの後、いでや東橋辺ニ行きて雪の風景を見ばやと立ち出づ。風は初めよりありしか、橋の近くニなりて少々雪模様となり、橋ニつきて暫時の後藻岩<sup>〔嶽〕</sup>も見えずなる。急ニ大雪となりしも、橋側ニ立ちて少々半時間も眺望をほしいまゝにし帰路につく。半途ニして弥々本年ニ無き許りの大雪降りとなり、面も向けん様もなし。帰舎せしは三時半頃。夜学校ニ行く。高等科ハ倫古龍大会あり。三四氏の演説ありたり。尚ほ親ほく会あるなれど、余は池田次郎氏<sup>97)</sup>と八時半頃帰途ニ就く。雪いよ〜烈しく降くる。

二月十六日（月）

〔発信〕小太郎、父上

午前は例の如し。午後よりハ少許図書館ニ行き、博物館<sup>98)</sup>辺迄散歩し、帰りてジャマンを読み、化学の筆記を大光寺氏より受けつぎて写す。夜は洗濯屋ニ行きて注文をなし、帰りて明日ノヲセロを下読す。今日は風〔邪〕の気味にや、のど痛かりしか、晩方より頭も痛み出し、何時頃にや時計止まりて分らざりしも早く臥す。

二月十七日（火）

朝は例の如し、ヲセロを講釈す。午後よりは農園ニ行きて農具室<sup>〔到〕</sup>ニ致り農具を見て帰る。帰舎後、うもれ木を積み、何事もせず。東郷氏来らる。夜は竹田氏と共〔に〕学校ニ行く。

三年 近火見舞の文

二年 椿

二月十八日（水）

朝は例の如し、動物実験は鶏の骨骼、胸部、脊部を記載す。午後よりハ一人にて散歩ニ遊園地に出掛く。天気特によろし。今日は風呂<sup>〔ど〕</sup>ある日なれとも風〔邪〕の気味あれば入らず。

小松宮殿下<sup>99</sup>の薨去の電報来りし由うわさす。青森下の饑きんの慈善音楽会を開く由なり。夜はジヤマン、ヲセロ及びトルスト [イ] ノ小説を読みて十時頃就床。

二月十九日 (木)

今日は小松宮殿下薨去ニ付き学校の授業は休みなり。午前は室ニとちこもりて倫理学を読み、作文のてん作をなす。大光寺氏来りてマラリヤになれりと話す。余も遂ニ風邪となれり。天気極めてよければ、毛布を復習講堂<sup>100</sup>の窓ニ持ち行きてほす。夜は学校ニ行く。生徒皆なを集めて河内氏小松宮殿下の御履歴を暫時話し、授業は休みとす。之の日少しく風 [邪] の気味増す。

二月二十日 (金)

朝は例の如し。午後は図書館ニ行く。夜はヲセロを読み、ヨン、ライフ<sup>101</sup>を半頁余読む。

二月二十一日 (土)

朝は例の如し、食堂ニ新聞を読みて九時半ニ至る。授業すみて室ニ帰れば大光寺弥々入院の由なり。車を頼み来りて安部付き沿へ一時頃出掛く。余も教育図書館ニ行く。小学、中学の生徒諸氏沢山来りてさわがしければ、雑誌類をのみ読みて出で来る。夜は学校ニ行く。授業例の如くなれども、風邪の為めのどを煩せしにより声を出すに中々くるし、早々帰る。

二月二十二日 (日)

昨日も朝にせき出でいと苦しかりしが、今朝も又々せき出でたんさへいと出でたれば、朝食をすませて又就床し十時頃起き出で、北辰病院<sup>102</sup>ニ行く。待つこと一時間計りにして概く院長のしん断を得、のどを硝酸銀にて焼きもらう。葉にはうがへ水も与へられたり。午後よりは当分夜学校の受持ちを角館君ニ頼まんとて農園の寄宿舍ニ致る。坂本氏<sup>103</sup>も来て居られたり。承諾を得て四時頃帰舎す。食堂には明後日の音楽会<sup>104</sup>のやく割り広告されたり<sup>105</sup>。大光寺氏の病氣腸ちふすニなるやも知れずと逢坂君話さる、心配の事どもなり。学校ニハ行かず。

二月二十三日 (月)

朝は例の如く学校ニ行く。午後よりハ大光寺の室を消毒すべき由、事務より言へ来る。一時半より硫黄をたきたれば、其の内図書館ニ行き、竹田の室ニ行きて烟をさく。石炭酸は余の室にもまきまらう。夜は角館君来られたれば共ニ夜学校ニ行く。氏を紹介して授業をまたしまらへし時余は帰る。安部の室ニ行き少時談話の後ち来りて八時半就床。

二月二十四日 (火)

朝は八時ニ起き出づ。今朝はせき出でざりし。ジヤマンありて後の課業は皆な休みとなる。室を大掃除なし新聞などを見る中ニ昼となる。一時より北辰病院ニ行く。病氣は余程宜し。三時半より札幌座<sup>106</sup>ニ出掛く。皆々已ニ集まりて準備ニいそがし。四時半頃より客ぼつへ来りしか、五時を過ぐるに至て出札口ニ来りて普通、学生ノ二券を買はんとて集る者山の如く一々之れをことわり居りしか、三十分過ぎに至りては入場せんとする者黒山の如く入口雑とうせり。四十分頃夜学校に河内氏と行き御話しありて休みとし、石川氏<sup>107</sup>と共に再び札幌座に来きしに已ニ満員にて入口を閉せり。されと外ニは入場せんとする者尚ほ

去らず、口々ニのゝしりさわぐ。裏ニまわり前ニ出で河内氏と三人にて三十分計りも待ちしか、江刺家氏<sup>108)</sup>裏口を開けてまらへ概く入ることを得たり。種々の奏楽ありて終わりしは十一時過ぎなりし。寄宿舎に帰りて食堂にて飯を食へ、眠りに就きしは一時頃なりし。

二月二十五日（水）

原先生の授業ありて休みとなる。午前中は読書す。午後は河内氏の室ニ三時頃ありて雑談す。三時半より又々音楽会ニ出掛く。今晚は昨夜の如く人集まらず、六時ニなりしも八分位なりし。今日の奏演は昨日のそれより面白ろかりし様ニ感せられたり。余は職務もなければぶらへとなしいたるか、中頃より二階<sup>〔階〕</sup>の逢坂氏の所ニ至りて火鉢ニよりにて最後迄見物せり。最も喝采せられし物は昨日も今日もベル氏のハーモニカならん。能も数番、大嶋<sup>109)</sup>大倉<sup>110)</sup>諸氏演せられたりしが、三人かたわ、黒ぬりなどいと面白かりし。帰番都合よくはかどりし為メ十時半ニ終りたり。寄宿舎に帰りしは十一時頃にして食堂ニ入りていと甘き飯を食へ、風呂ニ入りて床に就く。此の両日は近来になき、いとうれしき日にて、連日の鬱も散ぜられぬべく覚へられたり。

二月二十六日（木）

朝起きしは八時過ぎなりしか、朝食をすませし頃、橋本先生<sup>111)</sup>休みなりとて皆々帰り来る。どせ今日は休みなればとて十時半頃北辰病院ニ行きて薬を取り帰り、南一条ニ行きて買物をなす。明日の遠足は延期の由なり。午後よりハ足助君を訪問し雑談五時ニ迄で帰る。夜はレジュアレクシヨンを読み、寝ニ就きしハ九時なりし。

二月二十七日（金）

八時ニ目醒めて学校ニ出づ。本日の時事新聞にて音楽会をほめ書けり。二時間授業ありて十一時より校長の訓話あり。休業の事、遠足の事及び修身上に付て十二時過ぎ迄演説す。山鼻の齊藤様の奥様より金貳円を借らんとて知らざる人使へに来る。貸しやる。午後は室にありて読書す（論理学、ヨンライフ）。夜は六時より夜学校ニ行く。帰りて畜産反論<sup>〔反論〕</sup>を読む。床ニ就きしハ十一時近くなりし。

二月二十八日（土）

〔受信〕父上様より

朝は例の如く、九時半迄はジヤマンを読む。宮部先生は御休みなり。午後は病院ニ行く。

三月一日（日）

朝七時頃に河内氏来りて目醒めしが、朝食を終りて八時頃洗濯物を取りに大通り迄行く。今日は撰拳日<sup>112)</sup>なれば豊平館<sup>113)</sup>前及び丸井の側らの各事務所には人力車黒山の如く集り何れもいそがしそうにほん走し<sup>〔走〕</sup>をれり。八時迄に遠友学校ニ行く。北澤氏、滝氏及び生徒十四五集まる。九時ニ出発して円山ニ向ふ。途上二人引の車、往來を飛で掛るか如し。此の日中々天気よく、汗出で、中々苦しむ。生徒等は直ニ前の山ニ登れり。後れで足助、関<sup>114)</sup>諸氏来らる。中食は豚汁ありて満腹す。昼頃に池田、竹田、末光、色部<sup>115)</sup>及び本〔科〕二年の二人計〔り〕来りて中々盛なり。一時頃より此ニ雪合戦を初む。遂ニ組撃とな〔る〕こと数回、帰路につきしは四時近くなりし。夜は夜学校ニ行く。倫古龍会ありて新聞を聞

むの可否論あり。散会せしは九時、之の次には演説は余ニ頼まる。

三月二日（月）

当撰者は対島氏<sup>[馬]</sup>116)ならんと呼び声高し。学校授業は例の如し。午後より南一条二行き理髮所ニ立ちよる。それより病院二行く。夜は夜学校あり。帰りて明日の課業をしらべ、床に入りて山中鹿之助伝<sup>117)</sup>を読む。眠ニ付きしは十一時過ぎ<sup>[き]</sup>なりし。

書籍を借る、文 三、

□ 二、

三月三日（火）

橋本先生ハ休みなり。今日の新聞にて撰挙の結果判然す。内地方の都市の部だけは電報あり。午後より南一条二行きて本を二冊求む。札幌にてハ対島氏<sup>[馬]</sup>百六十余点、浅羽氏百二十余点、中西氏六十余点なり<sup>118)</sup>。小樽にてハ高野氏<sup>[男]</sup>なり<sup>119)</sup>。岩手県にては大抵旧の如くなれとも英麿氏<sup>[ト]</sup>120)落撰せし様なり。

三月四日（水）

〔発信〕父上へ返信

午前は学校ニ授業あり。午後よりハ図書館ニ行く。夜は学校二行きしか、風強く吹きて雨さへいと降りたれば衣服もしと、湿りて心持悪し。道路のぬかるみとなりて歩き悪きは言ふ迄もなし。帰路は高等科の生徒等と共ニす。一時間計りヲセロを読みて十時頃眠る。

三月五日（木）

朝は橋本先生休む。午後よりハ三十分計り図書館ニ行き、病院には二時頃出掛く。今日も風は吹けとも天気となりたれば、雪大抵はとけて道路も早や乾きそめし所もある様なれば、何となく春めきて心ものどかなる様なり。半年の間、土見しことなかりしかばうれしき事限りなかるべし。

三月六日（金）

今日は学校より銭函迄雪中遠足ある日なれとも病ある身は外出もなり難く空しく籠城ときむ。前日とは異なりて雪降りと云ふにはあらねど朝より風いと荒く吹き時々は雪もちらほら降り来れば、余り遠足ニは格好の日に非ざりき。行きし人は百二三十名計りもありし由。寄宿舎<sup>[ト]</sup>ニても十名余ありしか、後より汽車<sup>[ガ]</sup>ニて行き人多かりし為め、昼飯ニ食堂に集りしは十名位ニ過ぎ<sup>[き]</sup>ず、いとさびしかりき。皆々汽車にて二時過帰り来りる。之の日特別ニ風呂ありしかと入らず。夜は学校ニ行く。咽悪しき為め言はずと思へどついシヤベル故、具合あしく帰りて直ニいぬ。

三月七日（土）

〔発信〕小島氏へ

朝九時過にやありけん、足助君来訪せられ談話す。雑書四五冊貸しぬ。十一時過ぎ<sup>[き]</sup>帰らる。午後はなすこともなく、雑務を取る。夜は蘆花生<sup>121)</sup>の不如帰<sup>122)</sup>を読む。十時半ニ読み了る。浪子と武夫の落命ニ涙をそぐ。床に入りても人生問題と死と云ふことの念、胸ニ浮び考へははてしなく行きてエターナルライフ、ゴッド<sup>God</sup>などの上ニ及び安心を得ず。浪子と

武夫の間こそ<sup>pure</sup>ピアなる<sup>love</sup>ラブならめと心をかなしましむ。

三月八日（日）

目覚めしは何時頃なりしや、昨夜読みし不如帰のインプレッション<sup>impression[印象]</sup>深く頭に入りて夢心地ニ又も彼等の間を思ふ。起床せしは八時なりし。植物を少しく読み、ラン、ライフを一章読む。午後よりは末光氏を訪問せしがと不在の為め南一条ニ出で買い物して帰る。病気の為メ学校には行かず。南一条ニ出で、薬を求め帰る。

三月九日（月）

午前は例の如く動物実験はスケルトン丈けを書き了る。午後よりは図書館ニ小時間行く。帰りて外出せんかと思へしがと寒ければ室内ニ籠りて空しく読書す。夜学校の方、咽悪るければ竹田氏ニ頼みて行きてまらう。作文の題は三年級砂糖、二年級猫。

三月十日（火）

午前、橋本先生今日も休みなり。小泉来りてジヤマンを質問せしかと余も不勉強の為メ閉口す。午後よりは昨日半澤先生頼みし塩酸加里を買ふに南一条ニ行く。帰りて薪を運ぶ。ヲセロを復習せざるべからず。夜は又ヲセロを読む。植物を少し読みて十時頃床に就く。

三月十一日（水）

植物実験のとき宮部先生の話しによれば試験は十八日頃より始まるべしとの事なり。午後よりハ温室に行き帰路南一条を通りて帰る。帰りてヲセロを読み、植物を少しく復習す。今日の夜学校の授業を河内氏ニ頼む。

三月十二日（木）

無事。午後より一年のうさを散らさん為メ天気よきにまかせて農園ニでも遊はんかと思へ出かけしに足助君ニ出逢へなれば共ニ遊ぶ。第一、第二農場及び新築校舎<sup>123)</sup>を見物して帰りしハ四時過ぎなりし。之の日風呂あり。

三月十三日（金）

午前は例の如し。夜は学校ニ行く。二年級、三年級共、読書の復習をなさしむ。試験は十八日よりあるにより時間表を筆記せしむ。

三月十四日（土）

午前は無事。午後より博物学会あり。原先生ノ人の寿命ニ付て及び山田先生<sup>124)</sup>ノ林檎の寄生菌の新種発見ニ付て演説あり<sup>125)</sup>。夜は竹田氏の代理となりて高等科の授業を受持つ。

三月十五日（日）

朝より室にありて試験の準備ニいそがし。午後よりハあまりの天気よさに浮れて春の光を眺めは<sup>124)</sup>やと独り博物館内ニ行く。已ニ雪とけて草は生へねどいと心地よし。後より逢坂、池田、河内氏等も来る。独り吾れの芝生にしはれるを見て優々自適<sup>[悠々]</sup>と評せらる。それより吾れも共なりて川を渡り向ふのエルム樹の下ニ腰かけて小休止<sup>[小休]</sup>し二時半頃帰舎す。夜は<sup>[今]</sup>崎氏之度台湾ニ行かる、に付て<sup>126)</sup>夜学校にて別れの御話しある筈なれと行かず、勉強す。

三月十六日（月）

朝は植物の実験のみあり。文武会雑誌四十号<sup>127)</sup>来る。午食の後ち今日は大光寺氏伝染病室

を出づる日なればとて安部氏と共ニ病院ニ行く。然し出づるは午後よりなりと聞いて吾れと鈴木氏は立ち寄り<sup>[ず]</sup>して空しく帰宅す。天気いとよろし。夜は南一条ニ散歩ニ出る。北風そろへ吹きて寒し。

三月十七日（火） 雪

今日は朝より休業なれば動物、植物を復習す。午後も然し。昨夜より雪降り初めし様なりしか、今朝起きて見れば二三寸積り居れり。朝よりハ又々大降りとなりて昼に至るも尚ほ已まず。午後より角館、足助君一寸来訪せらる。植物を熱心ニなりて読む。夜は学校ニ行き一時間ニて帰り来り、植物を一篇さらへ、九時も過ぎたれば寝ばやとふしんを安部君の所ニ聞きニ行きしに、明日ハ動物なりと云はれて大ろ一敗し急ぎ動物を十一時迄かゝりて一篇さらう。ストーブの火も消へて心のみ急ぎ腹たゞしけれど仕方なし。

三月十八日（水）

朝は今日の動物ニ気になりて四時半ニ目醒む。最早や起き出で、勉強せし人々あれど、さのみはと思へて又眠る。六時ニて床を出で、動物を読み時間迄ニ一篇読みたれば心いと安かりしも、問題は第一、モルスカ<sup>mollusca</sup>〔軟体動物〕の体の位置を記せと言はるゝに正当の意味を取り兼而書きながらも度々自ら疑へ、書き了りても尚ホ不安心なり。ドーセ間違へし事はたしかなるべし。第二問は、エカイノダーム<sup>echinoderm</sup>〔刺皮動物〕のウラーター<sup>water</sup>、バスキュラー<sup>vascular</sup>、システム<sup>system</sup>の比較なりしか之れは出来し様なり。午後より南一条ニ行き書物を求め、一時半より昼寝をなし、夜に入りて一篇通り植物を見しのみ、十時ニ床に就く。十二時頃迄眠むられざりし。

三月十九日（木）

今日の植物は案外容易<sup>[物]</sup>の者のみなりし様なり。四十分前ニ教室を飛び出づ。図書館ニ行く。今日も極めて天気なれと風いと寒ければ外出もせず室にとぢこもり勉強もせず本を読まんとすれば頭痛<sup>[ど]</sup>み出して仕方<sup>[し]</sup>なし、不勉強虫の湧出せし為メならんか。夜は四人連れ立ちて夜学校ニ行く。南風なれと強ク吹きて寒し。雪にても降り出さん許りの空模様なり。高等科男生〔徒〕の試験を竹田氏にかわりて受け持つ。九時半頃就床。

三月二十日（金）

東洋艦隊司令長官マカロフ中将

英語の試験あり。不勉強の為め目的はづれて大ニ困しむ。最後に残りしは逢坂と伊崎<sup>[外]</sup><sup>128)</sup>と余とのみなりしが、逢坂二つゞきて吾れもあやしげの答案を出して教室を去り、吐意<sup>[吐息]</sup>気をつく。天罰とは之れなんめり。天曇りて細雨を降らす。暖くもなし。風は止めり。夜学校ニ竹田と共に掛く。雨さへ降りて道路極めて悪し。石川、半澤二氏をりたれば、八時頃帰りてテニソン<sup>129)</sup>を少しく読む。午後はトルストイを二頁計り読む。

三月二十一日（土）

ज्याマンの試験あり、丁度時間ニ出づ。正午迄図書館ニありて黒岩氏の靈魂不滅説<sup>130)</sup>を読む。曾て聖書の研究ニて読みしと同じけれどそれニてハ続の方のみ見しなれば意義貫徹せざりしも、これニはくわしくモニズム<sup>monism</sup>〔一元論〕の事<sup>[事]</sup>を論せられたり。物質皆有生の哲理を基礎として論せしなれと未だ<sup>[せ]</sup>尽く感服<sup>[ど]</sup>の議論ニ非ず。天気は極めて良けれど、風中々ニ烈しく近頃

なき大風なり。午後よりハ、ラン、ライフを二三頁読む。夜学校ニ角館氏来られたれと、<sup>【ト】</sup>  
今日は気の毒なれば帰して余独り行く。作文の試験して、

三年 火事見舞の文

二年 にわとり

三年

甲五人、乙三人、丙三人、丁二人

二年

甲四人、乙六人、丙三人、丁一人

成績あまりよからざりき。

三月二十二日（日）

朝、食堂にて池田君より夜学校にて今日ブランコ往生せしものある由聞く。何者の不礼漢ぞ、あへて神聖の学園をけがす者ぞと思へ居りしに、午後になりて留守の爺と聞きて大ニ無気力、無分別を思へあわれむ。<sup>【おのれ】</sup>已れ独り浮世の苦しみを忘れてたりとて後ニ残りし一人の妻と五人の子供は如何ニしてくらし得べきぞ、路頭ニ迷はんことは明なるべきに之れを顧みずして死するなど、は以ての外の下心得と云ふべし。然し又翻て爺の心事を察するに、人生を愛せ<sup>【ぞ】</sup>るはなきにあへて死に就くの止むを得ざるの決心ニ迄至らしめし周囲の事情は如何ニ彼れを辛苦せしめしぞ、思ふて茲ニ来れば又同情の涙なき能はず。午後より大光寺を病院ニ訪へ、花室ニ行き散歩して帰る。夜も勉強をせずトルストイの小説を少しく読む。十時半過ぎ<sup>【き】</sup>就床。

三月二十三日（月）

七時より三十分前ニ目醒めて起き出づ。今日は尾泉先生ノ農具にて試験は終る。先づ之れ<sup>【ず】</sup>にて千秋楽の事なり。午後よりハ級会を開くとの事なりしが、弥々道場ニてす。集る者二十名計り、兼て話しありし税金の決議あり。菓子出て、名を探し当てる遊戯をなして帰りは四時過ぎ<sup>【き】</sup>なりし。図書館ニ行きて新しき六合雑誌<sup>【りくごう】</sup><sup>131)</sup>ニ出でたる某氏の哲学者としてのヘッケル<sup>132)</sup>なる題にて「世界の謎語」の批評あり<sup>133)</sup>。物質と精神の区別ある上は尚ほ氏の一元論は唯物論なりと批難せり。夜は学校ニ行きて読書の試験をなして帰る。

三月二十四日（火）

〔受信〕小太郎

午前は室ニあり。午後よりハ足助一寸来訪せらる。夜は角館氏と共〔に〕学校ニ行き暫時にして帰る。帰途、南一条薬店秋野<sup>134)</sup>ニ立寄り、吸入器を買ひ入る。試験の為め八時過ぎ<sup>【き】</sup>まで時を費し、帰舎して再び組み立て応用す。蘆花子の黒潮<sup>135)</sup>を買ひ来りて朝より読み初めしか<sup>【が】</sup>夜る十二時迄ニ読了す。いつもより感服の作なり。喜太川伯夫人と同令嬢ニは同情の涙を流す。

三月二十五日（水）

〔受信〕川村<sup>136)</sup>

朝は天気例ニよりにて宜し。吸入器を組立て逢坂氏を呼び来り実験す。結果は昨夜あやしく

疑はれけるが案外宜かりし。風あれは今日も外出せず家にとちこもる。夜は逢坂氏来りて議論ニ花を生じ宗教、科学、人情、人事、あらゆる人間の真面目なる疑問ニ付て対談す。床ニ付きし八十時過ぎなりし。

三月二十六日（木）

〔発信〕川村

吸葉してエマルソン<sup>137)</sup>を少しく読み居りしニ河内氏来られて同君の室ニ共ニ行き、石川君と今度三年級より四年級ニ上級すべき者を択ぶ。其の撰ニ当りし者ハ三年ニ立花、本間、古川、河田、二年ニ阿部、大関<sup>138)</sup>諸氏なり。之れは学業の優等ト年長なりしによる。それより大挙して農園ニ散歩を試む。河内、竹田、末光、秋ちやん、僕及び河内氏の友人なり。此の日天気は宜かりしも風特ニはげしくいと冷かなり。帰舎せし八十二時過。午後よりハ理髪店ニ行き、四時ニ石川君の送別会あるなれば夜学校ニ行く。諸先生大抵集まる。豚飯の御馳走あり。五時半ニなれとも石川君来らざりしより皆々食ふ。飯はいとこわし。之の日も角館ニ頼みたれと、同氏もはれものを腹ニ出せしとの事なれば、此の次よりハかわりてやらずはなるまじ。藤井氏<sup>139)</sup>来りて将来の希望を談る。十時近く帰らる。

三月二十七日（金）

今日も天気いとよろし。吸葉して後、教育図書館ニ行き十二時近く迄居て帰る。午後よりは札幌病院ニ大光寺を見舞ひ二時過ぎ迄を。帰りてレヂュアレクシヨンを三四頁計り読む。晚餐ニ初練を食ふ。七十五日生きのびし心地して初めてテニスをやる。運よきにや中々負けざりしも、風の冷さには負けて室に逃げ帰る。

三月二十八日（土）

十時頃より南一条ニ行きしが、天気もよく風も吹かず近日ニなき好天気なれば、久々無音ニ過ぎし山鼻の齊藤氏を訪はゞやと歩を転ず。三ヶ月計りも訪はざりし為め、いとめづらしき心地す。用事ありげなりしかは、十一時過ぎ辞し去る。鶏卵五個をまらう。帰りは師範学校<sup>140)</sup>の方を通る。今日は卒業式ありしと見へて盛装せし小さき人々手ニ手ニ証書を持ちて喜ばしげに帰り来る。午後より農園ニ角館氏を訪問し病氣を見舞へて之の後も頼ふ事とせり。農芸科丈け成績今日わかりし様なり。予科、土[木工学科]、林[学科]も別る。本科のみハ未だし。夜は室ニありて読書す。之の日の新聞ニ学制改革と共ニ校名の改称の事出で人心洵々たり<sup>141)</sup>。

三月二十九日（日）

今日のはどを洗へし後、教会に出席せんかなど思へ居りし中、足助君来訪せらる。今日の十時半頃より日蝕あるにてその為めが空かきくもりてあやしげなる天候なりしか、十時頃よりいよへ暗くなりて余程かけし様なれば、二階の逢坂氏の所ニ行きて水ニ写し見る。六分とか欠けし由。午後よりは室にありて空しく読書す。夜は学校ニ行く。石川氏の談話あり。唱歌をなして帰る。休暇なればにや、先生達皆々集る。

三月三十日（月）

〔受信〕父上より

朝、遊園地ニ散歩をこゝろむ。岡田<sup>142)</sup>ニよりて窓より植木を眺めて帰る。桜梅<sup>〔ど〕</sup>なとうつくしく咲けり。角館君来られて十二時迄談<sup>〔す〕</sup>す。午後より図書館ニ行く。足助君来り居られたり。夜は室にありて読書す。

三月三十一日（火）

〔発信〕直次へ

九時半より道場ニ急ニ級会を開きて、狩野氏より此度の学校の一件ニ付きて校長<sup>143)</sup>との会见始末を話さる。十時半より農芸科卒業式あり、演武場ニ集まる。式すみて後、本科、予科のみ残りて相談会を開き、狩野の談話あり。後日を期して更ニ決議すべく解散す。昼飯後、為替を受取る為メ郵便局ニ行く。之の日、中々の大風なり。午後より逢坂氏来室す。夜は少しく読書して九時ニ就床。夜より大風大雨となる。

四月一日（水）

〔発信〕父上

昨夜の雨と風とは止めたれど空曇りて又々雨でも降りそうな天候なりしか<sup>〔が〕</sup>、ひる頃よりそろへ風吹き出し、雨も少しく混じる。午後より小泉氏を訪問せしに丁度引越しの最中にて二三人の朋友来りて手伝へ居れり。不意の事なる由にて余も更ニ知らざりき。共ニ荷車ニつきて新宅ニ行き談話の後帰る。夜は夜学校にて石川氏の送別会ある筈なれ<sup>〔は〕</sup>は行く。七時頃より初まり、河内、末光、池田氏の談話及ヒ石川の談話あり。唱歌の後ち帰る。九時過ぎなりし。直ニ床ニ就きしかと、眠りしは十一時過ぎなりし。

四月二日（木）

今日も朝より天気悪るし。然し雨は降らず。室ニありて靴を磨き、論理学を少しく読む。正午前二角館氏来訪せられ作文を受取る。直ニ帰らる。午後よりは散歩ニ出掛け南一条を南二条ニ出で六丁目目より引き返す。風吹き荒みていと苦し。夜は学校ニ行く。先頃の試験に欠席せし者数人を試験し八時半ニ帰りて眠る。

四月三日（金）

神武天皇祭

朝よりの曇天なり。今日豊平館にて青年会<sup>144)</sup>の発会式ありし筈、寄宿よりも数人の出席者ありし様なり。午前中大光寺を訪へたれと、診察中なりしを以て暫時待ち居たれと中々すみそうもなければ<sup>〔は〕</sup>帰る。午後よりは二時間計り昼る寝をなす。夜学校にて女生〔徒〕の会ありし筈なれと、出席せず。学校の問題ニ付て各級の委員は縦覧室ニ集りて会議を開きし様子。藤井氏を訪へて二時間計り談話す。

四月四日（土）

九時半頃より藤井氏と円山ニ散歩に出掛く。昨日と変りて天気極めて良く、風もなかりければいと暖く汗流れて今更なから厚着せしをくやしく思ふ計りなりし。途中にて足助氏等と会へしかど、足早やに進み行きて池のほとりより藪の中ニ入り、雪の下より芽を出せし計りなるを彼れ之れと扱びて二三かぶ掘る。十一時頃温泉ニ行き風呂ニ浴して中飯を食へ一時半頃迄遊びて帰路ニつく。中々愉快なる徒遊なりき。夜はトルストイの小説を四五頁

計り読む。

四月五日（日）

今日も天気宜かりければ、遊園地ニ独り散歩を試む。風あれは昨日の如くならず。帰路独立教会<sup>145</sup>ニ行き、帰舎せしは十一時半なり。夜は夜学校ニ行きしかと、暫時ニして帰る。

四月六日（月）

午前は室ニありて外出はせず。午後より足助君を訪問せしかど不在なりし為め帰りて図書館ニ暫時よる。急ニ雨降り出して風さへ烈しく吹く。夜は幸ひおぼろ月も出しかば、南一条を西七八丁目辺迄行き北一条を通りて帰る。

四月七日（火）

朝は雨降りしかと間もなく天気となりたれば、病院ニ大光寺と坂本氏を訪問す。色部と渡辺君<sup>146</sup>も来られたり。十一時ニ辞して博物館構内を散歩して帰る。午後は南一条ニ出で、ノートブックを買求む。足助氏を訪問せんとして行きしか不在なりしかば、製糖会社<sup>147</sup>の方ニ散歩し苗穂の北一条通りを過て帰る。

四月八日（水）

今日より学校始業す。例の如く時間割の問答ニ終りて帰る。一人にて遊園地より豊平の川岸を散歩して十時半頃帰舎す。角館君正午迄をられたり。午後は図書館ニ行き二時間計り雑誌を読む。夜食後風呂ニ入り、六時過ぎ夜学校ニ出掛く。今晚は余か受持ニ非らざれど明日より出づるなれば様子見ニ行きしなり。九時頃ニ帰る。

四月九日（木）

朝ニ農具論あり、動物は休む。十一時迄小池氏<sup>148</sup>を訪問して雑談す。学校問題ニ就て慷慨せられたり。十一時より校長の説演ありしが特ニ今日は不得要領なり。中食の後に農園ニ散歩ニ出掛く。余りに天気よかりしかば線路を伝ふて五六町下り北五条の通りを帰り博物館内を貫けて帰校す。少しく風吹き出す。夜学校ニ行く。

四月十日（金）

休日無事。夜学校ニ行く。

四月十一日（土）

休日無事。

四月十二日（日）

無事。

四月十三日（月）

朝、級会あり。授業なし。夜学校ニ行く。八時過ぎ帰る。

四月十四日（火）

朝より級会あり。授業なし。午後より農園ニ行きて肥料を運ぶ。この日、辞職勧告事件ニ付きて予修科一、二年級、休学ヲ命せらる<sup>149</sup>。夜学校ニ河内、竹田氏と共に行き帰りしハ九時なりし。

四月十五日（水）

之日は尾泉氏の農具一時間あり。

四月十六日（木）

農具あり、動物は休みとなる。午後より角館氏を訪問して四時半頃帰る。夜は学校ニ行く。帰りて直ニ就床。

四月十七日（金）

大島教授<sup>150)</sup>の植物栄養ありたれど、御話しと参考書とを写して終り。本授業は月曜よりなす。原先生の動物あり。午後より南三条辺迄散歩ニ出掛け直ニ帰る。之日星学の大意を読み了る。夜は竹田氏暫時来り話せり。ポール氏のヒトスリー、ヲブ、ヘブン<sup>151)</sup>の太陽ト月の部、大体み読み了れり。

四月十八日（土）

朝は図書館ニ暫時行く。理髪所ニ行きて中飯迄ニ帰る。午後は風吹き出せしを以て室内ニあり。昨夜小樽ニ大火ありて九百戸計りも焼へし様ニ広告あり<sup>152)</sup>。夜は学校ニ行き帰りて池田氏の室ニ行き暫時ニして帰る。藤井氏来られて、眠ニ就きしハ十一時頃。

四月十九日（日）

朝より極めて天気よし。散歩に出でしのみにて大抵は室内ニあり。夜は学校ニ行きて尋常科生徒ニ講話をなす。高等科生徒は倫古龍会ありて、足助、池田諸氏の話しありし様なり。書冊三、四冊寄贈して帰る。

四月二十日（月）

天気よし、別段書くことなし。

四月二十一日（火）

此の日も天気は宜かりしも風中々烈し。午後より農園ニ実習ニ行きしが、例の風一層強く吹き、別段仕事もなく立つ居るなれば極めて寒しと感せしに、はたして風邪ニ取り付かれたり。ハーロをしかけ区割をなして帰りしは四時半なりし。夜は学校ニ行く。

四月二十二日（水）

之日、昨日の農園行の爲め風邪の気味ありしに由て大事にせばや、午後より床ニ就きて眠る。夜食前風呂ニ入りて又直ニ床に就く。寝ながら本を読みて眠りしは十一時頃なりし。

四月二十三日（木）

〔受信〕小島、直次

今日も動物実習は吾か組なり、鶏を見る。午後より天気もよく風も無かりければ散歩ニ南一条ニ行きしか、それより博物館を通り抜けて農園ニ行きて見る。流石ニ茲は風の名所なれば早々ニ逃げ帰る。夜は学校ニ行く。角館も来り居られたり。

四月二十四日（金）

〔受信〕連次郎<sup>153)</sup>様

大島先生は休みなれば、鶏の解剖を始む。午後よりは図書館ニ行きてそれより復習講堂ニて基督伝<sup>154)</sup>を四時過ぎ迄読む。

四月二十五日（土）

〔発信〕連次郎、父上

十時半頃より農園の馬市ニ行きしかど何処ニてなすをるにや別らざりければ、第一農場の方を通りて帰る。天気極めて良きより午後よりも散歩ニ出づ。夜学校ニ行く。夜二時頃ニ創成川ぶちの宿屋より火事起り美以教会<sup>155)</sup>等数軒焼きはらへり。

四月二十六日（日）

朝十時頃より又々農園ニ行く。中学校の少し前ニて雨ニ降られければ帰りかけしかど又々霽れしかはもどり行く。人も更ニ集らず、牛も集らざる様子なれば帰る。路にて佐藤様ニ行き逢ふ。昨夜の火事跡を見物して、更ニ大通りニ出て自転車競争を二三回見物して帰る<sup>156)</sup>。午後より又竹田氏と行きかど人余りに群集せしかば博物館に行き内ニ入りて見物して帰る。桜も大部蕾を増セリ。夜は学校ニ行く。末光氏の話しありて、大島先生の一寸御話しあり。唱歌を終りて大島先生の下宿<sup>157)</sup>ニ至り種々談話を承りて帰舎せし八十一時過ぎなりし。

四月二十七日（月）

無事。午後よりは又々復習講堂ニ行き十九世紀の預言者なる書<sup>158)</sup>を読む。四時頃より散歩ニ博物館ニ出掛け、北五条を西の方ニ行きて恩地氏等と出逢ふ。夜は別段ニ誌るす事なし。

四月二十八日（火）

之の日朝より大風なり。動物の実験あり。午後より又々復習講堂ニ行きて日なたぼっこをなす。夜学校ニ行く。今日、畳を改正したり。豚小屋も少しは美しくなりて心持よかるべし。往復の途中中々風吹く。此の日昼の間より円山の奥の山ニて火事ありし様なりしか、夜ニ入りてハ三角山一面の火となり中々壯観なり。藻岩の奥も火事ありて、茲よりも火光焰々天をこかせり。

四月二十九日（水）

記事なし。

四月三十日（木）

午後より足助氏来りて円山の観桜を勧めしかど、今日は農園の実習あることなれば一寸は顔出しもせねばならぬ事とて断り農園ニ行く。時間早き為め馬市ニ行きて見物し、三時近なりたれば農場の中を通りぬけて帰る。夜は学校ニ行く事、例の如し。

文題、花見に友を誘ふ文

五月一日（金）

〔受信〕父上より

午前は例の如く授業あり。午後よりハ農園ニ行きて狩野氏の五升いも畑を耕す。小泉の手助などをなせし為め、尽く掘り返す事能はじ。明日更ニ行く事として四時半頃帰舎す。夜は一寸学校ニ行きて一時間計[り]の後帰る。労働して発汗せし為めにや、先日来の風邪、多ニ宜し。

五月二日（土）

二時間ノ授業すみて後、直ニ農園ニ行く。昨日の残りの分を尽く掘り返す。帰舎せしは一

時近くなりし。一時半より大島先生ノ欧米学生の事情及び池氏のフートボール<sup>foot ball</sup>に付て講演あり。終りて演武場前ニてフートボールの稽古をなす。角館氏来りてフリームの農書<sup>159</sup>を持ち来り二頁計り訳読をなしやりたり。夜学校ニ行く。

五月三日（日）

天気極めて良ろし。今日こそは花見ニ行かばやと思へしかと、午前中は何にかと用事ありて十時過ニなる。角館氏、坂本君の見舞に行く途中なりと云へて一寸尋ねられ午後より一所ニ円山ニ行く事を約す。中飯迄は復習講堂ニありて読書す。午後より約ニよりて円山ニ向ふ。夥しき人と、乾ける土と風と、其の砂利を敷きつめし為め歩き悪く黄蘆<sup>[塵]</sup>反丈<sup>[煩擾]</sup>の有様なり。神社の前ニ至れば一層の騒客にて賑かなること例の如く記するの必要もなかるべく、実ニ花も人の為めには閉口の体ニして淋しげニ立てり。帰路は北五条を過て帰る。夜食後は病院ニ坂本を見舞ふ。病状更に宜しとも見えず。いと気毒<sup>[極]</sup>の至ニ耐へず。

五月四日（月）

〔発信〕父上江<sup>[〜]</sup>

午前は例の如く学課あり。午後よりは農園ニ行きて一時より畦を立て、逢坂氏と二人にて堆肥を運搬す。最早や終りなれば概く掘りて三車運<sup>[ぶ]</sup>ふに大抵は尽きたり。五時の時計の音を聞きて帰る。四時間の労働なれば、<sup>[は]</sup>ひ<sup>[た]</sup>勞<sup>[は]</sup>すること甚たし。夜は九時頃ニ寝ニ就く。

五月五日（火）

尾泉先生の時間は時計の<sup>ママ</sup>あ屋訪れる為メ休む。朝より雨降りしか終ニ風も強く吹き出して夜に入るも止まず。角館氏訪問せられ五時近く帰らる。夜は学校ニ行く。

文題三年 円山、

二年 梅、

五月六日（水）

朝は曇りてあやしき天気なり。大嶋先生ノ授業あり。原先生ノ授業は休みて運動会<sup>160</sup>ノかざりものを作る。午後よりは農園ニ散歩ニ行きて直ニ帰る。雨少しく降り出せしか夜ニ入りてもやみそうなし。夜は本日買へ来りし英国土道物語り<sup>161</sup>を読み了る。

五月七日（木）

〔発信〕文明堂<sup>162</sup>へ、注文状

朝の六時頃迄は雨降りし様なりしか、七時頃より天気となりたるに付き今日の運動会はやるとて鐘を打ならせしも八時過ぎ又中止となる。

五月八日（金）

今日は弥々天気なれば、六時頃より起き出<sup>[で]</sup>て運動会ノ準備をなす。大抵ハ昨日なせしこと、て十時より遊戯を初む。午前は人も来ず遊戯も三等のみなりしかと、午後よりハ招持席も一杯となり、普通の観覧人もをし掛<sup>[押し]</sup>け来れる事とて、場内整理のいそがしさ目の回る様<sup>[な]</sup>様なりし。大抵諸学校ニは前ニ席を取らせ、三時過ぎよりハ誰れニても随意ニ入場せしめたり。一哩<sup>マイル</sup>ニてハ安部一等となり、諸学校競争ニては一、二等とも師範学校ニて占む。各科競争ハ森林科の成田<sup>163</sup>と云ふ人一等ニて、影山<sup>164</sup>ハ三等なりし、老へたりと云ふべ

し。終りしは六時頃なりし。夜は角館氏九時頃迄遊び行かれたり。

五月九日（土）

今日は七時過ぎ迄誰れも起き出づる人なかりしは、定めし昨日のつかれ出でしなればならん。朝より雨降り出たりて夜ニ入りてようやく止む。終日室ニ籠りて空しく暮す。夜は学校ニ行く。工藤来り<sup>[居]</sup>をられたり。

五月十日（日）

今日のはめづらしく天気なりしかど、風少しくあり。女子小学校<sup>165)</sup>の運動会ある由なりしか<sup>[と]</sup>と見ず。午前は南一条を西ニ行き博物館前を通りて帰り来る。午後よりも室ニありて一寸復習講堂ニ行き書を読みしか<sup>[が]</sup>、室ニ帰りて夜食迄午睡す。夜は学校ニ行き、尋常科生徒ニをかき昔話をなす。高等科ニはリンコン会あり。生徒更ニ来らざる模様なり。

五月十一日（月）

午前中は例ニよりにて授業あり。図書館ニ少時間行く。午後よりハ農園ニ行きて諸を弥々まきつく。天気極めて良く風さへなきいと穏き日なれば<sup>[は]</sup>、手稲の諸山も青く山の方ニそばだち、菜の花、たんぼ<sup>タンボボ</sup>などの花も黄ろく咲き出でたれば<sup>[は]</sup>、眺めいと思白く<sup>[面白く]</sup>画を見るが如き北海の好風景は何時見るもあかねど、今日は一年の春一時ニ来りし心地ぞせられける。四時半頃概く終りて帰る。

五月十二日（火）

朝は少しく雨降りて寒し。図書館ニ少しく行く。午後よりは尾泉氏の水田あるニより農園ニ行きしか<sup>[が]</sup>、それには出でずして畑ニ行きて「きみ」の畦を立て肥料を入れる。安東氏来りて塵を焼けるに真似て吾れも吾<sup>[が]</sup>か領分ニある限きりの物を集めて火をかく。風いと強く吹きければよく焼ゆ。四時半過ぎ帰路ニつく。夜学校ニ行く。高地氏にかわりて某と云ふ女の先生、明日より出でらるゝ筈なり。

五月十三日（水）

朝の授業は例の如し。午後よりは角館氏来りて英語を講談す<sup>166)</sup>。夜は足助君来る。

五月十四日（木）

午前は例の如し。午後より農園ニ行き、とうもろこしを播種す。夜は学校ニ行く。

麦

本を借るゝ文

五月十五日（金）

朝七時半より月寒の演習を見んか<sup>[が]</sup>為め学校を出立す<sup>167)</sup>。朝は少しく雨降りたれば<sup>[は]</sup>外套などを着込みて用意せしかど途中にては已ニ雨模様もなくなれり。豊平橋の此方ニ二小队計りの兵士休憩し居たり。橋を渡りて兵士の列に次ぎ行く。見物中々出だり。演習は十時頃より初まり兵營の少く南ニ一列となりて盛ニ出現せり。十一時半ニ終る。十二時頃より観兵式あり一時頃ニ終る。帰途は各学校の生徒及<sup>[と]</sup>其の他の見物人皆一しく<sup>[等しく]</sup>帰るなれば<sup>[は]</sup>、塵の立つこと甚しく氣息もつまる計りなりし。舎ニ帰りしは二時、少しく昼寝す。夜は開識社なく、吾が宗教<sup>168)</sup>を読む。

五月十六日（土）

午前は授業あり。午後より農園ニ行きて大豆を植る積りなりしも雨降り出せしによりて室ニ座居す。夜は学校ニ行く。雨少しは霽れて明日の天気稍々望みあり。本日の萬朝<sup>169</sup>ニ那珂博士<sup>170</sup>の甥藤村操君、年十八にして宇宙の疑問解けざるを恨み日光山奥の華巖滝ニ投じて死すと、<sup>〔措しむ〕</sup>を<sup>〔ほ〕</sup>しむべき哉。好少年、君は曾て札幌中学ニあり、札幌ニ成人せりと。死ニ臨みて巖頭の樹を白けて書せるの文は巻後ニ誌せり<sup>171</sup>。

五月十七日（日）

今日は八時より夜学校の女生徒と藻岩へ登山の筈なれば、六時頃目を醒せば雨の音す。兎てもだめならんと思へ居りしも、雨<sup>〔は〕</sup>齊<sup>〔は〕</sup>れて天気模様ニなりたれば起き出て角館君と共に八時頃出立し、本願寺の門内にて皆々を持ち受く。九時半頃ニ一所となり山ニ登る。他にも二三の組登り来れり。頂上ニ付きしハ十一時、皆々中飯を食へ一時頃雨少しく降り出せしかは下る。温泉<sup>172</sup>にて二階を借れて円座を作り名指しなどして愉快ニ遊び、三時半過ぎ茲を立ち出て、<sup>〔で〕</sup>各々家途ニ向ふ。之の日は竹田と北澤の外、皆々来れり。足助も、工藤も、橋本<sup>173</sup>等も遅れて登山せり。夜は学校ニ行く。倫古龍会あり。

五月十八日（月）

午前中は授業例の如し。午後よりハ農園ニ行きて大豆を植へ終る。柳川<sup>174</sup>来り居れり。夜は学校ニ行きて先日頼まれし入学者を試験し見る。余り望みなきにも非<sup>〔ざ〕</sup>りしかと、二年級は殆ど満員なりし為め実ニ氣の毒之極なりしも断りて帰らしむ。

五月十九日（火）

土曜日の夜学校の前にて拾へ来りし子犬を皆々もてあませしによりて柳川ニ嫁入りさす。農園ニ行べき日なりしも雨降りし為め休<sup>〔み〕</sup>となる。角館氏来りて英語を教ゆ。五時過ぎ<sup>〔き〕</sup>となれり。夜は学校ニ行く。

三年 金子を借る、文

五月二十日（水）

〔受信〕小島

朝より天気極めて良ろし。此日より吉井先生<sup>175</sup>の授業あるニよりて午後より化学実験ニ取りかゝる、四時迄。夜は聖書の研究<sup>176</sup>を借れ来りて読む。

五月二十一日（木）

朝より雨模様なりしか、十二時頃より降り初む。動物の実験室ニ行きて人々のなすを見る。夜学校ニ行く。

五月二十二日（金）

午前之授業は例の如く、午後よりも化学実験あり。微雨<sup>〔霽 陶〕</sup>として降りウツトウしき事限りなし。七時より復習講堂ニ開識社あり、弁士及演題は次の如し<sup>177</sup>。

愉快の精神 江刺家

馬鹿論 池田

おとき<sup>〔き〕</sup>嘶ニ付て 藤井

人相論 芳賀<sup>178)</sup>

五月二十三日 (土)

午前は例の如く、午後も天気悪しければ外出せず。夜学校ニ行く。角館氏来る。

五月二十四日 (日)

今日は尋常科生徒と真駒内ニ行く積りなりしも天気宜しからざる為め中止ときめ学校ニ行きしか、生徒は早や皆々集まり、天気も少々望みある様なれば又々急ニ行く事とし九時より出立す。余と角館君と生徒を伴れて先発し、多くの先生ハ後より来る。牧場<sup>179)</sup>の入り口にて少許待つ。茲にて半澤及び女先生等と一伴となる。茲より更ニ農場の西ニ行きて川を渡りてかつ好の野原ニ出で、遊ぶ。吾等は其の中川ニ橋を架く。中飯を食ふて後ち種々の遊び等なし、帰途ニ付きしハ三時半を過ぎたり。舎ニ帰りしハ六時。夜学[校]ニ行かず。此の夜、南三条辺ニ出火あり。

五月二十五日 (月)

〔発信〕小島

朝より天気なり。午前は学校あり、午後よりハ風少しくありたれど農園ニ行く。未だ我が植へし者は何れも生へず。夜食後足助氏を寓ニ訪ひ種々談話の後ち、帰りしは已ニ九時半頃なりし。

五月二十六日 (火)

午前は授業例の如し。午後よりは富貴堂にて天人論<sup>180)</sup>を求め、遊園地ニ行く。後方の馬場にて三十分余ねころび、岡田花園ニ行きて帰る。夜は学校ニ行く。之の日極めて晴天。

五月二十七日 (水)

午前は大嶋先生授業休みなり。午後よりハ化学実験あり。夜は室ニありて読書す。午前二時頃にもや、半鐘の音ニ夢を破られ起き出で見れば、火事は電燈会社<sup>181)</sup>の北隣より燃へ上り少しの風ありし為め火の子盛ニ飛び散れり。中々止むべき風もなかりければ急ぎ洋服ニ改め再びかけ着く。幸ひ強風ならざりしとポンプのありし為め一区画にて止まれりしハ幸福の事なりし。終りし頃は已ニ夜少しく明けはなれたり。再び床ニ就く。

五月二十八日 (木)

昨夜の火事の為め本日の授業は休みとなる。朝来天曇り雨さへ降り出し風も中々あり。夜学校ニ行く。

五月二十九日 (金)

大嶋先生の授業は休みとなる。夜は角館氏を訪問す。明日、寄宿舎送別会を兼て開識社を開くなれば、夜学校の授持ちを明晩丈け依頼す。談話ニふけりて十時過まで居たり。

五月三十日 (土)

朝の授業ありて、農園の畑を見に行く。諸の方は未だ芽を出さず。人より遅くまきつけしによるならん。コーン<sup>corn</sup>の方は早や芽を出せしものあり、大豆は未たなり。一時より武林<sup>182)</sup>ニ写真を取りに出掛く。今日も朝よりむし暖かりしか、撮影するとき一層甚たしく汗も流れん計りなりし。食堂にては御馳走あり、南先生も来られたり。六時より開識社に於て演

説会兼送別会を開く<sup>183)</sup>。河内、川口<sup>184)</sup>、逢坂氏等登壇し、最後ニ芳賀君のあいさつに次で人生観ニ付て懇々述べらる。菓子、コーヒー、スシの御馳走出て、散会せしハ九時過ぎ<sup>[き]</sup>。トルストイの吾宗教を読み了る。

五月三十一日 (日)

朝は曇天にして細雨降る。九時過ぎ<sup>[き]</sup>恩地君を訪問したれども不在の為め足助氏宅ニ向ふ。途中ニて行き逢へ十時過ぎ<sup>[き]</sup>迄同氏の室ニ居り、天気となりたれば豊平川の土手を伝ふて遊園地ニ至り、岡田花園ニ致りて鯉魚を見て帰る。午後は在室す。夜は学校ニ行く。末光氏の講話あり。半澤氏すゞらんヲ採取し来り生徒ニ与ふ。吾れも一たばをもらひてビンに挿すに清香室をこめて得も言はれぬ様なり。実に春の王女なるべし。國分君への手紙を書く。

六月一日 (月)

〔発信〕 國分様

〔受信〕 父上より

午前の授業は例の如し。午後よりは農園ニ散歩ニ行く。天気よければ第二農場の細道を試験場<sup>185)</sup>の方に行き牧場に入りてぶらへ散歩し、第一〔農場〕に出で作物を見て帰る。今日は巴ニ大豆も芽出で、薯も三四本新芽を出せり。夜食後はテニスをなし、南一条を散歩して帰る。

六月二日 (火)

今日も天気よし。郵便局ニ至りて為替を受け取る。午後より農園ニ行きて石油発動器を見る。第一農園ニ出で博物館脇を通りて帰舎す。夜食後、角館君来られ三十分計り英語の後ち共ニ夜学校ニ行く。

三〔年〕 我国

二〔年〕 松

六月三日 (水)

〔発信〕 父上へ

朝は天気よかりしも午後より曇りて三時頃ニ雨少しく降る。化学実験ニ四時過ぎ<sup>[き]</sup>。父上への手紙を書く。

六月四日 (木)

十時頃より博物館ニ行きて鳥類の講義を聞く。午後よりハ農園ニ行くべかりしも、風烈しき為行かず。夜は夜学校ニ行く。大島先生来られたり。

三〔年〕 花を贈る文

二〔年〕 すゞらん

六月五日 (金)

大島先生ノ試験あり。一時間足らずの時間ニ五問題なりし為め思ふ如く書けず、極めて不成績なりし。午後よりは化学の実験あり、酸類ニ入る。夜は南一条ニ行きて買物をなす。

六月六日 (土)

今日より宮部先生の議講あり。農園ニ行きて唐きみの鳥よけを作る。夜は学校ニ行く。

六月七日（日）

朝は一人にて円山ニ出掛く。元の池ある辺ニ出で、暫らく休みて帰りしは十二時なりし。天気よく、いとあつき日なりし。裕を着んかとして出す。午後よりは河内の室ニ行く。七時より倫古龍会<sup>〔百回カ〕</sup>あり。大島先生ノ欧米の風俗に付て談せられ、其後種々の遊戯をなして散会せしは十一時近くなりし。生徒も三十人以上集りて中々盛会なりし。

六月八日（月）

大嶋先生ノ英作文あり、Technical Educationなる題なりし。午後よりは農園ニ行きて薯の移植をなし、狩野君のキヤベーチ畑<sup>cabbage〔キャベツ〕</sup>を作るに手伝ふ。

六月九日（火）

午後より尾泉先生の水田の実習あり。田のくれをく<sup>〔嵜〕</sup>だく。夜は学校ニ行く。

六月十日（水）

午後は学校ニ出で、午後より化学の実験あり。夜は風呂ニ入る。角館君来る。

六月十一日（木）

動物の実験として博物館ニ行く。鳥の講義すみて博物館内ニ入り熊ニ食はれし子供の手足を見る<sup>186)</sup>。之の日農芸科ニ支那人二人入り来り、寄宿舎に入る<sup>187)</sup>。夜、復習講堂にて歓迎会を開く。吾れは出席せず。午後より農園ニ行きて草とりをなす。天気極めて良し。夜は学校ニ行く。

祭礼ニ友を招く文

六月十二日（金）

朝は雨降る。十一時頃より霽<sup>は</sup>れたれど天気は曇<sup>は</sup>れり。午後、化学の実験あり。夜食後一と休みせんとして床ニ就<sup>か</sup>きしか、ふと目を醒<sup>は</sup>せは十時ニなりたり。十二時迄勉強せばやと起き出で、動物を読む。再び床ニ就<sup>ど</sup>けども、之度は万感胸ニ往来して想像、思想、意をたくま<sup>〔選しくし〕</sup>し、眠りしは二時過<sup>き</sup>きなりし。

六月十三日（土）

朝の農具は農園ニ行きて実物を見る。大嶋先生のローウエル<sup>188)</sup>の講義すむ。十二時迄図書館ニ行く。午後より足助来り後、二人にて河内の室<sup>〔理〕</sup>ニ致る。帰りしは四時。夜は学校ニ行く。降雨の為め道路中々悪るし。

六月十四日（日）

朝よりして雨降る。

In The morning it has rained ; about 9 o'clock, the rain has ceased but the air was very cold and moisture ; the exquisite study of lesson has ached on my head so that I take a walking to Minami ichizo, in the road I have met Mr. Koike. In the Afternoon I was sitting in my room, and slept a little while, in the night I have gone to our school.

六月十五日（月）

The sun beam has awakened me from the bed, I was very cheerful because today is the festival day of Sapporo jinja<sup>189)</sup> ; at the 9 o'clock the rain has fallen but soon it ceased about

10 o'clock I visited for Daikoji, in the afternoon I went to the Yuenchi to see, the horse race and on there I have met Mr. Koike, Mr. Abe & at the 4 o'clock I have returned to my home.

六月十六日（火）

〔受信〕小太郎

It is fine weather in the morning, so the whole city crowded with man & woman; the festival procession went round and round each streets. The afternoon I have taken a walking to Toyohira bank, the night also.

六月十七日（水）

〔発信〕小太郎

fine weather. I was in my room at fore noon, the afternoon went to Hakubutsu Karn.

六月十八日（木）

〔受信〕小太郎

fine weather, Today we have examination of nutrition of plants, I learned a room about 10 o'clock, then there has been a thundering & lightening but the rain has not fallen, the afternoon I went to Yuenchi and entered to Busanchinretsujō.

六月十九日（金）

朝は植物と独逸との試験あり。午後より逢坂、河内と共に鉄道線路を散歩す。朝は曇りしか、午後より天気となり中々暖〔か〕なり。帰りは博物館内を通り、池の辺りにて小休して帰る。夜は南七条辺迄散歩し、明日の動物の下しらべをなす。

六月二十日（土）

朝より天気いとよろし。動物の試験あり。十時半頃より高橋<sup>90)</sup>と農園に行く。此の夏の草取りをきみとの交換にて約束を取り結ぶ。本日の新聞ニ本科二年の騒動出でたり。蔭山迷惑の体なり。

六月二十一日（日）

大抵の課業を昨日にて済みたれば気楽なり。午前、午後とも散歩す。特ニ午後よりハ一人にて東橋より茶碗淵を通りて帰る。天気極めて良けれと風少しく吹き出せり。夜は学校ニ行く。末光氏の御話しあり。

六月二十二日（月）

朝より風ありて氣候少しく寒し。尾泉氏の試験あり。午後よりハ足助氏来訪し竹田と三人にて苗穂辺に貸家を見付けに行く。余と足助ハ随行なり。足助の宅より二人にてローズの蕾をもらひ来る。香ひいとよし。夜に入りて雨となる。風も少しくあり。夜学校ニ至りて試験をなす。答案を見終り十時にもなりたれば床に就かんとせしに突然半鐘の声聞ゆ。東の方なれば夜学校の附近にもやと思へかけ出す。南二条の東一丁目にして風ありしがと数戸にて済みしに幸への事なりし。

六月二十三日（火）

今日も風ありて雨模様なり。大嶋先生の英語試験あり。午後より北澤の処ニ至りて恵庭山登山の相談をなし、天気良ければ明後日出発せんと極め帰る。夜は学校ニ行く。三年ハ作文、二年ハ読書なり。滝氏来られたり。九時過ぎ帰る。

六月二十四日（水）

朝より化学の試験あり。十二時半迄かゝりてあやしげなる答を得て帰る。粉末と液体ニして粉末の方はコバルトらしく、液体は鉄と云ふ人ありしかど、クロミにアムトマンガんに塩酸なりし。午後よりは河内の室ニ至りて談話し又夜学校の答案ニ評点も付す。晩方ニ北澤宅を訪ね、出発を延期し廿六日となす。七時より同窓会倶楽部ニ卒業生の送別会あり会する者三四十名、十時頃ニ解散す。

六月二十五日（木）

八時半より農園ニ至りて田植をなす。巨離試験として六寸五分？、八寸、一尺の三種となし、植へ終りしハ十二時なりし。今日も風ありて陰雲四方にふさがりて兎ても天気の見込みなし。時々雨降る。午後は南三条迄散歩ニ出掛けたり。夜は学校ニ行く。風寒し、雨滴降る。

六月二十六日（金）

九時過ニ農園ニ至りて薯ニ培土し、大豆の除草し、とうもろこしの除草ニ取りかかりしに雨降り出せり。今日にて皆なとり終らばやと尚ホ働きしか、弥々本降りとなりしかば三畦計り残して帰る。北澤等、関と共ニ遊びニ来り居れり。恵庭登山は明日も天気悪しき時は七月ノ一日迄延すこと、昨夜安部氏より言へ来りしかば、別段何にも言はず。午後より教育図書館ニ行く。四時頃の帰りにて、風尚ホ止まざれど雲霽れて青空を所々に出せり、或は明日の天気ニ望みあらんか、夜床にありて外交奇談<sup>191</sup>を読み居りしに十時過ぎ火事あり。急ぎ飛び起きてかけ出す。北三条東一丁目ニして焼失戸数四戸計りなりと。夜学校ニ用事はなかりしも行く。

六月二十七日（土）

昨夜、大光寺より借れたる目醒しの未だ鳴らぬ中より目を醒し居りたれど、鳴る迄は起きも上らず。窓は薄し暗らければ今日の天気は如何なるものにかと案ぜられしが、はたして雨にはなるまじけれと曇れり。兎ても出立むじかしければ北澤の処ニも行かず。八時半頃より農園ニ至りてとうもろこしの除草と培土とをなす。十時頃より天気となれり。それよりぶらへ散歩して帰りしは十二時なりし。午後よりは山鼻ニ齊藤氏を訪ふ。遊園地ヲ経て帰る。今日より大通りニ相撲の興行あり。京都角力とかの由なり。五時過て竹田より電話ありしニより佐野屋<sup>192</sup>ニ行きて夜食の御馳走ニなる。夜学校ニ行く。試験成績終りて我級よりは桜井<sup>193</sup>と梁田<sup>194</sup>落ちし由。桜井君は兎ニ角、梁田は気の毒千万の事なり。予[科]の二年にては工藤と小川<sup>195</sup>と落ちし由。之れも気の毒なり。

六月二十八日（日）

今日はリンコン会にてミソマイ辺ニ遠足ある日なれば、朝五時頃目醒めて起き出づ。雨模様なれば行かず。河内、竹田、逢坂の諸氏は出掛たり。風あるに加へて時々微雨降りた

れは、さころ困難なりしならめと案せらる。終日室ニありて書を読む。夜食後、縦覧室ニ寄宿舎会ありて解散後の事やら新寄宿舎制度ニ付て議す。九時半を過たり。之の夜々学校ニ茶話会ありし由なれと、前の事ありしニ付き行かず。雨降りしきる。此の日南一条東一丁目殺人事件ありしとか。

六月二十九日（月）

之の日も朝より天気悪く雨降る。道路ぬかりたれば外出もせず内ニ籠城す。午後よりも同じく徒然なり。夜学校ニ行く。有島君<sup>196)</sup>の御話しありて授業は休む。

六月三十日（火）

之の日演武場に卒業式あり<sup>197)</sup>。

七月一日（水）

此の日午後弥々寄宿舎を出で、角館氏の室に引きこす。夜は夜学校ニ行けり。

七月二日（木）

此之日寄宿舎ヲ出ツ

朝七時の発車乗り込む。有島、河内、末光及び一年ノ高松<sup>198)</sup>及二氏と同車す。有島君等とは室蘭ニて別れ、汽船よりハ東郷、住友君<sup>199)</sup>及び高松氏等と同乗、それより故郷迄同伴せり。

九月九日（水）

此の七月一日ヨリ山崎下宿舎に入る

室蘭よりハ河内、池田君及び河内の知人と同車せり。他の列車には越前屋<sup>200)</sup>、河村君<sup>201)</sup>など居られたり。河内氏とも青森より一所になれり。室蘭は宿ニ就かず直ニ停車場ニて待ち合せたり。濃霧深くして雨の如かりき。札幌停車場二つくや、足助、末光、竹田など夜学校ノ連中乗り居られたり。余は直ニ角館君と同氏ノ宿所ニ急ぎ行く。夜は風呂ニ入りて直ニ寝る。

九月十日（木）

馬鈴薯<sup>1)</sup>にロト病付けりと聞き午前は農場ニ行きて薯を掘る。柳川、高橋ノ二氏ニ逢ふ。概く掘り了りしは十二時なりき。畑の中央ニ穴を掘りてうづめ置く。午後よりハ藤井氏訪問せられたりと聞き余も尋ぬ。二時間計りの後、足助を訪へしかと不在の為メ、南一条ニ出でノートを購入、大通りニ出で、黒田伯ノ銅像<sup>202)</sup>を見る。夜は夜学校ニ行く。先生等皆な来り居られたり。

九月十一日（金）

午前九時頃より経済学教室ニ始業式あり。諸先生ノ訓辞ありて解散す。畑ニ行きて藤井、大光寺ととうもろこしを採り来り、下宿ニ帰りて焼き食ふ。それより牛乳ニ合を呑みて、南三条ニ出で、更ニ足助氏ノ宅を訪問せんとして歩を転せしに、そろへ腹の工合悪しく大便をもようすこと甚だし。足助氏の二三町此方にては耐へ難き程なりしも、概く同氏の宅ニ付きてやれ嬉しやと重荷を下しぬ。林檎ノ御馳走ニなりて再び散歩ニ豊平ノ川岸ニ行きしも、又々腹工合可笑しければ帰りて又も雪隠ニ行き又々帰りに行く。弥々きびニ当てら

れ下痢を起せりと思へ、宿ニ帰りて又行き直ニ床ニ付く。身体ノ工合、大ニ此の夜悪しく。

九月十二日（土）

今日も腹工合よろしからざれば学校へは出でず床ニ就けり。午後より創成川岸ノ正見医師<sup>203)</sup>ニ付て<sup>[診察]</sup>しん察を乞ふ。途ニて池田次郎氏ニ逢ふ。夜学校ノ事は角館氏ニ依頼す。

九月十三日（日） 晴天

朝は大光寺氏を訪ねたれど不在の為メ帰りしが、途中ニて足助氏と逢へたれば、札幌村の方に散歩ニ行き、橋と言へる家ニて林檎ヲ買ひ、宿ニ帰りしは十二時過ぎなりし。午後は風呂ニ入り昼寝をなす。夜は夜学校ニ行き、河内ノ御話あり。

九月十四日（月） 晴天

八時半ニ学校ニ行く。尾泉先生ノ土地改良ありて他は休みなれば宿ニ帰る。藤井氏立ち寄りて十二時少し前ニかへらる。午後よりは動物ノ実験ありて出席せしハ五人なりき。余は昼寝せしと時計のくるへる為め一時間遅刻す。パーマネント<sup>permanent</sup>のプレパラート<sup>[製]</sup>を學びて齒<sup>マ</sup>くそのプレパラートを作る。校舎新しければ中々気持ち良く全く別世界の感あり。夜は南一条ニ行きて昆虫学<sup>204)</sup>を求む。

九月十五日（火） 晴天

午前は四時間共授業あり。午後より農産製造の実習として林檎のジャム<sup>jam</sup>を製す。夜学校ニ行きて授業す。

三 [年] 石炭

二 [年] 石油

九月十六日（水） 晴天

午前は二時間ありて帰る。午後よりハ風ありて黄塵飛び立ちて面を向けん様もなけれど、兼而約せしなれば<sup>[診]</sup>藤井君を訪ふ。工藤氏の書庫を一覧して、エ、サウサンド、エンド、ワンゼムス<sup>205)</sup>一冊を拵ぶ。風は中々止まねど遊園地ニ向ふ。水原ニ至りて西洋梨を購へ、樹下の将ぎに腰打ち掛けて話しながら食ふ。味特ニよろし。小池氏に見舞ノ為め将ニ三斤を購へ北辰病院を訪ふ。平常の大男、蚊の如くやせたり。病には勝てぬものと見へたり。安部、関も来り居られたり。四時半時辞して帰る。夜は外出することなく、藤井より借れ来れる近江県物語<sup>206)</sup>を読む。滑稽ありて中々真面目の小説なり。興味津々巻ををくに耐へざらむ。此の夜雨降らんとて<sup>[か]</sup>が例ニなくむし暖し。

秋なれどえんまの脚は細かりき

九月十七日（木） 雨

昨夜より降雨ありし様なりしか、今朝起き出で見れば、細雨粉の如く降れり。午前の授業は例の如し。午後より実習は休みなれば帰りて三時頃より頭痛すればは少しく休む。夜は雨弥々本降りとなれたれど是非なく夜学校ニ行く。夜は暗きが上、道路悪しければ、足も衣もビッシヨリとぬれたり。

三 [年] 大工を頼む文

二 [年] 盲人

九月十八日（金）曇

朝の授業は尾泉氏の分のみかありて休みなれば、図書館ニ行き、雑誌を見る。午後は藤井氏を訪問して工藤とも談話し、先日持ち来りし詩集は已ニ小川氏と先約ありしとの事なれば返済してローウェルを持〔ち〕来る。南一条ニ出で沙翁物語<sup>207</sup>を購ふ。夜食後風呂ニ行き、少しく散歩して帰る。

九月十九日（土）晴天

午前は授業例の如し。午後よりハ山鼻に行きて齊藤氏を訪問す。夜は学校ニ行く。雨降る。帰りにはやがてはれたり。

九月二十日（日）半晴

朝は曇りをれば今日の天気如何あらんかと危ふまれたれど、八時に出立す。昨夜より石山街道の川沿に遊ばんとの心算なりしかば、道を山鼻にとりて行く。林檎の赤玉を掛けたる如きも嬉しく、村端れの畑のチモシーtimothyに似たる雑草の黄ばみて黄金の波を打てる様ななどいと心地よし。突当りの川原に行きて暫く休息し又出で立つ。石山につきしは十時過ぎにもや、茲を通りて例の目ざせる川原につきしは十一時なりし。川の眺めよからぬにあらねど、樹木ともしく、いこーべき日陰なく、時も早やければミソマイの橋ニ向ふ。此の道を通りしは去年の秋なりしに変わるものなるかな、新しき家の五六軒も増したり。橋ニ至りしは十二時なりし。橋下の石ニ腰かけて川の流れを足下ニ眺みなから中食す。持ち来れる青山百雲と云ふ本<sup>208</sup>を読む内一時ニなりたれば帰途ニ付く。此度は途を換へて真駒内ニ出で、渡しをこへて山鼻を再び通り、宿ニ帰りしは四時半頃なりし。夜は学校ニ行く。

九月二十一日（月）晴天

午前授業は尾泉と大嶋両先生のみありしかば、図書館ニこもりてエンサイクロペディアEncyclopediaの絵画を見る。午後よりハ動物実験ありて、蛙の血液をプレパレートに作る。夜食後、線路ニ沿ふて西の方に至り、青年会寄宿<sup>209</sup>の前を通りて帰る。六時過ぎたり。

九月二十二日（火）

午前授業あり。松村教授は休業なり。午後よりハ農産実習ありて林檎の鐘詰を作る。四時半頃より工藤の米国行の送別会を河内宅ニ開く。集まるもの足助、池田、藤井、僕にて其他は宿の半澤、末光、竹田、河内諸氏なり。ライスカレ〔一〕の御馳走ありて汗を流しつゝ、食ふ。三杯計り食へしかと腹張りて座することも能はざる様にて、例の腹の病再び出でんかと心配さる。余と河内とは学校あれば六時十五分頃ニ出で行く。後は例の保ら話にて、さぞにぎわへ事なるべし。

三年 秋の景色

二年 烟草

九月二十三日（水）午前極て晴天

今日は兼ての約束有れば、宮部先生博覧会<sup>210</sup>より持ち帰られし海産物を見せらる。台湾の植物製品も沢山持ち来られたり。ハーバリウムherbarium〔植物腊葉室〕を見る。中々立派なるものなり。現在の標本数は四万に越へたりとか。帰りには図書館ニ立ち寄りて、エリーの経済書<sup>211</sup>を受け取る。

午後より八南一条ニ至りて書店に立〔ち〕寄り、博物館構内を通り抜けて帰る。夜は如何なる故にや、むし暖きこと限りなく、夏の夜半の心地する程耐へ難ければ、定めし雨の徴候なるべしと思へる内、十時頃より降り出せり。頭少しく痛む。

九月二十四日（木） 大雨風

○秋季皇霊祭

何時頃〔か〕にやフト目を醒ませは、窓外雨滴の声聞ゆ。さては明日の旅行も望みなからんと考へながら又眠る。五時頃には中々の大雨にて兎も霽るべくも思へねば、断念して宿の握り飯を断わる。六時ニ起き出でたれど、せんことなし。八時の上り汽車にて工藤氏出発するにかと思へ、強雨をおかして行き見たれと誰れも居らず空しく帰る。午後一時四十分のものに又行く。已ニ工藤など来り居れり。見送りの学生多く、宮部先生も来ゆる。弥々之の汽車にて永訣す。帰路、足助の宅ニ立ち寄り、南一条ニ散歩に出で小池氏を病院ニ見舞ふ。夕刻、末光氏来りて明日旅行ニ出立の事を報じ去る。夜学校ニ茶話会ありたれと行かず。

九月二十五日（金） 晴天

動物採取旅行として山中温泉ニ行く

午前七時の発車にて小樽に向ふ。手宮ニて下りて赤岩ニ向ふ。新しく道路を山上ニ開さくせしにて途中尚ほ未だ工事の個所もありし、中復頃より小樽湾を眺めらるゝなれば、眺望中々良し。東の方ニは高島、祝津ノ漁村も見ゆ。之の時を上り尽せば後坂を直下ニ海ありて白浪の打よする様壯絶なり。手宮より稍々一里ニして赤岩温泉ニ達す。之の温泉は開業尚ほ新しく本月ニ入りて初めしものなる由。十二時迄は風呂ニ入りなどして休息し、午後より海岸採集を試む。海岸に沿ふて西の方ニ行き、各々びんニ動物を満す。後れがちの余は海中ニて滑りしの滑稽もありし。更ニ東の方ニ行きしかと雨少しく降り出せしかば急ぎ帰る。夜は級会を開き、茶菓の御馳走あり。安部の西比利亜談ニて開散し、其の後は碁の集会などありし様なり。

九月二十六日（土） 晴天

此の日は高島ニ向ふ例の坂道を上り、途中ニて二た手ニ別れ、我等は高島の小学校の裏手より行き、試験場の工場を案内されて、海岸ニて他の組と合し、舟ニて弁天島の試験場ニ行く。茲ニて海栗を採集し或は場内ニ入りて顕微鏡などを見て十一時頃迄遊ぶ。それより又山中ニ引き返す。午後は散歩に日を消す。夜は碁の大合戦ありトし、余等は初学のトランプを遊びて墨ぬりなどして無邪気ニ遊びて十一時頃ニ至る。

九月二十七日（日） 晴天

同断

午後八時にて帰宅す。朝は先生等小舟ニ乗りてサーフェスコレクションを試みられたり。余等は無す事なきまゝ、魚釣ニ出掛けしか、一匹つれし嬉さ忘れ難く、いと熱心ニなりしか、場所を変へて一人高名せんと皆より遠くはなれて向ふの岩ニ行かんと、すそまくりして海ニ入りしか、案外深く腹まで付きしに一二の事と尚ほ深く行きしニ頭まで付きぬ。着

物着しまゝ、釣〔竿〕りざほ一本の奇芸〔はづ〕なれば、人に見付けられしならば奇観なりしならんと一人可笑しがる。止むを得ず釣〔竿〕を止めて陸ニ上り、着物を日ニ干かし、今は裸体となりて海ニ飛び込む。高橋も来りて共ニ遊泳す。午後よりは祝津ニ行き、灯台の裏手の浜ニ採取を試み、茲の海ニても逢坂、素木<sup>212)</sup>、鈴木など遊泳す。それより高島を通りて小樽の築港を見物し、小樽の市街を通りて小樽停車場より乗り込み、車中は軍歌〔ど〕などにて大きわぎをなし、宿ニつきしハ八時なりし。

九月二十八日（月） 晴天

朝は理髪〔ば〕の為め南一条ニ行き、午後よりハ頭の工合悪しければ昼る寝す。夜食後、石澤君<sup>213)</sup>を青年寄宿舎ニ訪へ、円山街道迄散歩しながら牧畜農業上の高論をうけたまわる。半月淡く地上をてらす。

九月二十九日（火） 晴天

午前の授業は例の如し。午後は農産実習ありてトメtomatoトのソースを作る後ち図書館ニ少時行き、農園を一周して帰る。夜学校ニ行く。

九月三十日（水） 晴天

尾泉先生は休みなり。藤井氏来りて九時半迄遊ぶ。午後二時より新入生歓迎会ある筈なれど、高橋と豆を煮て食ふべく農園より一風呂敷つみとりて同氏の宅ニ至る。四時頃帰る。夜は経済を筆記す。隣室の荒川氏<sup>214)</sup>、病院の近傍ニ引き移る。

十月一日（木）

朝は雨降り出せしか〔み〕、吾等の学校ニ行く頃には霽はれたり。松村先生ハ三年の昆虫採集旅行に行かれし為め休みとなり、午後の農業実習も石川先生<sup>215)</sup>、南先生<sup>216)</sup>とフラヌ〔富良野〕ヘ行かれし為休業。足助一時頃尋ね来られ、一時半過ぎ共ニ出掛く。余れは博物館ニ散歩の為メ道庁の門内ニて別る。昨日迄は夏のなごり猶残りいたればにや、秋の景色更ニなく日も毎日麗なれば夏の面影去らざりしも、今朝の雨一しきり降りしより、天の模様と共に気候ニも変化を及〔は〕ほせしにや、急に秋風吹き初めし心地していと冷し。博物館の森の景色も久しく眺めでありしに、今来て見れば尚ほ紅葉には早やけれど〔ど〕、つたうるしなど紅〔は〕に黄〔じ〕をのがじ、色を競へてエルムにまとはる状など、反てエルムの葉の緑あるによりて一きはうるはし。四条の通りを琴似街道の方ニ出で、線路ニ沿ふて帰る。札幌の風景の大なること、故郷の景の今を見て感動せざれど〔ど〕、幼時いかばかり感化を被むりしかかと考へもて行く。

行く雁にや又見へにけり秋の風。石狩の秋は来にけりつたうるし

十月二日（金） 晴天

いつもの積りにて単衣着て牛乳をとるに農園ニ行きしに、北風烈しからねど吹きて身を切る如き寒さ、急ニ北海の秋となりしやとあやしまる。実ニ昨日迄は単衣ニても尚ほ汗を流さん計りなりしか〔み〕、今日は秋の寒さ一時ニ至れる心地す。尾泉先生休みなれば、十一時半より大嶋先生あるのみ、午後の実習も鈴木先生<sup>217)</sup>フラヌ〔富良野〕に行かれたれば休む。学校の帰途、北四条を通りて円山ニ至り、神社の前を通りて秋の景色を眺む。日は麗なれど少しく風あれば、日当たり已ニ心地良ろし。こ〔行李〕一りを開きて裕を出し衣更す。本日、足助、高地〔河内〕氏の

自炊仲間に引き移りし筈なり。

十月三日（土）晴天

午前の授業は例の如く、松村氏休みなれば畑〔はた〕ニ行きて豆をもぎ藤井ニ送る。午後より藤井、竹田と御料局ニ至り葡萄を購へ、散歩がてら茶碗淵より東橋下の木影ニ立ちよりにて秋の味を味ふ。一斤十銭の高値なれば味も仲々良ろし。帰路又々御料局ニ至り竹田氏家の土産〔土産〕とにや買へり。尾泉先生一時の汽車にて函館より帰られしが、角館氏は未だ帰られず、函館ニ留りて見物ならむか。夜学校ニ行く。月特ニ良く天寒し。今朝も寒気仲々甚たしく霜降り。

十月四日（日）晴天

今朝も霜降る。朝風例ニよりにて寒し。九時頃大光寺氏を訪問し、十時半頃より中学校の運動会を見に行く。午前なれば別段面白き競争もあらざりし。十一時過迄見物して、製麻会社<sup>218)</sup>わきの郵便受取所に至り為替を受取る。午後は経済の筆記などして外出せず、閉居先生を学ぶ。夜は月あれと寒し。南一条の書店に行き買はずして帰る。散歩の積りなるべし。店頭の小僧は例のひやかしかとは思へなから、帰りか〔か〕げには御世辞を云へぬ。角館氏本日函館旅行を終りて帰る。

十月五日（月）晴天

朝の二時間は図書館ニ行く。午後よりハ動物学実験あり。今夜は旧暦の八月十五夜にして所謂中秋の夜なれば夜学校ニて生徒一同にて豊平の河岸に月見とシャレ〔洒落〕との河内氏が言伝え、幸ひ空もはれ月清くして実ニ稀れなる清朗の天気なれば角館氏と六時より行く。豊平の河岸ニて足助と伴ひ、月を賞し、俳句を論〔じ〕して徐行す。水門の傍にて生徒等遊戯をなせし様なりしかど、吾れは病ある身の露帯べる空気を吸呼するは宜しからず、且つ夜風冷たく吹き出せしかは、独りにて帰路につく。富貴堂ニ立寄るゝ。

十月六日（火）晴天

午前之授業例の如く、午後は農産製造実習ありて林檎〔jelly〕のゼエリーを作る。放課後、独りにて第一農場を通りて北の林之方に散歩す。未だ全く秋の景色ならねど、何となく荒涼たる様、已に冬の来るの報れを示せり。初めて来りし所ながら、風景の北海的なる写真〔か〕が、さも無くは、油絵の名手にもなりたき心地す。森の中を通せるせきの上を通りて農事試験場に出で、少時稲田を見廻り門を出でしに、向ふの広野をさまよ〔徘徊える〕へる書生あり。同じ心にて此の秋の眺めをめづるにか、やさしき人よと思へ、第二農場の方ニ帰る牛数多居る辺にて、以前の若き人に遇へは足助氏なりし。頭の痛めばそがために此の辺を散歩し居れるなりとなん、共に家路ニ向ふ。夜は学校ニ行く。

今夜十時四十分より月蝕ありとか（九時二十分誌す）

十月七日（水）晴

午前は授業例の如く、経済の時間は図書館ニ行く。午後も図書館に行きて、当志遠〔トルストイ〕の著作年譜を写して四時迄に了る<sup>219)</sup>。夜食後一寸河内氏宅ニ行きて暫時の後帰宅す。夜はくもりて雨模様あり。

十月八日（木）

午前は例の如く、午後の実習も休みなり。南一条に行き買物し帰途北辰病院に立ち寄りて小池氏を見舞ふ。夜学校ニ行く。夜の明るる少し前に雨降りし様なりしが、起き出でし頃には已ニはれたり。終日天気とはならずして、細雨を時々降らす。夜に入るも星所々雲間より顕れ月も出でたれど、風いと寒く吹き、北の方より墨の如き雲を吹き起こせば、その度毎に又もや細雨を降らす。

十月九日（金）曇

朝の二時間ノ休みは図書館にて暮す。午後は休みなれば、二時頃より空もくもり雨も少し降りたれど、頭の工合悪るければ、博物館内の森を散歩す。今日は耐へられぬ程の寒気にて、朝より晴曇極まりなく時々は雨を降らし、時には太陽の光線輝きしが、午後五時頃ニ雪を降らせしとか。

（札幌の初雪）

十月十日（土）晴

昨夜は十一時過に北四条の西一丁目ニ出火あり、目を醒しぬ。今朝も中々寒さ烈し。学校ニ行く途中、西の方の山を見れば雪白く降り積れり。午後に至るも尚ほ消へざる所あり。午後より畑ニ行きて薯を掘り、<sup>かます</sup>吠にて二俵を得たり。河内氏の宅ニ運ぶ。一輪車なれば中々重く、腕も抜けん計りニいたみぬ。五時より同窓会にて一年生の歓迎会を開く。別段演説などはなく直ニ茶菓となる。六時過ニ辞して夜学校ニ行く。

十月十一日（日）

〔発信〕父上、丸善、長沼、川村、国分、明八様へ葉書出す

朝極めて天気宜し。円山へにても散歩に行かばやと足助を尋ねし所、藻岩へ登山せずやとの事いそぎ宿ニ帰りて洋服を着、再び同氏宅ニ行く。同行四人、河内と半澤と足助と僕となり、山鼻村にて登山者の多き模様ニより山しまひなる事を知る。山ニかゝりては登山者続々上り来り、うるさき事限りなし。紅葉には未だ<sup>だ</sup>少しく早けれど、已ニ霜をふくみし者<sup>物</sup>ありて、特ニ桂の先づ<sup>す</sup>黄金色をなして芳香を薫ぜしむる辺、壮快なり。山頂ニ付きしハ十二時半、一時過<sup>き</sup>き帰山す。温泉わきの小丘ニ登りて小憩し、家ニ帰りしハ四時過たり。夜は南一条ニ買物ニ出づ。空模様定まりなく、黒雲、明星相錯又し時ニ雨を降らすなど明日ノ天気をぼつかなき心地す。

十月十二日（月）朝雨 晴天

午前九時半、植物採集旅行として小樽山中温泉ニ向ふ。

山中温泉一泊。

午前八時の発車にて立つ積りなりしかと、降雪なりし為メ人集まらず、九時半頃のものにて立つ。手宮公園ニ登りて公園内の植物を採集し、昼飯を食ふ人あり。ぬるでと云ふ木、盛ニ紅葉せり。山中ニ付きしハ十二時過なり。一時過<sup>き</sup>きより海岸採取ニ出掛け、盛ニ藻類を採集す。藻類採集ニは已ニ時期後くれたりとか、最も良きは春より夏にかけてなりとぞ、例の島ある所まで行き引き返す。夜は又々級会を開き、投票にて各人の芸を定め、中々

愉快なりし。余もせんかたなく天神舞と云ふ者試む。寝ニ付きし八十時過ぎ。するこの御馳走あり。

十月十三日（火） 晴天

午後六時着ノ汽車にて山中より帰る。

坂本氏本日故郷より来る。

朝は温泉の後の崖を採取ニ登る。吾れは採集よりハ登山か愉快なれば、独り岩石の崔嵬たるを攀ち行きしか、中々高き山にて已ニ絶頂ニ近きし頃ハ目もくらまん計り高く、砂地なれば一歩を踏みあやまらば死せざる迄もけがを免かれ難く見へければ、小心翼翼々岩ニ取り付きてようやく登り上り、笹藪をこぎて本道ニ出でんと心静ニ行きしに、突然山の影より宮城<sup>220</sup>顕れ出で何にかわ別らめことを高声ニ言へて道ある方ニ急ぎ行きぬ。余も何にかは判らざれど、容易ならぬ危険ニ逢へし人ありしなるべしと崖の方ニ行きしに、鈴木居りて指す方を眺むれば、大光寺崖ニ取り付きしまゝ上ることも下ることも得せじ、進退谷まりて如何とすること能はざれば、宮城は宿迄繩を取りに行きしなりとか。殆ど一時間計り寒き海風ニふかれて待つ内、宮城、渡辺、関など来りれり。我れと渡辺と鈴木と三人少しく崖を下りて、なわをつり下げ大光寺を引き上くる。宮部先生も途中より来られて心配せられし由なり。午後は小樽の苗圃ニ立ちよりて見物し、四時の汽車にて手宮より乗り込み、例の軍歌など歌へてあまりに騒きたれば、馱夫ニ注意せられたるも可笑し。

十月十四日（水） 晴天

学校あり無事。

十月十五日（木） 晴天

学校あり無事。夜学校ニ行く。

十月十六日（金）

無事。教育図書館ニ行く。

十月十七日（土）

石狩鮭漁見物行

之日、半澤、河内、足助、末光及び予〔修〕科の人二人及び小学生某氏等八人にて石狩ノ鮭漁見物ニ行く。朝は霧深かく天気も如何かとあやぶみしか、十時頃よりはれたり。風体のよからざればにや、石狩一等の宿屋にてことわられ、あやしげなる宿の雪隠のわきに入れらる。三時頃ニ海岸ニ綱引きを見ニ行く。二ヶ所計りにて引き上げしが、各々二三百計り入れり。今朝は一個二千三百入りし由なり。

十月十八日（日）

朝は雨降る。鮭一尾買ひ来りて八人にて満腹す。雨は尚ほ止まねど、何時迄も滞在する訳ニも行かねば九時頃出立す。半澤は馬車にて其の他は徒歩にて行くことゝし、外套持たぬ人ハゴザを買へて衣る。軽川停車場ニ行くことゝし道を急ぐ。一直線なる上、道路極めて粗悪なれば、目をたのしましむるものなし。軽川ニ着きしハ一時過なりし。昨日は石狩大繁昌にて農学校の生徒計りも二三十人計り来れり。大関、北澤、川口氏を初め知人中々多

し。夜は夜学校の講話を頼まれたれど、何にも腹案なければ、旅行談をなして御茶をにごす。

十月十九日（月）

尾泉先生農学実習旅行

農学実習旅行として定山溪及簾舞地方ニ尾泉先生と共ニ行く。朝は極めて晴天なりしか、簾舞より大雨となり定山溪迄降り通しなり。只紅葉のみは今は盛りの眺めにて、実ニ二月の花よりも紅なりと思はる。宿ニ付きて衣を乾かし、夜ニ入りて茶菓出で十時頃寝む。

十月二十日（火）

今朝も尚ほ少し雨降りしかと、九時過ぎに出立す。パンの澤と云ふ所ニて某百姓を訪へて開墾の模様を聞き、簾舞ニ着きしハ一時なりし。午後、樹木を伐る積りなりしも、雨の為メ明日とし、吾等ハ⊕と云ふ宿ニ付く。宿屋せまければニヶ所ニ別れたるなり。夜は遊戯の後ち日露戦争の可否論となり盛の議論なりしか、余は恐露病者と做されたり。それより同級生の実科目を投票して大抵を予想す。菓子、林檎などの御馳走ありて寝ねし八十時過ぎたり。

十月二十一日（水）

朝は天氣の為メ神社の裏なる藪ニ入りて樹を伐る。寒さ甚たしかりしか、遠くの山ニは雪降り。九時過ぎ茲を出立ちして帰路に就く。農芸科生徒及〔び〕本科四年の人々ニ出逢ふ。之れ今日より開かるべき品評会ニのぞむ為めなり。南先生も騎馬にて来らる。石山の崖ニて中食し、真駒内ニ至りて調馬師の乗馬を見、各畜舎及び製乳所を一覧し、山鼻を通りて帰る。家ニ付きしハ五時。

十月二十二日（木）

朝は原先生ノ講義のみありて休みとなる。午後より図書館ニ行きて文学書の目録をあさる中、トルストイのイバンイリウイチの死<sup>221</sup>を探し出して借る。廣井先生<sup>222</sup>の贈付せられしものなり。四頁計り読りて時間となりたれば帰る。夜は夜学校ニ行く。

三年 病気

二年 桃太郎の話

十月二十三日（金）

今日二時間目は吉井先生ノ授業あり。午後は家ニ在り。夜は原種論<sup>223</sup>を読む。

十月二十四日（土） 晴天

朝の授業は例の如し、宮部先生休まる。午後は農園ニ一寸行き⊕ニ行きて洋服を注文し、維新堂<sup>224</sup>ニて書籍及びペンを買ひ、博物館を通り抜て農園ニ再び行き散歩して帰る。夜学校あり。帰路中々寒くのどの痛そろへ宜しからず。角館氏定山溪より帰らる。

十月二十五日（日） 晴天

今日は夜学校の高等科男生〔徒〕芦戸<sup>〔笑戸〕</sup>に遠足する日なれど、已ニ度々行きて風景の見るべきものなき上、天気模様もよろしからざれば余は行かず。十時頃より遊園地ニ散歩し岡田花園及び陳列所<sup>225</sup>を見て帰る。同所ニは今年の博覧会ニ出品せし写真、其の他物品を新に

さしかへたり。時計の油さしを頼みて家ニ帰る。午後は第二農園より試験場の方迄散歩ニ行く。夜は足助氏を訪問し、帰宅せしハ九時なりし。

十月二十六日（月）

午前は校長のレクチュアのみにして他は休む。午後は動物学実験あり。今日の寒さは格別ニして北風<sup>はだ</sup>膚をさす如しとも形容すべからんか、弥々冬ニ入りたればにや、又もストーブなくてハ凌がれ難き期とはなりぬ。やがては雪の降るを待つのみなるべし。

十月二十七日（火） 夜雪

午前の授業は例の如く、午後は尾泉先生ノ実習ありて稲苺をなす。今日も風いと寒く、外套を着て行く。外套をき、靴をはきての稲苺ハ、外国ニも未だ例を見ざることなるべきか。夜は学校ニ行く。例の風吹くなれば、口覆へをかけて要心す。帰路には天かきくもりて、今にも降り出さん〔と〕<sup>す</sup>。風吹きすさみ<sup>しか</sup>、途中より一二滴か片か、雨か霰か雪か判らぬ者<sup>ぬ</sup>落ち来り<sup>しか</sup>、南一条の辺ニて弥々雪となり、大なる塊をなりて、風ニ伴はれて舞ひ落ちぬ。之れ<sup>が</sup>札幌の市街ニ降りし今年の初雪ならむ。狩野君上川より帰り、初めて出席す。

十月二十八日（水）

午前は大島先生休む。午後は昆虫実験ニ行く、とんぼの頭を写生す。坂本来訪す。今日も寒さ中々強し。

十月二十九日（木）

午前は松村の昆虫休む。午後より足助君訪問せらる。今日も寒さ烈しく時々降雪あり。氣候の加減にや、頭痛みて耐へ難き程なり。のみならず、一昨日来よりの氣候劇變の爲め、咽喉又々悪しくなり、夜学校に行くのつらさ中々なりし。往復とも雪解の道悪るく困難す。本日東海丸衝突し、沈没の上四拾余名の死者ありし由電報あり。

十月三十日（金）

尾泉先生の授業のみありて休業となる。昨日程は寒さからねど、天曇りて時々微雪降る。上川ニは一尺余寸の降雪ありし由。当地の寒暖計も零下二度ニ降りしとか。教育図書館ニ行く。安東、高橋氏も来られたり。

十月三十一日（土）

午前は少しく晴天なり<sup>しか</sup>、又々曇る。午後より博物学会<sup>226</sup>と農学会とあり。後者を聴講ニ行く。大島先生ノ欧米ニ於ケル農事研究所巡歴談なり<sup>227</sup>。之の日蒸気の試験ニ取りかゝりし模様なり。夜は夜学校ニ行く。雨降る。のど、弥々悪るし。

十一月一日（日）

朝よりの降雪なり。寒気も烈しければ室内ニ籠城す。午後よりハ晴天となりたり。藤井氏一寸来られたり。少しく散歩して道の悪しきに閉口し直ニ帰る。夜も外出せず。月の夜ニて外ハ特ニ冷たし。

十一月二日（月）

〔受信〕 父上より

午前は尾泉氏故なくして休業す。午後ハ動物学実験あり。此の日試験の為メ、蒸気を初めて通す。天気は極めて霽れたれど、気候ハ温暖とならず。道路未だ乾かず。二三日前より風邪の気ありしか、昨日より弥々本物となり、本日も又宜しからず。夜は足助氏を訪問せしも、夜学校ニ行きした為め不在、直ニ帰る。月の夜なり。

十一月三日（火）

天気うらゝかなり。拝賀式<sup>228</sup>には出でず。九時頃高地<sup>〔河内〕</sup>氏宅を訪問し、病氣の為め夜学校の方を相談す。適當の人あらば頼む事ニ極む。十一時過ぎ帰る。朝の気色ニは似で、昼は稍々くもる。

十一月四日（水） 晴天

〔発信〕 父上へ

校長の経済休みとなりしかば、大嶋先生ノ授業も明後日に伸ばし<sup>〔貰う〕</sup>まらう。午後より昆虫の実験ニ行く。色部と余との二人なり。夜学校の後継者ニ農芸科三年の赤松氏<sup>229</sup>なるを頼む。温厚<sup>〔梅〕</sup>特学の人にして、身体も壯健の由なれば、極めて適性の人を得たるを喜ぶ。午後高地<sup>〔河内〕</sup>氏を訪へて不在なりしかば、足助ニ伝言を頼み帰る。

十一月五日（木） 晴天

午後の授業は例の如し。午後より実習ある筈なりしかば洋服ニ着がへて行くに、今日は校長の西比利亞談、道農会<sup>230</sup>ニあるなればそれを聞きに行く方宜しからんなれば<sup>〔は〕</sup>実習は休みとの事ニ一寸農会ニ行きしかど椅子もなく立ち聞きなれば、農園ニ行きて豆を取りて帰る。後にて聞けば、三時間余の大演説を試み、最後ニ大々の気焔を吐きし由なり。夜は赤松氏と夜学校ニ行く。同氏を<sup>〔紹〕</sup>シヨウ介して今晚の授業は角館氏ニ托して帰る。月まどかにして霜白く、秋気清朗の夜なり。

十一月六日（金）

〔発信〕 教文館<sup>231</sup>へ

午前は例の如く、午後は石川氏の菓樹<sup>〔果〕</sup>実習として苗木の掘取りに従事す。東一丁目ニ行き<sup>〔果〕</sup>て為替を受取り来る。荒川氏訪問せられて病氣は精神病の由話さる。天気極めて良ろし。

十一月七日（土）

朝よりして曇天なれども、午前の中ハ降らず。午後より文武会大会あるなれと<sup>〔ど〕</sup>出席せず。此度も少人数ノ為メ延期となりし由なり。二時頃南一条ニ時計を取らんとて出かく。風吹きて細雨さへ降り出せしか、洋傘も自由ならず、藤井氏ヲ訪ふ。柳川来りて例の碁ニ余念なかりし、四時頃辞して南一条ニ行き時計を受取り書店ニ立ち寄りてマートルリンク物語<sup>232</sup>を購ふ。夜は少しく雨降り風も中々烈しければ、今晚より出でらるゝ赤松氏、さこそ困しめるならめと思へやらる。尚ほ案じらるゝハ之の暗の夜の雨降る中をいとへもせで出席せる生徒ニこそ。

雨ニ風に打たれて散らぬえぞの菊

十一月八日（日）

昨夜来大雨なりしが今朝ニ至りて霽れたれと天尚ほ曇る。終日室内に籠りて読書す。昼は

豚を二人にて一斤買ふ。

十一月九日（月）

朝は雨模様なりしも降らず。午後二至りて晴天となる。夜は冷風北より南より吹きすさみて、星さへ初めは輝きしが雨となる。丸井ニ至りて洋服のかりぬへを着試む。<sup>〔仮縫ひ〕</sup>

十一月十日（火）

朝より晴天なり。午後ノ農業実習休みなれば教育図書館ニ行く。兼而より評判の嘲風ノ清見瀉の一夏<sup>233)</sup>の一文を読む。亡友<sup>〔樽〕</sup>□牛<sup>234)</sup>をおもへて、綿々のうらみを述べたる。眞ニ一掬ノ涙なき能はざりき。且ツ嘲風<sup>〔樽〕</sup>□牛の性行を彼等の間ニ往復せし手紙を読みてより同情景<sup>〔敬慕〕</sup>ぼの念ニ耐へざりしもの、之れを□で感特ニ深かりき。嘲風は之の一文ニ於て□牛が日蓮ニ於テ安心を得たれども、余はむしろ基督ニよりにて安心を求めんと断言し、基督ノ神性を論<sup>〔じ〕</sup>しては之れを是認せり。兎に角、近時快心の美文にして、思想も現今の俗学者に一頭地<sup>〔ゆ〕</sup>をぬきんづたるをおぼい。

十一月十一日（水）

朝は雨模様なりしかども、やがて天気となるべしと思へ傘も持たて行きしか、昼頃は大降りとなりビツシヨリとぬる。一時頃より雪も降り出し、夜ニ入るも雨は中々霽<sup>〔霽〕</sup>れず。尾泉先生例に似ず恐色を呈す。

十一月十二日（木）

朝よりして曇る。風中々寒く又も雪にても降り出すならんかと思はるゝ天候なり。午後の農業実習休みとなる。終日家ニ籠りて外出せず。

十一月十三日（金）

〔発信〕 教文館

教文館よりの返書、朝読む。天気極めてよろし。午後より鈴木氏<sup>〔栗〕</sup>の菓樹実習あり。教文館ニ為替を組み、散歩ながら旧製粉会社<sup>235)</sup>の前を通り抜けて北三条を通りて帰る。夜はレジユアレクションを読む。

十一月十四日（土）

午前十時半より経済学教室ニ校長の訓話ありて文武会総会を開く。予修科より呈出せし文武会解散の件、議案ニ説明弁難中々烈しく決を取らんとするや衆議紛然其の可否を論じ、南副会頭<sup>236)</sup>議長席を退き校長換つて説明<sup>〔漸〕</sup>し概く沈静ニ帰せしも、時已ニ一時を過ぎたれば更ニ他日を期して開く事とし散会す。秋風淋々として降る。帰路に就<sup>〔脚〕</sup>く者鯛の子を散らせし如し。二時半より農学会ありて大嶋先生、校長の演説あるなれど、雨余りに烈しき為め行かず<sup>237)</sup>。午後五時より同窓倶楽部<sup>238)</sup>に弼水倶楽部<sup>239)</sup>の例会を開く。昨年<sup>〔ど〕</sup>の正月開きし<sup>〔ど〕</sup>のみにて殆ど二年間休会せしなれば、或人の尽力によって開きしなれど、雨の為めと其の他に事情ありてにや、来会する者九人、石澤君の御話しありて余等は九時頃帰宅す。今後は成るべく毎月一回第三土曜日ニ開会することなどを約す。

十一月十五日（日）

朝は風ありて中々寒し。農園ニ牛乳を取りに行き<sup>〔河内〕</sup>帰路高地宅を訪ね、十時頃教会ニ行くと

云ふ皆々と家の前迄同行す。午後よりは北辰病院ニ小池氏を見舞ふ。二十日計りも見ざりし中ニ顔、手など殊に太りて普通ニなりたれど、脚のみは尚ほ瘠せたり。已ニ歩行し得らるゝ様ニなりたれば退院も間近かるべく来月の初めニは学校ニ出づべしなど談らる。宮部先生も見舞として来る。夜はリンコロン大会あると云ふニより夜学校ニ行く。大嶋先生、滝君の演説ある後ち遊戯をなして面白く遊び、九時に余は帰る。尚ほさわぎし事なるべし。

十一月十六日（月）

朝は天気と云ふに非らねど、<sup>[と]</sup> 少々<sup>は</sup>霽れたりしか、午後三時半頃より雨となる。動物実習ニて鼠を解剖<sup>[解剖]</sup>し、intestine<sup>[腸]</sup>、liver<sup>[肝臓]</sup>、stomach<sup>[胃]</sup>、pancreas<sup>[膵臓]</sup>、耳の柔骨<sup>[皮膚]</sup>、スキンを切り取り、corrosive sublimate<sup>[昇汞]</sup>、alcohol<sup>[アルコール]</sup>に三十分計りつけ、後ちアルコールニ移して帰る。夜は試験中丈の約にて夜学校ニ行く。帰路には星も見へたれど、雨降りと風吹きに道路の悪しきには閉口の外なし。生徒も少なく漸く三分の二位も出席せしにや。

十一月十七日（火）

朝より極めて天気よろし。午後の実習は休みとなる。兼而より柴田下宿屋ニ明き間出来る筈なれば三度計りも聞き合せ弥々二三日中ニ引き移る様ニ相談を極めたれど、丁度吾等<sup>[か]</sup>か室の前の室明きたれば、柴田の方は断りて此の室ニ移る様ニ相談す。午後より一人にて除々<sup>[き]</sup>ニ物を運びて形付く。夜はエリーの経済を六七頁計り読む。床ニ就きし八十時過ぎ。

十一月十八日（水）

朝より雨降る。風も少しあり。午後は昆虫の実験ニ行く。余一人なり。概<sup>[漸]</sup>くトンボを終る。夜は夜学校ニ行く。外は雨降り、風吹き、寒気も甚たしければ、外套を着て出掛く。帰路は雨止みたれど雪らしきもの降りて寒さきびし。

十一月十九日（木）

〔発信〕丸善へ

朝起き出で見れば雪白く積りて降ること猶止まず。昨日迄泥ね<sup>[津]</sup>一甚だしかりしもの今日は堅く氷りて足駄の歯をかく。午後ニなりても猶ほ止まず。二時頃、製麻会社側の受取所ニ行きて為替を東京丸善ニ組む。Tolstoi ノ Plays, 某ノ On milk cows<sup>240)</sup>を購けん為めなり。洋服代として送られし金拾五円を受取る。

十一月二十日（金）

朝より雪降る。午後の実習は休みなりしかば南一条ニ出掛く。雪<sup>[粉]</sup>紛々として降り、已ニ二月頃の気候の如し。理髪店に行きておしき髻<sup>ひげ</sup>をそり落す。南部屋、富貴堂ニ立ち寄りて買物し、尚ほ止まぬ雪を突きて帰る。白鼠の如し。三宅氏の水彩画帖を購ふ<sup>241)</sup>。石版なれば其の真価を評し難きも、当今水彩画家中一頭地を抜き、つとに世の嚆<sup>[嚆]</sup>望するところとなれる君の画<sup>[才]</sup>なれば、在来の紛々たる画帖とは其の撰を異にし、其の着眼、その筆力、彩色の凡ならざるは余の贅言を待たず。曾て白馬会ニ就て見し真筆に比すれば大に物足らぬ心地せらるれど止むを得ぬことなるべし<sup>242)</sup>。

十一月二十一日（土）

〔受信〕教文館、小包

午後より博物学会より聴講ニ行く。経済学教室にて開かる。大島教授の浅草海苔の成分ニ就て及び宮部教授の近頃発表されたる某プロフェッサーの種類原始説に付て述べられたり。之れはダーウィンの原種説とは反対ニして、種の出現は漸進ニ非らずして急変するものなることを述べられたり。佐々木林学士<sup>243)</sup>の森林と牧畜なる講演あるべき筈にて、之れが為め聴講者も通例ニなく五六十名ニ上りしが、用事の為め来校せられざりしかば、河野氏<sup>[臨]</sup>りん時としてチャシコツ砦跡ニ就て其の構造及び所在を演べられたり<sup>244)</sup>。昨日は暴風か雪の為めかは知らねど内地〔便〕来らざりしか、本日漸く入り教文館の注文書来る。

十一月二十二日（日）

朝は大光寺氏を訪問し、十一時過ぎ<sup>[き]</sup>帰宅す。角館氏と豚の会食をなす。一時頃より雪降りしかど夜学校の障子余り破損したれば張り換へんとて南一条にて紙を求めて行きしか<sup>[が]</sup>、明日学校の方にて尽く修繕するとの話しなりしかば空しく帰宅す。夜は南一条ニ行きて買へ物をなし、帰りに植物標本を調べ、ボールを切り画学紙にて額縁の製造ニ取りかゝる。中々アート<sup>art</sup>を要するものなれば、只た之れ等の仕事ニ一夜を暮して床ニ就きしは十時半なりし。

十一月二十三日（月）

今日も雪少しく降る。昨夜フレーム<sup>frame</sup>丈け造りをきし額縁<sup>[額]</sup>を糊を以て次々<sup>[繕]</sup>合せ弥々立派ニ仕上げ上く。理想の如くならじ。稍々失望せしかどインキ<sup>ink</sup>を塗りに目立たぬ様ニなせしかば、絵を入れて壁間ニ掛くるに案外見事なれど、はたしてエコノミック・レーボア<sup>Economic labor</sup>なるや否やを知らず。午後農園ニ牛乳を取りニ行く。帰り路、高地<sup>[河内]</sup>氏宅を訪ふ。末光風邪ニ罹りしにか頭をはらし<sup>[包]</sup>ホー<sup>[包]</sup>帯をなし居りたり。一日家ニ籠りて書を読む。夜は頭痛の気味ありしかば早々寝む。今日より朝牛乳一合づ、配達しもらふ。

十一月二十四日（火）

原先生例の工風<sup>[夫]</sup>をこらし、例刻十五分を過ぎて尚ほ遅刻し授業中教室ニ入り来りは妨害ニなる〔こと〕甚たしければ、今後は授業初まりし時は戸口ニ講義中の札を出すにより、遅刻せしものは<sup>[速]</sup>えんり<sup>[速]</sup>よして其の時間丈け休む様ニせられたしと言はる。面白かるべし。昨日より頭痛せしが吉井先生の時間など稍々困しむ。されは午後より少しく天気も宜しかりしかば、南一条を通りて博物館構内を散歩し帰る。岩手山にて大光寺と共に採取せし植物を台紙ニ張り付く。中々美事なり。

十一月二十五日（水）

尾泉先生ノ時間ハ三時間目ニくり下げし為め、九時半より出校す。尾泉先生ノ授業は教室なき為め休みとなり、大島先生ハ明後日ニ伸して<sup>[貰]</sup>もらへて二時間ノ休みを得、余等の動物実験の組みは実験室に行きて、兼てアルコールニ入れ居きし種々のsegment<sup>[体節]</sup>を取り出し、パラフィン<sup>paraffin</sup>をストーブにて溶して入<sup>[れ]</sup>る用意す。午後よりも行き、弥々蠟ニ入れて固め、器械にて先づ<sup>[ず]</sup>notochord<sup>[脊索]</sup>とkidney<sup>[腎臓]</sup>とのセクション<sup>section</sup>を作りてプレパラートに製す。大光寺よりもらへ来りしライケンは宮部氏のレクチュアによる。此ハ其の中二種ハ有用なるものにして、一は北極地方にてジユン鹿の食用とするモス<sup>moss</sup>にして、他は薬となすものな

ること判れり。雪降る。午前は少々天気。

十一月二十六日（木）

〔受信〕小包、丸善

午前の授業は例の如くありて午後は休みとなる。午後は雪紛々として駈毛の如く降る。丸善ニ注文せし書籍到着す。

十一月二十七日（金）

今日の一時間目尾泉先生あるべき筈の事を伝達者取りあやまりて矢張り三時間目にあるものと皆々心得て二時間目出席せしにより尾泉先生ハ休みとなる。午後より天気はさほどよろしからねど腹の為めと思ふて散歩ニ出掛く。南二条を通りて博物館前を通りて帰る。夜は角館氏腹ニはれものを出せしとなれば、夜学校ニ出掛けて算術、珠算を教ふ。珠算と云ふもの吾れ曾て学びしことなくその一点一角も知らざれど、目くら蛇ニおじづと云ふ格にて出づ、謂所負ふた子ニ教へらるゝとはこれのことなんめり。晴れたりと云ふニあらねど、月の光りおぼろげながら出でたり。

十一月二十八日（土）

朝は雪、非常ニ降る。十二時頃ニ至りては雨と変ず。本日ノ積雪量ハ少々七八寸ニ一尺にも近からんか。一時半より槇氏<sup>245)</sup>、安東氏<sup>246)</sup>の演説、農友会ニて発起となり昆虫学教室ニ開く<sup>247)</sup>。槇氏の畜産談、安東氏の保羅相待<sup>ほら [殊]</sup>て有益なりし。トルストイのマン、エンドマスター<sup>248)</sup>を読み了る。例ニ依て感心する事甚だし。

十一月二十九日（日）

朝は十時頃より足助を訪問し、種々写真など見て帰る。午後は夜学校にストーブを付くるニ行く。掛け終りしハ四時半。之の日ことの外天気温気も例ニなかりし為め、朝より雪解け道悪しきこと甚だしかりしか、夜に入りてハそろゝ寒冷となり、月もよかりき。小池氏今ハ病院を出で、狩野氏と同じ下宿ニありとか聞きぬ。夜は角館氏の室ニ行き談話し十時を過す。

十一月三十日（月）

朝の授業はくり上げと校長の休みの為め、初めの二時間ハ休みとなる。午後よりハ昆虫の実験ニ行く。えぞしろ蝶を写生す。夜は夜学校ニ行く。帰路、明月輝く。

十二月一日（火）

〔受信〕隼次郎様より南瓜の注文来る

朝ハ天気なれど寒さはきびし。宮部先生より校則しんしひくを明後日より令行すと言はる<sup>249)</sup>。午後より尾泉先生ノ稲こきあり、玄米迄となし帰る。本年の米は例年ニなき出来なりし由、一升の重量ヲ左ニ挙く。

モミ 二百二十五匁

玄米 三百九十六匁

夜ニ入りて寒気烈しく、雪風と共ニ吹く。本日より来年の正月頃迄、学校の牛乳配達断はらる。

十二月二日（水）

校長の休み時間中、動物実験をなす。午後よりも実験室ニ行く。セントルイ<sup>Saint Louis</sup> [ス] 博覧会ニ出品すとかにて、写真師来りて所々を写せし様なり。吾等も原先生よりの電話にて図書館ニ行き、写真中の人物となる。夜学校は本日より荒川氏全快せしにより出勤せらるゝ事となる。今日も雪降る。

十二月三日（木）

朝の寒きこと甚たしく、稀れニ有ることなるべし。例によりて七時半近く起き出で、書を読む閑もなく学校ニ行く。本日より兼て新調中のゴム靴を出しはく。学校は本日より弥々洋服制度となる。近頃ニ至りて吾級にて分髪せしもの素木と関ニして、伊崎、大東<sup>250</sup>も仲間となる。特ニ関は評判ニして滑稽至極なり。髻の多きもの吾級なる、八九人はある筈なり。

十二月四日（金）

大嶋先生ノ授業をくり上げて三時間目より休業となる。風いと荒さみて、校舎より校舎に行くだにも困難ニして、雪を捲て来る北風のつめたきのみならず、今日は外套もきられぬ程、時々吹きすさべり。動物実験室ニ行きてチツクのセクションを写す。色部と安藤も来る。午後よりも又来らんとそのまゝにして家ニ帰る。エルムの木の上に雪積りて花咲けるが如きのどけき日、又ハ今日の如く風雪の吹き荒べる壮大なる北海の之の天地を、ステム<sup>steam[暖房]</sup>の通へる春の如き氣候をなせる教室より眺むるは、実ニパノラマを見し如き心地こそせらるれ、吾等がかゝる雄壯の景色を日々友とし眺むるは如何ばかり幸ひなることならめ。九州より来りし友は<sup>[佐賀]</sup>そが県の人にて此の景を見し人五十人を出でざるべく、吾れも之の上洋航<sup>[ト]</sup>ニてもなさば、遣り憾しき事更ニなしと言はれき。されと之の景色ニ多年交りながらぞか、感化を受くることなくして再び去る人もあらんがいとかなしき事ならずやと他の友語る。一時半より又々出掛けて写生す。午後よりは風弥々烈しく、遂ニ径三四分もあらんかと思は、霰<sup>[き]</sup>迄も降らず。四時過ぎ帰る途の寒さ、夜も風吹きぬ。

十二月五日（土）

今日午後より経済学教室ニ高岡氏の湾州の産業談あり、行きて聞く<sup>251</sup>。殆ど数字のみなりしが有益なりき。最後の結論として、今後湾州の産業発達ニ傷害を与ふべきもの二つあり。一は雨量少なくして旱魃<sup>かんばつ</sup>の害多く、他はホワイト<sup>White Australianism</sup>アウストラリアニズムニして他人種の移住を拒絶するにあり。而して前者は人力を以て如何ともすべからずと雖も、後者の如き之れを全く排除するに非らざるよりは、今後湾州の産業は或は今日の状勢を維持し得べくんも其の発達は到底望むべからず云々と。家ニ帰りしは四時。雪降る。昨日頃より寒氣ニのど又もや悪しくなる。

十二月六日（日）

晴雪常ならず。午前ハ南三条辺より病院西側を通りて博物館前ニ出で散歩して帰る。午後は少しく昼寝せしか、足助氏訪問せられ四時頃帰らる。子規随筆<sup>252</sup>及びマン、エントマスタを貸す。夜は雪降りしかど夜学校ニ行く。高等科ハリンコロン会あり、河内、足助、

竹田諸氏の演説ありし様子、尋常科ハ末光話さる。ストーブは未だ焼さじれば寒きこと甚<sup>[だ]</sup>たしく、実ニ歌も凍らんばかりなり。帰路は雪はれて月特ニよし。

十二月七日（月）

大嶋先生も休みなれば、土地改良論のみありて休みとなる。図書館ニ行きて経済を筆記す。午後も行きて四時迄読書す。試験も近づきたれば中々いそがし。夜は高橋氏ニ経済筆記を返すに行き、帰路南一条の書店に立ちよりにて買物す。試験の日間割出でたり。

十二月八日（火）

午前の授業は例の如く、午後は農産製造としてパンを作る。普通ノものには非ずして簡単<sup>[方法]</sup>の法方なり。図書館ニ行きて経済を筆記す。頭痛甚<sup>[だ]</sup>たしく耐へ難ければ、鉄道線路を沿ふて散歩し、青年会寄宿ノ前を通りて帰る。五時近かりし。近日になき好天気なり。尚ほのど悪し。

十二月九日（水）

午前の授業例の如く、午後よりハ動物実験あり。夜はホヤ<sup>[火屋]</sup>を買ふ為めに南一条ニ行く。校長の授業あり質問ニ終る。

十二月十日（木） 晴天

朝は松村氏のみ休みとなる。原先生ノ時間は遅刻してしめ出しを食へ図書館ニ入る。午後は休みなれば室<sup>[は]</sup>ニ籠りて読書す。夜も然り。試験間近ければ準備ニいそがしけれど、一通り読み了りしは土地改良のみにして、其の他ニは未だ一遍も手を付けざるものあれば、心のみ急<sup>[ぎ]</sup>きに実<sup>[だ]</sup>に日暮れて途遠しの感あり。勉焉。咽喉さほど悪しと云ふニ非らねど尚ほ全快せず。議会解散にならんとすとかの号外配達せらる。

十二月十一日（金） 晴天

校長の経済のみあり。午後よりハ南一条ニ散歩に行く。之の夜も議会解散となれりとかの号外あり。夜少しく雪降りし模様、一積りしに非ず。太陽三時四十分<sup>[だ]</sup>に没す。

十二月十二日（土） 晴天

昆虫のみ休<sup>[み]</sup>にして他は皆な授業あり。吉井先生ノ土性論はノート持つて試験することゝす。

十二月十三日（日）

此家もあちら向きけり冬の原

弥々明日より試験なれば、午前は経済を一返<sup>[復]</sup>復習す。足助、教会行き<sup>[だ]</sup>の帰途立ち寄りて新聞を借れ行く。午後も外出することなく読書す。夜は九時ニいねたれど目さへてねむられず、十時を聞きて眠る。朝ニも時々目を醒む。神經過敏とかになりしものなるべし。

十二月十四日（月） 暴風雪

弥々八時半より昆虫の試験あり。十二時半迄図書館ニありて動物を少しく復<sup>[復]</sup>習す。朝は少しく天気なりしが、九時過<sup>[ぎ]</sup>きより雪降り出し十時過<sup>[ぎ]</sup>きには暴風と変し雪さへ加はりたれば、例ニよりにて吹風すること甚<sup>[だ]</sup>たしく、雪を飛ばし枝を鳴らすことすさまじき有様なりし<sup>[が]</sup>か、午後に入りては一層甚<sup>[だ]</sup>たしく霰を降らすこと無数行人の困難さこそと思はれぬ。夜ニ

入りても尚ほ止まず。之の日の新聞ニて議會ニ於ける上奏文の委細及び河野議長の毀<sup>[著]</sup>ヨ、各新聞によって伝へらる<sup>253)</sup>。咽喉尚ほ全快せず、満<sup>[機]</sup>性となりしなるべし、二重とは恐れ入る。

十二月十五日（火） 天気

午前は室<sup>[に]</sup>ありて経済、土地改良などを読む。午後より尾泉氏の土地改良の試験あり。天気良ろしければ、帰途、青年寄宿の側を通り抜け博物館前を通りて北一条に出て二丁目を北ニ通りて帰りぬ。夜も下読す。

十二月十六日（水） 暴風雪

朝より天気宜しからず。土性論の試験あり。九時頃より雪降り出し風さへ吹く。十二時過<sup>[き]</sup>き迄図書館ニあり。風弥々吹き荒さみ南風なれば少々雨となりて横ニ降るなれば図書館屋上の窓より雨入りて室内ニも<sup>[れ]</sup>り来ぬ。午後ニなりても尚ほ止まず、弥々烈し。

十二月十七日（木）

経済の試験あり。雪降る。

十二月十八日（金）

動物ノ試験あり。朝より雪降る。正午、藤井氏来訪、暫時談話ノ後帰らる。南二条の勤工場<sup>254)</sup>ニ至りて買物し、富貴堂ニも立ち寄る。

十二月十九日（土）

大嶋先生ノ試験あり。今日にて学校の試験は終了なれば、図書館ニ行きて雑誌を読み十二時頃帰る。理髪所ニ行きて帰路河地氏宅を訪問し英語<sup>Bible</sup><sup>[聖書]</sup>を借れ林檎の御馳走ニなりて帰りしに、途中にて藤井氏ニ出遇ふ。同氏の寄留せる家婦病死せしとかの由にて、一週間他泊せられたしと要求せられたれば甚た困却せりと云われ、他の都合悪しからは余の宿<sup>[ば]</sup>ニ来られたしと云<sup>[い]</sup>へて別る。夜は植物の宿題を書く。

十二月二十日（日）

朝八時半頃、藤井氏来訪せられ、東二丁目かのアレキサンダーと云ふ美以教会ノ牧師の宅ニ行き、バイブルの講義を聴く。何にを言ふやら訳<sup>[が]</sup>か別らず。講義としてハ元より聴くに足らねど、余は某先生ノ所謂人は出来る丈け利用すべきものなりとの言に従へて、英語の研究の一助となさん為めに行くなり、豈ニ他あらんや。南一条を通り書店ニ立ちよりて帰る。午後よりハ植物の答案ニいそがわしく、一寸高地氏宅を尋ねたり。夜も植物を調べて十二時を聞きて寝ニ就く。

十二月二十一日（月）

朝九時ニ宮部先生ノ宅を尋ねて植物答案を渡し、遊園地ニ散歩<sup>[が]</sup>なから行く。少しく風ありたれと晴天なれば中々暖かく、雪の景色も一入<sup>[ひとしお]</sup>なりき。

十二月二十二日（火）

今日は教育図書館ニ行く。午後よりハ足助氏宅を訪問し、南一条ニ散歩<sup>[が]</sup>なから二人にて出掛く。菓店ニ立ち寄り、雑誌店をひやかす。朝より非常ニ寒冷にして、十時頃にて日の輝けるニも関せず、雪道の奇音を発してキーキーとなるさへあるに耳も切れなんばかりの寒

さなりき。半澤氏の所有なる思出の記<sup>255)</sup>を借りて読む。半ばゞかりしか読めざりしかど興味津々として湧く<sup>[が]</sup>か如く、十二時を聞きて床ニ入る。人生問題ニ入りて稍々決心するところあり。

十二月二十三日（水）

今日は朝より外出せずして、思出の記を読む。夜に入りて読了す。又々人生問題ニ付て沈思し絶望の淵ニ沈む。神あり、基督あり、永遠あれど、噫、吾れにはなぐさめなし。図書館ニ大光寺、角館氏と共に行く。

十二月二十四日（木）

午前は角館氏室ニありて談話す。余りの苦しさに青年会ニ石澤兄を訪へて、初めは牧畜上の談話ありしも、最後ニ信仰問題ニ移る。未だ<sup>[だ]</sup>安心は得ざれど、此の日の対話ほど余を感じ憤せしめ益せしめしは非らざりき。されど尚ほ疑問の雲は余が不霊の肉体を包みて真理の光を顕し給はず。床に就きしハ十二時。過去を顧み、未来を思ふて心安んせじ、不覚の涙を流してねむられず。

十二月二十五日（金）

朝は聖書を読み、他の二三冊の書をも読む。不安念尚ほ<sup>[糺ひ]</sup>おそへ来て苦しき事限りなし。トルストイの像を画かばやと筆とり初む。午後よりハ<sup>[河内]</sup>高地氏宅を訪ふ。夜学校の卒業式廿八日なれば中々いそがし。少しく手伝ふ。此の日試験成績発表す。結果など殆ど念頭に<sup>[ぶ]</sup>浮むひまだになし。

十二月二十六日（土）

如何ニせしか、此の冬の休みとなりてより、朝起きるハ八時半若しくハ九時となることさへあり。吾れながら寝坊ニなりしこと驚く外なし。夜の読書にて思はず十二時近く迄居る故ならんも不規則ニなりしハ事実なり。朝ハ聖書及び吾宗教を読み弥々少しく心眼の開きし心地せられて改悔の念ニかられて仰りせしと雖も、薄信の吾れ未だ<sup>[だ]</sup>天父の愛を知らず。実ニ野に迷へるの羊の如かり。午後よりハ夜学校ニ行きて式場の装飾を手伝ふ。夜も読書す。精神上のものなり。

十二月二十七日（日）

朝ハ聖書及び吾宗教を読むこと例の如し。午後より又夜学校ニ行きしかど已ニ大半出来せしかば少しの手伝のみして、ストーブにあたりて足助と駄句、駄じやれの言へくらをなす。之の人の前ニ出では悪る口の稽古のみぞさるゝ。吾れを天神なりとて拝みければ、年の暮れ貧乏隠居が神頼みとやりぬ。隠居とは足助の事なりかト聞く。余か神ニ<sup>[か]</sup>対する<sup>[観念]</sup>関念は、彼れは宇宙の大精神にして、吾人は我等の信仰及び実行ニよりて彼れと一致するニあり、之れ乃ち救極なりと信ず。而しその<sup>[観念]</sup>関念は曾て五年前鎌倉ニありて仏教の方面より黙考せし点と符号一致せしを知り、唯た異なるハ神ニ於てハ人格を有せしことなり。之の考へハ、トルストイ及び黒岩氏の神ニ<sup>[か]</sup>対する<sup>[観念]</sup>関念と相類似せるを覚ゆ。

十二月二十八日（月）

聖書を一遍読み、夜学校ニ行く。午前は福引きの品を買ひ集むる為メ、勤工場ニ足助、角

館氏と出掛く。年の頃十二三と思ほしき身なりいやしからぬ男の子、並べ置きし品物をさらへて逃げんとせしが、<sup>〔道ひ〕</sup>をへかけられて番頭ニ捕へられぬ。少年なれば別段のことなくゆるされたるなるべし。茲を立ち出で更ニ三丁目の勸工場ニ入りしに、又々人の集まり居れば何心なく見しに、又も先刻の小供<sup>〔子供〕</sup>ニ似たるもの、折角わび入れり。茲ニても何か悪心を起こせしものなるべし。之の小児をして<sup>〔斯〕</sup>期る罪惡<sup>〔犯〕</sup>ををかして更に恥ることなく<sup>〔到〕</sup>致るところ悪心をきざましむるもの、果して誰れの罪ぞ、社会の罪か、父母の罪か、之れ或は一種の病ニ非ずや、遺伝病ならずや、吾れ茲に於て又人生信仰の<sup>〔ゆ〕</sup>いるがせにすべからざる道德の暫時も<sup>〔ほうてき〕</sup>放擲すべからざるを覚りぬ。余りのことに吾が友なる義に正しき足助は耐へ得ずして、手を取りて之れを彼れが家ニ伴ひ、彼れが父母ニ一言するところあらんとて別れ去りぬ。

(夜学校の卒業式の有様ハ補遺ニ記す)

十二月二十九日 (火)

朝ハ例ニよりに九 [時] 頃近く起き出づ。之れ昨夜卒業式より帰りしハ十二時ニして就床ハ一時近くなりし為めり。角館氏ハ十二時頃概く起き出で朝食と昼飯を兼帯せし様なりき。午後よりも外出せずして日誌を付けつ、夜飯ニ至る。夜は角館氏の室ニ至り宗教を談す。足助来訪し快談の後ち辞し去らる。

十二月三十日 (水)

午前は室ニありて読書す。午後よりハ南一条迄行きて買物す。年の暮なれば往来の人々も<sup>〔が〕</sup>騒かしげに<sup>〔馳〕</sup>走せ廻る。

十二月三十一日 (木)

朝は室ニありて読書す。午後よりハ足助氏宅を訪問し、餅、栗などの御馳走になる。若松賤子<sup>〔女〕</sup>の忘れかたみ<sup>〔256〕</sup>を末光より借れ来り読む。今日ハ弥々年の暮なれば<sup>〔は〕</sup>浮世ニては鬼と云ふ恐ろしきもの提灯さげてかけめぐるなりとか聞けど、吾等の如きには影だも見えず。聖書読める間ニ十二時の時鐘を聞く。廿六年の最後の分時、廿七年の最初の分時と茲ニ合して、吾れは実に永劫の空間ニ架せる橋上ニたゞずめる感ありき。吾れは更ニ<sup>〔が〕</sup>吾か愚かしき心を一変して希望ある廿七年の第一時をむかへたりき。

明治三十六年当用日記補遺

五月十六日

悠々たる哉天壤、遼々たる哉古今、五尺の小軀を以て此大をはからんとす、ホレーシヨの哲学竟に何等のオーソリテーを備するものぞ、万有の真相は唯一言にして悉す、曰く「不可解」、我この恨を懷て煩悶終に死を決す、既に巖頭に立つに及んで、胸中何等の不安あるなし、始めて知る大なる悲観は大なる樂觀と一致するを。

藤村操

十二月二十八日

去年の卒業式と奨励会は廿六日でしたが、本年は廿八日にすることに致しました。先生方や生徒等の熱心な尽力の爲め、式場は美々しくかざられ、たしかに去年の装飾よりハ一段の進歩を来りて稍々荘嚴の体になりました。先づ正面ニは白幕を引きまわして、中央ニ奨励会と云ふ額を掲げ、左右ニは黒地に白く蛍雪と張り付けたは多分高地氏の意しようと見へて中々立派でした。之れニ続ける壁上ニはリンコン氏と新渡戸先生<sup>257)</sup>の額を対して掛け、正面ニ対せる戸のしきりの上には赤ひ紙の上ニ心ニ刻む自主ノしんかん共ニ磨く胸の玉なる字をかき、天井及び周囲の壁は尽くグリーンでかざりました。生徒の居る方はビール会社<sup>258)</sup>から借れたスターの付いた幕を張り周しましたから、平常の不潔になれて居る我等にはまるで別の所ニでも来た様ニ感じましたから、勿論生徒などはどんなに嬉しかったか知れません。準備もと、のへ僅か計りの来賓(然し同情には多く富める)も集りましたから、式の初まつたのは多分六時過ぎでしたら。例の会計報告、校務報告を池田と高地となしましてから、滝君より証書を授与し、賞品も大分ありました。之の中で特別証をもらへましたは興膳と云ふ尋常四年を卒業した男生[徒]で、中々学問も出来るし、品行もよく、学校のことを良く思ふてくる、感心な生徒だそーで、私は毎日顔は合せて居りますけれど深く性質を知りませんが充分彼れか将来の希望を助けてやりたへものだと思て居ります。それから滝君の奨励の辞二次で、西川嬢、宮川<sup>259)</sup>と云ふ独立教会ノ宣教師及び宮部先生の談話がありまして、特ニ宮部先生ノ御話しは吾れ等にとりまして、生徒ニ取りましても非常ニ有意なことでありと深く心ニ留めました。之れか終つて校歌を歌へ、卒業式を閉ちて更ニ余興ニ移りました。之より生徒のすることで二日計り前からヤット相談したのですからそ一高尚と云ふものは全くなく、皆な滑稽を極めしもの計りで、生徒や私し等も皆な腹をかへて笑へました。特ニ宮部先生ノ如きは例の有名な笑へ声を出したので、一層愉快ニ感じました。それから福引きに移りましたが、主任の人々に二百丈こしらへて呉れと言つたので大分汗になつて概くこしらへた所が、概し百人位なので二本づゝ取ることゝし、順序かきばくとせぬのと沢山なので非常ニ混雑し、それに時間もたつたので半分位で止めることゝして散会になりましたが、之の不満足の結果を来たしたので、之の掛りを務めた逢坂氏は大変腹を立て、目録を投げ付けて憤満ニ耐へぬ有様でありました。それから皆々に菓子を与へて家ニ帰らしめ、私し等はストーブの周りに集つて菓子を食へ、福引きの残物なる芋を一個捨ふてストーブで焼へて食へましたところか、例の足助や半澤やの悪口をも食へました。午後になつてからでありましたが、卒業生の女生[徒]の一人の内から祝へのつもりなのでしよう、てんぷらを一鉢遣てよこしましたか、之の家内のでんぷらと言ふのは有名なもので何日かもさんへ足助との悪口に引用されたものですのに、中々臭気(?)の烈しへので皆々へキエキシ、遠く左遷せられで、取て食ふほどの勇者もありませんでしたが、今之の中央に高地が運んで皆なニ勧めたところ、始めは皆なニの足をふんで居りましたが、北澤隊長か真前きにつまんで食つたものですから、鉢ニ一ぱいあつたきらわれ者も漸時ニ一つも無く退治られました。成る程、持つて来た口上に、今日のものは豚の油で

揚げたのだからと言ふて来たそーだから、食つたら甘かつたでしよー。然し之れの悪る口を聞き、先刻の臭気ニ恐れたものは誰れも一口食へませんでした。之れで散会ニなるのですが一寸書き忘れたことがあるから付け加へてをきますか。本年の卒業生も男生〔徒〕はなく（去年もありませんでした）、たつた女生徒か二名でした。てんぷらを持つて来た女生〔徒〕も其の内の一入です。之の生徒は実ニ感心な女子で、夜学校の一年から居るものだそーで、今年で八年ニなるそーです。妹は今度三年ニなりましたか、二た児だそーで始めて見ました時も大変良く似た子供と思へました。道理であらそわれぬものです。弟もありまして今度尋常の四年ニなりましたが、余り出来ぬ方ですが、去年落第させたら、父な〔人〕か大変怒つて婦娘の罪だとして殺すとか生かさぬとか言ふて大験【験】ぎをしたそーで、其の後は学校の先生方も大変重用視【重要視】して、高地氏からも度々之の次ぎにはどーか落第させて呉れるなど私ニ話されたこともあります。期様な家庭ニ育てられた小児ですから随分悲惨な境遇之人となり、困苦もし涙も流したでしょう。作文を見るも何時でも鬱して悲しそーな感【感】じか致すので判ります。然し人間と云ふものは悲惨【悲惨】になれはなるに従て、大慈なる天父のふところに懐かれて温き愛を受けずには居られません、之の児も幸ひに世間の困しみを充分なめて知りて居りますが、又天父のめぐみも早くから知り初めまして基督を信じ精神上ニ於ては安心を得てをるのでございませう。之の児ニ比較べますれば私などがなまじ僅かの財産ある家ニ生れ、幼少よりの少しハ苦しみ（それも他の人ニくらべたらなんでもなくてダ、をこねたに過【過】きぬかも知れぬ）もあつた様だけれど、好きなものを買つてもらへ、甘へものを食へ、学校はいやだと云ふて時々は欠席し之れ計りは大変おこられて亡き母ニも心配を掛け涙を以ていさめられたこともあるが、其の他は殆ど放任主義を以て育てられた。十五歳の時、他郷ニ遊学ニ行つてからも学費ニ何に不自由なく、反て遊び過【過】ぎて学問の方はをろそかになつてしまつたが、困苦と云ふものは殆ど知らなかつた。況して悲惨の境遇ニ落ち入りて人生のはかなさに泣たなど、云ふことは無つたが、唯た一つ私しの心ニ苦痛を与へたは母の死であつたかも知れぬ。私は之より他の児童ニ比すると余り活発でなく、むしろ陰気を好む方の性質であつたし、それに幼少の頃よりして屢々親類や何にかの死去ニ出逢つて殆ど毎年の様ニ寺に行つて御経を聞き、鐘の声を聞き、幼な心ニも無情と云ふことは別つて居つたであらう一か、其の後時々変な心地ニなつて泣きたへ様なことがあつた。私の父は私の生れぬ前からの希臘教【ギリシヤ】の信者で毎朝夕基督の像ニ向て祈祷を捧ぐるを幼な心にも黙つて見て居つた。そして、小学校ニ出でしハ、信者の児童か他の生徒から馬鹿ニさるゝを心持ちよく思はぬでもなく、家ニ歸つては父に同情を以てをつた。然し私しの父は決して私等に基督教を教へたこともなく、又無理ニ洗礼をも施さなかつた。一体之の教への方では生れて一年もたてば、何にも判らぬ小児でも洗礼をさづくるは例なのである。而して私しに施さなかつたは、私しの祖父母か仏教信者で、父も信者ニなるに大変な苦情【苦情】があつて先づ迫害を受けた様な訳だつたと或る親類の信者から聞へたが、多分之れか為めであつたろうと思ふ。然し小児の時二三度は宣教師のところにも行つて御話しを聞へたことがある。旧約のモーゼであつたがエジプトから逃れて紅海の

波を切つて渡つたなど云ふことを臆げなから覚へて居る。然し私か青年となつて東京ニ居る間は余り基督教ニ同情を持たなかつた。勿論時々は教会ニ行つて説教も聞へたが、更ニ感化を得ることなく、むしろ此の時代は早稲田で坪内博士の孔子談を聞えてよりハ儒教主義ニ傾へて漢籍を好む様ニなつた<sup>260</sup>。此の間ニ同郷の先輩で当時大学ニ通学して居る國分氏と同室して仏教主義を吹き込まれ、薄弱ながら仏耶儒の三教が私の心に入り込んだが、未だ何れを取るなど、云ふほど熱心でなく、殆ど顧るいとまもなかつた。其の後脚気の為め鎌倉の円覚寺ニ二度計り行つたもので、人真似て禅と言ふものをやつたが之より何にも得るところ無つたけれど、悟道と云ふものを宇宙の大精神と吾か心を一致せしむるものであると云ふこと丈けを覚つた様ニ覚へている。此の後余れは先づ仏教を基礎として儒、耶の精を取りて理想の宗教となさんなど、空想を画へて、或る友との旅の空で楽しく寝物語りをしたとこともある。其の後ど一しても精神修養の必用を感じて、已ニ松村、内村諸氏<sup>261</sup>の著書を読み少しハ感化を受けて居つた。それから中学を卒業して札幌ニ来ることになつたが、此の時ノ考へは東京などに居るよりハ精神修養の爲めにも良かるべく且つ学問も得たへが精神上の修養をも得たへといふのは私か札幌ニ来るときの大目的でありました。札幌ニ来てからは私の思想上ニ大變華を来しまして、私ハ六年間の中ニは初めの目的通り是非一の信仰を得て歸る積りではありますが、何れ之れは他日くわしく書き度へと思へ、今はホンノ概略丈けを書いて今の私か落信と迷想とを述べます。札幌ニ来て初めて接したのは父の信してをる希臘教で、其の当時之の地に伝教者として居つた私の親類の家ニ一寸の間やつ介になつたからであります。先めて聖書も読み、教義も聞へて見たがど一しても信する訳ニは行きませんでした。然し勿論後には私も絶対的ニ反対はせじ、神の存在も永遠の生命をも臆げなから信する様ニなりましたが、儀式教儀丈けはど一しても迷信ではあるまいかとの疑へを持ちまして、折角洗礼を勧められたがと一となりませんでした。其の後、新教の人々とも交際して談話し、聖書の研究会へも出席し、罪惡を思ふては改恨の祈をもして信仰を得た積りの時もあり [ま] したし、或時は信仰冷灰の如く消へ去りました。期して又起り又さめ幾度やつたか知りませんが、去年の秋よりしてトルストイに接してからは非常ニ彼れの書を愛読し、信仰をもよこんで研究してをりましたが、本年の冬の休みになつてフト朋友より蘆花氏の思へ出の記を借れて読んでから非常ニ心ニ苦悶を覺へ、先輩ニもたゞして唯た祈祷せよと彼れのラルソドックス<sup>orthodox</sup>を吹き込まれましたが、私は充分信することか出来ません為め、それより豈ニ苦悶が加はり昼夜聖書とトルストイの吾か宗教を読み考へ遂ニは祈祷まで致しましたけれども、未だ心の安心は得ませんで、日々迷へる羊の如く泣きさげんでをります。之れは彼の悲惨の内ニ生長しながら、反て天父のめぐみに浴し慈愛の手ニ懷かれてをる卒業生の某女ニ比するならば、私は唯た不幸を嘆するのみでありまして、むしろ期の如き苦しみを得るならば何故学問したる一か、何故精神上の問題を研究し始めたる一かとくやんでをります。實ニ神は之れを智者学者ニかくして小兒ニ顯し給ふ、噫ふ私しハ今更らなから無学ならんことを願てをります。然しながら私しハ決して失望を致しません。必ず小兒の如き心となつて神の道を正しく悟らんことを心掛け

て、念々として怠らじ、綿々として之れを考へようと思へます。而して私しの只今の薄信も若し言へ表すことを<sup>[許]</sup>いるし給はゞ、私は矢張り神を以て且つて五年前鎌倉ニ於て私しの芥子粒の様な心ニ刻まれた通り、宇宙の大精神にして之れには人格と言へませうか、活精と言へませうか言葉を知りませんが、確かに私等を作り、我等を<sup>[支配]</sup>司配し、我等を見ゆると見えざるとに於て導き給ふ且つ我等をして進化せしめ給ふ主神なりと答ふる外はありません。然して私しハマルソドフクト称するもの、教義である三位一体を信じません。勿論私しハ基督を以て神の子であるとは堅く信じて居ります。又或る言葉ニては彼れを神としても信じますか、然し前ニ述べた神乃チ宇宙の大精神乃チ基督と同体なりとは<sup>[う]</sup>ど一しても信ずることは出来ず且つ之れは聖書でも明なることでトルストイの信仰なども之れであります。

罪の教義は尚ほ疑問で只今ハ断言されませんが、私しハ之れも<sup>[う]</sup>ど一しても信ずることか出来ません。私しハ人間の罪の救極は唯た宇宙の大精神の大法則と言へませうか、乃チ基督の吾れ等ニ示させ給へる教訓の實行ニよりのみ救はるゝものなることを思へます。勿論信仰ハ第一でありますけれど、唯た信仰のみありて未だ行へなきに如何ニ改悔の涙を流し罪の<sup>[許]</sup>いるしを願ふても一朝一夕にして直ニ汝の罪<sup>[許]</sup>いるされたりの喜び来るものに非ざること<sup>[許]</sup>を信じます。若し罪の<sup>[許]</sup>いるしを得た人<sup>[か]</sup>ありとしますれば、人ハ行と信仰との二つにより漸々神の愛を受けた人であらうと思ふ故ニ、私しも決して<sup>[く]</sup>急ぐこと<sup>[と]</sup>なく、行と信仰を増し疑信ニ落ち入らざる様ニ理性の光を以て之れを探究し後ち罪の<sup>[許]</sup>いるしを得、神の慈愛を知り、完全ニ人を愛せんことを吾か神ニ祈る。

## 明治三十七年当用日記

吾人はすべからく現代を超越せざるべからず 高山林次郎

一月一日（金）

噫、今日は如何なる日ぞや、不冥の余を導き遅鈍の我を教へ給へし畏友国分兵吉氏<sup>262)</sup>の訃に接し流涕歔歔数刻遂ニ主なる神の聖前ニ万<sup>[一字空欄]</sup>□ノ熱誠を以て祈祷しぬ。生前余か靈を君ニよりにて宗教ニ導かれ、死後君が靈ニよりにて吾れは神を信じ、永生を信じ、薄信余が如きにも神の奇跡を<sup>[か]</sup>実験せしめぬ。万感胸ニあふれて、今日の日記吾れ誌すの筆なきをうらむ。

三時五十分太陽西山に没す。

一月二日（土）

北八条ニ為替受取るに行く。昨日の悲しみなほ去りやらず、途中にて色々の考へ胸ニ浮ぶ。若し永生なくば生何の<sup>[か]</sup>楽みぞ、希望何者ぞや。吾れも又藤村君<sup>263)</sup>の後を追ふて華巖百丈の懸瀑ニ身を投せんものを。然れど喜ふ可き哉、吾か友の死は吾れニ神の<sup>[か]</sup>実在を示し、神の<sup>[か]</sup>摂理を<sup>[か]</sup>顕せり。吾れ又先哲の後ニ<sup>[か]</sup>従へ信仰の林ニ<sup>[か]</sup>分け入り真理の泉を<sup>[か]</sup>尋ね、<sup>[か]</sup>仮令<sup>[か]</sup>吾か器小なりとも神か我れニ<sup>[か]</sup>与へし能力の及ぶだけは<sup>[か]</sup>汲みとらんものを。啓七様ニ<sup>[明]</sup>吊状を出し

二十五枚計りの年始状を認む。夜は夜学校に男生〔徒〕ノ新年会ありし筈なれども吾が心  
楽しまざれば<sup>〔は〕</sup>は行かず。藤井氏来訪せらる。

一月三日（日）

〔受信〕石黒<sup>264</sup>、隼次郎様より年始

日曜日なれば藤井氏と同行して英語聖書講義に行く<sup>265</sup>。帰路天気極めて宜しければ遊園地<sup>〔は〕</sup>  
ニ散歩す。午後も鉄道線路ニ沿ふて琴似の方ニ向へ、優ニ北海自然の風光に溶して宗教ノ  
妙味をさとり、想界の迷暗に彷徨しては人生の知り難き自然の広大計り難きを思ふて、円  
山村を通り南一条ニ出で、帰る。

一月四日（月）

朝より外出することなく室ニ籠りて読書す。夕飯後黙灯もなさて<sup>〔で〕</sup>、幽室にありて独り沈思  
黙考す。基督の死とゲッセマネの祈り<sup>266</sup>、日頃よりの疑問なりければ解決せんとなり。  
遂に次の如く断定す。ゲッセマネの祈りは基督世ニありて已ニ神の命ぜし事を果たたれど  
尚ほ信仰の点に於て全からず、且つ未だ<sup>〔た〕</sup>心ニ充分ならざりき故ニ神若し許し給はゞ尚ほ之  
の世ニ在りて彼れの教を宣伝せんことは彼れの願へなりしならん。而して苦痛は彼れの肉  
体の死と共に来れり。彼れの死ニ付ては吾が友の死ニ付て之れを知るを得たり。人の死は  
如何ニ彼れニ親し<sup>〔約〕</sup>やくせし人々の間ニ信仰を起さしむるかは議論ニ非<sup>〔ず〕</sup>して直覚的の事な  
り。基督ノ死ニよりにて如何ニ人々の間ニ堅き信仰を起さしめしかハ<sup>〔瞭〕</sup>瞭然たることなり。吾  
か<sup>〔が〕</sup>維新前志士、仁人の死は如何。今日ノ文運ニ関連するかを知れ、誠に実ニ汝等に告げん。  
一粒の麦若し地ニ落ちて死なずハ<sup>〔た〕</sup>唯た一粒にてあらん。若し死なば多くの実を結ぶべし。  
吾れは<sup>ひざまず</sup>跪きて吾が神ニ感謝しぬ。トルストイは基督の贖罪を否決し、ゲッセマネの祈祷ハ  
彼レガラストテムプテーションニして乃チフェア<sup>fair</sup>とファイト<sup>fight</sup>とは彼れの心を苦しめしもの  
なりと、果然<sup>〔が〕</sup>吾か心を得たり。

一月五日（火）

午前は室ニありて忘れがたみを読む。今日、東京新聞の元日の分来る。航海ノ危険なりし  
為め遅延せしなるべし。午後より足助来る。米国ニ在る工藤<sup>267</sup>の滑稽談を談る。夜は夜学  
校ニ女子ノ新年の遊びある筈なれば、後れ走<sup>〔馳〕</sup>せながら七時過ぎ行く。例の遊戯に余念なく  
笑へたわむれ、髯<sup>ひげ</sup>の生へし小児となる。八時過に帰宅す。新聞、聖書など読む。若し人の  
死は生前ニ自覚し得るものならば、或は余が生命畏からざらん。兵吉君の永眠の報に接せ  
し頃の夜半にふと目醒めて夢心地ニも人生のはかなきを思へて悲しく、何処よりとなく汝  
の生命も長からざるべしと言へる声を聞きぬ。それより時々余も長からずして兵吉君のあ  
とを追ふなるべしとの感を何とはなしに懐く様ニなりぬ。凡ては神の聖意のまゝなり。我  
か<sup>〔が〕</sup>生命を汝の手ニ委ぬ。

一月六日（水）

〔受信〕大森、貞三、内藤<sup>268</sup>、太布留吉、斎藤、明八 二、国分市郎、田中眞一郎、  
繁一<sup>269</sup>、川村<sup>270</sup>、赤岩治家、大光寺政樹 年始状

朝は南一条ニ出で、新しき太陽などを買へ求めて帰る。午後より足助の宅を訪問せしか

<sup>[と]</sup>と、皆々留守と見へて錠かゝれり。天気良き日なれば、直ニ逢坂氏を下宿ニ尋ぬ。英文学史<sup>271)</sup>の絵を見終りて直ニ信仰問題をたゞく。氏等は原よりヲルソドックスを余程立ち離れし見地もあるなれど、尚ほ復活、贖罪、天国などを信ずるなり。余の如きは彼れ等より益々遠きをさとる。されど信仰は一、真理は一、神は一なり。豈一路のみならんや。要は唯だ理性ニうつつたへて基督の道を実行せんのみ。夜学校今夜よりあり。角館氏同校の為め計数器とかを寄贈せんと云ふにより二人にて出金して購ふ。明八様より兵吉様死去の報知廿六日に出せしもの学校に來り居りたり。行かざりし故、知ることは得ざりき。

一月七日（木）

〔受信〕 関貞次<sup>272)</sup>、米長、小太郎

朝、藤井氏訪問せらる。談話の中ち佐瀬<sup>273)</sup>來り、梁田來りて、本日午後四時より、伊藤廣機<sup>[機]</sup>氏のシャムに漫遊せらる故<sup>274)</sup>、送別を兼ね新年大会を催したきに付きてそれへ手を廻して故郷人に報知しくれずやと云はれて去る。午後二時頃大光寺氏を訪はゞやと行く途中にて色部氏ニ逢へ、新宅の有様を見て呉れずやとの事なれば一寸立ち寄る。談は始めより終り迄文学談なり。先づ小説の□□訳物流行より先づまりて（氏は鏡花<sup>275)</sup>を第一流にをせり）新体詩の衰微に及び、和歌俳句を片ばしより論じ終る。大光寺を訪問したれど不在なりしかば伝言して歸る。四時に同窓俱樂部に行きたれど梁田と佐瀬と居るのみ。初まりしハ五時過ぎたり。集りしもの十五六人もありたらんか、中学生特に多し。例になき大人数とや言けん。カルタなどの遊戯の後、十時頃歸る。伊藤氏のあへさつありき。

一月八日（金）

〔発信〕 繁孝<sup>276)</sup>

〔受信〕 忠次郎、繁孝

朝九時より校長の訓諭あり。帰宅して南一条二行きノートブックを買ひ求む。午後より足助を訪問し種々御馳走ニなり下らぬ話しなどして歸る。夜は学年始めのことなれば如何なる有様ならんかと思へて夜学校ニ行く。新入学生も大分ありし様子なり。約翰伝第十七章の「皆な一にならん為めなり」との語に付て、姉崎博士<sup>277)</sup>余程感せし様なりしが、之の語に付て考ふる時は概<sup>[概]</sup>ニ余が考を確かむるに非ずやと思はる。

一月九日（土）

吉井先生の土性論あり。南先生ハ一寸御話しありて休みとなる。図書館ニ行きて雑誌、新聞など見て歸る。森源三翁の油絵かゝげられた<sup>278)</sup>。京都の人小笠原某<sup>279)</sup>の画きしものなり。巧拙の批評は言はざるべし、美術としての価値なきは勿論なれば。午後は室内ニあり。

一月十日（日）

八時過ぎにようへ起き出づ。例のバイブル講義、余り気ハ進まねど藤井氏ニ気の毒なればはいやへながら半頃ニ出掛く。余か如き異端者の儀式的祈禱をくり返してある彼等信者の中に雑じれるは、洋服着たる人この中ニ一人、羽織袴のいで立ちしたらん如く目立ちて、むげニいやしく見え、心の中ニは何とか思へる人もあるべけれど、余か信仰<sup>[信]</sup>は致底彼等と一致する事能はざるものなるに、みだりに彼等ニ拘りて仰意雷同し、神の与へ給へる

理性の光りを覆ふは兎ても耐へ難きことにしあれば、余か信仰と独立心を害せるらるゝか如きことあらば直ニ別かるべし。唯た余か良心ニやましきば、兎に角、基督の道を宣伝しつゝある彼れの言に重きを置かず、単ニ自己の語学の為めに利用しつゝあるは天ニ対してやましき心地す。帰路は大吹雪となる。夜ニ入るも止まず。トルストイのファスト、デスチラー<sup>280</sup>を三章計り読む。今日影山君郷里ニ帰らる。

一月十一日（月）

尾泉先生と校長の講義あり。午後より少しく風ありしかど天気なりしかば南一条辺ニ散歩に出掛く。夜はEconomy<sup>[経済学]</sup>を読む。然し何にやら判然せず。

一月十二日（火）

午後二時より級会を同窓会倶楽部ニて開くなれば一時半頃出掛く。少し散歩して腹の工合へを調べばやと南七条辺迄行く。文武会に就ての話しなどありて直ニカルタなどになる。余等は例の無芸の事とてアッチにぶら〜コッチにぶら〜して人の上手に取るを感心して眺むるのみ。夜に入りてはスシなどの御馳走あり。遊戯も新工<sup>[夫]</sup>風の者にて、御半長兵工、何にやら名を知らねと歌ひながらやる者ニて者を当てもの、字探しとやりて何れも墨つけをなす。最後には二組となりてケンをなし、捕虜の取りくらをなし、分取りに付て大騒きをなし、終には総立ちとなりてさわぐ。外より見しならば喧嘩とでも見しならん。それより他の一遊戯をなして十時に散会す。吾級会にて今日程さわぎしは此度か初めにて実ニ未曾有のことゞもなり。帰路は雪降りて夜に入りて五寸位積りたり。

一月十三日（水）

昨夜降りし雪、今朝はやゝ一尺も積りしならんか。尾泉、松村先生のみありて休みなり。図書館に行く。外出もせじ、室ニあり。夜は経済を読みて他を読まず。

一月十四日（木）

今日も少しく雪降る。午後よりハ理髪の為め南一条辺に出掛け書店をもひやかす。勤工場に立ちよりにてハミガキを買ふ。夜は聖書を読む。「汝等我れを愛せんとならば吾か言を行へ」との句を多く見出して我か心楽しむ。茲に於てか世の所謂基督伝者なる者の所信を疑はざるを得じ。人を単に信仰にのみよりて義とせらるゝに非ず、実行によりてなり。而して信仰あるもの（単に基督の道を信すると称する者）必ずしも実行あるに非ず。信と行とは一の如くして実は二なり。汝ち精神をつくして主なる神を信じ<sup>[信]</sup>、而して隣人を愛すること自己の如くせよ。又吾れ思ふに若し教会の信条及び宣教師の基督教を耳にすることなくして聖書を読み直に基督の教を咀嚼せば、決して彼れは贖罪や人間のアダムよりして伝はりし罪等の事は夢想だもせざる所ならん。吾が疑問は死よりの復活なり。基督死よりの復活を談らざりしとするも、聖書の事実は之れを示せり。今日読みしラザロの復活<sup>281</sup>の如きは明なる事にして余が心をして迷はさしむ。今少しく之れに付て考へざるべからず。

一月十五日（金）

別段誌すべきことなし。午後より遊園地ニ散歩して雪の景色を眺む。

一月十六日（土）

十一時半より授業は休みて文武会<sup>282)</sup>臨時級会を開く。中嶋講師<sup>283)</sup>の今後演すべき倫理学の方針に就て一寸述べらる。洋行帰りと聞きしかど更ニハイカラらしからず、容ぼう風采より見るときは何んたが<sup>[たか]</sup>古るさうな人なり。然し倫理学に就て一定の意見を有し居るならば学生の幸ひならんも、唯だ単に実せん倫理など云へて徒に世の学者輩の糟粕をなめ喋々するのみにては之の講座の前途如何にや危まる、事にこそ。文武会の規則修正案は特別委員を各級より二人づゝ<sup>[ず]</sup>撰みて一任することに決して散会す。午後より天気よかりしかは製糖会社の辺ニ散歩す。

一月十七日 (日)

聖書講義ニ出席す。例によりて得るところなし。帰路花室に立ちよる。去年の九月より殆ど見ざりしかば、いとめづらしき心地す。パイナップル<sup>pineapple</sup>実れり、初めて見る。昼飯には角館氏と豚肉会を開く。三時半頃迄、談話す。それより鉄道線路を西に往復して腹工合を調ふ。夜は思へ出の記を略見して九時過ぎ床に入る。

一月十八日 (月)

天気はよけれども風いとおつめたし。午後は南一条の書店に行きてひやかせども、何にも買へ度き本はなし。帰りに風呂ニ行く。藤井氏来り<sup>[来]</sup>をられたり。森林科の人ならんと顔は見しことありし人の様なれど更ニ思へ付かぬ人より種々談話せらる。故郷の人にもあらねば、或は中学時代にて顔を知りし人にもや、然らざれば人違ひならん。

一月十九日 (火)

午後より散歩せばやと鉄道線路を通へ行きしが思の外風寒く兎ても遠くへ行かれ難ければ、裏門の方より学校図書館ニ行きて四時過ぎ迄<sup>[き]</sup>新聞、雑誌などを読む。夜食後あまりねむたければ床を敷きて八時迄寝ぬ。それより起き上りて十二時迄勉強し、二時の鐘を聞き再び夢に入る。

一月二十日 (水) 雪

〔受信〕伊藤七郎

朝の二時間の休みは図書館ニ入る。午後より農産製造実習ありて粉乳を製す。雪降り出せしかと、南一条、二条辺迄散歩ニ出掛く。夜ハ久しぶりにて復活<sup>[復]</sup>を読む。午後シャツ一枚となりてサウンダーの運動法を行へし為めにや、頭悪しくなり吸入器を試む。近来風邪大流行にて至るところせき<sup>[咳]</sup>の音を立てつゝあれば、さては吾れもその病魔にとり付かれしにやあらん、あな恐ろし。伊藤氏及び小太郎氏へ葉書を認む。

一月二十一日 (木) 大雪

〔発信〕伊藤七郎 澤藤小太郎

朝起きて見れば咽喉甚だ悪し、遂ニ風邪の先導をなせり。やがてせき出で鼻つまり、声変るなるべしと思へばいまへしき限りなし。朝は少々天気なりしも十時半頃より盛に雪降り出す。宮部先生の授業は休みて其の時間内特別委員の報告をなす。議案は予修会呈出の通り已ニ或るものは定まりたれば如何ニすべきかとの事なり。所謂、文武会の国体組織なるものなり。吾れは内容を良くは知らねど全々反対にも非ず。然し吾級の意見は全々之れ

ニ反対するなれば吾れは何にも言ふところなし。兎に角、如何ニなるも文武会の活動は已ニ止みて国体的活動ニ帰すべきや論なし。

一月二十二日（金）

朝の授業例の如し、午後は風雪ありしも図書館ニ行きてジヤマンを一頁足らず読む。ヘッケルのエボルーション、ラブ、マン<sup>284</sup>を借れて四五頁読む。未だ本論ニ入らざれば意義を捉へ難し。夜はトルストイの復活を読み、記事弥々四人の西比利遠てきニ及びて叙景見るが如し。二三日なりしと覚ゆ電報ニよれば、拓植銀行員某行金三万円位ごまかして発覚し為めに重やく四人計り辞職せしとか。裏には日本銀行の事件あり、今又期の如きの事あり、世の品性の人を要求するや弥々切ならんとす。

一月二十三日（土）

松村氏の時間は休みて特別委員会の報告をなして委員の意志不調和ニ終りしを以て遂ニ解散となりし由報ず。何れも自己の意見を貫徹せんとするなれば致底成立するの望なきは明なり。文武会の前途や、之れ暗黒なりと謂つべし。午後は教育図書館ニ行きて新聞、雑誌を読み、二時半より経済学教室ニ於テ举行するエルム会発会式ニ臨む。之れより先き、予〔修〕科二年級より本会ニ対して他との意見相違せるを以て加盟し能はざるむね通知ありたりとか、依て之れニ就き前後一策を議し、ヨ〔修〕科二年との交しよう委員を選みて、ちよう定を試み、発会式を延期することを決す。夜は同窓会ニ於テ懇親会を開きたれども出席せず。之の日ノ朝、大光寺、親父の病気の報ニ接し帰国せりとの事なり。

一月二十四日（日）晴天

昨日迄は甚だしくならんとは思はざりし風邪、今朝ニなりて急ニ頭重く、水ばなど云ふものなど流る。聖書の講義の方は休む。十時過ぎよりにや、角館氏の室ニ坂本来られたれば行きて色々国元の事などを談話す。同氏の帰宅されしハ午後四時過ぎなりし。夜に入りても尚ほ角館氏と談話を続け話頭次第ニ熟し中々絶へず、遂ニ内事上の事ニ迄及ぶ。衣を重ねて温を呼びクヅユー一杯を飲みて七時頃寝ぬ。終夜安眠を得ず。夢寝ニ転々す。転々するに当りて三つの法則あり。その一を揮まざるべからずとは夢ニ一貫せる主題なりしと雖も、意義幽遠ニして茲ニ述ふべからず。

一月二十五日（月）

風邪いよ〜よろしからず頭痛むによりて学校は休みて床ニあり、昨夜の夢は尚ほ続く。昼飯を食はず。足助氏来訪せらる。種々談話す。

一月二十六日（火）

今日も風邪よろしからず、学校を休みて保養す。先頃、六合雑誌ニ於て某氏の論中<sup>285</sup>ヨハネ伝は基督死後約ど二世紀の後に神学者ヨハネによりて誌されしものなることを今や人皆な承認せり云々の語ありしが、其の後ヨハネ伝をとりて熟読するに、神学上深淵なる意義教訓沢々として流れてつきざれど、基督の真面目は反て覆はれし心地して何となく以前の如く尊からず、反て路加、馬太伝におとりし考へするは如何にや。勿論、今日の基督教々義は其の源を之れ等に発せしものなれば、神学上の意見として当時已ニ発達せしものなるべし。夜

は頭痛甚たしく六時寝ぬ。

一月二十七日（水）

今日も宜しからざれば学校を休む。朝より火によりそうて雑書を手当り次第引き抜きて乱読す。午後も然り。無連なること甚たし。そろへ少しく雪降り出す。夜は角館氏室二行きて談話す。十時就床。

一月二十八日（木）

今日は病少しくおこたりたれば学校二行く。午後は図書館に行きて経済の筆記をなし、四時まで雑誌を読みて帰る。大光寺の父君、同氏の出立ちの際、死亡の電報着せしなる由。去歳の夏、余等壯遊を巖手山ニ試みんか為め同氏宅ニやつ介となるや、白髪白髯の老翁出で来る。大光寺の父君と聞きて一瞥をきつしたりしか、今や已ニ白玉楼中の人とならる。大光寺一家の悲嘆察するに余りあり。近来風邪流行して夜学校の手嶋先生迄かゝられいと困難し居らるゝ由、困つたものなり。

タマキ 末光の細君となりし人

一月二十九日（金）

天気極めてよろし。午後より種子学実験の為め、宮城、大関と実験室二行き、東海林君<sup>286</sup>より諸実験の器具の説明にあづかり、試験用として余は大豆を受取る。夜は、ト翁の復活を読む。

一月三十日（土）

天気よろし。外出もされざれば兼而書きかけをきしトルストイ翁の肖像をとり出し書き初む。一生懸命になりて画きしかは夜飯の少しく前ニ止む。余りよき出来ばひ<sup>【映え】</sup>ニもあらねど全く成りし上ならねば如何ニとも云へ難ければ稍々望みを戸しをくべし。夜は復活と買へ来りしダンテ神曲<sup>287</sup>とを読む。夜学校ニて茶話会ありたれど病氣よろしからねは行かず。

一月三十一日（日）

北八条の風呂ニ行きて二週間来の<sup>【垢】</sup>あかを落す。風邪尚ほ宜しからねば早々上る。それより河内氏宅を訪問し十二時迄雑談を試む。別段主題とは非らざりき。午後より又もト翁を画き初む。四時過ぎ迄かゝりて顔の大部分と体の一部とを画き終る。鼻大にまづき心地せらる。之れあながつ余の罪のみに非ずして、元来ト翁は<sup>【醜】</sup>ぶ男なれば責任を分たざるべからず。今度のもは如何なるにや、近よれば良く見ゆれと、<sup>【ど】</sup>遠くより見ると非常ニまづき心地せらる。夜は復活<sup>【復】</sup>を読む。九時ニいぬ。

二月一日（月）晴天

朝は授業例の如し。午後よりハ種子学実験ありて、余は大豆二千粒を扱みて実重を見る。夜は嘲風の復活の曙光<sup>288</sup>及びトルストイの復活<sup>【復】</sup>を読む。嘲風の論中、吾人は互にその抱懐せる思想を知ることを得ざれども、一種の符号ある言語によりて互の思想を理会し且つ交通せしめ得たりと信ず故ニ若し宇宙万物が抱懐せる精神も其の標表を判読するを得ば、又我等と交通をなすことを得べしとの議論、吾か心を得たり。之れ所謂エマーソン<sup>289</sup>の「天地は符号に満つ唯た之れ等は聡明なる人ニ向て語るのみ」なるものか。

二月二日（火）

朝より天気よく極めて温度なり。午後に至りて益々温く、積雪も余程融<sup>融</sup>解せし如くなりき。午後よりは種子学実験あり、比重を計る。夜はトルストイと嘲風を読む。

二月三日（水）

昨日の天候とは打つて変り、北風漂裂雪を降らし、此の日頃になき天気なり。午後よりハ農業実習あり。チースの製法を学ぶ。単ニ見学に過ぎざれば得るところあるようなし。終りて種子学実験ニ行きて大豆を二百並べ初む。然るに二百粒づゝ二組作る由を聞きて、更ニ水ニ入れて明日用意することゝして帰る。失敗のことどもなり。夜はトルストイを読むこと例の如し。学校の課業ハ更ニ復<sup>復</sup>習せず。

二月四日（木）

之の日も南先生、当別地方ニ御出での由にて休む。午後より農学実験室ニ至りて大豆を並べ初む。又々の失敗は大豆不足し止むを得し昨日捨てしもの数粒をひろへ上げて並む。次の組々の人々、皆より来りて講義を聞く。夕飯過ぎ、足助新聞を借りに来る。一寸立ち寄りて談話し復活<sup>復</sup>の曙光を貸す。夜はトルストイを読みて十一時頃ニ至る。此の日も中々寒し。特ニ夜に入りて寒気一層甚たしく、爐辺の牛乳は氷るニ至る。

二月五日（金）

〔発信〕丸善

〔受信〕父上より為替

昨日足助ニ石川君夜学校に尚ほ出勤せられず手嶋先生一手にて引き受け居るゝ由にて気の毒なれば、当分の中、小生かはりて出てもよろしきむね言へしか、今日、末光より弥々頼まる。午後は種子学実験室に行く。第一の方、乃チ三日ニ並べしもの六つ計り発芽し初む。直ニ南一条の神田床に行きて理髪す。夜は夜学校ニ行く。今日丈けハ見せてもらへたしと思へしかど、手嶋先生未だ帰らざる由なれば已むを得ず授業を受け持つ。ストーブ燃へずして寒むきこと甚たしく又風邪を引くに非ずやと心配す。帰りてトルストイを読む。十一時頃迄かゝりて全篇を読了す。去年の正月ニ初めしも中途にて止めをりしに付き殆ど満一ヶ年を要せり。

二月六日（土）

近衛師団と某々師団とは已ニ召集せられたりとかにて、今日農芸[科]の桂<sup>290</sup>とか言はるゝ小尉殿<sup>少</sup>出發さるゝ由なり。我が級の渡辺君<sup>291</sup>にも支人より電報来りしとかにて出發せらるゝも間もあらざるべければ早く写真をとらばやと朝より学課を休みて信じな<sup>292</sup>に行く。予〔修科〕一年級にも志願兵ある由にて<sup>293</sup>、その級の人々も来りて写さる。午後よりハ種子を見に行く。温暖なればにや、第一の方ハ百六十余、第二は八十余発芽せり。博物学会ニ行きて、松村氏の変体説及び橋本氏の豆納の研究を報告せらる<sup>294</sup>。雪降り出でしか、四時より松村氏の祝賀会あるなれば、余は余興の提灯を買ふニ一、二条辺をぐるへとうろつきようやく買求めて同窓会ニ行けば已ニ松村氏の説演も終わる頃なりし。五毛久の御馳走ありて余興ニ移る。琵琶、吾級の昆虫行列、茶番、狂言、一年の松村氏祝賀会の大々の

演げき、三年のテレスコをどり<sup>295</sup>、剣舞など甚たかつ暎<sup>[笑]</sup>をはくしたり。九時半頃開散す。松村氏の胴上げをなす<sup>296</sup>。

二月七日（日）

今日は聖書ノ講義に出づるやう約束し置きしか、つい朝寝して時間ニ後れたれば行かず。坂本氏来りたれば、角館君ノ室ニて談話す。昼飯には第一日曜なればとて豚肉を食ふ。二時頃種子発芽試験ある為め学校ニ行く。温度ハ今日最も高く十八度なりしかど、昨日大抵発芽せしものから余り多からず何れも二三十下なりし。帰路、足助君を訪問す。二三日前、学校門前の貸し家ニ移りし池田、荒川及び支那人諸氏、今日見れば已ニ居らず如何せしかと尋ねしに、壁尚ほ新しき為め息気を発し、池田氏真先ニ逃げ出せし為め已を得ず解散せしなりとか。天気非常ニ良かりしも風寒し。

二月八日（月）

朝よりして天気よろし。日中ニは温度も昇りて雪もとけ初めたり。午後より発芽試験を見ニ行き帰り図書館ニ立ちよりにて雑誌を見る。夜は夜学校ニ行く。無邪気なる小児輩なれば、浮き世の堅くるしさも忘られて心地すがへし、特に我が身の今にとりては。昼の間も停車場の方より多人数の大声上くるを聞きしか、夜学校の帰りも或る料理屋の二階より例の万歳やらんを聞く。号外の鈴の音も急かしげニ走るを見て、又何にか大事でもありしかと宿ニ帰りて号外を借りて見るに、何日もには似ず、公使引上げ等の不愜<sup>[隠]</sup>の記事あり。戦争も弥々迫りし模様なり。日本国民は大和魂とやらをふり起して狂するなるべけれど、剣を以て立つものは剣を以て亡ぶ人の子の教を信ずるものは同情の念を起す能はず。噫、吾れ之の人々の間ニ立ちて如何なる行動をとらんか、余は真ニ盲目たるなり、唯た主なる我が神ニ祈るあるのみ。

二月九日（火）

朝より天気よし。最後の授業済むや直ニ発芽試験を見ニ行く。温度は毎日昇りて初めは七度と十一度なりしが今日廿度ニなる。未だ発芽せざるもの四五粒づゝとなる。午後よりハ風呂ニ行きて久しく捨て置きしトルストイの肖像を画く。夜は風烈しく吹き雪らしきものも少しは降りし模様なりしも極めて温かき夜なりし。

二月十日（水）

土地改良の時間に、尾泉先生自ら改良せしものなりとて鋤の雛形を示さる<sup>297</sup>。スクルー<sup>screw[ネジ]</sup>によりて角度を定むるものにて尾泉先生としては大出来、苦心慘<sup>[機]</sup>瞻ノ余りに出来しものなるべければ理想としては面白かるべきも実用<sup>[適]</sup>ニ的せざるや論なし。此の日も温暖にして試験器の水温は廿三度を示す。農業実習ありてハムの製法方の前準備を見る。人々の話しによれば、已ニ平和破れて露国軍艦は沈没し、我軍旅順港を攻撃中なりとか。帰路、線路ニ沿ふて黙想しつゝ進む。已ニ平和望むべからず、鉄火相見ゆるの止むを得ざるニ至りし上は吾れ又何をか言はん、唯た<sup>[だ]</sup>その悲しむべき報酬を謹んで待ち以て後世子孫の鑑として平和光榮を望ましむべきのみ。

二月十一日（木）

弥々宣戦詔勅下る。吾等臣民は謹で陛下の大御心を翼賛せざるべからず。トルストイの翁の肖像を画き了る。絶対的平和論をとなうふる翁と日露戦争、如何ニ面白きコントラストぞ。翁が像と対して氏の戦争ニ付て如何なる考想を有しをれるにやなど思ふ。好翁願はくは自愛して世界平和論者の為め大々的气燄を吐け、翁が像今後楯間ニかゝげて朝夕翁が高徳をしたはん。我が崇敬するニコライ師<sup>298</sup>遂ニ退去を命ぜられしとか、願はくは主のめぐみによりて平安彼の上にあらんことを。朝より室ニあり。午後学校ニ行きて種子試験を見る。水温廿三度なりし。大風にして綿の如き雪降り、夜に入るも止まず。拝賀式ニ於て、校長や、氣燄を吐けりとか伝ふ。

二月十二日（金）晴天

旅順港外ニ於て露艦十余艘を沈没せしめしハ事実なる<sup>[が]</sup>か如し。又号外によれば、日本汽船一艘露艦の為め秋田近海に於て沈没せしめられ、露艦四艘は函館近海にありとの報ありし<sup>[が]</sup>か、五時頃江差砲撃せられたりとの虚報伝はり、更に前の露艦四艘ノ内三艘は函館附近にて水雷にかゝりて沈没せりとの電報あり。小樽人士ノ戦々<sup>[恐]</sup>洵々たり陸兵は多く滞在せしとか。本科一年にて提灯行列とかの発企せし由にて我級にも交渉ありし<sup>[ど]</sup>かと、文部大臣ノ訓令もあればとてキヨ絶するに決す。遂ニ中止となる。「汝の行なき信仰を吾れに示せ、我<sup>[が]</sup>か信仰は吾か行に依て汝ニ示さん」実ニ吾等は事項によりて吾<sup>[が]</sup>か信仰を人に表白せんと欲す。行なくして言語によりて信仰を人ニ語るの人ハ悲しむべき哉、世上<sup>[濶]</sup>踏々たる自称基督教徒、皆な之の亜流ニ非らざるなきか。何んぞ空しき信仰のみを有して実行を軽んずるの甚だしき。基督ノ贖罪を信ずるに非らざれば<sup>[は]</sup>、実行に入るを得ずと思謂する徒よ、古の聖人君子は如何、異教徒たりと雖も汝等の仰望する天国に先づ<sup>[ず]</sup>入らんものは之の人々、神の<sup>[寵]</sup>寵者たるは此の人々ニあらずや。而して汝等は如何、吾れ之れを知らず、唯た神の知る。夜学校ニ行く。

二月十三日（土）雪

十一時半より校長の訓諭あり。文部省より達せし運動ニ付てなり。市中行列は見合すべき筈、電報来る。宣戦詔勅を決して喜ぶべきことに非らず。世界平和の為め、人道の為め、悲しむべきことなりとせば、戦勝<sup>[并]</sup>豈にべん舞して欣ぶべき事ならんや。米国南北戦は世界の義軍なりしと称せらる。然れとも戦勝てリンコルン<sup>Lincoln</sup>が満面の笑を見しものなく、市民の行列を聞かざりき。之れ名は正義の戦なりとも、行は神の道ニそむき、目を以て目をつくなへ、<sup>[く]</sup>齒を以て齒をつくなへりしかばなり。嗚呼、東洋君子国の愛国者よ、汝等か目には神の怒り見へざるか、人道の念存せざるか、亡びに至るを知らずして徒ニ戦勝の甘きに酔へるものは禍なるかな。露艦三艘沈没せしとは虚報にして、今尚ほ行へ<sup>[行方]</sup>不明なりとか。午後は教育図書館ニ行く。文武会の規則、校長の訓辞後、直ニ総会を開きて、特別会員よりの修正を原案通り尽く可決す。少しく雪降りしかど温暖の日なりき。

二月十四日（日）

聖書研究会ニ出んと約束せしかは、<sup>[は]</sup>七時頃ヨリ目醒めたれど、起き出しは八時頃少しく前なりし。天気は良かりしかど風少しく吹く。午前ハ角館氏の室ニありて談話す。坂本君肋

膜炎にかゝりしと聞きて、午後より見舞かたへ訪問す。坂本は病院ニ行きて留守なりしかど鈴木居りしによりて座ニ上り、岩手山上ニて採取せし植物ニ命名しもらう。間もなく橋本、坂本來りて種々雑談の後、辞せしハ四時なりし。市中の要所ニ建てし高札を見れば、豊川山ニて敵国降伏の大祈祷ありて御守を与ふとか。伊勢の神風にも非らざるべきに迷信もよい加減ニ切り上げたきものなり。青森航路は開通せしとか号外あり。

二月十五日（月）

〔受信〕丸善

大嶋先生休みなりし。天気はいとよし。午後より図書館ニ行きて、ヘッケルのエボルーションラプマンを借れて見る。重にエムブレオロジーおも embryology[発生学]にして面白き論題もならざる様なり。四時過ぎ迄ありて帰る。夜は夜学校ニ行く。旅順大勝は電報のほどには非ず。東洋艦隊全滅など、よろこ愉ぶほどの事ニ非ざるべし。

二月十六日（火）

〔発信〕丸善

今日も天気は良ければ、雪は余程とけしならん。此頃の朝は堅雪となりて雪上を渡り渉かるべし。午後は為替受け取りと丸善ニ為替を組む為め北八条の受取り所ニ行き、夜学校の石川又病氣となりしとか聞きたれば河内宅を訪ねて前後策を立てばやと行く。同氏も肋膜炎ニかゝりしとかにて入院せしとか。換りの先生を目付くる迄出づることに約束せしかど、余も二三日前より咽喉の方少しく宜しからねは困りしものなり。秋ちやんの來られて写真などを取り出して見る。本日の読売りを見るに、ニコライ司教の信者ニ向てのべられし演説あり。至極同情の念ニ耐へず。其の宗派の如何を問ふ勿れ、現今基督教徒中、赤誠赤心を以て主の教に随ふもの幾千ぞ。その教義に於ては吾人と考へを異にすと雖も、吾人の尊敬に値するものは日本教道師中唯だ之の人あるのみ。

二月十七日（水）

〔発信〕直次、石黒

〔受信〕国分喜代太

朝より晴れたり。風は少しく吹きて寒し。大嶋先生休みなれば図書館ニ行き、松浦武四郎氏の天塩日誌<sup>299</sup>を読む。別段文章とても記事とても感服のものに非らざれど、蝦夷地開拓の恩人なる丈け誠意誠心の人たるは其の文中にあきらけし、読み了る。午後より農産実習として豚を屠と殺す。刃物を以て心臓を貫きければ悲鳴を挙げてなきさげび、血の傷口及び口耳より流れ出づる様泉の如く、残忍至極にて思はず人々の頭をそむけしめぬ。心なしと云ふ獸にてさへむごたらしく哀れなるものを況して人と人と命を争ふ戦争と云ふもの見しならば平和論者も増しぬべし。夜は風いと冷たかりしが要心して夜学校ニ行く。今夜出でし号外ニよれば、露艦又々北海附近ニ出沒しをととか。

二月十八日（木）

昨夜よりして少しく雪降りし様なりしが、今朝も少しく降り、風さへ烈しく吹く。十一時半より経済講堂ニ於て宣戦詔勅の奉読式あり、直ニ開散解す。午後は風呂ニ入りて、夕方迄

ニ若松賤子の小公子<sup>300)</sup>を読み了る。之の書曾て三四年前東京ニありし頃、上野図書館<sup>301)</sup>ニて読みいとめでたきものと思へ機会もあらば今一度読みたしと思へをりしが、書店にて見当りしが購ひ来りて精読しぬ。十余年前ニ訳されしもの、由なれと文章もよく、家庭小説としては上乘のものなるべし。

二月十九日（金）晴天

〔発信〕国分喜代太

先頃とりし写真出来上りたり。批評紛々として面白し。夜は夜学校ニ行く。唱歌のある日なれど、しばらく出席せしことなければ出でしなり。赤松、末光の講話ありて唱歌をなし帰る。余が基督教観は、基督は依然たる神なれど、所謂、三位一体としてその神とは異なるが如し。余は之れを解釈して宇宙万物と及び之れ等を支配せるヤーソリテーとの二つとなす。而して之のヤーソリテーは乃チ余か観るところの神なり。万物は皆な之のヤーソリテーに同化せんことを希ふ、乃チ神と同体とならんことを欲して止むことなし。之ニ於てか、向上の念、人の胸ニ断ゆることなく、進化の原理又茲に存す。而して基督は遂ニ之の理法を実行し、理想を現実<sup>〔表現〕</sup>して向上不退転の域ニ達し、神と同化するを得るに至れり。故ニ神と同化し得るも〔の〕は基督のみに非ず、釈迦ニ於ても、其他の聖人ニ於ても、之の域に達せしならん。而して吾等生活あるものも又勉むることによりて達せらるべし。基督は決してヤーソリテーに非ず<sup>〔非〕</sup>、ヤーソリテーによりて支配さるゝものたりしなり。而して遂ニ神と合す。茲に於てか更ニ権者と被権者との区別を言ふの要なし。

二月二十日（土）

朝より天気にして温暖なり。午後は一寸南一条ニ行きて本屋をひやかす。氷雪とけたればそろへ馬糞街道となる。夜は河内氏宅を尋ねて夜学校の先生の事ニ就て相談す。ヨ〔修科〕二年の人桑山<sup>302)</sup>とか申す人、九月よりならば出でゝも宜しき様申されしとかの由なれば、当分七月迄の換りにても見付けたしと思ふ。怪談などなして九時ニ帰る。二三日前頃の万朝〔報〕ニ、八戸辺ニて鉄道工夫の悪戯を風声鶴れひニ聞きあやまり、希臘教徒の仕わざなりと真面目<sup>〔真〕</sup>ニ慷慨せるもをかし。噫、汝等小心なる日本国民よ、何ぞ今少しく眼先を大ニせざる。世界的国民とは、汝等の如きさいき、私利ニ汲々たる者には非ざるなり。トルストイズムに於て、絶対的平和を主張せんと欲するものは、勢へ現今の制度たる君主・国家・国法をデナイ<sup>deny〔否定〕</sup>して今日の社会主義者が称ふるものよりも一層進める説を取らざるべからず。然らずして現今の社会制度ニ於て平和主義を称ふるは矛盾せるの甚たしきものなり。単ニトルストノ平和主義を聞いて疑へるものよ、之の点ニ就て少しく考へよ。

二月二十一日（日）

朝より温き日なり。曇りて小雨降る。聖書講義ニ出席し、帰路温室ニ立ち寄りて花を見る。道中々々氷り居れと、上は解けて悪るし。人力も櫓を廃して車となる。此の頃の日の長くなりしこと甚たじ<sup>〔だじ〕</sup>。太陽の没するニ五時頃なり。

二月二十二日（月）

今日も朝より天気よかりしが昼る頃には一天雲の影だになく冬の空とは覚へぬ迄なりき。



なり。午後よりは理髮の為め南一条二行く。そこにての話しによれば日本軍艦四艘沈没せしとか談り<sup>[唐]</sup>をりしかと真偽判然せず。夜は夜学校二行く。片破れ月ながら雪にうつりて明るし。

二月二十七日（土）日没正五時

〔受信〕丸善

極めて晴天にして風もなく本年来の好天気なりし。足助、橋本、竹田、藤井の輩、豊<sup>[平]</sup>川のバンクを水門迄散歩せしとか。午後より農学会あり。校長の戦争と農業者の覚悟及び加藤泰治氏の欧米産畜談ありたれど共に不得要領にして徒に眠をもやうさしむるに過ぎず<sup>308)</sup>。夜は角館氏の室ニありて談話し十一時ニ至る。

二月二十八日（日）

聖書講義ニ出席る為め八時二十分頃出かく。天気なれと南風強<sup>[ど]</sup>く吹きて昨日の如くならず。帰路は雪とけて道わるし。花室ニ立ちよりにて觀賞す。午前足助来り暫時の後去る。午後は風呂ニ入り戦争と平和を読む。夜は河内氏宅を訪へ九時前ニ歸りて筆記物を読む。昨日頃の北鳴<sup>309)</sup>ニ飯田雄太郎<sup>310)</sup>氏の不敬とか、不忠事件とかの記事あり。時節柄愛国者の御機嫌ニさわりしものなるべけれど、直ニ被らずに露探の名を以てし警察も聞捨ならずと取調中とは噴飯の至りなり。日本人の尻穴の小さきにはあきれて物か<sup>[が]</sup>言はれず。早く頑迷の旧思想をぬき捨てたきものなれど、社会の木樨<sup>[樨]</sup>を以て任する新聞記者連が皆々之の頑迷輩なれば日本進運の前途も中々待ち遠きものなり。

二月二十九日（月）

〔受信〕小包、丸善より 詩集、一

朝より天気なり。昼頃には雪も余程とけたり。大嶋先生授業あり。午後よりは図書館二行く。非常ニ眠むたし。夜は中々冷へて雪もちらほら落ち来る。夜学校二行く。池田と角館等来る。

三月一日（火）

〔受信〕丸善より、父上より、

昨夜少しく降雪ありし様なりしかど昼頃には又々とけ出して春風春水一時ニ至るのながめあり。雪は未た一尺位もあれどエルム樹下など日当りのよき処は青草を出し初めたれと去年ニ比すれば<sup>[は]</sup>余程遅し。南一条などにてさへ未た土出でざる位なり。気候の変化常ならざる為めか、咽喉病もよろしからず。午後よりハ又図書館二行きたれと眠を催し勉強もせず雑誌を読み博物館の側を通りて帰る。今日は議員撰挙日にて当区は対馬翁と浅羽氏の競争なる由なれど、戦争熱の為めか、とんと風評もなく、去年ニ比すると平隠<sup>[隠]</sup>無事なりし。家郷よりの信書によれば未蔵君よりの手紙、宇品より来りしとかの由、已ニ戦地ニあるなるべしとの事なり。

三月二日（水）

〔発信〕青年会へ雑誌注文

朝より曇りしか午後になりて雪となる。為替に受取りに製麻会社側迄行く。札幌区の議員

にて浅羽氏二百余点にて当撰す。対馬氏は三四十点不足なりし。

三月三日（木）大暴風雪

飯田雄太郎君免職になりしとか。曲学阿世の徒よ、吾れは曾て汝を思慮ある基督教徒、品性ある紳士と思ひたりき。然るに何事ぞ世界人道の大義をとりて平和博愛をとなうる之の弱き一義人をなやむる。自ら基督教徒と称する以上は如何ニ曲解するも国家の無上権を信ずるとハ能<sup>〔はぶ〕</sup>ばざるべし。然るに世ニあり自己の地位を安全ならしめんか<sup>〔が〕</sup>為めに其の人の説るを信理と知りながら力弱きに乗して直ニ其の職を免し得たりとなして愛国者を気取る、嗚呼、汝の道義心とはの期<sup>〔期〕</sup>の如きものか。時代精神とは世ニありて俗流と供に声を等して真理を無視するの謂ひか。吾れは以後汝か再び精神界ニ復活<sup>〔復〕</sup>し来る迄は汝の説ニ耳かたむけざるべし。噫、神よ、虎狼の間ニありて正義を説ふる弱き子羊の上に汝の恵を垂れ、平安を彼れの上ニ下さんことを祈る。夜は足助を訪問して時局問題ニ就て大激論をなす。帰<sup>〔り〕</sup>れは坂本、角館氏の所ニ来り居られたるにより十二時迄談話す。坂本氏は十時ニ帰らる。

三月四日（金）雪

昨夜足助を訪問して飯田氏事件を噴概<sup>〔噴概〕</sup>し談論平和論ニ移りて、足助氏は現今は人民皆な戦争熱ニ狂せるときなれば沈黙を守りて寧口平和に復して平静ニ判断を下し得る時期を待つて平和論をとなうるを良しと云ひ、余は然らず反て堂々平和論を懐けるものは此の際ニ大声咤呼して民心<sup>〔訴〕</sup>ニうつたしるを良しと云へげき論数次ニ及ぶ。然れども要するに帰着するところなき議論なるを以て結着を見ずして中止す。今日は文武会より茨戸ニ遠足する日にて余も行<sup>〔き〕</sup>積りなりしも、昨日よりの大風雪尚ほ止まざれば思へ止まる<sup>311)</sup>。午後よりは全く霽れて天気となりたれと、雪とくるにも至らず。夜は夜学校ニ行く。帰路、明月団々として石狩平原の彼方、夕張の山にかゝる。

三月五日（土）

〔受信〕伊藤七郎

朝より風はありたれども雪は降らず。高橋、逢坂氏来訪、十二時迄談話し去る。午後には一寸農園ニ行き帰<sup>〔り〕</sup>りしか、足助来りて四時過までを<sup>〔を〕</sup>る。世界文学<sup>312)</sup>二冊貸しやる。夜に入りて雪となりしかば夜学校ニは行かず。少しく筆記物を読みト翁の我宗教を読む。

三月六日（日）

伊藤七郎君より来書ありたれば、朝より待ち受け<sup>〔居〕</sup>をりしかど遂ニ来らず。午後は農園ニ行き牛乳をとり来る。董会<sup>313)</sup>より回章ありて入会を求め来りたれば承諾<sup>〔は〕</sup>す。夜は第一例会ある由なりしかど出席せず。橋本氏来訪。稲垣氏此度アイヌ人の同行となりて米国セントルイス博覧会へ行かる、由、僥倖の事なりとて角館氏話さる、朝より寒しと云ふニあらねど曇天にして夜は少しく雪を降らす。吾人は目下思想病ニかゝれりとは足助之言なりしか、実行の思想ニ伴はざることよ、主の偽善なるパリサイの徒<sup>314)</sup>よと罵られ言しを吾れも又甘受せざるを得ず。何ぞ吾か行の奥なる、主の愛ニよりて誘惑より救へ出ざる、を勉めざるべからず。再生せよ、復活<sup>〔復〕</sup>せよ、然らずんば吾れは永遠ニ悪魔のとりごととなり、消えざる地獄の火ニ投げ入れられん、噫。

三月七日（月）曇

午前は大嶋先生休む。午後より図書館ニ行く。夜学校は今日より六時半始業となりしも知らづ<sup>[ず]</sup>ニ六時ニ行きてしばらく待つ。

三月八日（火）

午前の学課例の如し。午後よりハ室内ニありて経済を読む。試験は十九日より始まるとのことなり。夜は角館氏のところに坂本来りたれば行きて談話す。

三月九日（水）

昨夜降りしにや、起き出で見れば<sup>[ば]</sup>二三寸計り雪降り積りて枯木時ならぬ花をつけたり。されど春の雪なれば昼頃には已<sup>[や]</sup>ニとけて途ぬかり出せり。近頃ニめづらしく青空所々にあらわれて太陽も出でぬ。午後よりは図書館ニ行きて、三時頃より武術の稽古<sup>[ず]</sup><sup>[315]</sup>初めに行きて見る。中々盛会なりき。夜は雪降り風さへ吹きたれば、夜学校ニ行く途の悪さ一、途中にて足助、河内氏と一所ニなる。

三月十日（木）

昨日の天気ニ似げなく朝より良く晴れたりしか、正午頃にて片雲<sup>[が]</sup>だも見へざる好天気となる。実に近日に稀なる日なれば、午後より汽車線路沿ふて琴似の方ニ散歩す。大方は已ニ雪も消えて、小川の水も洋々と春の樂をかなで、岸辺の芝生は青き芽を出し初めぬ。何時も変らぬ森の景色も今日は一しほめづらしき心地せられぬ。大光寺と行き逢へたれば共に引き返す。夜は室ニありて勉強。

三月十一日（金）

朝は曇りをりしか雪となり、昼頃は盛ニ雨降り出す。午後より四時頃迄昼寝す。夜は夜学校ニ行く道路の泥ね<sup>[泥]</sup>一層甚だしく雨もしきりに降りしか、帰る路ニは一天星を以てかざられめたれと下界は暗なりき。近頃の校長の経済講義によれば、氏は甚だしき国家主義者なり。経済上の意見として実ニ立派なるものなれど、自由貿易論を排して、自由をとる者を怠惰者なりと云へ、而して自由説を評するにフヲゲル<sup>[極]</sup><sup>[316]</sup>、フライ<sup>[備]</sup><sup>[317]</sup>を以てするが如きは余りに自由を解決するに局論ニへんせずや。之より今日の時勢にては、自由貿易不可能の事たるや知るべからずと雖も、工業製作其他の進歩已ニ隆盛の域ニ入りて保護するの必要なきに至らば自然ニ自由貿易となるべき理ニ非ずや。現在の有様をのみ考えへて未来ニ及ばざるをおしむべし。

三月十二日（土）

朝より風強く雪は降らねど東京の空っ風と云ふものなるべし。寒烈極まりなし。午後よりはウィバー嬢より音楽会の切符貰へ居りしかは、藤井と共に行く。洋楽・和楽とりへに奏せしかと、吾れには未だ音楽の趣味解せぬ為め興ニ入り難し。特ニ洋楽ニ於て甚だし。寒さの非常なると小便の耐へ難ければ、英国々歌を歌ふ前ニ帰る。戦争中は毎月一回開会するとか。音楽の趣味に乏しき日本人にとりては耳新しきものにあらねば総て同一ニ聞ゆるなれば直ニあきを来すにより、今後は余程趣好をこらすに非ざれば充分ノ聴聞者を得難かるべし。時代思潮<sup>[318]</sup>ニ冊来る。試験時間割発表さる。

三月十三日（日）雪

起き出で見れば雪降り積りぬ。藤井氏と聖書講義に行く。帰路足助と出逢へたれば共に独立教会に行く。去年の四月頃より行きしことなかりしかば丁度一年目なる。豚食会を催す。午後よりハノートの復習にいそがし。旅順ニ於ける露兵砲台を焼きて遁去せしとかの号外来る。

三月十四日（月）雪

朝、嘲風氏のトルストイ論<sup>319</sup>を読む。トルストイの宗教及び人生観を以て農民救済にホー芽せりと言はれたれど、如何ニや疑問の点なり。其の他は同意す。午後より大雪降りとなり夜に入るも止まず三四寸積る。夜学校に行く。極めて寒し。帰路、旅順かん落の爲めにや、二三十人の者ども提灯行列をなせる様なり。未だ前途も判らざるに之れ位の事にて喜ぶほどならば、敗報に接せば泣き行列でもせずばあるまじ。

三月十五日（火）雪

別段誌すことなし。雪少しく降る。試験の準備にいそがし。

三月十六日（水）

朝よりはれたり。午後は農業実習ある爲め学校ニ行きしかど、試験にていそがしければ楓糖を造る準備とラカン<sup>320</sup>の<sup>〔庫〕</sup>□室とを見て帰る。此の頃生れし四五匹の<sup>〔子牛〕</sup>犢、天気よければ柵内ニ打ち伏せる又は立てるなどいと可愛し。夜は夜学校ニ行く。此の頃の天候不順なる爲めにや、数日前より咽喉の工合よろしからず、又々吸入器を初む。

三月十七日（木）大雪

朝より大雪にて昨日は大抵雪も解けしかど、今朝見れば四五寸計り積り居たり。学校ニ行く頃は弥々荒れニ荒れて、冬の最中なりともこれ程までにては非らざりしにと思はる、計り風雪吹き捲きて面を向けん様もなかりし。午後よりは図書館に行かばやと思へしかど、吹雪ニ恐れて室に籠る。二時頃より雪をさまり雲も霽れて耐へ間より金色の光も放たれぬ。夜は室ニありて勉強にいそがし。いと寒し。

三月十八日（金）

〔発信〕故郷

〔受信〕教文館

朝より風なく天霽れたり。末光来りて昨日渡せし試験問題あまりむづかしき様なれば取り換へてくれよと話す。更ニ作り換へて農園ニ牛乳取る路すがら立ち寄りて渡す。午後よりは南一条ニ行きて基督教本義<sup>321</sup>を買ひ求む。又々路とけ初めて悪るし。今日の授業は試験の爲め、皆な休業す。

三月十九日（土）

昨日南一条に行きし風寒しと思ひたりしか、夜ニ入りて風邪の気味を催す。如何ニ皮膚の弱りしことよ。朝より曇天にして雪も降る。夜ニ入りては積りし様子。吉井先生の肥料の試験あり。図書館ニ行く。

三月二十日（日）

弥々風邪となりたれば聖書講義を欠席す。午後、藤井氏訪ねられて、ウェバー氏此度帰国せらるゝ様子なれば聴講者一同紀念の爲め明日写真をとらばやとの事ニ同意す。丸亀床ニ行きて理髪す。朝より雪降りて夜ニ入るも止まず。昼の間はさずか暖ければや、途には積らざりしかど晩方ニなりては面白くなる。最早や四月にも近ければ東京などにてはそろへ桜開く時節なるに、如何ニ北の国なればとて毎日の雪降り寒さととも去年より増れば病ある身ニとりては天候の不順をうらみ、腹立たるゝことにこそ。

三月二十一日（月）

〔受信〕石黒

八時半頃、藤井氏を訪へて共に武林写真店ニ至る。写真を探り終りて告别し、互ニ別れをおしむ。朝は天気ニもなるべき模様にて日光もかゞやき出せしかど、午後よりハ再び曇りて雪降りとなりしか、夕方になりて稍々霽れ夕陽かしけく輝く。昼の頃、暫時角館氏の室ニ居りて、札幌ニ来るよりハ東京ニ行きし方都合よかるべしと話す。氏も同意せし様なり。写真の帰り停車場通りのミルクホールと云ふニ藤井氏と共に入りてミルク一杯を飲んで雑誌を見て帰る。一昨日、昨日の新聞本日来る。

三月二十二日（火）

昆虫と植物營養の試験あり。曇天にして少しハ雪も降りたれど天気とならん模様あり。

三月二十三日（水）

〔受信〕父上より

植物生理の試験あり。少しハ雪降りたれど天気〔曇〕とり、午後ニ至りては道路もかわき初めたり。足助来りて新聞を借れ行く。兼而借れをきし思出の記及びバイブルを返しやる。足助の近来得たる思想とて談るを聞けば、之れ迄はゴットは遠くに居りて吾々をさし招ぎ、吾等は之の理想を目的として自力を以て〔奮〕自励し、自ら清ふして精神の膝下に至るを得るものと考へたりしか、今は神は常ニ己れか正しきときにも不義なるときにも吾が手を取りて理想ニ導き給ひつゝあるを感ずと言はれたり。如何ニも志かあるべし。神の慈愛は正しきものゝみ知るに非ずして、反て罪あるものこそ深く感ずるなれ。

三月二十四日（木）

〔発信〕故郷に

極めて天気よし。経済の試験あり。帰路、原先生ニ行き逢ふ。昨日御帰札なされし由。在学証明書をもらへて国ニ送る。足助の昨日の談話の中に、氏の教会観一変せりとして談りしを、之れ迄教会なるものを偽善者の集りと思ひてきらひをりしかど、信者とても弱者どもなれば、ゆゑわくニ打負けて罪に落入るは人の情なるべし、唯た之の情をかなしみて改悔し、基督の道を追はんと心かくる者、いとやさしき心ならずや、されば吾れも之れよりは教会の一員となるやも知れずと、吾れとても教会をば迷信ならざる限りはよしとし、必要なる人にはなくてかなわぬものなるべしと思ひり。同じ光を追へ、同じ道を求むるもよく打ち集へて互ニ志を語り、祈りをさ〔捧〕ぐるならば、いと楽しくこそあるならめと思ふ。然し吾れ等か信仰を今の教会の人々是認しくるゝにや如何に、反て吾等の思想はユニテリ

アンの信仰や海老名氏の信仰ニこそ近けれ。

三月二十五日（金）

南教授の作物試験あり。天気よければ午後より汽車線路に沿ふて散歩す。春田麗にして青草ももへ出で、水の流るゝ音も春の樂を奏せるにやと聞かる。河内氏休みをりたれば、共に暫時岸辺の芝生に腰かけて談話す。

三月二十六日（土）雪

尾泉氏の農具ありて之れにて試験は全く結了す。図書館に入りて某技師の朝鮮支那の乳牛調査報告なるものを読む。森廣氏<sup>322</sup>米国より帰朝せられ図書館ニ来られたり。午後より鈴木氏を訪へしかと不在なりしかは、河内氏宅を一寸訪へ一時半より農学会ニ藤田昌氏の講演を聞きニ行く<sup>323</sup>。夜食ニ豚食会を催し之れより十一時迄談話す。天気なりしも時々雪降る。風寒し。

三月二十七日（日）

海老名氏の基督教本義を読みて十時過教会ニ出掛く。橋本と出逢へて共に行く。森氏のあへさつありたり、日ならず又米国ニ行かるゝ由。帰路、本屋ニ行きて病理の本を求めたれど、注文ならではなしとの事に已むを得ず注文し来る。午後よりハ兼而約束しをきしかば写真をとるに武林二角館氏と行く。大光寺、坂本等は已ニ来り<sup>65</sup>をれり。逢坂も又須々木の児等と採影する為めに後れて来りぬ。帰路、丸井ニ立ちよりて帽子<sup>324</sup>を注文す。大光寺は立ち寄りて談話二時をふかし、夜の十一時を聞きて帰る。角館氏と三人にて、昨夏の岩手山登山の失敗談をなして高笑、屋をうごかす。朝よりして晴天にして風もなし。

三月二十八日（月）晴天

朝は六時半頃ニ起き出で、基督本義を読む。図書館ニ行きてトルストイのラン、ライフを一章読み、雑誌、新聞などを見て十二時過ぎ<sup>67</sup>帰る。午後よりは天気なりしかど、室ニこもりて書をかれこれと択み読む。夜は本義とト翁の我宗教、自然法と人為法の一章を読み了りて寝ぬ。

三月二十九日（火）

朝は牛乳取る帰り路、鈴木のところ<sup>68</sup>に立ちよりて、クラフトを借れ来る。渡辺氏も来られたり。午後は高地<sup>69</sup>来る。何時より出でしにや、右の奥歯虫歯となりたれば二時頃より南二条の横山<sup>325</sup>と云ふ医師の元ニ到りてうめもらう。贖罪と云ふこと吾れには兎ニも解し難く、基督教としてはあるまじき事なりと思ひ来りしか、海老名氏も又之れを非認せられたり。吾れ等の神は慈愛の神なれば、悔へたる罪人の心を限りなく欣び給ふこそすれ、決して仲保者<sup>326</sup>も要し給はず。罪の贖ひなくば永久ニゆるさずなど云ふ規則約のものに非ず。如何ニ罪にけがれ、不義の深淵ニ沈める者にて、己れの罪惡を痛悔して神の救を求むるものあらば、彼れは直ニ無条件ニて赦し給ふ。而してその喜びや一疋の迷へる羊を尋ね出せしか如けん。

婦其の乳児を忘れ、己か腹の子を憐まざらんや、縦へ彼等忘るゝことありとも、我は爾を忘るゝことなし イザヤ書

神の要め給ふ祭物はくだけたる靈魂なり、神よ爾を砕けたる悔ひし心を軽ろしめたまはじ  
三月三十日（水）曇

基督教本義、吾が宗教を読む。午前は図書館ニ行きてクラフトを十二時頃迄読めり。四時半頃より角館、赤松氏の送別会ありたれば出掛く。諸先生尽く出席す。顔を見知れども名を知らぬ人、名を知れども顔を知らざりし新しき先生も来られたり。豚の飯の御馳走あり。去年の石川の送別会のトキは工藤も居りしがなど思ひ出さる。半沢も本日東京より帰られし由にて学校ニ来る。新しく髯をたくはへたれば、例の者どものことゝて冷笑罵言とは行かぬ迄も充分冷かしぬ。七時より生徒も一同集りてあいさつあり。唱歌などうたへて八時頃帰る。本日朝、大光寺、兄君病死の電報来りし由にて帰国せられたり。返しへの不幸にこそ。秋山定輔氏衆議院議員を辞せしとか<sup>327</sup>。

三月三十一日（木）天気

朝十時頃より農芸科卒業式あり<sup>328</sup>。九時頃ニ行きたれば、側の原ニ行きて小川君と談話す。帰路、河内氏宅ニよる。半沢東京より持ち来りしモルモットと云ふ猫の如き愛らしき動物を出して物を食せなどして楽しむ。午後よりは天気少しく曇りたれど遊園地ニ散歩に行く。師範学校の生徒など舟ニ乗りて戯れ居れり。基督教本義を読む。海老名氏の信仰、殆ど余か信仰ニ近きを見て心楽しむ。トルストイ伯の如き、海老名氏の如き、皆な三位一体、贖罪等の如き教条を否認せしを見れば、吾が思想の必ずしも独断の誤り<sup>〔誤〕</sup>に非ず、反て理性ニ訴へしものゝ、必ず達せざるべからざる真理ならずやと思ふ。

四月一日（金）好天気

〔受信〕父上より

九時頃牛乳をとり農園ニ行きて図書館ニ立ちより農場の方に散歩に行く。午後より八足助と東橋ノ方ニ行きて橋上ニ座して三時過ぎ迄、種々信仰上の問題を語る。帰り来りて独り再び黙想ニ沈み、内心の理性と外なる肉体の常ニ戦へて其の度ごとに肉ニ打ち負ぐれども、理性の光りは尚ほ内心ニもへ上りて、罪惡をせむること厳ニ耐へ難きほどの苦痛を感じ、基督を信じ神を禱れど慈愛なる神の御手も吾れニのみは加はず、捨てられたる羊の弥々底深き谷ニ迷ひ行く心地して打ちたへ難し。然れど之れも又神の摂理なるべし。神の慈愛を常ニ吾れ等か上ニあるものを自ら見るを得じ感ずるを得ざるは、自ら他人を愛することの足らねばなり。例へ神の愛を見ずとも、基督の道ニ従へて、もどらぬ行へだになし。信じて疑はずは、やがて天の光を仰ぐこともできつべし。

四月二日（土）

朝より天気は良ろし。別段誌すべきことなし。夜になりて曇り、細雨も降りし模様なり。紅葉<sup>329</sup>の小説を貸来りて読む。昨日故郷よりの来信によれば、二月男子出生し静壯と命名せりとか。

四月三日（日）

今日は夜学校の高等科生真駒内へ遠足する由、朝早く高地<sup>〔河内〕</sup>来たりて告げたれど天気も曇りて風もあれば行かず。朝の間は小説を読む。

四月四日（月）

天気極めて良ろしければ牛乳をとりての帰り路ち第二農園の方にぶら〜散歩す。午後よりハ風少しく吹き出でたれば外出せず小説を読む。夜は藤井氏来りてウヰバー氏より送られたるイースター<sup>Easter card</sup>カードを持ち来らる。

四月五日（火）

朝天気なりしかば円山の方へ散歩せんとして出掛けしに、青年会寄宿の窓より藤井顔を出して呼ぶにぞ立ちよる。逢坂の室なり。十時半頃迄遊び、更に一人にて講習所<sup>330</sup>の前を通りて帰る。午後より風呂ニ行きしか、<sup>[が]</sup>帰り中村ニ行き逢へて話す。小泉は大坂迄行きし由にて今は水戸ニ居るとか。夜は本を返却せん為め南の方ニ行く。勸工場にも出より、丸井ニよりて帽子を受取る。坂本来りて十時頃辞し去れり。角館と二人にて談話し、床ニ入りしハ一時を聞く頃なりし。

四月六日（水）

七時二起き出づ。角館氏は今日弥々出立なれば早くより起き出で、さわぎ<sup>[居]</sup>をれり<sup>331</sup>。八時を聞きて停車場ニ行く。荒川君及び夜学校の女生〔徒〕<sup>[居]</sup>四五人来りをりたり。八時五十三分の列車にて出立さるゝ。三年の月日住みなれし北のみやこも又再び来り訪へがたしと思はじ君の心にもいと名ごりをしまるべけれど、残れる吾れも又何となく物悲しき様ニ感<sup>[じ]</sup>して、其の日は沈み勝にぞ物思へける。

四月七日（木）

〔受信〕大光寺

足助氏学校の方よりトマコマイ<sup>[昔小牧]</sup>に今日出立ちせらるゝ由なれば牛乳をとりに行きし帰り一寸立ち寄る。午後一時ニ出立ちせらるゝとか、林檎を買ひ来りて皆々打集りて食ふ。午前曇りなりしが午後より少しく<sup>は</sup>霽れたれば博物館の構内を散歩し草原ニ暫時腰かけて休む。夜は頭の工合もをかしく勉強も出来難ければ八時を聞きて床ニ入る。盛岡の大光寺より来る十日頃帰札せらるゝ由、報知ありたり。

四月八日（金）晴天

朝ハ九時よりならんと思へて学校ニ行きしところ、八時半頃より皆々集りし模様なり。然し授業はなく、例の時間割の写しと各先生の御話しとのみありて休みとなる。逢坂氏の頼みにて古帽子を森林科の某氏に譲与す。共に汽車線路を琴似停車場迄行き、帰りハ本道を通りて帰る。路々例の如く談話<sup>[才]</sup>尽きす。琴似の道端れの一農家にて馬の分娩あり。プラセンター<sup>placenta</sup>未だ出でずとかにて、獣医其の他の人々集りて大さわぎをなしをれり。子馬は道のほとりニむしろ<sup>[糞]</sup>かけてふし<sup>[居]</sup>をれり。一老母腰打ちが、めて馬にても人<sup>[居]</sup>にても難産のときはくるしきものよなど、いと同情に耐へぬらしき面もちして居たり。午後よりハ南一条ニ行き<sup>[ト]</sup>てノードを買ひ求む。

四月九日（土）大風

〔受信〕角館氏より

昨夜は二三日来風邪の為めにや、せき出でゝ、それも床ニ入ると朝起き出づるとき特にい

づるなれば、或は例の病ニとりつかれしならずやなど想ひ出されて、はては墓の石さへ目ニ見ゆる心地す。マリ、バシカーセフ<sup>332)</sup>の日記など心ニ浮びて、二十四歳の妙齡を以て死せし彼れには已ニ数年前より死の影見へしとか云へど、我か身にとりても楽しからぬことにこそ。されど吾れは神は吾れにその慈愛を躰は<sup>[か]</sup>ざずして、吾れを之の世より奪へ給ふことあらざるべしと思ふ。然れば吾れは神の慈愛を見るまでは死なじ。或は死の時間ニ於て見るやも知れず。然らば空しく迷へ<sup>[え]</sup>の子となりて百年の齡を長へんよりハ神の愛を知りて今死せん方まさる。吾れは当らねど、神は実ニ之の塵の世ニ清き愛子を置くをおしむなるべし。今日もせき時々出づ。咽頭の方はよほど宜しきが如し。学校より帰りて四時迄昼寝す。朝より大風なりしか、ひる頃より一層はげしく屋をゆすり、砂をあげて面をむくべくも非ず。文武会ニて東郷、池田、校長の演説ありたれど出席せず<sup>333)</sup>。

四月十日（日）

朝より曇りにして、昨日よりの暴風尚ほ止まず。昨夜よりして時々雨降る。角館氏よりの依頼もあるなれど、のどの工合よろしからねば外出せず、内ニ引こもる。夜はトルストイの暗黒の勢力<sup>334)</sup>を読む。藤井氏来りて写真を受取る。

四月十一日（月）

〔発信〕丸善、角館

〔受信〕角館

朝より天気なり。午後よりハ南一条ニ行きて角館氏の依頼なる鍵を聞き見る。不結果なり。理髪店ニ立ちよる。途中新川ぶちにて藤根壽吉氏ニ似よりし人ニ行き逢ふ。八九年ぶりなれば、或は同人なるやも知れず。丸善ニツルゲネツフ<sup>335)</sup>の烟ほか一冊を注文す。一昨夜とか河内氏の宅ニ何者か放火せしものありたりとか云へば行きて見る。何れ食ふニ困りし盗者の仕わざなるべし。悲しき恐しき世なる哉。角館氏より安着の報知来る。

四月十二日（火）

朝より天気極めて宜ろし。原先生の講義を久し振りにて聞く。午後よりは室内ニ籠りて時を費す。夜はエコノミーと暗黒の力を少しく読む。太陽もそろへ北の方ニ帰りたれば、此の頃の夕暮こそいと美しき手稲の山の頂きに太陽没せしより暫時の間こそまばゆき計りの金色の光線を放て、やがて黄色の夕雲たなびきて山の緑色なるにうつりて特にあざやかなり。北の方は又紫の雲となりて夕暗手稲の頂を包めども、茲ばかりは尚ほしばし消ゆるをおしめるか如く明なり。

四月十三日（水）

朝は曇りしかど昼頃よりは天気となる。風もふき静なる日なり。午後よりは図書館ニ行きてと一写板の原稿を書く、農史の講義なり。かりそめと思へし風邪も長びきて、今に尚ほ全快せず。せきは稍々止まりたれど、咽頭は非常ニ<sup>sensible</sup>（敏感）となれり。心がらにや胸のあたり何となく苦しき様ニ感ぜらる。死と云ふこと左程恐ろしとも思はねど、弥々それと極まらば如何なる心地せらるゝものにや、身一つならば<sup>しから</sup>残りをしきことも、思へをくこともなく、心のどかに天の御国にこそ行け、浮世の柵みは何処如何なる人ニもあるなればこ

そ、ついこの別れを悲しまるゝならん。況してや人生の鍵をもにぎること得ならじ。思ふことなにつ世ニ遺さで之の世を去らんとは忍び難くも苦しきことにてである。二日ばかり前の新聞に某氏の歌あり。

惑はしの人世の謎解きも えで帰らむものか天の死の国

四月十四日（水）

朝は曇りて何となく雨にても降らむ計りの空模様にて、昨夜は少しく降雨ありたればにや、草もぬれ水の溜りも道の窪にできたり。昼頃になりて青空所々に表はれたれど、雨雲の往来すきりにして風も寒く吹きぬ。夜は暗黒の力、二章を読み了る。東京は桜の時節已ニ過ぎたるにや、新聞によれば先週の日曜頃は満開の由にて向島、上野など非常のにぎはへなりしとか。東京の桜も見ざること已ニ四年となりぬ。其の面影如何計りか変りたる。北の海にありて自然の眺めにはとほしからねど、尚ほ東都の花も忍ばるゝになん。

四月十五日（木）

〔発信〕 父上、川村

〔受信〕 川村敬 [二郎]

朝より上天気なりし。風もなく日も温かになりたれば、校庭の牧草も毛せん敷けるか如く青くなり、何と云ふ草にや、黄なる花を付たる名無草<sup>336</sup>などの所々に開けるも嬉し。やがてはエルムの葉ももえ出づべく、すみれなども咲き出でたらんには、実ニバラダイスの眺めも忍はるゝ迄に北海の春景色とならん。午後よりハ菓樹園実習あり。無用の枝を切り去る事を習ふ。甚しなりけん、切らるゝ為めに生長せしハ非ざるべしと言へりしが面白き事にこそ。実に樹木は自然のまゝに繁茂して、自かじゝ心のまゝに花を付け実を結ばんと心掛くるるべきに、人によりてそをさまたげられたらば、果樹の身ニとりて如何ニ遣りをしきことにや。ゴルキイーの放浪生活は果樹の自然繁茂にして、人為的の切枝は現今の文明にやなど考へらるゝ。川村氏福島ニ当分滞在するとの手紙ありたれば、同氏と父上へ手紙差出す。

四月十六日（土）

天気よし。午後一時半より博物学会あるにより、一寸その前ニ図書館ニ行きて謄写板の穴をうめんと出掛けしかど已ニ閉りをりしかは、農場の方ニ散歩ニ出掛け新築の農舎を見物す。道路も大ニ改正せられて、アカシヤ街道ニ一直線の路開かれたるなど、大ニ心地よし。博物学会は藤田氏と宮部氏の演説あり<sup>337</sup>。宮部氏は占守の植物ニ付て標本を以て示され、特ニ寄贈者の独りたる報公義会の、員たる故、関氏の美談を□発せられたり。夜は橋本氏を訪問して種々の談話をこゝろみ屢々議論ニ及ぶ。十時過ぎ辞し帰る。昨日号外ニよれば、露艦隊二艘沈没し司令長官マカロフ溺死せし由、おしみて尚ほ余りありと云ふべし。

四月十七日（日）

十時頃より一人にて円山ニ散策を試む。極めて暖なる日にして風もなかりしかば優々自適、杖を引きて社殿の側より林中の道を南の方ニたどる。林の影などには尚ほ残雪まだらにあれど、已ニ春色は野ニ山ニ満ちて色づき初めぬ。池のほとりニ暫し腰打ちかけて十二時近

くに帰る。円山村の十字街にて河地<sup>〔河内〕</sup>、半澤の山帰りと行き逢へ共ニ打ちつれて帰る。めづらしく月寒の伊藤氏<sup>338)</sup>訪問せられて室ニありしかば、昼飯をすまして一時半頃迄談し、一時半より弼水倶楽部にて佐藤の送別会を開くなれば、一所ニ出掛けて同窓会の門前にて別かる。石澤、佐藤氏の御話ありて、志伊奈ニ行きて写真し、再び引き返して御馳走ニなり五時頃帰る。夜は夜学校ニ女生〔徒〕の茶話会ありしにより出掛く。種々例の遊戯ありし後、十時頃ニ余は帰る。之の日祝勝会にや、異彩の装して市中を何者か行列せし様なり。夜も何かもやうしありし由。

四月十八日（月）晴天

〔発信〕青年会

〔受信〕丸善より小包

今日も好天気なり。午後よりハ図書館ニ至りて謄写板をする。三時頃に初めしにより済みしは四時過ぎなりし。素木氏の話しによれば、遊戯会は来月の初めの土曜日とかに開かる、由なり。桜の時節に相当するべければ盛んならんか。昨日着の東京新聞にてマカロフ溺死の報知来れり。丸善よりツルゲネツフ二冊到着す。

四月十九日（火）

好天気なり。午後より室内ニありて読書す。近頃宗教上の想より少々遠かりたる様ニ感ぜらる。更ニ疑問となり来らざるは宗教心ニも冷熱ありて、今は静血時代なるべきか、それとも春となり鳥唱ひ花開くの期節となりたればにや。オルソドクス<sup>〔オ〕</sup>の信仰を有せぬ吾は彼等の基督を信ぜよとの意を解し得ず。安慰を得難きも之の為めならんか、余が心ニは基督を信ずるとは彼れの言を信じ、彼の教訓を実行する外ニ彼れを信ずるの途なきを思ふ。吾が心は余りに理ニ傾きて情ニ乏しきに非ずやと思はる。之れか為めに総ての物ニ対するにクールなり、同情の念ニ乏し。独り人に対するのみならず、其の他の生物ニ対しても然り。宗教の真髓<sup>〔真〕</sup>を窮ひ得ず。基督、神の慈愛を知る能ハざるも之れか為めならんか。

四月二十日（水）

天気なり。別段誌すべきことなし。トルストイを読む。涙と云ふものは尊きものなるべし。吾れ等の流す涙はされど女々しき感情のものに非ざるなきか、元より情ニせまられて泣く場合ニは理屈などのあるべき道理なし。之れ等は吾等か具体的ニ目ニ見、耳ニきくときにて実感を引くなれば、木強横<sup>〔木〕</sup>、愚婦も芝居を見て涙を流すべし。然れど之の実感以外、更ニ吾れ等の心をえぐりて号泣せしむるものあり。幾多の求道者のさげび、之れなり。之の涙こそ真ニ尊き真珠なるべし。吾等には未だ味ふことは許されず。之れは感情ニても得られず、実感ニても求められざるものなり。唯だ得るの途は理ニたよるの外あらざるべし。所謂、道理ニよりにて初めて感情となる。未だ理ニ明ならざるもの情なく涙なく他を愛する能はず。他より愛せらる能ハざるは無論のこととなり。

四月二十一日（木）

〔受信〕川村

天気。午後よりハ博物館構内ニ散歩に行き温室を見て帰る。夜はトルストイヲ読む。川村

氏より来翰あり。それによれば、氏は福島中学の先生になりて来られしもの、由。月給は二十枚とか報じこしぬ。何にやら「あいまい」なれど、氏は去年の夏期岩手山登山の日ニ結婚式を挙げしとか。

四月二十二日（金）晴天

〔受信〕角館氏より

午前の授業は例の如し。午後よりハ実習ある積りにて行きしところ先生来らざりしかば皆々帰る。大光寺と二人線路を伝へて円山ニ登り、暫時、桜樹の下ニ踞りて談話し居りしところ、渡辺君昆虫採集の爲めに来られ三人にて四時頃までをり帰路につく。旧練兵場<sup>339)</sup>の野原にて森林科の人々運動の練習をなし居れり。円山の四季桜已ニ蕾を出して二三日も経ば咲き出ん計りなり。桜花の盛を来月の十日頃にもや、去年よりハ余程後るゝなるべし。トルストイを読む。

四月二十三日（土）

午後より牧草地ニ於て予〔修科〕一年級と本科一年との野球競戯あるとの事に、橋本氏遊園地ニ遊びニ行かずやと誘へたれとこと<sup>〔ど〕</sup>はりて二時頃出掛く。初めの二三回は予修科の勢、破竹の如く十点余の勝利なりしが、投手ニ<sup>〔河内〕</sup>高地氏換りてより急ニ本科方威勢よくなり、最後ニ二三点の勝利を得しより<sup>340)</sup>、余は皆なまで見ずして帰る。之の日も極めて天気は宜かりしも、少しく風ありたり。写真を受取る。トルストイの暗黒の勢力は本日にて読み了る。

四月二十四日（日）大風南

朝は農園ニ行きて牛乳をとる。帰りはぶら〜と散歩し、偕楽園の中を通り抜けて帰る。午後よりハ大風となり砂塵舞ひ上りて途行く人も苦しげに見へたれば、風は吹くとも塵の立たぬ農園にもと思ひて第二農場に行く。左手の牧草場ニ入り込みてそゞろ行きし。そごこ<sup>〔其処此処〕</sup>のエルムの下に踞して休む。初めて名を知りしキバナノアマナと云ふ黄なる草の一面に生へ出でたるを、しとねをなして長ふなれば、名を知らぬ草花の二三輪雑して咲けるも嬉し。昨日迄冬と思へしに、早や<sup>〔蜜〕</sup>密を集むる花蜂の飛びあるきて花にたはむるゝを見る。

黄花が中に一もと咲ける白き花春の女神の出でましがごど

四月二十五日（月）南風

午後より風ハありたれど博物館ニ散歩に出掛く。日はいと麗かなれば、風なからましかばとうらめしき程の天気なり。松の小影ニしばし横になる。何処の小犬にや、四五匹計りむれ集へて静に伏せるは之れも春の花見の積りにや、やさしき心根にこそ。

人しれずエルム花咲く山かげに

小犬むれいて春の色見る

夜はツルゲネッフの烟を読む。知らぬ<sup>〔ぬ〕</sup>字多くて困しむ。

四月二十六日（火）雨風

〔発信〕父上へ

〔受信〕時代思潮

久しく降らざりし雨、昨夜より落ち来る。朝日になりては春雨と云ふにや、霧の如くいと  
しめやかになりしか、やがて霽れて間もなく青空も出でたり。今日も風止まねど雨の為め  
塵静りたれば、南一条辺迄散歩に出掛く。帰途は風もやゝ烈しく、雨雲手稲の山におへかゝ  
りて今にしてにも来らん有様なりしが、さはなくて已みぬ。夕陽のしづまんとする頃は西  
の山も赤く輝きて、明日の天気なるべきを報しぬ。如何かと思へし時代思潮来り居りたり。

四月二十七日（水）風

農史の時間ニ柳川と農場ニ行きて牛乳をとり、新に建てられし豚、馬などの畜舎を見る。  
山羊の子の生れて未だ間もあらざるべし。猫の如き程のもの嬉しげにはね廻るなど可愛ら  
し。午後よりハ図書館ニ行きて雑誌を読む。体格検査あり。成蹟左の如し。近日、岡山、  
福島高等女学校にての裸体事件、新聞にてさわがし<sup>341)</sup>。教育家の没常識なる、真に嘆す  
べし。如何なる方面ニ於てか常識に富める精神健全の人材を要せざらんや。然れども先づ  
之の要求を充てしめて社会の木鐸たらしめんは教育界ニ非らずや、噫。

|     | 37 [年] | 35 [年] | 36 [年] |
|-----|--------|--------|--------|
| 身長  | 一六〇    | 一五八. 五 | 一五九    |
| 体重  | 五二. 七  | 四八. 〇  | 四七. 六  |
| 胸、常 | 八一     |        | 七五. 五  |
| 差   | 八. 五   |        | 七. 〇   |

四月二十八日（水）晴風

天気極めてよろし。午後より風ありたれど室内に居るも心すまざれば、博物館構内ニ散歩  
ニ行く。帰路は旧校舎の中を通り抜けて創成川岸に出で七条を通りて帰る。監獄の側の差  
入れ所に無罪屋と云ふ屋号を見る。めづらしき名もあればあるもの。風呂ニ行く。脚をさ  
しり見れば太くはれたり。昨日頃迄は左程とも思はれざりしもの、今日は少しくしびれも  
出でしに非らずやと思はるゝ程なれば、旧愁未だ去らざるに新愁又一つ加はりぬ。今一二  
日経過を見て例の灸点にても初めて甚だしからざる内ニ退治せんなど、久々にて脚気病の  
事ニ就て考ふ。朝丈は毎日パンにしてみらう積もりなり。同宿の人々も殆ど脚気ニとり付  
かれ、健全なるは余と岡本氏<sup>342)</sup>とのみなりしか、余も又運命を免れ難かりしと見えたり。  
夜食後一寸散歩ニ出掛く、月良し。

四月二十九日（金）

天気なりしかど小寒き日なりき。午後よりハ菓樹<sup>[果]</sup>実習あり。グースベリ<sup>gooseberry</sup>のさし木、林檎、  
葡萄などの枝きをなす。小雨少しく降り来りたれど間もなく霽る。午後より風吹き出す。  
夜ニ入るも止まざる様子なれば、明日の天気如何ニやと思はる。

四月三十日（土）

天気にして風もなく温かなる日なり。畑を九人にて借り入るゝに付き、見分及び分配法方  
などの為め、原先生ノ時間を一寸休む。午後よりハ本科対 [土木] 工 [学科]、森 [林料]、  
農芸科のベ [-] スボール試合ありたれば行き見る<sup>343)</sup>。本科大勝利の模様なり。五回目位

にて帰宅す。角館氏より依頼ありたる写真を手嶋先生ニ渡さばやとて夜学校ニ行く。講話の日にて末光氏御話しの最中なりし。共に唱歌をうたへて帰る。月よし。足助ニ一寸面会す。

五月一日（日）

朝は天気なりしかば風吹き出さぬ中にとて遊園地ニ散歩す。陳列場ニ入る。博覧会ニ出品せし写真を去年見しときは甚だ好ましと思ひしかば、今一度とて入りたれど今回は更ニ感服せず。先めは新奇ニ目ニ映したればなるべし。岡田花園にて河内、木原君と行き逢へ共に池の彼方の小山に暫時ねこらびて、更ニ鉢ち植ひの桜花などを眺め門前にて別る。先月の頃来りしとき何とも判らぬ円家、今はパノラマの旗をかゝげたり。函館戦争の画なりとか。帰路より風強く吹き出す。午後、農園ニ行きしときは風一層強くなり、顔も向けられざる程なりし。足助氏三四日前帰宅せしなれば、其の後の話と新宅を見ばやと半澤氏宅を訪ひ、暫時ニして足助と共ニ立ち出で、足助ハ更ニ来訪して四時過ぎまで遊び行きたり。夜はスマレ会ありしに就き夜学校に行きて袋張りをなす。例の口悪る連のより合なれば騒々しきこと限りなし。

五月二日（月）

吉井先生一時間ありて余等か農業実習の為メ全体休業となる。午前、午後にてプロウトハローをかけ終る。藤井、大光寺と三人組み合つ。一反歩の積りなりしも地積狭き為メ、一人五十坪づゝとなる。岡本氏昨日引き越せしなれば、二階は余一人となりて静なること甚だし。脚気かと危みし脚のはれも昨日頃より殆ど全快せり。九連城大劇戦の電報来りて、日本軍死傷六百名とか聞きぬ。高山林次郎氏の吾人は現代を超越せざるべからざる語、新奇なることには非ねど、戦争を之の見地に立ちて考ふるに頗る趣味あり。現代の思想を超越し能はざればこそ、戦争を是とし、愛国、人権など螻蟻の争をなして自ら得たりとなせど、吾人平心虚気想ひを現代以上ニはせて高遠の理想を味ふを得ば世上の争は誠ニ一夢の如かるべし。基督の一言も戦争ニ付て語らざるを見れば、其の人の思想、その人の信仰の如何ニ大ニ、如何ニ深きかを見て感嘆讚美の声を発せざるを得ず。

五月三日（火）雨

朝より雨降る。原先生ノ時間は休みとなる。午後よりハ図書館ニ行きて新聞、雑誌を見る。夜食後余りねむたければ一寸寝ねんと床ニ入りしが、そのまゝ眠りて一時を聞くニ至りぬ。東京新聞来らず。昨日、狩野、大関と円山ニ行きしとか、已ニ桜花二三木開ける由なり。学校に行く途中の梅の花も稍々蕾を開けり。

五月四日（水）

〔受信〕 父上より

朝は曇りなりしか、そろへはれたり。風はたゝ中々烈しく吹く。午後よりハ博物館構内ニ散歩ニ行き温室を見て、帰路は旧校舎の方よりす。昨日の新聞、本日着す。元山沖にて露艦の為め撃沈せられし金州丸には二百余名の兵士乗り居たる由。旅順にてマカロフ提督と共に露国の画家溺死せし事は已ニ知りをししか、笹川臨風の文によれば、ヴェレスチヤ

ギン氏は有名なる戦争画家ニして、彼れ常ニ戦争の罪惡にして光景の慘憺たる様を写し、之れニ題して曰く、謹みて之れを戦勝者の許ニ致すと。〔到〕芸術界は茲ニ戦争の爲めに主義ある芸術家を失へぬ<sup>344)</sup>。

五月五日（木）雨

朝は雨降る。午後になるも止まず、風も加はる。午後より図書館ニ行きて雑誌を見る。夜はこれと云ふ勉強もせず雑書を見る。

五月六日（金）

〔受信〕伊藤正修氏

午後よりハ霽れて少々晴天となりぬ。文武会の演説あり。池田氏の農芸科新入生歓迎辞及び中村氏のマークアントニMark Antonyニの演説暗しよう、逢坂氏のサーター・リザータスSartor resartus<sup>345)</sup>の梗概ニ付て述べらる<sup>346)</sup>。夜食後散歩ながら大通り辺ニ出づ。毎晩のことなるべし。自転車の稽古あり。人々むらがり居りぬ。号外によれば第二軍、遼東半島ニ上陸せしとか。

五月七日（土）

朝より晴天なり。テニス大会ありとのことに、南、原両先生の授業を休む。午後よりハ農園の畑ニ来りて切りかぶを取りはらへ制地manure〔肥料〕をなし、マニアニ台計りを運びて帰る。非常ニ暖き日にて、シャツ一枚ニなりてさへ汗流れ出たり。

五月八日（日）

〔発信〕父上、川村、太布留吉

少しく風ありたれど宜しく晴れたり。一人にて豊平岸ニ散歩に行かばやと旧製糖会社の側を通りて川岸ニ出づ。タンポ、などの咲き出でたる、得も言はれぬのどかなる風景なり。遊園地を通り抜けて帰路につく。今日は三吉神社<sup>347)</sup>の祭礼なると円山の桜花今は盛りの由なれば、観客の三々五々行きかへりて南一条は雑とう〔糞〕を極めたり。午後よりは札幌各学校連合のベースボール会を見に行く。七に対する十四点にて中学校のピッチpitch〔投球〕となりし方勝ちぬ。他は師範、中々見ばへある勝負なりし<sup>348)</sup>。午前には農学校丈けの大会ありし由。

五月九日（月）

今日も天気よければ円山に観桜を兼而級会を開かばやとの事ニ、南先生は又もや休みでもらう<sup>349)</sup>。皆々一時半に学校ニよりて出立す。吾れと大光寺のみはをくれて二人にて行く。今日も中々暖き日にて汗の出づること甚たしく、夏服をほしき思へもしぬ。皆々と神社の裏手ニ入りて本陣を定め、上衣をぬぎて涼風を入る。林檎、菓子〔菓〕の御馳走あり。本日は更ニ雑沓せず、去年の如く狂態を呈するものは余り見受けざりき。之れも戦争の影響にや。已ニ盛を過ぎたればにや、点々として風ニ散りそむる木も多かりき。夜、池田氏来りて農園にて血清注射を牛に行ふにより見に行かずやとの事ニ二人にて出掛く。帰りしは九時半か十時頃なりしなるべし。

五月十日（火）

昨日の天気あまりにむし暖くして雨にもならんかと思はれたりしが、今日は朝よりして曇りぬ。昼頃よりは天一面に暗くなりさんたんたる空の色なりしか、はたして一時半より大

雨となりぬ。風さへ吹きたればすさまじき計りの音たて、雨の屋をた、きしか、晩方になりて大方止み日の光りさへ暫時はさしぬ。鈴木氏訪問せられ談を哲理的ニ渉りて大ニ自己中心説をとなへられぬ。氏の説は又趣味ある一元論にして余も賛成するところあり。然し哲理上の確信と云ふニ止まりて、人生の意義、信仰等には更ニ入らざるが如し。十時過ぎ辞し去らる。

五月十一日

朝は晴天なりしが午後よりハ曇りたり。運動会も間近ければ休業せし級も多かる模様、吾級の某々等も折角休まんとてプーへ云へしかど昼迄授業を受けぬ。午後よりハ農園ニ行きて区画を立て、地ならしをなし、マニアを運びもらへて播種の準備を已ニと、のへ終りぬ。帰路につきしハ五時を過ぎたり。

五月十二日（木）

朝より小雨ふる。二時間の授業の後ち、誰れが言ひ出せしものか、我級全体ニてアーチを作らんとの事に皆々休みたき方なれば賛成して、今〔日〕明日を休業することに断判す。午後よりグリーンを取りに行く事ニなりたれど、雨降りなれば余は行かずして教育図書館ニ行きて太陽を見る。翌日之れか為めに多にうらまる。夜に入りて雨も止み星も出でし様なり。早く寝ぬ。

五月十三日（金）

朝より会場ニツメカケてアーチの準備をなす。一半は馬車に乗りて楊を取るに豊平迄行けり。柱を建て、タンポ〔ポ〕を摘みなどして暮せしか、午後よりハグリーンを装飾して組建てにかゝり、五時半頃迄ニ旗、額までかゝげたり。朝より天気極めてよし。

五月十四日（土）

〔受信〕太布氏より

朝より晴天にして更ニ風も無き暖かき日なりき。朝は室にありて読書す。午後より遊戯会を見物ニ行く<sup>350</sup>。自由ニ観覧人を入れし為めにか非常なる人ごみにて、招待席も人の山を築きて席に不足を来せし模様ニて何処も一杯なりき。去年よりハ遊戯何れも勢へよく、余興も四五回出で、中にも予〔修科〕の旅順みやげ、新聞社の行例、狐の嫁入りなど喝采を得りぬ。各学校競争にては今年ハ一、二とも中学にて占めたり。各科競争にては予〔修科〕の朝倉<sup>351</sup>なる人、余程の先着なりき。一英里競争ニても朝倉氏先着を占め、安部は三着なりき。森林科ニては余程の意気込ニてそろへの運動服を作り、軍歌を作り、旗迄作りたれど、成田なる人如何なればにや、余程後れたり。之れニ就て何か苦情ありし模様。兎に角めつたになき好天気なりしと場所の宜しかりし為め愉快ニ感せられたり。

五月十五日（日）

昨日福岡の太布氏よりの返信によれば、福岡中学を中心として耶佛宗教研究の団体起り、共ニ二三十名の会員を有し盛にやりをとるか。一時的のものならしめずして永久に続かせたきものなり。而して氏は附記して曰く、世人の多くハ戦熱ニ犯されつゝある間ニ平和を標榜とする是等之団体を生したるを福岡の為メ御喜び被下度と。午前ハ足助と同道して

チャーチ<sup>church</sup>に行く。自転車競争大通りにあり、困<sup>[が]</sup>へをなし人々群<sup>[ど]</sup>かり居りたれば、暫時足を止めたりしかと直<sup>[ど]</sup>に去る。午後よりも天気よかりしかば西の方<sup>[が]</sup>に散歩に掛く。大通りの陸軍省所有地の草原を逍遙して雲雀<sup>[スミレ]</sup>の声を聞き、しみれの色を尋ぬ。池田次郎氏日曜学校の生徒五六人を引きつれ、花を摘<sup>[居]</sup>みをりたり。自転車競争の前<sup>[が]</sup>にて或る男を見て、

春の花塵もより来る美しさ

花がすみ心もそらの雲雀哉

五月十六日（月）

〔受信〕父上

朝学校二行きしかど人々来らざりしかば帰る。大光寺来りて十二時迄種々<sup>[が]</sup>に可笑しき議論をなす。午後は農園二行きて馬鈴薯、蕎麦、小麦、大麦、玉蜀黍、大小豆、菜豆<sup>いんげんまめ</sup>の各種を播種す。今日も朝より極めて暖く、早や夏服、夏帽を見るに至りたれど、日没の頃は西の空曇りて夕<sup>[夕映え]</sup>ばひの美しさなかりき。桜も一重は已に散りては、エルムも緑の衣を装へ初めぬ。木立繁れる小川の辺<sup>[ど]</sup>りにはけ<sup>[行々]</sup>よう<sup>[子]</sup>しの名あるヨシキリの声を聞きぬ。此の頃の空は花<sup>[霞]</sup>がすみと云ふなるべし。天晴朗ならず、手稻の諸山も見えぬ程なり。昨日の夕暮は之の霞の中<sup>[ど]</sup>に入りし太陽赤くかゝりて実<sup>[が]</sup>に日の丸の旗の如かりき。

五月十七日（火）雨

宮部先生の授業あるのみにて、原先生は他日にくりのべ<sup>[貰ひ]</sup>もらへ休みとなる。図書館二行きて新聞雑誌を読み、十二時となりて帰る。朝より曇りて或は雨ともならんかと思はれしか、昼<sup>[が]</sup>なりては風と変じ、砂塵を巻き上げぬ。四時頃より弥々雨降り出だす。夜に入るも時々雨声を聞く。向ふの室に移りし二人の私立中学生<sup>352</sup>遊びに來る。

五月十八日（水）朝雨

〔発信〕隼次郎様へ種子と

朝は雨なりしか、昼頃<sup>[が]</sup>になりて霽れ日光輝きいでたり。二時頃より散歩ながら南の方<sup>[が]</sup>に行き、興農園<sup>353</sup>二行きて隼次郎様二送るべき南瓜種を買ひ求む。富貴堂二立ちよりし処、久しぶりにて石川君二行き逢ふ。四五日前病院を退院せられし由にて已に顔色もよかりき。夜食後も散歩に大通りに出で、旧練兵場を西二師範学校<sup>[で]</sup>辺まで行き、帰路は北五条を経て青年寄宿の前<sup>[が]</sup>にて石澤君と逢へしかば道なから今夏の計画を談ず。

五月十九日（水）

或る時は曇り、或る時は晴れたれど、雨とはならず。午後より東海林氏の実習あり。単<sup>green house</sup>グリーンハウスと農場を見廻りて終る。藤井氏等畑に來り居たれば直<sup>[が]</sup>に手伝ふ。今日にて已に大抵のものは播き付けたり。夜食後、南の方<sup>[が]</sup>に散歩す。

五月二十日（金）

朝よりして天気よし。昼頃<sup>[ど]</sup>になりて風吹き雨模様となりたれど、暫時<sup>[ど]</sup>にして又晴る。午後より図書館に至りて雑誌などを読む。本日の号外にて八島、吉野沈没せし由出づ。

日没六時四十分

五月二十一日（土）

天気よしと云ふ程ならざりしかど風もなく暖かなりし。夜ニ入りてや、曇りたれど、十時頃ニは朧月も出たり。土曜日の授業を尽く朝にくり上げて休みを二日続けんとのうまき動議を誰れやらが発言せしか、七時半よりにては少し朝起きあやしげなれど、皆々不賛成もなくそれへ交渉委員を出す。午後より農学会にて伊藤広機氏のシヤム談あるなれど行かず<sup>354</sup>。南の方ニ散歩に出掛く。夜は久々にて半澤氏の宅を訪問す。夜学校は修膳の爲め休みとなる由なれど、末光と半澤とは居らざりき。飯たきの爺の自慢なる蕎麦がきの御馳走ニなる。

五月二十二日（日）

昨夜は今日の天気如何ニかと案ぜられしか、朝起きて見れば天気にして朝よりむし暖かきほどなり。八時半頃迄夜学校ニ着き、九時少し過ぎ女生徒等と共に真駒内ニ向ふ。今年高等、尋常を一所ニせし由なれば四十人近くの人數なりき。平岸の近くにて乗馬会員の篠る騎駒を並べて真駒内ニ向ふを見ぬ。菓子の包みを皆々馬持ちとなす。林檎の花盛りなり。真駒内の近くにて早や蟬の鳴くを聞く。例の橋なき小川を渡りて牧場ニ入る。余と足助とは人々より早く行き入口にて皆々待ちぬ。心地よき春の光に浴し、すみれ咲く野辺に打まれて種々の遊戯をなし、午後には奥の豊平川辺ニ行く。四時頃より天気模様変りしかば、帰途ニ付く。入口の辺にて雨降り出せしか、暫時ニして止みぬ。夜学校ニ立ち寄りて家ニ帰りしは七時過ぎたり。之の日、真駒内ニ乗馬会員の競馬ありし爲め、見物人など行き相応ニにぎわへし様なりき。遊園地ニは道庁の官吏の運動会もありし由。

五月二十三日（月）

天気なりしかど北風強く吹きて、夏ツボン<sup>[ズ]</sup>を初めてはき行きしに打ふるう程なりしかば、午後よりはシヤツ二枚を重ねて行きしに左程にも感せざりき。鈴木氏の菓樹実習あり、つぎ木を習ふ。帰路畑ニ立ちよりしに蕎麦、大小麦、二十日大根の発芽せしを見る。図書館ニ一寸立ちよる。夕飯後南二条の勤工場ニ一寸行き、博物館側<sup>[マ]</sup>きを通りて帰る。昨日真駒内ニて運動せし爲めにや、体いたみて中々太儀なり。本日の新聞ニ仏国新聞より摘訳せしトルストイ翁の時事観なるもの出でたり。

五月二十四日（火）

今日も朝より風吹きたれど、昨日の如くは寒からず。授業時間のあへ間にて、校舎の南側の風なき所ニ集まりてクローバーの四つ葉を探し当てることなどして戯れしが中々見当らず、運なるべし。余は一所ニ三つ計り見付けぬ。西洋の習慣とかにて、恋人に行き逢ふ前ちようなりとか。されと吾れは一人にも行き逢はず。元より風におそれて家ニのみ引き込み<sup>[閉]</sup>をるなれば。数日前見し六合雑誌ニ安部氏<sup>355</sup>のものせしなるべし理想の恋愛なる一文あり<sup>356</sup>。真誠の結婚はかくしてなさるべけんも、日本ニ於て実行は不可能なるべし。男女交際と云ふこと行はれずは、いかで理想の恋愛起るべき。然し吾れは其の論旨には大体ニ於テ賛成しぬ。トルストイなどの結婚論なども稍々之れに近き考へを有せるに非ずやと思ふ。

五月二十五日（水）

晴天なれど風吹きて非常ニ寒し。それが為めにもあらんか、咽喉の工合少し宜しからず、吸入器をかく。午後より農場ニ行きて試験畑の札を書き建つ。図書館ニ立ちよりに新聞雑誌を見る。風烈しければ散歩にも出でず。氣候の加減なるべし、頭脳明瞭ならず、勉強も出来難く、ボンヤリと目を送ること多く、学校の講義の前、更ニ手ニ取らず。鈴木氏よりクラフトの動物扁〔讀り〕をいづり受くることゝなす。一戸の小野寺福松氏、遼東半島ニて戦死せし事を新聞ニて見る。深く其の人を知らねど尚ほ春秋ニ富む好青年、おしむべし。福蔵氏の悲嘆、おしはからる。

五月二十六日（木）

朝より天気にて風なければ、近日になき温暖にてありき。午後よりハ農園ニぶらへ散歩に行きて、新ニ作りし水田などを見る。鉄道線路ニ出で、散歩し帰る。午後よりハ風吹き出でたり。

五月二十七日（金）

晴天なり。七時半より授業あり。午後よりは一寸図書館ニ行く。夕飯後博物館ニ行きしに、藤井氏十歳計りの女の児二人と何にか草をつみ〔原〕をりしか、四人にて両方ニ分れて陣取りをなし、愉快ニ遊ぶ。飯田氏〔原〕水彩を画きをりたれば止りて談話せる中、末光も来り。五六人集りぬ。日も暮れたれば、やぶ蚊ニ食はれし手をなでつゝ末光と共に帰りを向ふす。

五月二十八日（土）

今日も天気極めてよし。学校のエルムニ鳥巢を作り雛をそだて居たりしが、皆々石を投げて悪戯す。昨日も今日も然り。子を思ふ暗ニ迷ふとか、親鳥の巢を離れかねしも親の心なるべし。午後より博物学会あり。高橋氏の笹の病害、原先生の鼠の雑種ニ就てなる講演あり〔原〕。終る頃より雷鳴せしが盛ニ降雨せしか間もなく霽れたり。夜食後、農園より鉄道線路を沿ふて散歩す。之の頃は夕かすみかゝるなれば、夕陽真紅の球の如し。

五月二十九日（日）

朝は曇る。今日は藻岩の山開きなれば、登山三々五々前を通る。九時足助氏来り、共に遊園地ニ行き岡田の池の傍に至りて鯉魚を見る。藤は已ニ少しは蕾を破りたれど満開は尚ほ四五日の後なるべし。教会に行きて説教を聞く。遼東半島にてげき戦あり〔義〕。我軍の死傷三千人ありとか。永山將軍〔原〕東京にて病死せし由、新聞にあり。午後よりは農園ニ行きて畑を検分し、草などをとり、アカシア街道を北ニ試験場を通り抜け、第二農場ニ出で、帰る。七時より夜学校の手嶋友紀先生、熊本女学校へ御出でニなるニ付き、すみれ会を兼ねて送別会を開く。袋はり終りて、遊戯、唱歌などなし、帰路に就きしは十一時頃なりし。

五月三十日（月）

天気よろし。午後より実習あるならんと思へ行きしかど、休みなれば畑を見廻り、図書館ニ入りて雑誌を見る。夕飯後は学校の方より線路に出で、博物館構内を散歩し帰る。

五月三十一日（火）雨

朝より時々強雨降る。然し直ニ止む。午後よりは農園ニ行きて畑を見、図書館ニ入りて新聞を見る。夕飯後南一条にノートを買ひニ行く。長山將軍の遺骨致着〔水〕するとかにて停車場〔到〕

<sup>[購]</sup>雑沓し居りしかば、吾れも立ち留りて見送る。夜は八時頃ニいぬ。

六月一日（水）

朝より天気なり。本日より朝一合づ、牛乳を本間より配達しもらう。七時半より動物あり。午後は為替を受取る為め北八条ニ行き、それより旧製糖会社の前を通り抜けて東橋に至り、橋下に魚釣れる一老翁と談してぶらへ帰る。

六月二日（木）

朝は天気よかりしも昼頃より曇る。永山將軍の葬儀、一時よりあるなればとの事ニ、昆虫は休みとなす。午後よりも曇りて今にも雨降らんかと思はる、こと度々なりしも遂ニ降らず。夜ニ入りては非常ニむし暖く、眠むる頃は雨声を聞く。丸井に行きて夏服の注文をなし、帰路は博物館を通り抜けて学校の側ニ出で、散歩ながらぶらつく。坂本ニ行逢へ歩みながら談話す。

六月三日（金）

〔発信〕 父上、石黒

雨降る。昆虫学の時間、幼虫の製法及び捕虫網の各種を見る。午後よりも雨降りたれば外出せず。夜ニ入りて阿部氏と名乗りて尋ね来りし人あり。行き逢へ見れば福岡の直道氏の弟なり。東京より海路にて本日札幌に着せられし由、宿泊す。

六月四日（土）

雨降らざりしかど曇りて今にも降らん空模様なり。阿部氏中学校ニ友を尋ねんとて辞し去る。農園ニ至りて畑を見廻り、図書館ニ入りて雑誌を読む。午後よりは散歩に遊園地ニ出掛く。久しぶりにて山鼻兵村を横ぎり、畑中の途を師範学校の方ニたどる。今日は運動会と見へて旗など高くか、げられをりたれば、後方の垣より入りて暫時見物し、北五条を通りて帰る。午後よりハ非常ニむし暖き日なりき。夜食後<sup>[河内]</sup>高地氏宅を尋ね、明日島松へ鈴蘭をとりニ足助と行くことを約す。夜学校ニ皆々と出掛く。足助の御話しあり。唱歌をうたうて帰る。

六月五日（日）

朝よりして上々の天気なり。創成河畔にて足助と出逢ひ共に夜学校ニ至る。生徒の集まるもの九人、八時半ニ出発す。非常ニ暖き日にて風少しくありたり。十一時半頃ニ大曲と云ふ村の鎮守ニ息みて昼飯を食ふ。島松迄は二里と聞きたれば<sup>と</sup>兎てもと思ひ、更ニ野幌ニ出んとて少しく後ニもどり、三里塚と称する所より横ニ入る。途中の一農家ニ行きて水をもらへし<sup>[ぎ]</sup>次ぎ、後ろの涯<sup>[崖]</sup>のや、庭園めきし清水こんへと流れ出づる辺ニ下りて息み、大ニ水を飲み、菓子<sup>[菓]</sup>を食ふ。厚別の村ニ出で、それより又引き返して月寒に向ふ。之の途中の草原にて鈴蘭を大ニ採集す。それより月寒出で、夜学校ニ帰りしは五時半なりき。此の日の行程、殆ど十里余。荒川氏来訪せられてトルストイの小話集<sup>360)</sup>ニ、三冊着す。氏は先日来マラリアニ罹りおられたりし由なり。

六月六日（月）

〔受信〕 角館氏より

朝より晴天なり。今日も昨日ニおとらぬ暖気にて七十五六度<sup>361)</sup>を示しぬ。午後より菓樹実<sup>[果]</sup>習ありて、石油乳剤の製法を見る。桜桃などの実、稍々大きくなりぬ。図書館ニ一寸寄りて新聞を見る。夜飯後、ドーラン<sup>362)</sup><sup>[河内]</sup>を高地氏宅に持ち行き、それより北の新開道路を東ニ創成川ニ出で、帰る。

六月七日（火）

朝は少しく雨降りぬ。別段誌すべきことなし。

六月八日（水）晴天

〔受信〕壽郎様より

此日も昨夜よりの雨降りにて朝には已に止みたれど空曇りてあやしげなる天候なり。渡辺環氏に昨夜召集令状来り、本日出発するとのことに、吾級発起となりて本科一同にて送別会を開くことに極め学校は休む。直ニ偕楽園<sup>363)</sup>ニ皆々集まり、各級の送別の辞、答辞などあり、一時頃より皆々停車場ニ向ふ<sup>364)</sup>。壽郎様より手紙あり。健君、例の人々より気違ニなりし由な<sup>[ど]</sup>うわさある由報し来る。壽郎君の言ひる如く、健君の性質を知らぬ者どもの評なるべし。唯た<sup>[だ]</sup>気<sup>[ば]</sup>には是日の阿部氏の話しによれば雄次君は身持ち良からぬ事をなしおるとか、雄太郎氏の父上へ心痛思へやらる。畑ニ至りて一人ニて雑草を取る。

六月九日（木）

〔受信〕石黒氏より

午後より一同にて試験場ニ行き来りて縦覧す。黒澤氏<sup>365)</sup>説明せられたり。中頃ニ至りて腹の工合おかしかりし為め一人にて帰り、図書館ニ入りて新聞を見る。夜食後は理髪の為め南一条ニ行き、帰路は博物館の前を通りて帰る。

六月十日（金）

〔受信〕父上より

時代思潮

朝は雨模様なりしかど降らず。午後よりハ晴天となる。作物を次の週の火曜日ニ試験しもらうこと、なす。午後よりハ図書館ニ入り、農場を散歩して帰る。夜食後、散歩ニ遊園地ニ行く。祭礼も間近くなりたれば、競馬の準備などなされたり。畜産会の会場たるべきところを通り抜けて、西八丁目の通りに出づ。今日は如何なる為にや、非常の霧にて特ニ博物館辺は細雨の如くもう〜と来りて面をうつぬ。夜は作物を下読みす。

六月十一日（土）

原先生の動物は今一時間ニて終ること、し、残りし分は時期を見計らひ、来学年に有志の者ニ講述すること、す（十日の記事なり）。

午後より天気よかりしかは農園ニ行く。藤井氏来り居られたれば二人にて畑の雑草をとる。四時頃迄ニ終る。午前は室ニありて作物を見る。

六月十二日（日）

九時頃ニ為替を取りに行き、それより旧製糖会社の前を通り抜けて東橋ニ出で、川岸ニ腰掛けて魚釣りなどを眺め、十一時頃に帰る。之の日も非常ニ暖き日にて、早や已ニボツ

へ単衣を着し人を見る。夜食後は散歩に南一条辺ニ出づ。如何なる故にや、今日の朝、顔を洗ふときのどよりして血出でたり。吸入器をかく。

六月十三日（月）

朝は晴天なり。宮部先生より実科撰定<sup>366</sup>に就ての御話しあり。それより引き続き種々の談話出で、病理の時間は全く休む。校長の農史ハ休む。今日より畜産共進会ありて午前ニ発会式ありたればなるべし。此度の試験ニ肥料、植〔物〕生〔理学〕などノートを持つことに談判委員となりて吾れは宮部先生<sup>367</sup>ニ行きたれど不結果なりき。午後よりハぶらへ農園を散歩し来りて作物を読む。頭の工合少しく悪し。午後よりは天気曇りて風少し出でたり。今朝も血出でたり。夜食後石澤君を訪問して上川の牧場の方を依願し、藤井の室ニ行き暫時逢坂と三人にて談話す。

六月十四日（火）

普通作物の試験あり。あまり上成績ならざり<sup>[き]</sup>。午後より畜産共進会<sup>368</sup>ニ行く。出品馬の内一千円、三千五百円のものあり。種牛には非常ニめづらしきものあり。エアシア<sup>Ayrshire</sup>の白色の部分多きもの流行の由にて、斑点もや、紫色を帯べり。牛種は重<sup>おも</sup>ニ、エアシアとホルスタイン<sup>Holstein</sup>に限れる如く、他の種類はデボン<sup>Devon</sup>、短角<sup>Shorthorn</sup>の小数を見るのみなり。兎に角有益なるものなりき。今日も中々暖し。時々雨雲来りて一二点降りたれど間もなく霽<sup>は</sup>る。夜食後は農園ニ散歩す。夜は肥料を見る。

六月十五日（水）

〔発信〕明八様へ

〔受信〕角館氏より

札幌神社祭礼にて休みなれど、午前は試験の下調べをなす。朝の間は天気曇りてあやしげなりしも、正午頃ニは上天気となる。午後よりハ散歩に出づ。昨日新調せし洋服を着る。遊園地の競馬にでも行かんかと思へしかど、人出多くてうるさかるべしとて、北二条を西の方ニ行き線路ニ出で、農園ニ入り散歩して帰る。中々暖き日なりき。夜食後、市中の景況を見ばやと南三条辺迄行き早々帰る。夜は各区にて提灯行列らしきものありし模様。本年戦争の爲めにや、山車一台も出でざれば御祭りらしくもなくさびしきものなりき。夜に入りて風急に冷くなる。御祭りの行列は横を通るを二階より拝す。

六月十六日（木）

昨夜は少しく雨降りたる様子にて、朝起き出て見れば地ぬれたり。天気になりそうもなく風吹きたるが、午後ニ入りて時々雨降る。宮部先生一時間ありしのみにて休みとなる。図書館ニ入る。帰り路にて柳川ニ行き逢へしに吾れも畜産ニ行くぞと言ふたが、之れも今日あたり牛や馬をギョロへ見し為めなるべし。今日は昨日ニ以て寒き為め室ニのみ引き籠りたれば、更ニ御祭りらしくもなく、ヒツソリしたものなり。咽喉の工合悪しければ吸入器をかく。夜はランプのホヤを買はん為め市ニ出でしも、御祭りの為め休みな<sup>[は]</sup>れは、提灯行列、見世物などを見て帰る。雨降り出したり。

六月十七日（金）

〔受信〕明八様より 写真二葉と

天気良ろし。明八様より写真ニそへて手紙を下さる。本月の末頃ニは浦鹽方面にでも行くならんかなどあり。午後より農園ニ行き四人にて培土をなし、チシヤ、二十日大根を間拔し、白菜を播種す。壱岐沖ニ於て日本商船常陸、佐渡丸、露国軍艦の爲め沈没せられたりの号外出づ。

六月十八日（土）

午前は室内ニありて勉強す。午後より農園ニ散歩に行く。足助来りて種々談話の後ち帰る。之の日、露国軍艦福岡近海ニ出沒せる由号外出づ。

六月十九日（日）

朝は遊園地ニ散歩に行き、陳列場ニ入る。午後よりハ經濟を下調べなす。四時頃竹田来り、續て足助、河内、池田、末光来り。向ふの室をかれて足助の爲めに牛の会食をなす<sup>369</sup>。八時頃より豊平のバンクに散歩に出掛け、帰りしは十時。

六月二十日（月）

朝の授業は例の如し。午後四時より写真をとる爲め、武林ニ出掛く。遊園地ニてとらんとて茲を立ち出でしハ五時半を過ぎたり。藻岩の見ゆる景色よきところにて撮影す。試験の時間割出で、未だ<sup>〔欠〕</sup>一扁通りも復習せざるもの多くして大ニ狼狽す。

六月二十一日（火）晴

肥料は今日ニて終了す。試験準備ニい〔そ〕がはし、誌することなし。

六月二十二日（水）

朝は雨降りたれど、昼頃には霽る。然し梅雨ニ入りたればにや、空曇りて晴天とはならざりき。

六月二十三日（木）

朝は今日も雨降る。然し間もなくはる。松村氏青森に出張する由に就き来週あるべき試験を今日に繰り上げて八時半よりなす。

六月二十四日（金）

經濟の試験あり。不勉強の結果、大ニ不成績なりし。特ニミル氏<sup>370</sup>の租税論五則とか云ふもの更ニ見ざる爲め大失敗す。朝より好天気なり、中々暖気はる。夕飯後南一条ニ買物ニ出づ。

六月二十五日（土）

植物病理、農史の試験あり。朝より暖気甚だしかりしか、午後よりハ一層まさりてとても室内ニ居られざる程なりし。博物館の木影に行きて三時過ぎまで休む。夜食後は第二農園ニ散歩に行き、之れまで行きしことなき牧草地ニ出で、中学校側の通より帰る。途中、藤井、竹田ニ逢へて香ひよきパンヂー<sup>〔り〕</sup>をもらう。旅順沖にて大海戦あり。露の戦艦沈没せし由の号外出づ。夜も非常ニむし暖し。

六月二十六日（日）

朝より雲かゝりて晴天とはならねど、むし暖きこと昨日に変わらず。皆な白き単衣となる。

新しき裕を出す。午前より肥料を読む。

六月二十七日（月）

肥料の試験あり。計算問題のみなり。今日も暖きこと非常なり。シャツ一枚となりて勉強す。

六月二十八日（火）

植物の試験有り。時間前ニ出でたれば、製麻会社の側より苗穂の方ニ行き、東橋の下ニ据りて冷風を入れる。今日の暖さも土用の最中の如く流汗滝の如しと形容すべき程なりき。夕飯後は散歩として西の方ニ行き、農園を廻りて帰る。

六月二十九日（水）雨

動物の試験あり。今日にて試験弥々終了して夏期休業ニ入る。午後より天気よかりしかば、畑に入りて草を取り居りしに大光寺も来りぬ。二時半頃に雨模様となり二三滴降り来りしかば急ぎ家ニ帰る。遂ニ本降りとなりて夜ニ入るも止まず。室内ニありて国ニ送るべき不用物などを<sup>〔行李〕</sup>行り<sup>〔詰む〕</sup>二つむ。

六月三十日（木）雨

昨日よりの雨、今日ニ入りても止まず。九時頃なりしか、図書館ニ入りて新聞を読み、農場ニ立ちよりにて牛乳をことはる。帰りし途ニて柳川に呼び留められ、一所ニ専門の願書を出さんか<sup>〔が〕</sup>為め印鑑を取りて、又、江刺家の宅ニ行く。大関、竹田、藤井<sup>〔ど〕</sup>なども来りて談話の後一時頃ニ帰る。昼飯後高地宅ニ致りて牛乳代を渡し、足助と道庁まで一所ニ来り。南一条ニて買物、理髪などして、本科卒業生送別会場なる同窓倶楽部ニ至る。各級の送別の辞<sup>〔ど〕</sup>などあり。特ニ逢坂の黄金井氏<sup>371)</sup>ニ対しての気<sup>〔ど〕</sup>燄実ニ万丈なりし。六時頃ニ青年会寄宿ニ石澤氏を訪問し直ニ帰る。種々北海道の殖民、状況ニ関する書籍をかる。

七月一日（金）雨

〔受信〕阿部さめ様 夜出す

朝よりして雨降る。今日、藤井、竹田諸氏出函の由なりしが、一昨来の大雨ニて汽車汽路いたみ不通の由なり。大光寺氏来りて昼前まで談話せらる。午後より雨は霽<sup>〔は〕</sup>れたれど曇りは容易ニ去らず。終日室ニあり。一時頃阿部氏の宿しおらるゝ本宿氏と云ふ中学生来られ、前後策ニ就て相談し、後郷の母君ニ一応手紙を出すことに決す。夜、鈴木を訪ねて十時頃迄おる。

七月二日（土）

〔発信〕和山、父上

〔受信〕父上

朝は曇りしかど午後よりハ晴天となりぬ。農園の畑に行きて雑草をとり間抜きなどす。大光寺も来りて共ニ働く。之の日、竹田、藤井、末光等出立す。一時頃にもやありけん、阿部氏訪はれて帰国せらるゝ由にて岩見沢に一先<sup>〔ず〕</sup>づ立ち寄りて何とか<sup>〔工夫〕</sup>工風せんとのことなりし。真ぎ何れか知らねど旅するに一文もなくしては不自由なるべしと一円を送り、直ニ本宿氏宅を訪問し見る。

七月三日（日）

午前は室内ニありて雑誌など読む。十時頃ニ為替をとりて東一丁目ニ行き、帰路、大光寺を訪問したれど不在なりしかば、農場の北の牧草地ニ行きて鳥ニいたづら<sup>[イ]</sup>をなし、十二時頃迄樹下ニ休みて涼む。非常ニ好天気にて汗出づ。夜食後、散歩に博物館を通り抜けて山鼻の方に出で、それより遊園地ニ行く。池のほとりにて宮城、鈴木、橋本等と出逢ひしが、橋本と共に池辺に腰かけて舟こぐ様を眺む。君もやはり上川地方ニ近日中ニ行かる、由話されぬ。帰路、<sup>[時事社]</sup>事時社の前にて又宮城等と出逢へ、停車場の前迄共に帰りぬ。この日、素木、増田氏等東京ニ向はれぬ。夜学校にて厚別の滝ニ遠足する由にて、足助、<sup>[河内]</sup>高地等立ちよられたれどことはる。

七月四日（月）晴天

〔発信〕石黒

〔受信〕石黒

午前は図書館ニ入りて、<sup>[五字空欄]</sup>□□□□□氏のユニテリアン、プリンスプルなる書<sup>372)</sup>を読む。午後よりも農園ニ行きてぶらへ散歩して帰る。夜食後、石澤君を訪問したれど未だ御帰りなきにより、南二条ニ出で、故郷ニ送る荷物を頼みて帰る。鈴木来りてゴルキーとトルストイの二冊を貸しやる。

七月五日（火）

朝は農園ニ行きて豆の手を立つ。一寸、図書館ニよりて新聞を見る。午後よりハ足助来りて談話中、石澤君訪問せられ、上川よりの返事をつけらる。其の返事によれば小林<sup>373)</sup>と云ふ人の細君<sup>[妊娠]</sup>妊しんせられ<sup>[居]</sup>る由にて八月よりならばよけれど今は都合あし、それとも外より通はる、ならば格別とのことなりと。足助と共に博物館ニ行きて樹下ニねころびてすむ。夜食後、南先生を訪へて牧場の御相談せしかど不得要領なりき。それより柳川の宅に行きて、江刺家と藤野の牧場<sup>374)</sup>に出来るならば共ニ行かんと約す。本日、試験成績発表あり。本科にての落第ハ三年の佐藤氏<sup>375)</sup>のみ。森林の桜井氏も落ちたり。

七月六日（水）雨

〔発信〕父上

〔受信〕小太郎

朝は大光寺と農園ニ行きて豆の手を縄<sup>[糸]</sup>にて結ぶ。非常ニ暖かなる日にてシャツ一枚にて唯<sup>[た]</sup>た<sup>[居]</sup>るにてさへ汗流れぬ。午後よりハ地図を見ておる中ニ何時しかねむり<sup>[が]</sup>しか、雨の音にて目醒めむ。一時ハ中々の強雨なりしかと、一時間計りにして霽<sup>[は]</sup>れたり。

七月七日（木）夜雨

曇りたれどむし暖きこと甚だし。十時より卒業式あり<sup>376)</sup>。本科七人、<sup>[予]</sup>ヨ[修]科廿九人、土木[工学]科七人、森林科十五名なり。園田長官<sup>377)</sup>の演説ありて十二時頃ニ終る。帰路、江刺家の宅ニ一寸立ちよる。午後より<sup>[河内]</sup>高地氏宅を訪問して、三時より足助と写真を受取る。三嶋<sup>378)</sup>ニ行き、それより豊平橋畔にて暫時休みバンクを沿ふて帰る。天気ならねど暖きこと非常にて兎ても家ニ居られざる程なりしかば、何れ雨にても降るならんと思へしに夜ニ

入りて降り出しぬ。

七月八日（金）曇、暖

朝は天霽<sup>は</sup>れたり。畑<sup>は</sup>ニ行きて虫とり、除草などを行ふ。柳川、馬の稽古をなし居たれば、一寸借れて乗るに更ニ吾<sup>が</sup>命ニ従はず、さっさと厩<sup>は</sup>ニ入り込みぬ。之れでも未来の牧畜家なりとぞ。今日より入学試験ある模様なり。午後よりは散歩ニ遊園地に行き、岡田の池ニて休息し、豊平バンクを沿ふて帰る。夜は久濶<sup>ひさしく</sup>く見舞はざれば如何なる様かと思ひて、夜学校ニ行く。授業時間は一時間なり。暫時ニして帰る。風少しく吹き出し、道庁の屋根ニ暴風雨の標<sup>一字空欄</sup> □ 出でたれど、夜ニ入りてハ天よくはれぬ。

七月九日（金）雨

朝、江刺家来りて、雑誌などを返さる。農園ニ行きて胡瓜などを間抜きおる中ニ、雨少しく降り出せしかは、急<sup>ば</sup>き<sup>き</sup>帰り来る。午後より雨急ニ降り出し、風も相当ニ吹きぬ。室ニありて本などを読む。

七月十二日（火）

支笏湖、恵庭岳登山出発。一行九人。

七月十六日（土）

帰札

七月十九日（火）

コノ日旭川ニ出発す。

九月十日（土）晴

午後六時ニ着す。直ニ風呂に行き、帰路、柳川を訪問して江刺家の弟の不測の死ニ遇へしことを聞きぬ。

九月十一日（日）晴

〔発信〕 畠山氏

九時頃迄座敷を整理し、それより郵便局ニ為替を受取りに行き南一場ニ出で、買い物をする。午後よりハ大光寺を尋ねて行きしに去月引き越せし由にて鈴木と暫時談話の後、再び行く。先月十五日頃より一家を借り受け、農芸科生某氏と自炊を始めし由なり。小川君も来る。おはぎ、林檎、ぶどう、きみ等の御馳走<sup>下痢</sup>なりし為め、帰りて又々予測の下履<sup>河内</sup>を初めて其の夜大ニ困しむ。帰路、高地、小泉の所ニ立ちよりしかど何れも不在。足助は先月廿日過ニ山梨県ニ赴きし由にて大ニ落胆<sup>379</sup>す。

九月十二日（月）晴

〔受信〕 卅一日ニ出せしもの川村より

午前九時頃学校ニ行く。久しぶりの対面のあへ<sup>挨拶</sup>さつににぎわしく、十時よりなれば農場ニおもむく。体操場ニ於て校長其の他の談話あり<sup>380</sup>。後ち、教場ニて各受け持ち教官の御話しありて帰る。中々対話にいそがしく、高松氏も廿二日頃ニ旭川の小林氏宅ニ行き、十二日計り居られたりし由なり。午後より南一条ニ行きてノートブックを買ひ求め、帰路小泉宅を訪問したりしに村上、中村ノ二氏居りて中々談話ニ興ありき。夜食後ハ石澤君を寄宿

舎ニ訪問す。旭川小林氏ニ手紙をしたゝめ、後ち、牛乳ト衛生<sup>381)</sup>を少しく読み八時過ぎ寝ぬ。

九月十三日（火）雨

〔発信〕小林氏へ

〔受信〕角館氏

八時半ニ学校ニ出掛けて図書館ニ入る。授業何れもあり。午後より化学教室ニ於て原先生送別会の相談ある為め一時半より出掛け終りし後、又図書館ニ入りて帰る。夜食後、南一条に赴きて本を買ひ求む。角館氏より来翰あり。蚕業伝習所<sup>382)</sup>ニ入学許可ありし由なれば返事をしたゝむ。

九月十四日（水）雨

〔発信〕角館氏へ

〔受信〕父上、小林氏より

九時頃学校ニ行きて農場を見回る。午後より又々原氏の送別会委員会ありて、金曜日ニ行ふことに相談を更ふ。本日より実科演習あり<sup>383)</sup>。講義の後、ゲルベル氏の脂肪計<sup>384)</sup>を実見す。夜は雨なりしも半澤氏宅を尋ね種々旅行談などなして九時過に帰る。之の日雷雨あり。

九月十五日（水）

朝は九時頃より農場ニ至りて畑を見廻る。大光寺も居りたり。ビートは如何なるものかと生のまゝ<sup>[じ]</sup>かちり見しに、その時は甘かりしかと、暫時にしてのどえがからくなり中々直らず。夜に入るも工合何となくおかしく大ニよはる。午後より演習ニ行きて、昨日の講義の実見をなし見る。乃ち、牛乳の比重と脂肪量を計りたり。夜食後、散歩に南四条辺迄行き、レクチュアを下読みし、父上ニ手紙を書く。

九月十六日（金）晴

〔発信〕父上

五時の鐘を聞きて起き出づ。未だ<sup>[だ]</sup>太陽も昇らざりし。例の如くクラフトと牛乳と衛生とを読み、八時半頃ニ学校ニ出掛けて図書館ニ入る。十二時半ニ急ぎ<sup>[き]</sup>帰りて、一時過ぎ原先生送別会場なる同窓倶楽部ニ赴く<sup>385)</sup>。二時頃ニ開会し、中村氏<sup>386)</sup>の送別ノ辞及び原氏の答辞あり。スシ、菓子などの御馳走ありて散会せしは五時なりし。夜は南二条ニ出掛けて買物をなす。

九月十七日（土）雨

朝よりして雨降る。午後は実験室ニ行きて、顕微鏡を引き出だし、フェッテ、キウゲルを見んとしたれど、先生居らざれば何にやら別からず。例の石油ランプを出だして、ミルクを温め飲みて帰る。博物学会にては原先生送別の写真をとりし様子なり。

九月十八日（日）晴

八時半ニ原先生を見送りの為め停車場ニ向ふ。見送り人多く群集したれば早く別れを告げて、為替を受け取りの為め東一丁目に行き、更ニ南一条ニ出で、買ひ物をなし支那カバン

一個も買ふ。江刺家氏来訪して午後より佐藤政次郎<sup>387</sup>を訪問せんと約す。十時頃より独立教会ニ行きて説教を聞き正午ニ帰る。昼食後、江刺家と東三丁目（南三条？）に佐藤氏を訪問し、午後三時頃に辞し去る。途中にて江刺家氏ニ別れて、小池氏を更ニ訪問し、種々談話の末、氏か帰省に画かれしスケッチなどを見、談は絵画ニうつりて興をもようす。

九月十九日（月）晴

八時半より宮部氏の授業あり。初めなれば直ニ休みとなる。水曜日ニ昆虫採集旅行<sup>388</sup>の爲め、定山溪ニ出立の積りなりしも、一寸せし行違ひより明日出立することに許可を得たり。江刺家一人のみ不平を言ひて行かぬとがんばりしも、夜ニ入りて河野氏の話しニよれば行くとか言ひぬ。午後より実験室ニ行きてマルシャン<sup>Marchand</sup>氏の酪乳計を試験す。旅行の費用二十一円を会計より受け取り、河野氏巡視室ニ居りたれば直ニ渡して、農園ニ再び引き返し菜豆の収穫を初めたれど、僅か<sup>【畝】</sup>二うねにして日はくれたれば帰る。夜は南一条迄行きてトルストイの日露戦争論<sup>389</sup>を買ひ求む。夜ニ入りて稍々秋冷を感ず。

九月二十日（火）午後雨

三時半、宿のおばあさんの来りて、雨降りおれども今日行かるゝかと言ふ声ニ目を醒まして耳をそばたつれば、実ニ雨しきりと降りぬ。されど如何とも吾れのみにては決し難ければ、先づ<sup>【ず】</sup>五時頃<sup>と</sup>ニ兎も角飯の食はるゝ様ニ頼みおきて又ねむる。六時頃ニ河野氏と出立す。之れ之度の級会委員なれば、先発隊として行く為めなり。山鼻<sup>【二字空欄】</sup>□□氏宅によりて林檎、枝豆などをもらへ行く。道々食して腹ふくれしが、御料の橋二つき、時も概く十時半頃なれど茲にて昼飯を終る。簾舞より急ぐほどに、定山溪の温泉二つきしは十二時半なりし。幾度も来なれし途なれば別段面白き事もなし。新しき座敷を占領し、風呂ニ入りて待つほどニ、三時半頃よりポツ〜来りぬ。雨も降り出したれば皆々かこつ。夜は定山溪にて買ひし菓子を出して食ひ、名指しなどありし模様なりしも、委員等は中々いそがし。

九月二十一日（水）

昨日より降りし雨なれば今日のははるゝならんと思ひたれど、中々霽<sup>【ど】</sup>るゝことなくして小止みもなく降りたれば、午後に至りては豊平川の水量増して濁水混々として岩をかんで流る。昼食には札幌より買ひ行きし豚汁の御馳走ありしかは、皆々腹のふくるゝまでつめ込み、或人の如きは十二三杯を食へしとか、三升とかの米を食へしとて、宿の主人も驚きぬ。朝よりしてトランプなどをなして日を消す。夜は松村先生の昆虫採集談あり。終て級会ニ移り、菓子、林檎などの御馳走あり。ミルク入のコ [ー] ヒーを作りし為め非常ニいそがしく、殆ど目を回す計りなりし。松村の腕前々談ニ、宿の常次郎と云ふ若者の尺八吹奏などありて散会す。床ニ入りて、次の如き天狗俳句を催す。覚えたるものゝみを誌せば、

虫も得す唯た帰りけり雨の旅 拙

秋寒や明日をも知らぬ虫の声

雨の夜虫の博士の談りける

雨降るや虫も取らずに鳴く計り 大光寺

雨降るや保らは吹かずに笛を吹く

虫とりや雨の二日をかこちけり 安東

雨はれて虫の音高し秋の月 橋本

秋寒や昆虫びんの虫の声 安部

九月二十二日（水）曇

五時頃ニ起き出で、風呂ニ入る。旭かゞやき渡りたれば皆々喜ぶ。九時頃ニ仕度して出立す。途々採集せしも吾等は専門ならねば、余程先き立つ。一の橋あたりにて空模様あやしくなりたれば急ぐ程ニ降り出しぬ。簾舞にて先行せし連中五人計り待ち居りぬ。茲にて昼飯し、先生がたをも待ちうけて一時過ぎニ出立す。空はれて又降る模様もなければ大ニ安心す。<sup>〔確〕</sup>堅石山街道ニ出で、行く。石山にて農家ニ入りてきみを食し、林檎などを食ふ。八垂別<sup>390</sup>にて田舎相撲を見、後れたればとて急ぐこと飛ぶが如く。途も非常ニ悪し。本願寺の門前迄一時間半にて着せし由なり。宿ニ着きしハ六時にて已ニ日は暮れて暗黒となりぬ。風呂ニ入りて新聞を読み八時頃ニいぬ。

九月二十三日（金）曇

〔発信〕直次へ

朝は牛乳と衛生を少しく読み、東京の弟ニ手紙を書く。九時頃ニ農園ニ行きて菜豆、小豆の収穫をなす。大光寺も来りてそば<sup>〔蕎麦〕</sup>を刈り取る。雨降り出でたれば急ぎ<sup>〔急〕</sup>て帰るに、やがてはれたり。午後より豆を煮て食はんとて大光寺氏を訪問す。中々味美<sup>〔美味〕</sup>なり。三時頃竹田、橋本及び一昨日帰られし由の藤井も尋ね来て、又々豆を煮、談話ニふける。藤井と橋本とにて一家を構へんと相談するに、早速きまりて明日家を尋ねんと約す。夜は又牛乳と衛生を少しく読み、ノートをしらぶ。

九月二十四日（土）大雨

八時半頃より図書館ニ行く。南先生ハ休みなれば昆虫をくり上ぐ。午後よりは橋本氏の下宿を尋ねて、一時半頃より藤井と三人にて貸家を探すに出掛けしに、一二町にして大雨となりたれば偕楽園側の樹下ニて小降りとなるを待ちしかと、中々止むことなく盛ニ降りしかば雨をおかして青年会寄宿ニ至り<sup>〔至〕</sup>霧る、をまちて出掛く。女学校の辺ニも良きものありし。それより東の方ニ行きてビール会社の裏、御料局の近辺及び製糖会社の方まで尋ね、此度は北の方を探し見んとて一先づ<sup>〔先〕</sup>ミルクホールに入りてつかれし足を安ぬ。再び中学校をぐる〜と回りしかと<sup>〔と〕</sup>、思はしきものなく帰る。今晚は中秋明月<sup>〔名月〕</sup>の夜ニ当れば、大光寺宅ニ藤井、橋本、竹田等と会し、枝豆、南瓜を腹のさくるほど<sup>〔割ける〕</sup>食へ、俗歌の稽古に大声をはり上げて大ニとなりて月を賞す。

九月二十五日（日）晴

〔受信〕石黒

昨日見し内にて女学校裏の者や、良き様なりしかば、再び行きて談判し見んとて橋本と共に青年会ニ藤井を訪へ共ニ出掛けしに、其の途中ニ<sup>〔建〕</sup>畳立具はなけれど四円五十銭にてかなりの家ありしかば、又々之れニ心を転じ大家ニ逢ひて談ず。女学校裏ニも行きしかと面白からぬ返事なりしかば、皆々少々嫌気を生じて出づ。帰りハ橋本と教会ニ行く。午後より

第二農場ニ行きて小岩井<sup>391)</sup>より来りしホルスタインを見、搾乳の有様などをも見て、第一農園ニ至りふらつきて帰る。天気極めて晴朗なりし。本日にて牛乳と衛生及びトルストイのセバストーポール<sup>392)</sup>を読み了る。

九月二十六日 (月) 晴天

午後より畜産実験室ニ行く。レクチュアありて水分の定量、脂肪、<sup>protein[タンパク質]</sup>プロテインの定量法方を筆記す。借家の件は青年会の下の家ニせんと言へしかと、橋本意義ありて今少し低れんなるものを尋ねんとて中学校裏の辺を探せしかと<sup>[ど]</sup>適當のものなく、余一人のみ別れて再びビール会社の辺を見回りしかと思はしきもの見当らず。帰途は河野<sup>393)</sup>と逢ひて共に帰る。六時を過ぎたり。

九月二十七日 (火) 晴天

〔受信〕石黒

午後よりは昨日のレクチュアの実験ニとりかゝる。橋本と藤井とは又々家さがしに出かけたれど、<sup>[物]</sup>適當の者見当らざりしか聞きぬ。五時半頃より大黒座の活動写真を見にとて竹田、安東、柳川、江刺家と五人連にて行く。聞きし程は良くあらざりしかと<sup>[ど]</sup>長時間のものは皆なよかしき。ロビンソン・クルーソ、<sup>Robinson Crusoe</sup>水難救助、アラビヤン・ナイトなどは<sup>[ど]</sup>最も人目を喜ばせたり。

九月二十八日 (水) 晴天

如何にさがしても適當の貸し家なければ、当分の内は高村氏<sup>394)</sup>の居りし貸し間にて間ニ合わせんと相談一決し、学課すむや否や三人にて行きて<sup>[談]</sup>断判す。四円三十銭なりしものを三円八十銭<sup>[他]</sup>ニ直下<sup>[い]</sup>げさせ、<sup>[き]</sup>畳の古きところをかへさせる約束をなす。之れにて先づ<sup>[ず]</sup>一<sup>[段]</sup>だんらく付きぬ。午後よりは実習室ニ行くこと例の如し。

九月二十九日 (木) 晴天

朝は少しく早く行きて図書館ニ入る。南先生は愛嬢の結婚式昨日ありしとかなれば、本日は休まる<sup>395)</sup>。午後より行きて<sup>ash[石灰灰]</sup>アッシュ、<sup>[ロ]</sup>プラテン、脂肪の定量ヲ行はんとせしかど何れも時をとりて五時を過るも結果を得ざりしかば皆な中止して帰る。夜は小泉氏を訪問し、中村、宮城なども来りて談話し、九時を<sup>[き]</sup>過ぎ帰る。

九月三十日 (金) 晴

今日は本科一年級の歓迎会ある由なれど、吾が級にて出席せしハ三人のみとか聞きぬ。藤井今日ノ午後ニ新宅へ引越す由なれば、実習すみて後ち行き見るに明日になせしとか。夜に入りて中村来り、小泉今夜吾かあとへ引き越し来るとの事なれば、山崎ノ方に話しおく。橋本、藤井、竹田来訪して共に南一条に出掛け、陶器、金具類の世帯道具を買ひ求む。

十月一日 (土) 晴

橋本先生ノ授業のみありて休みとなる。畜産実習室ニ入りてアッシュの重量のみを見て帰る。昼食後藤井の住所ニ至りて引き越し車の手伝をなし、吾れ等は橋本と二時半頃ニ荷馬車<sup>[車、ひ]</sup>を一台やとへて引き<sup>[き]</sup>越す。急ぎて夜食の準備をなし、<sup>[と]</sup>兎に角食し終る。竹田、逢坂氏等手伝へくれたり。夜ニ入りて逢坂、大光寺等来訪、十時を過て帰る。

十月二日（日）

朝は竹田及び橋 [本]、藤 [井] 等のチャーチ行きと一所となり、製本所ニ至りて化学、動物と三冊の製本を依頼す。帰路は遊園地ニ行き岡田花園ニ入りて某々氏等と談話しながら帰る。午後ハ故郷より送り来りし栗を煮おりしところ、柳川、江刺家、中村来訪し日没ニ帰らるゝ。夜は竹田来訪、九時半を聞きて帰る。藤井氏ハ郷友会ありて東の方ニ行かれたり。

十月三日（月）晴

〔受信〕故郷より

午後よりハ実習ありてプロテンの定量法方を講述せらる。中々にむづかし。牛乳を飲みて帰路ニつきしハ五時を過たり。つたかつらもそろへ色づき初め、藻岩山なども已ニ紅葉しぬ。秋風吹きていとつめたし。山崎ニ立ちよりて新聞、書留を受け取る。夜ニ入りて関来訪、故郷への信書をしたゝむ。

十月四日（火）雨

〔発信〕父上

朝よりして雨降りしか昼頃ニ至りて止む。実習すみし後、東一丁目郵便受取所ニ至りて為替を受取らんとせしに、未だ通知来らぬ由にて空しく帰る。夜は空よくはれたれど月無ければ、いと暗し。南一条ニ行き買ひ物をなす。夜は末蔵、明八様へ手紙を書く。

十月五日（水）

無事。午後ノ実習例の如し。

十月六日（木）

無事。記事なし。

十月七日（金）

無事。記事なし。之日、橋本銀次郎氏<sup>396</sup>命日なるを以て学校を休業し、一同にて豊平墓地ニ行く。

十月八日（土）

午後より農作物ノ収穫をなす。藪を掘り、にんじん、パースニップ<sup>Parsnip</sup>、ビート、キャベージなど馬車ニつみて一台運ぶ。夜は竹田、大光寺来りて収穫祭を行へ大ニ食ふ。

十月九日（日）晴

午前ハ市ニ出で、買へ物をなす。午後より橋本と学校ニ武術大会<sup>397</sup>を見ニ行く。馬術大会も大通りニありし由なりし。

十月十日（月）晴

別ニ変りしことなし。午後の実習も例の如し。

十月十一日（火）

午後より安東、竹田来訪、安東氏ハ夜九時過ぎ迄種々雑談なして帰宅す。微雨あり。

十月十二日（水）

畜産の連中会合して、十二時より寄宿舎食堂ニ親<sup>[聴]</sup>会を開き、昼食を食ふ。ライスカレ[一]

を満腹せし為め演習の休みなりしを幸ひ、腹の工合を調べんとて第一農園の方二行きしに、アカシア街道にて腹痛し少しも歩行出来ず。暫時、排水溝畔ニ腰かけて休み、そろへ図書館ニ行きて四時頃迄<sup>[病]</sup>をりて工合をとゝのへ帰る。夜は南一条二行きて製本を受け取りしニ、散々の体にて腹打ち立てしも致し方なく、一冊丈は更ニ製本し直さすることゝし、他二冊は不承ながら受取る。

十月十三日（木）晴

本年の初霜、之の朝結ぶ。半澤氏より借り受けし進化論講話<sup>398)</sup>を読み初む。江刺家氏、競馬の際陰部ニ負傷したりし由なりしが、本日関場病院<sup>399)</sup>ニ入院せし由なり。

十月十四日（金）晴

別段ニ記事なし。農〔学〕甲〔科〕の親<sup>[聴]</sup>会ありし由なり。竹田氏一寸立ち寄らる。半ヶ月ぶりにて入浴す。朝は降雨あり。

十月十五日（土）

午後より博物学会あり。松村先生と原先生ノ換りに来りし動物学ノ講師八田氏<sup>400)</sup>の講演あり、傍聴す<sup>401)</sup>。夜は製本を受けとるに南一条二行き、久しぶりにて夜学校ニ至り見る。休暇後一度も行きしことなかりしかば、何となくなつかしき情、油然として起る。午前は曇りしかど、夜に入りて雨となる。

十月十六日（日）

朝は三人かゝりにて、とろゝ汁を作り大ニ食ふ。味ひ特に美なればあくことを知らず。十時頃より北辰病院ニ江刺家の病気を訪問す。午後は大光寺も来り。フライ <sup>fry</sup>、ラムレット <sup>omelette</sup>などの西洋料理をなせしが、フライの鮭は時を少しく経ちし為め腐かりしには閉口しぬ。其の後買ひ来りし菓子、林檎を又も食ひて満腹す。林檎の名称などを研究し雑話にふける。夜は青年会寄宿舎ニ預け物をとりに行く。大光寺は十時まで話して帰る。朝は昨日よりの降雨尚ほ続きしが、八時頃より霽<sup>は</sup>れたり。夜に入りて時々片月出でたれど<sup>[ど]</sup>、天候定かならず。

十月十七日（月）

夜学校の女生徒本日藻岩山へ遠足ある筈なれば、早く起き出づ。昼の便当<sup>[弁]</sup>のおかず無き為め芋<sup>[フライ]</sup>のふらへを作りなどせしかば<sup>[ば]</sup>、出発は九時二なりぬ。師範学校の前にて林檎を三斤買ひ求む。温泉の上にて高地<sup>[河内]</sup>ニ出逢ふ。急き上りしかば、ばらへ<sup>[ぎ]</sup>ニ上り行く生徒を逐ひ越して、先発の人々と稍々頂上ニて一所となる。之の山ニは本年に入りて此度が初めて上りぬ。道も少しく変りしところありたり。天気は特別によく、万山の樹木紅黄の色を呈し、特に中腹谷にのぞめる辺は見事なりき。十一時ニ頂上ニ達す。ぶらへ<sup>[ど]</sup>と遊び、二時頃ニ下山す。恵庭岳特ニ趣味あるを覚えたり。

十月十八日（火）曇

朝は雨降る。別ニ記事なし。

十月十九日（水）

宮部先生は休みにして橋本先生も休みなり。天気も曇る。此の頃は午後も大抵五時頃迄実科のういそがしければ、殆ど記すべき記事なし。

十月二十日（木）

微雨あり。学校ニ行きしところ、軍隊出發するニ付き見送りすべきに付き休業となりしかば、朝より実験室ニ入りて「カゼイン」<sup>kasein</sup>「アルビーミン」<sup>albumin</sup>の定量ニ従事し、午後四時頃ニ終る。今朝第一農園にてデボン犢牛を生みしとの事なりしかば行きて見る。ホルスタンとの雑種なり。夜、橋本ハ停車場ニ見送りに行く。中々盛なりし由なり。

十月二十一日（金）

今日も休みとは知らずして学校ニ行く。初乳を持ち来りしかば、一人にて分析ニ取りかゝる。中々勉強せしかど午後五時頃ニなりて一通りの準備をすまし帰る。竹田来り居りて、夜食後皆々軍隊見送りニ行きしかど、余のみは残りて行かず。

十月二十二日（土）

午後より昨日の実験ニとりかゝる。柳川も本日より初乳、ホルスタイン、デボンの分析ニ取りかゝりぬ。ゲルベルの脂肪計にて計りに初乳は五パーセント、ホルスタインは二、六パーセントを得たり。初乳球を顕微鏡にて見る。

十月二十三日（日）

朝食後は何処へ行かんかと考へおる内ニ雨模様となりたれば、出でずして新聞、雑誌などを読む。昼食の御馳走に南瓜の砂糖入れとビーフステーキ<sup>beefsteak</sup>を作る。中食後、天気となりたれば、一人にてぶら〜と円山ニ散歩に出掛く。休暇後初めてなれば久しぶりなる訳なり。紅葉<sup>季</sup>の気節<sup>季</sup>は或は少し後れたるかは知らねど、銀杏などの黄ばみたるなどよし。一体、円山は紅葉少なくして黄葉の多き山なり。落葉をふみ別けてさく〜と森の内ニ入り、神社の正面<sup>き</sup>を横きりて、新しき池のふちに出でたり。風寒き上ニ又々雨雲出でたれば急き帰<sup>き</sup>るに、石鳥居の辺より盛に降られたり。夜に入りて竹田来り。シルコ<sup>汁粉</sup>を作りて食ふ。此の日大食せしにか、腹の工合非常ニ悪し。

十月二十四日（月）

午前の授業例の如し。午後より実科講義ありて、飼料分析講義あり。天候例ニよりて定かならず、時々降雨あり。

十月二十五日（火）

〔発信〕川村、父上

今日は学校より真駒内へ遠足ある日なれば八時半頃ニ出掛く。正門内ニ整列して出掛く。豊平橋を渡りてより道路悪しく、平岸村<sup>到</sup>へ致りてハ特ニ甚だし。種畜場ニ至りしハ十一時半頃、乗馬を觀覽し終て、豚汁、林檎の御馳走あり。皆々たらふく食ふ。それより新式牧草の圧さく器<sup>搾</sup>、種馬を見て二時過て校長の沿道風物<sup>到</sup>に對て遇感を講述し、帰路につく。吾等は<sup>が</sup>大急に急きたれば四時頃ニは帰宅しぬ。風呂ニ入りて夜食の御馳走は無かりしかども、菓子を買ひ来りて食ふ。

十月二十六日（水）

朝より休みなりしかども何処へも出でず。天候例ニよりて定まらず、時々雨を降らす。昨日もかなり寒かりしか、今日ニ入りては一層甚だしく、天色もうらうとして今にも雪降る

にやと思はれぬ。午後より竹田来りて竹田も同居することになりたれば、貸家を探しに出掛く。東の方ニも行きたれど思はしきところなく、橋本気は進まぬ様子なりしも、病院西の新しき貸家を六円五十銭にて借りることゝなす。無邪気なる話しをなして九時頃ニいぬ。  
十月二十七日（木）

朝は極めて好天気なり。午後よりSeminar〔演習〕ありしかど何にもやらず、昨日よりなしかけをきしファトを定量して牛乳を飲み四時頃ニ帰る。隣りの大家へ移転のことはりを云ふニ行く。案外渋らず好都合なりし。明後日引越すことゝなす。夜に入りて降雨あり。

十月二十八日（金）

無事。記すべきことなし。

十月二十九日（土）

午後よりして農園の馬車を借り入れ引き越すニ着手す。寒かりしかど天気なれば好都合にて、四度にて三人分を尽く運び、午後竹田のものを運び終りし頃は五時半を過ぎたり。夜に入りて寒ければ急ニストーブを作り暖をとる。小川氏来訪、十一時を過て帰る。

十月三十日（日）

朝は独り留守す。ストーブ屋来りてストーブを据へ付く。朝より寒気甚だしく、雪紛々として降り出せしが中々止まず、夕方ニなりては一面の銀世界となりて一寸余も積りぬ。

十月三十一日（月）

別段記事なし。夜ニ入りて伊崎氏来訪。買物の為め三人にて南一条辺ニ出かく。

十一月一日（火）

〔発信〕 父上、弘道会、角館、石黒

今日は果樹展覧会の発会式なる日なれば、橋本先生の授業のみをくりのべて、朝より休みとなる。セミナーに入りて実検ニ着手し、帰家せしハ四時過ぎ。今日にてコロストラムの分析を終りたれば、牛乳の分析は今日にて切り上ぐ。夜は米桶を買ふに南一条迄出掛く。

十一月二日（水）

宮部先生の授業ありしのみにて、橋本先生ノ授業は来週にすることゝして、果樹展覧会を見ニ行く。中々の出品数なれども、余等門外漢は別らず。郵便為替受取ニ行きたれど、資金なき為め空しく帰宅す。午後はセミナーニ行きて牧草の分析ニ本日より着手す。之の日、余の当番なりしか、朝ニしんめしをたきて困却す、呵々。

十一月三日（木）

朝よりして大雨にて少しも霽れず。七時半過ニ起き出づ。橋本は学校ニ行きしかど、式ニ間ニ逢はずして空しく帰りたり。石川氏小樽より出札、来訪せられたり。午後ニ入りて女学校の生徒某氏来訪。余は為替受取の為め北八条ニ行く。雨はれたれど、道中々悪し。夜は夜学校ニ茶話会ありたれば竹田と共行く。帰りて床ニ入りしは十一時を過ぎたり。

十一月四日（金）

〔受信〕 足助より

朝は晴れたりしが十一時頃より雪となる。橋本先生のみありて休みとなる。学校の節下に

て富良野の酒井氏の訪ね来りしに行き逢ふ。品評会の為めに出札せし由にて、午前ニはわざわざ拙宅まで尋ね行かれし由にて是非一度は面会せんと尋ね回りしとか。好意、謝すべし。大雪の為め四時半頃ニは已ニ暗かりし。藤井氏と共に帰る。

十一月五日（土）

橋本先生のみありて休みとなる。午後より農場品評会<sup>402)</sup>を見ニ行く。セミナーに入りて<sup>〔一字空欄〕</sup>□灰をやきなどせしかと、別段之れと云ふことをせず、三時半頃ニ牛乳を取りて帰る。近日来の雨雪の為め道わるし。柳川の子息、余程望みあるとかにて又入院せし由なれば、一寸帰路立ちよりしかど不在の模様なりしかば直ニ帰る。

十一月六日（日）雨

朝より雨模様にて道路非常ニ悪るれば外出せず。橋本も今日は教会ニ行かず。午後より風呂ニ行く。十数日来の<sup>〔垢〕</sup>あかを洗ふ。東郷君ニ逢ふ。

十一月七日（月）雪

記事なし。

十一月八日（火）

記事なし。雪降る。

十一月九日（水）

今日より<sup>ガス</sup>瓦斯と水と通る、実験ニ便なり。柳川も来る。午後より特ニ大雪となる。

十一月十日（木）

天気なれと<sup>〔ど〕</sup>道路悪るし。午後より乗馬稽古<sup>403)</sup>の為め柳川、湯地と三人にて馬二頭を引き出し牧草地ニ行く。初めなれば尻工合定まらず、おかしけれど乗り廻す。秋色<sup>〔蕭〕</sup>肅条として真に画にも似たらんか。

十一月十一日（金）

〔受信〕石黒

無事。記すべきことなし。セミナーにてアーバー<sup>arbor</sup>の分析ニとりかゝりたる為め時間長くなり、帰宅せしハ五時を過て已ニ暗黒界となりぬ。

十一月十二日（土）

例の如し。午後よりセミナーあり。松井氏来りて夜の九時過ニ帰る。<sup>〔計粉〕</sup>シルコの御馳走あり。

十一月十三日（日）

晴天なれば午前ハ農場ニ行きて、大根、蕪菁などを抜き、手竹も取りはらう。午後よりハ大根などを漬物となし、二時頃より南一条の書店まで行き、帰路北辰病院ニ江刺家の病氣を見舞ふ。数日前更ニ手術を行へしとかにて、今月中ハ入院するならんとか。

十一月十四日（月）

昨夜よりして雨となり、午後ニ入りてや、<sup>は</sup>霽れたれど、又々降り出す。昨日よりして気候稍々緩なり。牧草の分析を先つ<sup>〔ず〕</sup>終りしなれば、本日より<sup>〔糞〕</sup>フスマの分析ニとりゝる。

十一月十五日（火）晴

〔受信〕角館、明八君より

別段記事なし。夜は南一条ニ買ひ物ニ行く。月光、満地を輝す。

十一月十六日（水）

記事なし。

十一月十七日（木）晴天

午後より牧場地ニ行きて乗馬の稽古をなす。天気よけれど風中々寒し。明八、末蔵様ニ手紙を書く。

十一月十八日（金）

〔発信〕明八、末蔵様へ

記事なし。夜は南一条辺まで散歩へ出掛く。

十一月十九日（土）

記事なし。

十一月二十日（日）晴天

午前は教会ニ行く。午後は農園ニ牛乳をとりに行く。大光寺来る。夜は素木も来りて種々談話し、九時過ニ帰る。

十一月二十一日（月）晴

記事なし。

十一月二十二日（火）

記事なし。

十一月二十三日（水）

赤飯を炊く。朝より外出せず。午後ニ至りて小池氏来訪。夜は南一条ニ行く。

十一月二十四日（木）

九時頃より三、四年一同、茨戸街道の製線所へ縦覧の為め学校を出発す。十時半頃、同所を見終りて、更に製麻会社ニ行き、案内を受けて各所を見、帰路に就きしハ一時半なりし。家ニ帰りて昼飯を食し、農園ニ牛乳を取りに行き、四時頃ニ同窓倶楽部の佐藤氏の入営送別会ニ赴く。東郷、安東等の送別ノ辞などあり。種々馳走の後、六時過ぎ<sup>〔暮〕</sup>皆々と帰路ニ就き南一条ニ出て、帰る。

十一月二十五日（金）

晴天。記事なし。

十一月二十六日（土）

今日は休みなれど実験の為め九時頃学校ニ行く。三時<sup>〔漸〕</sup>ニ概<sup>〔結〕</sup>く終る。モルモットに拮核菌を注射するを見る。博物学会もありし由なれ<sup>〔と〕</sup>と行かず<sup>404)</sup>。夜は南一条ニ行く。雪となる。

十一月二十七日（日）

記事なし。

十一月二十八日（月）

記事なし。

十一月二十九日（火）晴

記事なし。昨日よりのどの工合おかしかりしか、夜ニ入りて弥々風邪の気味となる。

十一月三十日（水）晴

記事なし。

十二月一日（木）晴

今日は佐藤陽太郎氏入営の日なれば、我級一同にて見送らんとて休む。入営は九時なれば、五時頃より橋本起き出でランプを灯して炊事なせしが、皆々行く頃ニは七時となりぬ。吾れのみハ風邪なれば行かず。十二時頃まで図書館ニ行きて雑誌を読む。一時頃に皆々帰り。午後より南一条ニ行きて床屋ニ入る。

十二月二日（金）

晴天。橋本先生ノ授業あり。午後は実習ノレクチュアあり、肥料の分析となる。江刺家氏本日より出校す。

十二月三日（土）

〔受信〕父上

晴天。温かにして小春日和なり。午前は図書館ニ行く。午後よりも学校ニ行きて、実験室ニ一寸より柳川の手伝をなす。

十二月四日（日）

〔発信〕父上へ

午前は家ニあり。午後も又、朝よりして天気曇りしが、午後ニ入りて雨となる。キヤーベーチを沢山買ひ込みて漬物ニなす。

十二月五日（月）

記事なし。

十二月六日（火）

今日も記事なし。

十二月七日（水）

本日試験の日割分る。十四日より始まり、十九日ニ終ろす。雨降り出す。

十二月八日（木）晴

記事なし。実課の方は本日迄にて、燐酸検定の試薬を作りしのみにて、明日より一先づ<sup>〔休〕</sup>休むことゝなす。

十二月九日（金）晴

〔受信〕小包

記事なし。試験の準備にいそがし。故郷より勝栗小包にて来る。

十二月十日（土）晴

朝より家ニあり、午後ハ風呂ニ行く。夜は散歩ながら皆々南一条まで行く。

十二月十一日（日）

〔発信〕父上、丸善へ

朝よりして家ニあり、試験準備ニいそがし。午後より雨となる。夜ニ入りてハ雪となる。昼よりして栗の御馳走のみありしかば、腹の工合宜しからず。<sup>[ず]</sup>

十二月十二日（月）

朝は非常ニ寒し。薪無くなりたれば南一条辺ニ行きて円山の方より来る薪売りをつかまへ<sup>[談]</sup>断判して壹円九十銭にて購ふ。午後ニ入るも暖気とはならず。終日家ニあり。

十二月十三日（火）

寒気甚し。記事なし。

十二月十四日（水）

特有作物ノ試験あり。午後より図書館ニ入りて細菌を読む。

十二月十五日（木）

細菌学ノ試験あり。天気となりて氣候や、温し。午後より練兵場ニ散歩に行く。夜ハ南一条の書店まで行く。

十二月十六日（金）

普通作物の試験あり。朝より温かなりしか<sup>[か]</sup>、午後ニ入りて雨となる。夜は大雨にして雷鳴も之れニ加はる。夜明ニなりて止みし模様なり。温暖。

十二月十七日（土）

生理学ノ試験あり。朝よりして温暖。雨と雪と暫時降りたれ止む。午後ニ入りて伊崎来る。

十二月十八日（日）

〔受信〕故郷<sup>ママ</sup>へ

晴る。記事なし。室内ニありて経済を読む。

十二月十九日（月）

経済の試験あり。試験今日にて終了す。暴風雪となる。夜ニ入るも止まず。寒気甚だし。

十二月二十日（火）

〔受信〕丸善

朝も昨日の風止まず。図書館ニ行く。午後よりハ南一条ニ出掛く。散歩の為めなり。

十二月二十一日（水）

雪降る。外出せず。

十二月二十二日（木）

図書館ニ行きて本を借る。思はしきもの一冊もなし。午後よりハ乗馬を試む。晴天。

十二月二十三日（金）

昨夜よりして降りし雪、朝起き見れば一尺ニ近く積りぬ。終日霽れず<sup>は</sup>、午後よりハ大光寺氏を訪問の為め行く。夜食の御馳走ニなりて八時過帰る。中々寒し。他の連中ハ青年会<sup>405)</sup>の記念会へ出席せられて十時過帰らる。

十二月二十四日（土）晴

午前ハ小泉氏を訪問す。午後は南一条ニ行きて買ひ物をなす。夜ハ独立教会のクリスマスニ出席す。

十二月二十五日（日）

記事なし。

十二月二十六日（月）晴

記事なし。午後より学校ニ牛乳とるニ行く。江刺家おりて実験をなしてあり。

十二月二十七日（火）晴

午後より夜学校ニ行く。卒業式明日あるなれば、準備の手助せん為めなり。皆々来りてそろへ茅屋をかざりつゝあり。福引の主任を頼まれて家ニ帰る。夜はメソヂスト教会<sup>406)</sup>のクリスマス祭ニ行く。

十二月二十八日（水）晴

朝より福引の準備にて、橋本と首引きをなす。安部氏来らる。午後二時頃ニ概く百本計り作り買ひ物ニ出で行く。勤工場などにて品物を大抵買ひ集む。夜学校ニ行きて生徒等を頼みて概く準備し終る。大嶋先生、末光の演説あり、余興ニ移る。獅子舞、北澤の勤しん帳、いろはにほへと、亀と兎、落語、遠友パンヤ、車の衝突、ポスト、練兵など種々抱腹のことありて、例年の如く笑へ興じぬ。福引をなし終りしは十一時に近かりし。

十二月二十九日（木）晴

午後より学校ニ手紙来り居るやと行き見しかど何にも来り居らず、そのまゝ東の方ニ出で、夜学校ニ行く。今日卒業生ノ為めに写真をうつす為めなり。宮部先生も来られたり。三時過ニ終りて帰る。

十二月三十日（金）

〔発信〕足助

午後より遊園地ニ出で豊平バンクを通りて帰る。晴天なれば心地よき日なりし。

十二月三十一日（土）

〔発信〕丸善

午前午後とも家ニありて正月の準備ニいそがし。夜は家内一同にて、みそかそばを食ふニ狸小路<sup>407)</sup>ニ行く。佐藤の妻君来りて、かるた会を催す。期くして之の年を暮しぬ。

### 【注】

- 1) 大光寺毅夫（本科学生、1906年本科卒業〔23期生〕）
- 2) 札幌市街中随一の商店街通り。創成川より西側にあたる西1丁目～5丁目が最も繁華であった。
- 3) 丸井今井合名会社（札幌区南1条西1丁目6番地。以下、住所では札幌区を略す）。札幌区随一の呉服・太物・洋物商。
- 4) 四方拝（三大節のひとつ）
- 5) 齊藤友八（札幌市地方裁判所書記、札幌郡山鼻村133番地在住）
- 6) 安東多加喜（本科学生、1906年本科卒業〔23期生〕）
- 7) William Shakespeare
- 8) 坪内逍遙（坪内雄蔵、1856～1935）
- 9) 坪内雄蔵『英詩文評釈』（文学叢書第5編、東京専門学校出版部、1902年）

- 10) 小島正治（石黒春秋と改名、千葉医学専門学校生徒）。川嶋一郎とは東京遊学以来の友人。
- 11) 中島遊園地（南7条西1丁目）。遊園地のほか、花園（岡田花園）、物産陳列場などが備わっていた。
- 12) 富貴堂（南1条西3丁目）。札幌区随一の書籍・雑誌類・雑貨・文具商。
- 13) 中野時計店（南1条西2丁目16番地）のことか。
- 14) 角館喜一郎（農芸科生徒、1904年農芸科卒業）岩手県二戸郡金田一村出身。
- 15) 足助素一（森林科生徒、1904年森林科卒業）
- 16) 川嶋貞三（川嶋泰作の三男、一郎の弟）
- 17) 小泉藤之介（本科学生、1906年本科卒業〔24期生〕）
- 18) 札幌停車場（北6条西3丁目）
- 19) 工藤敏雄（予修科生徒）
- 20) 太布留吉
- 21) 安部忠一（本科学生、1906年本科卒業〔24期生〕）
- 22) 原十太（札幌農学校教授：動物学）
- 23) 恩地剛（予修科生徒）
- 24) 義経伝説中の盗賊。能「熊坂」、歌舞伎「熊坂長範物見松」等の演目に登場する。
- 25) 能の演目。
- 26) 下斗米貞五郎（正教会伝教者）
- 27) 國分壽郎（東京市本郷区台町在住）岩手県出身。
- 28) 澤藤小太郎（夕張郡長沼村在住、後に帯広郵便局勤務）岩手県出身。
- 29) 石川千代松『進化新論』（敬業社、1891年初版）のことか。
- 30) 高見長恒『畜産汎論』（帝国百科全書第53編、博文館、1900年7月初版）
- 31) 川嶋明八（川嶋民八の五男、一郎の叔父、近衛歩兵第四連隊第十二中隊見習士官）
- 32) 川嶋直次（川嶋泰作の二男、一郎の弟、米澤長五郎家の養子となり米澤直次と改姓）
- 33) 川嶋末藏（川嶋民八の六男、一郎の叔父、野戦砲兵連隊第六中隊見習士官）
- 34) 内藤半兵衛
- 35) 米澤長五郎
- 36) 川嶋隼次郎（川嶋民八の三男、一郎の叔父）
- 37) 國分兵吉（東京市本郷区台町在住、國分壽郎とは兄弟）
- 38) 河内完治（本科学生、1905年本科卒業〔22期生〕）
- 39) 遠友夜学校の前身は1890年札幌独立キリスト教会有志が南3条東4丁目1番地に創立した同教会附属日曜学校「豊平日曜学校」。その後、1894年新渡戸稲造が、貧窮する家庭の児童、晩学者に普通教育を施すために日曜学校跡を引き受けて「遠友夜学校」を開校した。
- 40) 末光績（本科学生、1906年本科卒業〔23期生〕）
- 41) 池田競（本科学生、1908年東北帝国大学農科大学卒業）
- 42) 千葉良祐（名古屋安房町3番地在住）
- 43) 小椋科三（本科学生、1904年本科卒業〔21期生〕）
- 44) 東郷實（本科学生、1905年本科卒業〔22期生〕）
- 45) 関貞治
- 46) 寄宿舎内にあり、新聞・雑誌閲覧のほか、舎生の娯楽室として使用されていた。
- 47) 第18回開識社例会。演説会を開くべきところ、新年のため歌留多会に変更となった。茶菓、密橘、雑煮等が出た。開識社は1876年11月札幌農学校本科生のもとに結成された弁論・討論団体。
- 48) 森澤徳太郎（山口高等学校生徒）
- 49) 尾泉良太郎（札幌農学校教授：農学、1882年本科卒業〔3期生〕）

- 50) 1895年博文館が創刊した総合雑誌『太陽』
- 51) 1895年博文館が創刊した青少年向け雑誌『少年世界』
- 52) 竹田茂（本科学生、1906年本科卒業〔23期生〕）
- 53) 徳富蘆花（健次郎）『トルストイ』（十二文豪第10巻、民友社、1897年4月初版）
- 54) 山谷茂三郎（東京市牛込区西五軒町在住）
- 55) 古館市太郎
- 56) 区立札幌病院（北1条西8丁目、院長：関場不二彦）
- 57) 蠣崎知二郎（札幌中学校教諭、1901年本科卒業〔19期生〕）
- 58) 松村松年（札幌農学校教授：昆虫学、1895年農学科卒業〔13期生〕）。
- 59) 文武会第9回例会（於 北講堂）。蠣崎知二郎「吾が見たる禅学及易学改良に対する卑見」、松村松年「ハンガリー談」の講演があった。
- 60) Lev N. Tolstoi, *Resurrection*.（トルストイ『復活』の英訳）
- 61) 豊平川の架橋。
- 62) 札幌市街中の商店街の通り。西1丁目～4丁目が繁華であった。
- 63) 庁立札幌高等女学校（北2条西11丁目、1902年4月設立）
- 64) 札幌郵便局（大通西2丁目）
- 65) 高杉栄次郎（札幌農学校講師：英文学）
- 66) 高山林次郎『論理学』（帝国百科全書第12編、博文館、1898年9月初版）のことが。
- 67) 逢坂信丞（本科学生、1908年東北帝国大学農科大学卒業）
- 68) 庁立札幌中学校（北10条西4丁目、1895年6月設立）
- 69) 札幌農学会第20回例会、松村松年「欧州に於ける農業視察談」の講演があった。『農友』第27号（1903年2月25日発行、1～5頁）、同第28号（1903年3月25日発行、1～4頁）に詳しい。
- 70) 遠友夜学校男子生徒の修養会。
- 71) 丸善株式会社書店（東京市日本橋区通3丁目）
- 72) 北海道教育会附属図書館（北1条西3丁目1番地、1899年10月設立）
- 73) 北澤小八郎（本科学生、1905年本科卒業〔22期生〕）
- 74) Shakespeare, *Othello*.（シェークスピア『オセロ』）
- 75) 1901年結成された札幌農学校生による俳句の会。
- 76) 札幌農学校関係者を中心に1891年創立された、動物学、植物学、人類学、地学に関する研究団体。会頭は宮部金吾。
- 77) 新島善直（札幌農学校教授：森林学）
- 78) 宮部金吾（札幌農学校教授：植物学、1881年本科卒業〔2期生〕）
- 79) 札幌博物学会第106回月次会。宮部金吾「本邦産 *Gymnosporangium* 属に就て」、新島善直「葎樹の小蠹虫 *Scolytus* に就て」の講話があった。
- 80) 鈴木力治（本科学生、1906年本科卒業〔23期生〕）
- 81) 北海道庁（北3条西5丁目）
- 82) 札幌農学校植物園内の温室。
- 83) Maksim Gorkii（1868～1936）
- 84) Gorkii, *Fomá Gordyéeff*.（ゴーリキー『フォマ・ゴルデーエフ』の英訳）
- 85) ゴーリキー『チェルカッシュ』の英訳
- 86) 大黒座（南4条西3丁目、1875年創業の劇場）
- 87) 浅羽靖（衆議院選挙立候補者）。大蔵省属、根室県属を経て、北海道庁理事官（1886～1890）に就任し、札幌区長・札幌外八郡長も務めた。1887年、私立北海英語学校の校長となり、教育事業にも尽く

- した。
- 88) 第8回衆議院選挙が3月1日に迫っていた。
- 89) 狩野時二（本科学生、1906年本科卒業〔23期生〕）
- 90) 北海旭新聞社発行日刊新聞『北海旭新聞』
- 91) 紀元節（神武天皇即位日、三大節のひとつ）
- 92) 札幌神社（円山村、官幣大社。現 北海道神宮）
- 93) 瀧臣弼（北海道拓殖銀行勤務、1901年本科卒業〔19期生〕）
- 94) 半澤洵（札幌農学校助教授：植物学、1901年本科卒業〔19期生〕）
- 95) 野澤俊次郎（北海道庁殖民部水産課勤務、1885年本科卒業〔5期生〕）
- 96) 札幌博物学会第107回月次会。松村松年「浮塵子の分布に就て」、野澤俊次郎「北海道産ハゼ類に就て」の講話があった。
- 97) 池田次郎（予修科生徒、1909年東北帝国大学農科大学卒業）
- 98) 札幌農学校植物園内の博物館。
- 99) 小松宮彰仁（1846～1903）
- 100) 復習講堂（寄宿舎2階、食堂真上）
- 101) Tolstoi, *On Life*. (トルストイ『人生論』の英訳)
- 102) 北辰病院（北1条西4丁目、院長：関場不二彦）
- 103) 坂本太次郎（予修科生徒、1911年東北帝国大学農科大学卒業）
- 104) 札幌農学校生生の発起による「東北地方飢饉救済慈善音楽会」
- 105) 札売、札受、寄附金受取、奥掛、司会者、楷棧敷接待委員など、「慈善音楽会開会当夜委員役割」が寄宿舎に掲示された。
- 106) 札幌座（南7条西3丁目、1902年創業の劇場）
- 107) 石川保治（予修科生徒、1908年東北帝国大学農科大学卒業）
- 108) 江刺家昂（本科学生、1906年本科卒業〔23期生〕）
- 109) 大島六郎が能「羽衣」を演じた。
- 110) 大倉喜三郎が能狂言「隠狸」を演じた。
- 111) 橋本左五郎（札幌農学校教授：畜産学・細菌学、1889年本科卒業〔8期生〕）
- 112) 第8回衆議院選挙（札幌区定数1）の投票日。
- 113) 豊平館（北1条西1丁目）が札幌区投票会場であった。
- 114) 関司（本科学生、1906年本科卒業〔23期生〕）
- 115) 色部米作（本科学生、1906年本科卒業〔23期生〕）
- 116) 対馬嘉三郎（札幌区長、衆議院選挙立候補者）。開拓使中主典（1872～1878）を退き、開拓使官営醸造場を払い受け、酒造業を経営して財をなした。札幌区長も務めた。
- 117) 正流斎南海講演・安藤肅太郎速記『勇士山中鹿之助伝』（銀花堂、1898年）
- 118) 対馬嘉三郎（無所属）168、浅羽靖（無所属）124、中西六三郎（立憲政友会）66で対馬が当選した。
- 119) 高野源之助（無所属）が、高橋直治（立憲政友会）を破り、北海道小樽区（定数1／立候補者3）で当選した。
- 120) 大隈英麿（憲政本党）が岩手県郡部区（定数5／立候補者8）で落選した。
- 121) 徳富蘆花（小説家、1868～1927）
- 122) 徳富蘆花『不如帰』（民友社）。1898～99年『国民新聞』に連載後、民友社より1900年刊行。1903年2月には第27版（30銭）が出版されている。川島武男（海軍少尉）の出征と浪子の病気をめぐる家庭小説。
- 123) 1899年6月より北8条への校舎移転に伴う新築工事が5カ年計画で開始された。

- 124) 山田玄太郎（札幌農学校助教授：農学、1898年本科卒業〔18期生〕）
- 125) 札幌博物学会第108回月次会。原十太「人類の寿命に就ての或る事実」、山田玄太郎「葦樹の皮膚病に就て」の講話があった。
- 126) 台湾総督府へ転出。
- 127) 札幌農学校文武会『文武会雑誌』第40号（1903年3月7日発行）
- 128) 伊崎清（予修科生徒、1907年本科卒業〔24期生〕）
- 129) Alfred Tennyson（詩人、1809～1892）
- 130) 黒岩涙香による「靈魂不滅の説」は『六合雑誌』1903年2月号に、「靈魂不滅説に就て」は1903年1月15日付『万朝報』に掲載されたのち、黒岩涙香（周六）『精力主義』（隆文館、1904年5月初版）に所収された。
- 131) 日本ゆにてりあん弘道会発行雑誌『六合雑誌』。北海道大学附属図書館に同誌の札幌農学校蔵書がある。
- 132) Ernst Heinrich Haeckel（思想家、1834～1919）
- 133) 三並良「哲学者としてのヘッケル」（『六合雑誌』第167号、1903年3月15日発行、9～19頁）
- 134) 秋野合名会社（南1条西1丁目、薬店）
- 135) 徳富蘆花『黒潮 第一篇』（黒潮社、1903年2月27日初版）
- 136) 川村敬二郎（岩手県紫波郡徳田村在住）
- 137) Ralph Waldo Emerson（思想家・詩人、1803～1882）
- 138) 大関雄只（本科学生、1906年本科卒業〔23期生〕）
- 139) 藤井為次郎（本科学生、1906年本科卒業〔23期生〕）
- 140) 庁立北海道師範学校（南1条西15丁目、1886年創立）
- 141) 3月27日、実業学校令の一部改正があり、札幌農学校を実業専門学校とする旨公布された。大学昇格運動を展開している中でこのことであり、学生からの不満も高まった。
- 142) 岡田花園（南1条西1丁目中島遊園地甲十一号）
- 143) 佐藤昌介（札幌農学校校長：農業経済学、1880年本科卒業〔1期生〕）
- 144) 札幌青年同盟会
- 145) 札幌独立基督教会（南3条西6丁目、1899年設立）
- 146) 渡邊環（本科学生）
- 147) 北海道製糖株式会社（北7条東9丁目）
- 148) 小池俊三（本科学生、1907年本科卒業〔24期生〕）
- 149) 4月6日、予修科生徒が同盟して進龍男助教授（漢学）、高杉栄次郎講師（英文学）に対して辞職勧告書を出した。勧告理由は生徒の回想によると成績評価の厳しさからと伝わっているが、明らかとはなっていない。札幌農学校では教官による生徒取調を行ない、4月13日教官会議で停学処分（停学3日2人、停学1週間6人、無期停学60人）を決議した。その後、生徒の謹慎悔悟を認め、同月23日迄に全員が停学解除となった。進助教授は4月30日付で辞職、高杉講師も6月16日付で転出した。
- 150) 大島金太郎（札幌農学校教授：農芸化学、1893年本科卒業〔11期生〕）
- 151) Robert S. Ball, *The story of the heavens.* のことか。
- 152) 新聞広告欄に掲載された火事見舞の広告。
- 153) 下斗米連次郎（下斗米貞五郎の祖父、小樽区稲穂町在住）
- 154) 海老名弾正『耶穌基督伝』（警醒社、1903年1月24日初版）のことか。
- 155) 札幌美以教会（北1条東1丁目）
- 156) 「札幌愛輪倶楽部自転車競走会」が大通西5丁目で開催された。3周～7周競走、余興競走（提灯レース）、役員競走（裁縫レース）などが行われた。

- 157) 大通西5丁目佐野屋か。佐野屋には大島金太郎が1904年4月現在居住。
- 158) M.A. Ward 著・住谷天来訳補『十九世紀之予言者』（警醒社、1903年4月4日初版）
- 159) W. Fream, *Elements of agriculture: a text-book prepared under the authority of the Royal Agricultural Society of England.*, 4th ed, London: John Murray, 1892. 北海道大学附属図書館（札幌農学校文庫）に蔵書がある。
- 160) 第21回遊戯会。遊戯会は外国人教師の提案により1878年から開かれている札幌農学校運動会。「第21回遊戯会報告（三十六年度）」（『文武会会報』第42号、1904年6月、13～18頁）に詳しい。
- 161) D.M. Craik 著・加藤眠柳（米司）訳『英国土道物語』（内外出版協会、1903年4月29日初版）
- 162) 文明堂（出版社、東京本郷4丁目5番地）。トルストイ著・加藤直士訳『我宗教』（文明堂、1903年3月14日発行）の注文をしたのか。
- 163) 成田忠正（森林科生徒、1905年森林科卒業）
- 164) 影山滋樹（本科学生）
- 165) 札幌女子高等小学校（北1条西4丁目）、札幌女子尋常小学校（北1条西3丁目）。1904年には合併し、札幌高等尋常小学校となった。
- 166) 農芸科では英語が随意科目のため、農書を読解する英語力が課題であった。そのため、角館喜一郎（農芸科生徒）は本科生の川嶋に英語教授を受けていたものと考えられる。
- 167) 月寒には陸軍兵営、歩兵連隊演習場があった。
- 168) トルストイ著・加藤直士訳『我宗教』（文明堂、1903年3月14日発行）
- 169) 朝報社発行新聞『萬朝報』
- 170) 那珂通世（東洋史学者、1851～1908）
- 171) 第一高等学校生徒藤村操が1903年5月22日「巖頭之感」を書き残して華巖の滝に投身自殺した。
- 172) 円山麓にあった札幌温泉。
- 173) 橋本健三郎（本科学生、1906年本科卒業〔23期生〕）
- 174) 柳川鑑藏（本科学生、1906年本科卒業〔23期生〕）
- 175) 吉井豊造（札幌農学校教授：農芸化学）
- 176) 内村鑑三編・聖書研究社発行雑誌『聖書之研究』
- 177) 第20回開識社例会
- 178) 芳賀鋏太郎（本科学生、1903年本科卒業〔20期生〕）
- 179) 庁立種畜場が札幌郡豊平村字真駒内にあった。
- 180) 黒岩周六『天人論』（朝報社、1903年5月14日初版）
- 181) 札幌電燈会社（大通西2丁目7番地）
- 182) 武林写真館（南3条西1丁目7番地、写真師：三島常盤）
- 183) 第21回開識社例会
- 184) 川口順次郎（本科学生、1904年本科卒業〔21期生〕）
- 185) 北海道農事試験場（北20条西8丁目、1901年設置）
- 186) 1878年12月5日夜、札幌郡丘珠村で炭焼業の一家をヒグマが襲った。ヒグマ等の標本を札幌農学校博物館が所蔵していた。
- 187) 清国人留学生 呉超（江蘇出身）、屠師韓（浙江出身）が入舎した。
- 188) James Russell Lowell（詩人、1819～1891）のことか。
- 189) 毎年6月15日は札幌神社の祭日。
- 190) 高橋孝治（本科学生、1906年本科卒業〔23期生〕）
- 191) Allen Upward 著・徳富蘆花（健次郎）訳述『外交奇譚』（民友社、1898年10月13日初版）
- 192) 佐野屋（大通西5丁目、旅館）のことか。

- 193) 桜井忠夫（本科学生）
- 194) 梁田参（本科学生、1907年本科卒業〔24期生〕）
- 195) 小川善八（予修科生徒）
- 196) 有島武郎（1901年本科卒業〔19期生〕）有島武郎は6月28日～7月2日在札、父有島武に託された農場に関する用務を帯びて来道していた。
- 197) 札幌農学校本科第20期、予修科第5期、土木工学科第4期、森林科第2期の卒業証書授与式。
- 198) 高松正信（本科学生、1907年本科卒業〔24期生〕）
- 199) 住友璋一（本科学生、1905年本科卒業〔22期生〕）
- 200) 越前谷民治（本科学生、1905年本科卒業〔22期生〕）
- 201) 河村精八（農芸化学科研究生、1903年本科卒業〔20期生〕）
- 202) 「黒田伯銅像」（元開拓長官 黒田清隆の銅像。1903年8月建立、大通西8丁目）
- 203) 正見病院（北1条西1丁目、院長：正見伊三郎）
- 204) 松村松年『日本昆虫学』（札幌農学校学藝会蔵版、裳華房発行）のことか。初版は1898年10月26日。1900～1903年増訂3版が刊行された。
- 205) John Millais, John Gilbert, *A thousand and one gems of English poetry*. 1902.
- 206) 石川雅望『近江県物語』（袖珍名著文庫第6巻、富山房、1903年7月初版）
- 207) シェークスピア著・杉谷代水編『沙翁物語』（通俗世界文学第2編、富山房、1903年3月初版）、シェークスピア著・中島孤島編『沙翁物語』（通俗世界文学第6編、富山房、1903年8月初版）のどちらかであろう。
- 208) 徳富蘆花『青山白雲』（民友社、1898年3月25日初版）
- 209) 1898年11月3日札幌基督教青年会（会長 石澤達夫）の有志が、宮部金吾教授を監督として設立した寄宿舍。1903年当時は北5条西9丁目所在。
- 210) 第5回内国勸業博覧会
- 211) Richard T. Ely, *Outlines of Economics*. もしくは、佐藤昌介訳述『威氏経済学』（丸善商社書籍店、1891年）。Richard T. Ely（1854～1943）は佐藤昌介が留学先のジョンズホプキンス大学で師事した経済学者。
- 212) 素木得一（本科学生、1906年本科卒業〔23期生〕）
- 213) 石澤達夫（北海道庁殖民部拓殖課勤務、1901年本科卒業〔19期生〕）。岩手県出身、農学乙科（畜産）の先輩。石澤は1899年5月～1906年4月まで青年寄宿舍に在舎。
- 214) 荒川重理（農芸科生徒、1906年農芸科卒業）
- 215) 石川金平（札幌農学校助教授：農学）
- 216) 南鷹次郎（札幌農学校教授：農学、1881年本科卒業〔2期生〕）
- 217) 鈴木武良（札幌農学校助教授：農学）
- 218) 北海道製麻株式会社（北7条東1丁目1番地）
- 219) 『学燈』は、第65号（1902年10月発行）にトルストイの著作年譜を掲載するなど、ロシア文学の情報源となっていた。
- 220) 宮城鐵夫（本科学生、1906年本科卒業〔23期生〕）
- 221) Tolstoi, *Death of Ivan Illiwitch*.
- 222) 廣井勇（東京帝国大学工科大学教授、1881年本科卒業〔2期生〕）
- 223) Charles R. Darwin, *The Origin of Species*. (ダーウィン『原種論』)
- 224) 維新堂（南1条西4丁目、書籍・文具商）
- 225) 北海道物産陳列場（中島遊園地内）
- 226) 札幌博物学会第111回月次会（於 動物学実験室）。高橋良直「麦類の銹病に就て」、松村松年「昆虫

の採集旅行談」の講話があった。

- 227) 大島金太郎「欧米に於ける農事研究所巡歴談」(札幌農学会第5回総会)
- 228) 天長節(明治天皇誕生日、四大節の一つ)
- 229) 赤松義高(農芸科生徒、1904年農芸科卒業)
- 230) 北海道農会(北4条西7丁目)
- 231) 教文館(東京市銀座4丁目3番地、出版・書店商)
- 232) 正宗白鳥編『マアテルリンク物語』(通俗世界文学第7編、富山房、1903年9月初版)
- 233) 1903年10~11月『太陽』に連載された姉崎正治(嘲風)「清見湯の一夏」。
- 234) 高山林次郎(樗牛、評論家、1871~1902)
- 235) 札幌製粉株式会社(北6条西7丁目2番地)
- 236) 南鷹次郎(文武会副会頭)
- 237) 大島金太郎「欧米に於ける農事研究所巡歴談(続)」(札幌農学会第22回例会)の講演があった。
- 238) 同窓倶楽部(北2条西1丁目)
- 239) 札幌農学校内における岩手県人会。
- 240) Francis Guénon, *A treatise on milch cows.* のことか。
- 241) 三宅克己(水彩画家、1874~1954)
- 242) 白馬会は1896年黒田清輝らが創設した美術団体。三宅克己は1899年10月第4回白馬会展に水彩画を出品している。水彩画は明治30年代後半から流行し、三宅克己は水彩画普及の第一人者。
- 243) 佐々木和策(宮内省御料局技師)
- 244) 札幌博物学会第112回月次会(於 経済学講堂)。大島金太郎「浅草海苔の成分に就て」、宮部金吾「デ、ブリース氏種類原始論に就て」、河野常吉「チャシ(砦)及チャシコツ(砦跡)に就て」の講話があった。
- 245) 槇段(獣医蹄鉄工、1889年農芸科卒業)
- 246) 安藤義喬(北海道庁勤務、1899年本科卒業〔17期生〕)。学生時代は安東幾三郎(義喬)。
- 247) 農友会は札幌農学校農芸科(旧農芸伝習科)卒業生・生徒等の同窓組織。農友会海外視察談会を開催し、槇段「米国畜産業観」、安藤義喬「濠米視察団」の演説があった。『同窓農友会々報』第35号(同窓農友会、1904年1月31日発行、1~4、8~10頁)に詳しい。
- 248) Tolstoi, *Master and Man.*(トルストイ『主人と下男』の英訳)
- 249) 服制が改正となり、本科生は角帽着用、徽章装着などが定められた(4月1日施行)。
- 250) 大東興之助(予修科生徒、1908年東北帝国大学農科大学卒業)。後に卷淵と改姓。
- 251) 高岡直吉(北海道庁殖民部長、1882年本科卒業〔3期生〕)。札幌農学会第23回例会で高岡直吉「濠洲ノ産業ニ就テ」の講演があった。
- 252) 正岡子規(1867~1902)による随筆「墨汁一滴」(『日本』1901年1月~7月連載)、「病牀六尺」(『日本』1902年5月~9月連載)のことか。
- 253) 河野広中(第10代衆議院議長)が、1903年12月10日、第19回帝国議会衆議院開院式勅語に対する奉答文で、先例をやぶり、対露強硬の立場から桂太郎内閣を弾劾する内容を朗読し、衆議院は翌11日解散となった。連日、新聞は河野議長や各政党の動向を報道した。
- 254) 勸工場(各種店舗・遊戯場が備わった市場)は、第一勸工場(南2条西3丁目)のほか、狸小路に数軒あった。
- 255) 徳富健次郎(蘆花)『思出の記』(民友社、1901年5月15日初版)。「おもひ出の記」は『国民新聞』1900年9月23日~1901年3月21日に連載された。
- 256) 若松賤子訳『忘れかた美』(博文館、1903年4月1日初版)
- 257) 新渡戸稲造(遠友夜学校初代校長、1881年本科卒業〔2期生〕)

- 258) 札幌麦酒株式会社（北2条東4丁目）
- 259) 宮川己作（札幌独立基督教会牧師）
- 260) 川嶋一郎は1896年9月～1898年3月早稲田中学校（1896年4月設立）に在学。当時、教頭が坪内雄蔵（逍遙）だった。
- 261) 松村介石（宗教家、1859～1939）、内村鑑三（宗教家、1861～1930）。内村は1881年本科卒業〔2期生〕、松村介石は松村松年（教授、13期生）の実兄。
- 262) 國分兵吉（郷里二戸出身の友人）。仙台・東京遊学の際、下宿に同宿したこともある仲。
- 263) 藤村操
- 264) 石黒春秋（小島正治）
- 265) 札幌美以教会で行われていた聖書研究会。札幌美以教会青年組合員には、札幌農学校生が多く在籍し、日曜学校教師も務めていた。
- 266) 新約聖書はキリストが処刑前日にエルサレムの Gethsemane（オリブ山の麓）で祈禱したと伝える。
- 267) 工藤敏雄（元本科生）、1903年9月24日渡米のため離札。
- 268) 内藤半兵衛
- 269) 黒澤繁一
- 270) 川村敬二郎（後に仁左衛門、岩手県紫波郡徳田村在住）。川嶋一郎とは東京遊学以来の友人。
- 271) 坪内雄蔵『文学叢書 英文学史』（東京専門学校出版部、1901年6月2日発行）。札幌農学校文庫（北海道大学附属図書館貴重資料室）に蔵書がある。
- 272) 関貞次（岩手県二戸郡浄法寺在住）
- 273) 佐瀬誼雄（本科学生、1907年本科卒業〔24期生〕）、岩手県出身
- 274) 伊藤廣幾（北海道農会副会長、1893年本科卒業〔11期生〕）。岩手県出身。1904年1月、米作起業の計画のため、同志4名と共にシヤムへ渡航した。
- 275) 泉鏡花（小説家、1873～1939）
- 276) 黒澤繁孝
- 277) 姉崎正治（宗教学者、1873～1949）。
- 278) 森源三（札幌農学校校長1881.2～1886.12）。森源三の古希記念として、1903年10月卒業生有志25名が「森翁肖像費寄附金」を募り、油彩肖像画を作製し（製作費92円）、図書館に寄贈した。肖像画は図書館閲覧室に掲げられた。
- 279) 小笠原豊涯。来札した小笠原による談話が『北海タイムス』（1903年9月1日付、9月2日付、各3面）に「肖像画に就て」と題して掲載されている。なお、小笠原は札幌農学校に以前在学していたという（「森源三翁の肖像」『文武会会報』第43号、1904年7月、15～16頁）。
- 280) Tolstoi, *The First Distiller*.
- 281) 新約聖書（ヨハネ福音書11章）は病死した Lazarus がキリストにより蘇生したと伝える。
- 282) 文武会は遊戯会（体育系団体）と学藝会（文系団体）が1901年9月21日合併して創設された団体。
- 283) 中島泰蔵（札幌農学校講師：英語、倫理学）。コロラド大学で1893年学士号（Bachelor of Philosophy）を、1901年博士号（Doctor of Philosophy）を取得している。
- 284) Ernst Häckel, *The evolution of man: a popular exposition of the principal points of human ontogeny and phylogeny.*, New York, D. Appleton, 1886. 札幌農学校文庫（北海道大学附属図書館貴重資料室）に蔵書がある。
- 285) 神田佐一郎「ヨセフの子耶蘇基督」（『六合雑誌』第276号、1903年12月15日発行、55～67頁）
- 286) 東海林力蔵（札幌農学校助教授：農学、1901年本科卒業〔19期生〕）
- 287) 繁野天来（政璃）編『ダンテ神曲物語』（通俗世界文学第10編、富山房、1903年12月24日初版）

- 288) 姉崎正治 (嘲風) 『復活の曙光』 (有朋館、1904年1月1日初版)
- 289) Ralph Waldo Emerson (詩人・哲学者、1803~1882)
- 290) 桂宗左 (農芸科生徒、陸軍歩兵少尉)。「陸軍歩兵少尉桂君を送る」(『文武会会報』第42号、1904年6月、44~45頁)、「桂少尉の送別会」(『同窓農友会々報』第36号、1904年8月20日発行、40頁)に詳しい。
- 291) 渡邊環 (本科学生、陸軍歩兵少尉)
- 292) 信伊奈写真館 (南1条西3丁目、写真師:信伊奈亮正)
- 293) 田中義麿 (予修科生徒、陸軍歩兵軍曹)。同級生による壮行会が同窓会倶楽部で開かれた。
- 294) 札幌博物学会第114回月次会 (於 経済学講堂)。松村松年「昆虫の異形変態に就て」、橋本左五郎「納豆のバクテリアに就て」の講話があった。
- 295) 当時流行した寄席の踊り。
- 296) 松村松年教授の理学博士取得 (1903年12月26日付東京帝国大学、学位論文「日本産浮塵子科の研究 (Monographie der Jassinien Japans.)」) を祝して、本科生主催で祝賀会が同窓会倶楽部で開催された。「松村教授博士祝賀会」(『文武会会報』第42号、1904年6月、37~38頁)に詳しい。
- 297) 尾泉式伸縮自在鋏。「尾泉教授の発明」(『文武会会報』第43号、1904年7月、17頁)、尾泉良太郎「日本農具の主要なる鋏改良に就て」(『北海道教育雑誌』第135号、1904年、5~9頁)に詳しい。
- 298) Ioan Demitrovich Kasatkin Nikolai (ロシア正教会最初の来日宣教師、1836~1912)
- 299) 松浦多気志郎 (武四郎) 『天鹽日誌』
- 300) バルネット著・若松賤子訳『小公子』(博文館、1897年1月初版)
- 301) 帝国図書館 (東京市下谷区上野公園内西四軒寺跡)。蔵書は現在、国立国会図書館が所蔵。
- 302) 桑山茂 (農芸科生徒)
- 303) 社説「基督教と非戦論」(『六合雑誌』第278号、1904年2月15日発行、1~5頁)
- 304) 松浦竹四郎 (武四郎) 『十勝日誌』は、博文館編輯局校訂『校訂紀行文集』(続帝国文庫第24編、博文館、1900年)にも所収されている。
- 305) 当時、トルストイ『戦争と平和』は日本語翻訳本が未刊であったため、川嶋一郎は英訳本 *War and Peace* を読んでいた。
- 306) 外報「予は如何なる社会主義者なる乎 紐育に於て 金子喜一」(『六合雑誌』第278号、1904年2月15日発行、69~73頁)。某氏とは William Jennings Bryan (政治家、1860~1925)
- 307) 青葉萬六 (札幌農学校講師:物理学、数学)
- 308) 加藤泰治「欧米ニ於ケル牧畜業」、佐藤昌介「戦争ト農業者ノ覚悟」(札幌農学会第6回総会)。
- 309) 北鳴新報社 (大通西4丁目1番地) 発行新聞『北鳴新報』
- 310) 飯田雄太郎 (札幌農学校講師:画学)
- 311) 文武会遊戯部 (部長 松村松年、幹事主任 素木得一) による茨戸遠足。「雪中茨戸遠足記」(『文武会会報』第42号、1904年6月、11~13頁)に詳しい。
- 312) 『通俗世界文学』全集 (富山房、1903年2月~)。川嶋一郎は、第3編『イリアッド物語』、第7編『マアテルリンク物語』、第10編『ダンテ神曲物語』などを購入していた。
- 313) 遠友夜学校女子生徒の修養会。
- 314) Pharisees (パリサイ派)、モーゼ戒律の遵守を主張するユダヤ教の一派。
- 315) 文武会柔道部、撃剣部の稽古始。
- 316) Georg Wilhelm Friedrich Hegel (哲学者、1770~1831)
- 317) ドイツ語の自由「frei」のことか。
- 318) 『時代思潮』は横井時雄、姉崎正治が主筆となり1904年2月に創刊した総合雑誌。
- 319) 姉崎正治「ロシアの国情とトルストイ」(『時代思潮』第2号、1904年3月5日発行、21~26頁)

- 320) 臘乾（ラカン、塩漬けの豚モモ肉を薫製したもの）
- 321) 海老名弾正『基督教本義』（日高有隣堂、1903年初版）
- 322) 森廣（太平洋貿易会社副社長、1901年本科卒業〔19期生〕）
- 323) 藤田昌「農産品取引ノ急務及び其实例」（札幌農学会第24回例会）
- 324) 1904年4月1日より学生生徒の制帽が改正された。本科は「菱形ニシテ黒色ノ前庇ヲ附シ帽ノ両側ニ径五分ノ鍊釦ヲ著ケ又帽ノ周囲ニ幅九分ノ黒紐一条ヲ纏フ」と円形から菱形になった。一方、予修科は円形のままであった（『札幌農学校一覧』及び「制帽の改正」『文武会会報』第42号、1904年6月、29頁）。
- 325) 横山篤次郎（南2条西2丁目、歯科医）
- 326) 神と人との間を仲介する存在。
- 327) 秋山定輔（『二六新報』主筆・政治家、1868～1950）が、2月26日付『二六新報』の内閣弾劾問題を論じた社説で、露探（ロシアのスパイ）疑惑をかけられ、衆議院議員辞職に追い込まれた。
- 328) 農芸科第15期卒業証書授与式（於 農業経済学講堂）、第15期生19名（総代 角館喜一郎）が卒業した。
- 329) 尾崎紅葉（小説家、1867～1903）
- 330) 北海道庁農事講習所（北1条西19丁目）
- 331) 3月31日農芸科卒業の角館喜一郎の離札日。
- 332) マリ・バシキルツェフ Marie Bashkirtseff（画家、1858～1884）
- 333) 東郷實「大和民族の将来」、池田競「維新の理想」、佐藤昌介「戦時及び戦後の経済に就て」（文武会学藝部公開講話会、於 経済学第三講義室）。「公開講話会」（『文武会会報』第43号、1904年7月、3～5頁）に詳しい。
- 334) Tolstoi, *Dominion of Darkness*.
- 335) Ivan S. Turgenev（小説家、1818～1883）
- 336) キバナノアマナ（*Gagea lutea*）か。現在もキャンパス内に群生して4月～5月に咲く。
- 337) 札幌博物学会第115回月次会。宮部金吾「千島占守島の植物に就て」、藤田昌「麦酒中の炭酸に就て」の講話があった。
- 338) 伊藤七郎
- 339) 元第七師団練兵場（大通西10丁目）
- 340) 文武会野球部による野球試合（予修科1年級対本科1年級）。20対22で本科が勝った。
- 341) 岡山県、福島県高等女学校女子生徒が裸体で体重等の検査されたことが問題となり、「女学生裸体事件」として新聞・雑誌の報道が加熱した。文部省普通学務局による調査の結果、岡山県高等女学校長は免職となった。
- 342) 岡本半次郎（本科学生、1907年本科卒業〔24期生〕）
- 343) 文武会野球部による野球試合（本科3年級対農芸科3年級）。37対11で本科が勝った。
- 344) 笹川臨風「露国の画伯ヴェレスチャギンの死」（1904年5月1日付『読売新聞』）
- 345) Thomas Carlyle, *Sartor resartus*.（トマス・カーライル『衣服哲学』）
- 346) 文武会学藝部例会にて、中村精一「シーザーの葬式に際してマーク、アントニーの演説に擬す」、逢坂信彦『『サアタヤ、レサアタス』を紹介す』の演説があった。「新入会員歓迎会及び第一例会」（『文武会会報』第43号、1904年7月、5～6頁）に詳しい。
- 347) 三吉神社（南1条西8丁目）
- 348) 文武会野球部による第1回札幌各学校連合野球試合。札幌農学校6選手、札幌中学校5選手、北海道師範学校5選手、北海英語学校中学部2選手混合の赤白二組による試合。赤組14対白組7で赤組が勝った。

- 349) 「観桜会」(『文武会会報』第42号、1904年6月、40頁)に詳しい。
- 350) 第22回遊戯会。「第二十二回遊戯会報告」(『文武会会報』第43号、1904年7月、6～11頁)に詳しい。
- 351) 朝倉金彦(予修科生徒、1909年東北帝国大学農科大学卒業)
- 352) 私立北海英語学校中等部の生徒
- 353) 札幌興農園(南2条西1丁目)。園長小川二郎(1893年本科卒業〔11期生])のもと、種苗生産、輸入販売や農具販売など幅広く行っていた。
- 354) 伊藤廣幾「暹羅探検談」(札幌農学会第25回例会)。「暹羅国視察談」(『同窓農友会々報』第36号〔1904年8月20日発行、1～10頁〕、同第37号〔1904年12月31日発行、13～16頁〕)に詳しい。
- 355) 安部磯雄(キリスト教社会主義・教育者、1865～1949)。1900年社会主義協会会長に就任、『六合雑誌』に多数の社会主義論を発表した。
- 356) 社説「理想的恋愛」(『六合雑誌』第181号、1904年5月15日発行、1～8頁)
- 357) 飯田恪郎(土木工学科生徒)のことか。
- 358) 札幌博物学会第116回月次会(於 経済学講堂)。高橋良直「笹の病害に就て」、原十太「ガルビシヤール本邦産コマネヅミと欧州産ハツカネヅミとの交配に関する研究に就て」の講話があった。
- 359) 永山武四郎(第2代北海道庁長官・第七師団長)、1904年5月27日死去。
- 360) Tolstoi, *Tales from Tolstoy*. などか。
- 361) 摂氏23.8～24.4度。
- 362) 胴乱(どうらん、植物採集に用いる携帯用容器)
- 363) 1871年北7条西8丁目辺に開拓使が設置した公園。
- 364) 渡邊環(本科学生、陸軍歩兵少尉)のため同級生による壮行会が借楽園で開かれた。「渡邊環君壮行会」(『文武会会報』第43号、1904年7月、23頁)に詳しい。なお、渡邊環は1905年1月25日黒溝台にて戦没した。
- 365) 黒澤信良(北海道庁技師農事試験場勤務、1894年農学科卒業〔12期生])
- 366) 札幌農学校では、「実科規程」により、本科2年級を修得した者には、農業甲科(農学)、農業乙科(畜産)、農芸化学、農業経済学、植物病理学、農用動物学から1学科を選択させ、実験・演習・実習方式の専攻研究を行なった。
- 367) 宮部金吾教授は教務部長、本科主任であった。
- 368) 北海道畜産協会が6月14日～16日、中島遊園地で畜産共進会を開催した。馬50余頭、牛30余頭、豚・兎各10頭、鶏20余羽が出品された。
- 369) 足助素一の森林科卒業が翌月に迫っていたため送別会食を行なった。
- 370) John Stuart Mill(経済学者、1806～1873)
- 371) 黄金井解三(本科学生、1904年本科卒業〔21期生])
- 372) Arthur May Knapp 述・神田佐一郎訳『ユニテリアンの教義』(日本ユニテリアン弘道会、1895年)のことか。
- 373) 小林直三郎(旭川在住酪農家)
- 374) 藤野上川牧場(旭川町字近文五線一号)。牛乳生産のほか、輸入牛の種付け、牛馬放牧預かりなど幅広く事業を行っていた大牧場。第七師団御用達でもあった。
- 375) 佐藤陽太郎(本科学生、1907年本科卒業〔24期生])
- 376) 本科第21期、予修科第6期、土木工学科第5期、森林科第3期卒業証書授与式(於 図書館)。
- 377) 園田安賢(北海道庁長官)
- 378) 武林写真館
- 379) 森林科卒業後、足助素一は山梨県庁技師に就職した。
- 380) 入学式・始業式(於 体操場)。佐藤昌介(校長)、南鷹次郎(生徒監部部長・教務部長代理)、原十

- 太（図書館長）、尾泉良太郎（農芸科主任）より訓示があった。
- 381) 石橋三郎治著『牛乳ト衛生』（裳華房、1900年発行）。札幌農学校学藝会蔵版として、1898年から札幌農学校卒業生の著作が裳華房（東京市日本橋区）から出版された。石橋は1898年本科卒業〔16期生〕。
- 382) 東京蚕業講習所。当時、農商務商所管の講習所が東京・京都にあった。
- 383) 川嶋一郎は、江刺家昂、柳川鑑蔵と共に農業乙科を専攻し、橋本左五郎教授の指導を受けた。
- 384) ゲルベル（Gerber）法による牛乳脂肪測定計器。
- 385) 原十太教授（動物学）が学習院教授として転出するにあたり、送別会が催され、100名余の生徒が集まった。「恩師原教授送別会」（『文武会会報』第44号、1905年1月、21頁）に詳しい。
- 386) 中村精一（本科学生、1905年本科卒業〔22期生〕）。
- 387) 佐藤政次郎（牧畜業、1901年本科卒業〔19期生〕）。岩手県出身。同年、朝鮮総督府技手（水原統監府模範勸業場）に転職。
- 388) 本科3年級の昆虫学修学旅行が、松村松年教授引率により、9月20日～21日行われた。「本級第3年級学生昆虫修学旅行」（『文武会会報』第44号、1905年1月、15～16頁）に詳しい。
- 389) 平民社訳『トルストイの日露戦争論』（文明社・信陽社、1904年9月12日初版）
- 390) 現在の札幌市南区川沿辺り。
- 391) 小岩井農場（岩手県岩手郡雫石町、1891年創業）。当時、種畜の生産供給事業を推進していた。
- 392) Tolstoi, *Sevastopol* .
- 393) 河野孝太（本科学生、1906年本科卒業〔23期生〕）
- 394) 高村廣作（森林科生徒、1909年森林科卒業）
- 395) 南鷹次郎は山田勝伴（北海道庁技手、1904年本科卒業〔21期生〕）に娘を嫁がせた。
- 396) 橋本銀次郎（元本科学生）1905年10月8日死去。
- 397) 文武会柔道部大会、撃剣部大会が開催された。
- 398) 丘淺治郎『進化論講話』（開成館）。1904年1月初版発行後、同年10月で第4版を数えるほどのベストセラー。札幌農学校文庫（北海道大学附属図書館貴重資料室）にも蔵書がある。
- 399) 北辰病院（院長：関場不二彦）
- 400) 八田三郎（札幌農学校教授：動物学）
- 401) 札幌博物学会第117回月次会。松村松年「熊本県五家庄の昆虫採集談」、八田三郎「日本産ヤツメウナギの話」の講話があった。
- 402) 札幌農学校農場連合農産品評会（於 体操場）。各農場から生産物の米、麦、大豆、小豆、蔬菜、特用作物3,200余种が出品され、審査委員長 南鷹次郎からは品種改良の一定、病害予防についてコメントがあった。
- 403) 「学生生徒乗馬実習規程」（1904年10月決定）により、農学科乙科専修者には乗馬実習が課された。
- 404) 札幌博物学会第118回月次会。三宅勉「桑樹枝條枯死の原因に就て」、河野常吉「樺太漁業の沿革」の講話があった。
- 405) 札幌農学校基督教青年会
- 406) 札幌美以教会
- 407) 商店街（創成川西側で南2条、南3条との間の小路）。丸キ（南2条西4丁目、蕎麦・料理店）など、飲食店が多かった。

〔附録1〕明治三十六年金錢出納録

| 月  | 日  | 摘要                          | 収入 |    |   | 支出 |    |   | 備考                        |
|----|----|-----------------------------|----|----|---|----|----|---|---------------------------|
|    |    |                             | 円  | 銭  | 厘 | 円  | 銭  | 厘 |                           |
| 1  | 1  |                             | 21 | 30 | 0 |    |    |   |                           |
| 1  | 5  | 畜産汎論<br>農甲器具学 二部            |    |    |   |    | 70 | 0 | 富貴堂                       |
| 1  | 8  | 太陽<br>少年世界 二部               |    |    |   |    | 40 | 0 | 全                         |
| 1  | 8  | 口覆へ 一ヶ                      |    |    |   |    | 35 | 0 | 薬店                        |
| 1  | 11 | 切手 三枚                       |    |    |   |    | 9  | 0 |                           |
| 1  | 11 | 為替                          |    |    |   | 3  | 00 | 0 | 小島氏へ                      |
| 1  | 11 | 硯、朱墨                        |    |    |   |    | 10 | 0 | 振進堂                       |
| 1  | 11 | トルストイ                       |    |    |   |    | 25 | 0 | 全                         |
| 1  | 12 | 食費及雑費                       |    |    |   | 6  | 90 | 9 |                           |
| 1  | 14 | 薬代                          |    |    |   |    | 25 | 0 | 病院                        |
| 1  | 16 | 薬代                          |    |    |   |    | 20 | 0 | 全                         |
| 1  | 16 | 級会費                         |    |    |   |    | 15 | 0 | 宮城君                       |
| 1  | 16 | 全安藤氏へ貸                      |    |    |   |    | 15 | 0 | 全                         |
| 1  | 17 | 大工殿へ手金として                   |    |    |   |    | 50 | 0 | 額ぶち壺 <sup>〔物〕</sup> 円ノ者注文 |
| 1  | 19 | 歯磨粉                         |    |    |   |    | 6  | 0 | 勸工場                       |
| 1  | 21 | 切手三枚                        |    |    |   |    | 9  | 0 | 郵便局                       |
| 1  | 21 | 為替                          |    |    |   | 3  | 50 | 0 | 丸善へ                       |
| 1  | 22 | 論理学                         |    |    |   |    | 35 | 0 | 治自堂                       |
| 1  | 23 | クツシタ                        |    |    |   |    | 45 | 0 | 南部屋                       |
| 1  | 23 | 鉛筆                          |    |    |   |    | 20 | 0 | 振進堂                       |
| 1  | 24 | 福田氏の送別会費及其<br>の他            |    |    |   |    | 40 | 0 | 河内氏                       |
| 1  | 26 | 額縁代残金                       |    |    |   |    | 50 | 0 | 大工殿へ                      |
| 1  | 28 | 処世要訣                        |    |    |   |    | 26 | 0 | 富貴堂                       |
| 1  | 28 | 画学紙、使へ紙                     |    |    |   |    | 7  | 5 | 南二条の紙屋へ                   |
| 1  | 29 |                             |    |    |   | 1  | 00 | 0 | 逢坂氏へ貸                     |
| 1  | 30 | うもれ木、作文書                    |    |    |   |    | 43 | 0 | 富貴堂                       |
| 1  | 28 | <sup>〔河内〕</sup><br>高地氏よりの返金 |    | 40 | 0 |    |    |   | 河内氏より                     |
| 1  | 30 | 二月分の学費                      | 15 | 00 | 0 |    |    |   | 父上より                      |
| 1  | 30 | 教育上の常識                      |    |    |   |    | 25 | 0 | 富貴堂                       |
| 1  | 31 | 遠友夜学校よりの報酬                  | 1  | 50 | 0 |    |    |   | 河内氏より                     |
| 2月 |    |                             | 17 | 59 | 6 |    |    |   |                           |
| 2  | 4  | 学生訓                         |    |    |   |    | 23 | 0 | 富貴堂                       |
| 2  | 5  | 食費                          |    |    |   | 9  | 38 | 3 | 会計へ                       |
| 2  | 6  | 少年世界                        |    |    |   |    | 10 | 0 | 〃                         |
| 2  | 6  | ホヤ一個                        |    |    |   |    | 5  | 0 | 〃                         |
| 2  | 9  | 理髪料                         |    |    |   |    | 17 | 0 | 〃                         |

| 月  | 日  | 摘要                     | 収入 |    |   | 支出 |    |   | 備考     |
|----|----|------------------------|----|----|---|----|----|---|--------|
|    |    |                        | 円  | 銭  | 厘 | 円  | 銭  | 厘 |        |
| 2  | 11 | 少年世界                   |    |    |   |    | 10 | 0 | 〃      |
| 2  | 14 | 授業料                    | 4  | 00 | 0 |    |    |   | 父上ヨリ   |
| 2  | 14 | シャボン                   |    |    |   |    | 48 | 0 | 南部屋    |
| 2  | 17 | 月謝                     |    |    |   | 6  | 00 | 0 |        |
| 2  | 18 | 文例 一冊                  |    |    |   |    | 15 | 0 |        |
| 2  | 19 | 歯磨粉                    |    |    |   |    | 6  | 0 | 勸工場    |
| 2  | 22 | 薬価                     |    |    |   |    | 48 | 0 | 北辰病院   |
| 2  | 24 | 薬価                     |    |    |   |    | 39 | 0 | 全      |
| 2  | 26 | 全                      |    |    |   |    | 25 | 0 | 全      |
| 2  | 26 | ペン十二、ノート、インキ、ガム        |    |    |   |    | 23 | 0 | 振進堂    |
| 2  | 27 | 斉藤様へ貸                  |    |    |   | 2  | 00 | 0 |        |
| 2  | 27 | 夜学校よりの報酬               | 2  | 00 | 0 |    |    |   |        |
| 2  | 27 | 逢坂氏より返金                | 1  | 00 | 0 |    |    |   |        |
| 2  | 28 | 三月分学費                  | 15 | 00 | 0 |    |    |   |        |
| 2  | 28 | 薬価                     |    |    |   |    | 39 | 0 | 北辰病院   |
| 3月 |    |                        |    |    |   |    |    |   |        |
| 3  | 1  | 洗濯代                    |    |    |   |    | 24 | 0 |        |
| 3  | 2  | 薬価                     |    |    |   |    | 39 | 0 | 病院     |
| 3  | 2  | 理髪代                    |    |    |   |    | 17 | 0 | 鶴岡     |
| 3  | 3  | 修辞学、ざんげ                |    |    |   |    | 54 | 0 | 富貴堂    |
| 3  | 5  | 食費及舎費                  |    |    |   | 8  | 00 | 3 | 会計     |
| 3  | 5  | 文武会々費                  |    |    |   |    | 80 | 0 | 全      |
| 3  | 5  | 薬価                     |    |    |   |    | 39 | 0 | 病院     |
| 3  | 8  | ケント紙 二枚                |    |    |   |    | 12 | 0 | 岡田店    |
| 3  | 8  | 売薬                     |    |    |   |    | 10 | 0 | ⊖      |
| 3  | 10 | 塩酸加里                   |    |    |   |    | 23 | 0 | ⊖ 一ポンド |
| 3  | 10 | 少年世界                   |    |    |   |    | 10 | 0 | 富貴堂    |
| 3  | 12 | 失樂園                    |    |    |   |    | 20 | 0 | 全      |
| 3  | 13 | 足助氏へ貸ス                 |    |    |   | 3  | 00 | 0 |        |
| 3  | 18 | 沙翁物語                   |    |    |   |    | 20 | 0 | 富貴堂    |
| 3  | 21 | 足助氏ヨリ一部返金              | 2  | 00 | 0 |    |    |   |        |
| 3  | 21 | ハミガキ代                  |    |    |   |    | 6  | 0 | 勸工場    |
| 3  | 23 | 級会費                    |    |    |   |    | 10 | 0 |        |
| 3  | 23 | 安部、逢坂、竹田へ貸             |    |    |   |    | 30 | 0 |        |
| 3  | 23 | 大光寺氏の見舞                |    |    |   |    | 10 | 0 |        |
| 3  | 24 | 黒潮                     |    |    |   |    | 40 | 0 |        |
| 3  | 24 | 吸入器 一個                 |    |    |   | 1  | 50 | 0 |        |
| 3  | 24 | アルコール 一ポンド             |    |    |   |    | 40 | 0 |        |
| 3  | 25 | <sup>[安]</sup> 阿部氏より返金 |    | 10 | 0 |    |    |   |        |
| 3  | 26 | 理髪代                    |    |    |   |    | 17 | 0 |        |
| 3  | 26 | 石川君送別会費                |    |    |   |    | 20 | 0 |        |

| 月   | 日  | 摘要              | 収入 |    |   | 支出 |    |          | 備考 |
|-----|----|-----------------|----|----|---|----|----|----------|----|
|     |    |                 | 円  | 銭  | 厘 | 円  | 銭  | 厘        |    |
| 4月分 |    |                 |    |    |   |    |    |          |    |
| 3   | 31 | 四月分学費           | 15 | 00 | 0 |    |    |          |    |
| 4   | 1  | 夜学校ヨリ報酬         | 2  | 00 | 0 |    |    |          |    |
| 4   | 4  | 円山温泉の中食及菓子代     |    |    |   | 60 | 0  |          |    |
| 4   | 4  | 植木鉢代            |    |    |   | 7  | 0  |          |    |
| 4   | 6  | 林檎代             |    |    |   | 12 | 0  |          |    |
| 4   | 7  | ノートブック、洋ケー紙     |    |    |   | 25 | 5  | 振進堂      |    |
| 4   | 8  | 植物營養<br>少年世界    |    |    |   | 45 | 0  | [富]福貴堂   |    |
| 4   | 9  | 舎費及食費           |    |    |   | 8  | 30 | 4 会計     |    |
| 4   | 13 | 齒磨代             |    |    |   | 6  | 0  | 勸工場      |    |
| 4   | 15 | 星学              |    |    |   | 35 | 0  | 振進堂      |    |
| 4   | 16 | 農業本論            |    |    |   | 1  | 45 | 0 [富]福貴堂 |    |
| 4   | 16 | アルコール           |    |    |   | 38 | 0  | ⊖        |    |
| 4   | 17 | 竹田氏へ貸ス          |    |    |   | 1  | 00 | 0        |    |
| 4   | 18 | 理髮代             |    |    |   | 17 | 0  |          |    |
| 4   | 19 | リンコンン会会費        |    |    |   | 25 | 0  |          |    |
| 4   | 22 | 足助氏ヨリ残金反金       | 1  | 00 | 0 |    |    |          |    |
| 4   | 25 | 葉書代             |    |    |   | 7  | 5  |          |    |
| 4   | 26 | 十九世紀ノヨ言者        |    |    |   | 73 | 0  |          |    |
| 4   | 27 | 卵子代             |    |    |   | 20 | 0  |          |    |
| 4   | 29 | 竹田氏ヨリ返金         | 1  | 00 | 0 |    |    |          |    |
| 5月分 |    |                 |    |    |   |    |    |          |    |
| 5   | 2  | 洗濯代             |    |    |   | 31 | 0  |          |    |
| 5   | 6  | 五月分学費           | 18 | 00 | 0 |    |    |          |    |
| 5   | 6  | シャボン代           |    |    |   | 40 | 0  |          |    |
| 5   | 6  | イリアット物語<br>土道物語 |    |    |   | 53 | 0  |          |    |
| 5   | 6  | 文明堂へ為替及切手       |    |    |   | 91 | 0  |          |    |
| 5   | 7  | 四月分食費           |    |    |   | 8  | 22 | 6        |    |
| 5   | 7  | 月謝及舎費           |    |    |   | 7  | 40 | 0        |    |
| 5   | 9  | 逢坂氏へ貸ス          |    |    |   | 50 | 0  |          |    |
| 5   | 10 | 竹田氏へ貸ス          |    |    |   | 50 | 0  |          |    |
| 5   | 11 | 齒磨粉代            |    |    |   | 6  | 0  |          |    |
| 5   | 11 | 草履代             |    |    |   | 24 | 0  |          |    |
| 5   | 9  | 玉子代             |    |    |   | 20 | 0  | 大光寺氏へ    |    |
| 5   | 12 | 逢坂氏ヨリ返金         |    | 60 | 0 |    |    |          |    |
| 5   | 14 | アルコール           |    |    |   | 37 | 0  |          |    |
| 5   | 14 | 理髮代             |    |    |   | 17 | 5  |          |    |
| 5   | 16 | 竹田氏ヨリ返金         |    | 50 | 0 |    |    |          |    |
| 5   | 23 | 夜学校ノ会費          |    |    |   | 15 | 0  |          |    |
| 5   | 25 | 竹田氏へ借ス          |    |    |   | 20 | 0  |          |    |

| 月  | 日  | 摘要                   | 収入 |    |   | 支出 |    |   | 備考   |
|----|----|----------------------|----|----|---|----|----|---|------|
|    |    |                      | 円  | 銭  | 厘 | 円  | 銭  | 厘 |      |
| 5  | 26 | 天人論                  |    |    |   |    | 28 | 0 |      |
| 5  | 26 | 傘の修膳料 <sup>(繕)</sup> |    |    |   |    | 15 | 0 |      |
| 5  | 27 | 竹田氏より返金              |    | 20 | 0 |    |    |   |      |
| 5  | 28 | 池田氏へ                 |    |    |   |    | 20 | 0 |      |
| 5  | 30 | 送別会費、逢坂氏分も           |    |    |   |    | 30 | 0 |      |
| 6月 |    |                      |    |    |   |    |    |   |      |
| 6  | 1  | 切手代                  |    |    |   |    | 6  | 0 |      |
| 6  | 2  | 六月分学費金               | 15 | 00 | 0 |    |    |   |      |
| 6  | 3  | 夜学校報酬                | 2  | 00 | 0 |    |    |   |      |
| 6  | 3  | 池田氏より返金              |    | 20 | 0 |    |    |   |      |
| 6  | 5  | 夜学校報酬                | 2  | 00 | 0 |    |    |   |      |
| 6  | 5  | ハミガキ                 |    |    |   |    | 6  | 0 |      |
| 6  | 5  | 青年界                  |    |    |   |    | 20 | 0 |      |
| 6  | 5  | 帽子トズボン下              |    |    |   | 2  | 15 | 5 |      |
| 6  |    | 逢坂氏ニ                 |    |    |   |    | 20 | 0 |      |
| 6  |    | 理髪代                  |    |    |   |    | 17 | 5 |      |
| 6  |    | 本科のチャンピヨンの<br>滋養費    |    |    |   |    | 3  | 0 |      |
| 6  | 11 | ホヤ代                  |    |    |   |    | 5  | 0 |      |
| 6  | 12 | 歓迎会々費                |    |    |   |    | 5  | 0 |      |
| 6  | 12 | 舎費及食費                |    |    |   | 8  | 56 | 7 |      |
| 6  | 15 | 逢坂氏へ                 |    |    |   |    | 20 | 0 |      |
| 6  | 15 | 競馬見料                 |    |    |   |    | 5  | 0 |      |
| 6  | 20 | 靴代                   |    |    |   | 1  | 65 | 0 |      |
| 6  | 22 | 逢坂氏より                |    | 35 | 0 |    |    |   |      |
| 6  | 22 | 送別会費                 |    |    |   |    | 30 | 0 |      |
| 6  | 23 | 藤村君建碑へ寄贈ス            |    |    |   |    | 20 | 0 | 芳賀君へ |
| 6  | 26 | 脚絆と足袋                |    |    |   |    | 75 | 0 |      |
| 6  | 26 | パン代                  |    |    |   |    | 14 | 0 |      |
| 9月 |    |                      |    |    |   |    |    |   |      |
| 9  | 9  | 湯銭                   |    |    |   |    | 3  | 0 |      |
| 9  | 10 | 英和字典                 |    |    |   | 1  | 20 | 0 | 富貴堂  |
| 9  | 10 | ノートブック四、インキー         |    |    |   |    | 6  | 0 | ク    |
| 9  | 10 | ホヤ                   |    |    |   |    | 6  | 0 |      |
| 9  | 12 | 薬代                   |    |    |   |    | 30 | 0 | 正見病院 |
| 9  | 14 | 昆虫学                  |    |    |   | 1  | 70 | 0 |      |
| 9  | 10 | 牛乳代                  |    |    |   | 1  | 8  | 0 | 学校へ  |
| 9  | 11 | 寄宿舎会計ヨリ返金            |    | 6  | 0 |    |    |   |      |
| 9  | 16 | 梨子代 七斤、小池氏<br>への見舞い共 |    |    |   |    | 22 | 0 |      |
| 9  | 18 | 沙翁物語                 |    |    |   |    | 20 | 0 |      |
| 9  | 18 | 林檎代                  |    |    |   |    | 12 | 0 |      |

| 月   | 日  | 摘要                         | 収入   |    |   | 支出 |    |    | 備考      |
|-----|----|----------------------------|------|----|---|----|----|----|---------|
|     |    |                            | 円    | 銭  | 厘 | 円  | 銭  | 厘  |         |
| 9   | 18 | 湯銭                         |      |    |   |    | 2  | 5  |         |
| 9   | 22 | ローウェル代、工藤氏へ                |      |    |   | 1  | 00 | 0  |         |
| 9   | 21 | 第一学期月謝                     |      |    |   | 7  | 00 | 0  |         |
| 9   | 23 | 米国学生気質                     |      |    |   |    | 23 | 0  |         |
| 9   | 20 | わらじ代                       |      |    |   |    | 3  | 0  |         |
| 未   | 9  | 27                         | わらじ代 |    |   |    | 2  | 5  | 渡辺氏へ    |
| 9   | 27 | 小樽にて夜食代                    |      |    |   |    | 12 | 0  |         |
| 9   |    | 工藤氏送別会費                    |      |    |   |    | 15 | 0  | 末光氏へ    |
| 9   | 28 | 理髪代                        |      |    |   |    | 17 | 0  |         |
| 9   | 28 | 林檎代                        |      |    |   |    | 15 | 0  |         |
| 9   | 30 | 河内氏より受取る                   | 2    | 50 | 0 |    |    |    |         |
| 10月 |    |                            |      |    |   |    |    |    |         |
| 10  | 2  | 湯銭代                        |      |    |   |    | 2  | 5  |         |
| 10  | 3  | 食料                         |      |    |   | (5 | 50 | 0) | 九月分に勘定す |
| 10  | 4  | 十月分学費                      | 15   | 00 | 0 |    |    |    |         |
| 10  | 6  | 草履代                        |      |    |   |    | 19 | 0  |         |
| 10  | 7  | ポリテクカルエコノミー                |      |    |   | 3  | 9  | 0  |         |
| 10  | 8  | 綴方教授、レタライター                |      |    |   | 1  | 00 | 0  |         |
| 10  | 8  | インキ代                       |      |    |   |    | 5  | 0  |         |
| 10  | 8  | 有田海産植物                     |      |    |   | 1  | 20 | 0  |         |
| 10  | 9  | 牛乳代                        |      |    |   |    | 72 | 0  |         |
| 10  | 10 | 夜学校報酬                      | 1    | 30 | 0 |    |    |    |         |
| 10  | 11 | ビン                         |      |    |   |    | 10 | 0  |         |
| 10  | 11 | シャツ                        |      |    |   | 1  | 15 | 0  |         |
| 10  | 11 | ツボン下                       |      |    |   | 1  | 20 | 0  |         |
| 10  | 11 | 葉書                         |      |    |   |    | 6  | 0  |         |
| 10  | 11 | 食パン                        |      |    |   |    | 6  | 0  |         |
| 10  | 13 | 銭函マンヂュー                    |      |    |   |    | 20 | 0  |         |
| 10  | 16 | 風流志道 <small>〔軒〕</small> 転伝 |      |    |   |    | 20 | 0  |         |
| 10  | 16 | 図書館ノ見料                     |      |    |   |    | 1  | 0  |         |
| 10  | 18 | 石狩ノ宿料                      |      |    |   |    | 45 | 0  |         |
| 10  | 18 | 汽車賃                        |      |    |   |    | 13 | 0  |         |
| 10  | 19 | わらじ代                       |      |    |   |    | 2  | 5  |         |
| 10  | 20 | わらじ 三人分                    |      |    |   |    | 10 | 5  |         |
| 10  | 15 | 紙代                         |      |    |   |    | 10 | 0  |         |
| 10  | 15 | 足袋代、白布代                    |      |    |   |    | 44 | 5  |         |
| 10  | 23 | 理髪代                        |      |    |   |    | 17 | 0  |         |
| 10  | 23 | はをりひも代                     |      |    |   |    | 49 | 0  |         |
| 10  | 23 | はんけつ                       |      |    |   |    | 20 | 5  |         |
| 10  | 24 | 洋服ノ手金                      |      |    |   | 10 | 00 | 0  | 丸井へ     |
| 10  | 24 | 黴菌学                        |      |    |   |    | 33 | 0  | 振進堂     |
| 10  | 24 | ペン                         |      |    |   |    | 10 | 0  | 々       |

| 月    | 日  | 摘要                | 収入 |    |   | 支出 |    |   | 備考                                     |
|------|----|-------------------|----|----|---|----|----|---|--|
|      |    |                   | 円  | 銭  | 厘 | 円  | 銭  | 厘 |  |
| 10   | 30 | 牛乳代               |    |    |   | 1  | 8  | 0 | 角館氏へ托し                                 |
| 10   | 朔  | 安東君よりわらじ立かへの返金    |    | 2  | 5 |    |    |   |  |
| 10   | 30 | 教育図書館見料           |    |    |   |    | 1  | 0 |  |
| 10   | 31 | アルコール代            |    |    |   |    | 38 | 0 | 一の薬店                                   |
| 11月分 |    |                   |    |    |   |    |    |   |  |
| 11   | 2  | 大光寺氏ニ洋服洗濯代の借      |    |    |   |    | 13 | 0 |  |
| 11   | 3  | 子規随筆              |    |    |   |    | 60 | 0 | 富貴堂                                    |
| 11   | 3  | 塩酸加里              |    |    |   |    | 24 | 0 | ⊖薬店                                    |
| 11   | 6  | 十一月分学費            | 15 | 00 | 0 |    |    |   |  |
| 11   | 6  | 十月分食費             |    |    |   | 7  | 50 | 0 | 宿へ払フ                                   |
| 11   | 7  | 時計修繕代             |    |    |   |    | 50 | 0 | 丸井の隣の時計店                               |
| 11   | 7  | マーテルリインク物語        |    |    |   |    | 20 | 0 | 振進堂                                    |
| 11   | 5  | 葉書と切手             |    |    |   |    | 9  | 0 |  |
| 11   | 9  | 足駄代               |    |    |   |    | 21 | 5 | 丸亀の向ふの下駄屋ニ                             |
| 11   | 9  | 洋服残金              |    |    |   | 3  | 90 | 0 | 丸井へ                                    |
| 11   | 10 | 教育図書館             |    |    |   |    | 1  | 0 |  |
| 11   | 13 | 父上ヨリ入金            | 5  | 00 | 0 |    |    |   |  |
| 11   | 13 | 教文館へ注文ノ書籍代        |    |    |   | 6  | 70 | 0 | 平和及戦争 他二冊                              |
| 11   | 13 | 為替代及切手            |    |    |   |    | 9  | 0 |  |
| 11   | 14 | 弼水倶楽部代            |    |    |   |    | 5  | 0 |  |
| 11   | 15 | リンコンン会費           |    |    |   |    | 20 | 0 |  |
| 11   | 15 | ズボンズリ             |    |    |   | 1  | 10 | 0 |  |
| 11   | 15 | 夜学校報酬             | 1  | 50 | 0 |    |    |   |  |
| 11   | 19 | 洋服代               | 15 | 00 | 0 |    |    |   |  |
| 11   | 19 | 丸善へ為替             |    |    |   | 5  | 30 | 0 | トルストーイの <sup>(フ)</sup> ブレース及びチンシルキーカウス |
| 11   | 19 | 為替代及切手            |    |    |   |    | 9  | 0 |  |
| 11   | 20 | 理髪代               |    |    |   |    | 17 | 0 | 鶴岡                                     |
| 11   | 20 | ヲバシュー、エンド、シュー ヲイル |    |    |   | 1  | 81 | 0 | 南部屋                                    |
| 11   | 20 | 画帖、プロチングペーパー      |    |    |   |    | 48 | 5 | 富貴堂                                    |
| 11   | 20 | 世界お伽噺し            |    |    |   |    | 14 | 0 |  |
| 11   | 20 | 齒磨                |    |    |   |    | 6  | 0 |  |
| 11   | 22 | 美濃紙代              |    |    |   |    | 10 | 0 | 夜学校の障子張 <sup>(貼)</sup> ニ用ふ             |
| 11   | 22 | ワットマン巻紙           |    |    |   |    | 53 | 0 |  |
| 11   | 22 | 画学紙、ボール           |    |    |   |    | 22 | 5 |  |
| 11   | 22 | 牛乳のどびん茶碗          |    |    |   |    | 25 | 5 |  |

| 月     | 日  | 摘要                   | 収入 |    |   | 支出 |    |   | 備考    |
|-------|----|----------------------|----|----|---|----|----|---|-------|
|       |    |                      | 円  | 銭  | 厘 | 円  | 銭  | 厘 |       |
| 11    | 25 | 池田氏より夜学校報酬として        |    | 50 | 0 |    |    |   |       |
| 11    | 29 | 銭湯                   |    |    |   |    | 10 | 0 |       |
| 11    | 不  | 角館氏へ返金               |    |    |   |    | 5  | 0 | 実ハ一日  |
| 12月出納 |    |                      |    |    |   |    |    |   |       |
| 12    | 2  | 牛乳代                  |    |    |   |    | 14 | 4 | 百石ノ田中 |
| 12    | 4  | 襟章代                  |    |    |   |    | 2  | 0 | 高橋氏へ  |
| 12    | 7  | 十二月分学費               | 15 | 00 | 0 |    |    |   |       |
| 12    | 7  | 下宿屋食費                |    |    |   | 8  | 49 | 0 | 十一月分  |
| 12    | 7  | インキ代                 |    |    |   |    | 12 | 0 |       |
| 12    | 7  | ゴールトスミス荒村行           |    |    |   |    | 17 | 0 |       |
| 12    | 8  | 藤井氏へ貸ス               |    |    |   | 1  | 50 | 0 |       |
| 12    | 9  | ランプのホヤ二個             |    |    |   |    | 10 | 0 |       |
| 12    | 11 | 日記代                  |    |    |   |    | 35 | 0 |       |
| 12    | 18 | 藤井氏より返金              | 1  | 50 | 0 |    |    |   |       |
| 12    | 18 | 歯磨及掛け釘               |    |    |   |    | 9  | 4 |       |
| 12    | 18 | 米国遊学案内<br>フロム、ユスタンシー |    |    |   |    | 59 | 0 |       |
| 12    | 20 | 山家集                  |    |    |   |    | 20 | 0 |       |
| 12    | 22 | 教育図書館                |    |    |   |    | 1  | 0 |       |
| 12    | 22 | アルコール                |    |    |   |    | 40 | 0 | ⊖     |
| 12    | 28 | パン代                  |    |    |   |    | 20 | 0 |       |
| 12    | 25 | 十二月分食費               |    |    |   | 9  | 00 | 0 |       |
| 12    | 30 | 書籍二冊代                |    |    |   |    | 40 | 0 |       |
| 12    | 31 | 牛乳代                  |    |    |   | 1  | 7  | 0 |       |
| 12    | 31 | 角館氏より借る              |    | 20 | 0 |    |    |   |       |

〔附録2〕 明治三十七年金銭出納録

| 月 | 日 | 摘要                       | 収入 |    |   | 支出 |    |   | 備考   |
|---|---|--------------------------|----|----|---|----|----|---|------|
|   |   |                          | 円  | 銭  | 厘 | 円  | 銭  | 厘 |      |
| 1 | 2 | 一月分学費                    | 15 | 00 | 0 |    |    |   |      |
| 1 | 2 | 葉書三十枚、切手五枚代              |    |    |   |    | 60 | 0 |      |
| 1 | 2 | 角館氏ニ返済                   |    |    |   |    | 20 | 0 |      |
| 1 | 5 | 湯札代                      |    |    |   |    | 10 | 0 |      |
| 1 | 6 | 下駄一足代                    |    |    |   |    | 16 | 0 |      |
| 1 | 6 | 太陽、天地有情、子孫<br>繁昌ノ話       |    |    |   |    | 85 | 0 | 富貴堂  |
| 1 | 6 | 夜学校ノ為メ計数器ト<br>カラ購フ故補助トシテ |    |    |   | 1  | 00 | 0 | 角館氏へ |
| 1 | 8 | ノートブック三冊                 |    |    |   |    | 48 | 0 |      |
| 1 | 9 | カフスボタンとくつひも              |    |    |   |    | 79 | 0 | 丸井   |

| 月   | 日  | 摘要                          | 収入 |    |   | 支出 |    |   | 備考           |
|-----|----|-----------------------------|----|----|---|----|----|---|--------------|
|     |    |                             | 円  | 銭  | 厘 | 円  | 銭  | 厘 |              |
| 1   | 12 | 級会費                         |    |    |   |    | 20 | 0 |              |
| 1   | 14 | 理髮代                         |    |    |   |    | 17 | 0 |              |
| 1   | 14 | ハミガキ代                       |    |    |   |    | 6  | 0 |              |
| 1   | 22 | ハガキ代                        |    |    |   |    | 6  | 0 |              |
| 1   | 23 | 教育会図書館見料                    |    |    |   |    | 1  | 0 |              |
| 1   | 29 | <sup>[復]</sup> 復活ノ曙光ト、ダンテ物語 |    |    |   |    | 95 | 0 | 富貴堂          |
| 1   | 29 | シヤボンニ クツシタニ                 |    |    |   | 1  | 20 | 0 | ? 南部屋        |
| 1   | 31 | 湯銭                          |    |    |   |    | 2  | 5 |              |
| 2月分 |    |                             |    |    |   |    |    |   |              |
| 2   | 2  | 二月分学費                       | 15 | 00 | 0 |    |    |   |              |
| 2   | 1  | 角館氏ニ貸ス                      |    |    |   | 1  | 00 | 0 |              |
| 2   | 2  | 一月分食費                       |    |    |   | 9  | 40 | 0 |              |
| 2   | 2  | 洗濯代                         |    |    |   |    | 33 | 0 |              |
| 2   | 2  | 牛乳代                         |    |    |   | 1  | 8  | 0 |              |
| 2   | 3  | 松村氏祝賀会費                     |    |    |   |    | 30 | 0 |              |
| 2   | 3  | 一学期文武会費                     |    |    |   |    | 40 | 0 |              |
| 2   | 5  | 理髮代                         |    |    |   |    | 15 | 0 |              |
| 2   | 6  | 提灯にろーそく                     |    |    |   |    | 6  | 5 |              |
| 2   | 6  | 志いなニテノ菓子代として                |    |    |   |    | 30 | 0 | 一人前四銭で       |
| 2   | 7  | 坂本氏ニ貸ス                      |    |    |   |    | 50 | 0 |              |
| 2   | 8  | 二学期分月謝                      |    |    |   | 6  | 00 | 0 |              |
| 2   | 8  | 二学期分文武会費                    |    |    |   |    | 40 | 0 |              |
| 2   | 8  | 平民新聞                        |    |    |   |    | 3  | 5 |              |
| 2   | 9  | 角館氏より返金                     | 1  | 00 | 0 |    |    |   |              |
| 2   | 10 | ハミガキ                        |    |    |   |    | 5  | 5 |              |
| 2   | 13 | 教育図書館見料                     |    |    |   |    | 1  | 0 |              |
| 2   | 15 | 小公子及ペン十二                    |    |    |   |    | 41 | 0 | フーキドー        |
| 2   | 17 | 切手五枚                        |    |    |   |    | 15 | 0 |              |
| 2   | 17 | 牛乳代                         |    |    |   |    | 90 | 0 |              |
| 2   | 19 | 竹田より返金                      |    | 28 | 0 |    |    |   | 志いなにての菓子代なり  |
| 2   | 20 | 写真代                         |    |    |   |    | 32 | 0 | 関氏へ          |
| 2   | 16 | 父上ヨリ月謝代として                  | 6  | 00 | 0 |    |    |   |              |
| 2   | 16 | 丸善へ書物注文                     |    |    |   | 3  | 95 | 0 | 農用動物、詩集、ヘッケル |
| 2   | 16 | 為替代及切手                      |    |    |   |    | 6  | 0 |              |
| 2   | 20 | 永代蔵                         |    |    |   |    | 20 | 0 | ふきどー         |
| 2   | 26 | 理髮代                         |    |    |   |    | 16 | 0 | つるをか         |
| 2   | 27 | 坂本氏の返金                      |    | 50 | 0 |    |    |   |              |
| 2   | 28 | 藤井氏ニ貸す                      |    |    |   | 1  | 00 | 0 |              |
| 3月分 |    |                             |    |    |   |    |    |   |              |

| 月   | 日  | 摘要          | 収入 |    |   | 支出 |    |   | 備考     |
|-----|----|-------------|----|----|---|----|----|---|--------|
|     |    |             | 円  | 銭  | 厘 | 円  | 銭  | 厘 |        |
| 3   | 2  | 三月分学費       | 15 | 00 | 0 |    |    |   |        |
| 3   | 2  | 時代思潮 半年分    |    |    |   | 1  | 20 | 0 |        |
| 3   | 3  | 藤井氏より返金     | 1  | 00 | 0 |    |    |   |        |
| 3   | 4  | ホヤ代一ヶ       |    |    |   |    | 5  | 0 |        |
| 3   | 2  | 平民新聞        |    |    |   |    | 3  | 5 |        |
| 3   | 2  | ペン軸         |    |    |   |    | 12 | 0 |        |
| 3   | 9  | ハミガキ粉       |    |    |   |    | 6  | 0 |        |
| 3   | 12 | 文武会ヨリ返金     |    | 10 | 0 |    |    |   | 色部氏ヨリ  |
| 3   | 12 | テニス部会費      |    |    |   |    | 10 | 0 | 安部氏へ   |
| 3   | 16 | 牛乳代         |    |    |   | 1  | 11 | 0 | 角館へ托シ  |
| 3   | 3  | 二月分食費       |    |    |   | 9  | 20 | 0 |        |
| 3   |    | 牛乳代         |    |    |   |    | 54 | 0 | 田中     |
| 3   | 18 | 基督教本義       |    |    |   |    | 53 | 0 | 富貴堂    |
| 3   | 20 | 理髪代         |    |    |   |    | 16 | 0 |        |
| 3   | 21 | ミルク代        |    |    |   |    | 6  | 0 |        |
| 3   | 27 | 帽子注文代払      |    |    |   | 2  | 20 | 0 | 丸井     |
| 3   | 29 | 虫歯穴ウメ代      |    |    |   |    | 75 | 0 | 横山医士   |
| 4月分 |    |             |    |    |   |    |    |   |        |
| 4   | 2  | 四月分学費及      | 19 | 00 | 0 |    |    |   | 書籍、帽子代 |
| 4   | 2  | 三月分食費       |    |    |   | 9  | 73 | 0 | 山崎へ    |
| 4   | 2  | 牛乳代         |    |    |   |    | 55 | 8 | 田中     |
| 4   | 2  | 洗濯代         |    |    |   |    | 23 | 0 | 堤      |
| 4   | 2  | アルコール代      |    |    |   |    | 42 | 0 | 竹内薬店   |
| 4   | 5  | 本ノ見料        |    |    |   |    | 12 | 0 |        |
| 4   | 5  | ハミガキ粉代      |    |    |   |    | 6  | 0 |        |
| 4   | 7  | 送別会費        |    |    |   |    | 25 | 0 |        |
| 4   | 6  | 停車場入場料      |    |    |   |    | 3  | 0 |        |
| 4   | 6  | 角館氏へ貸ス      |    |    |   | 1  | 00 | 0 |        |
| 4   | 5  | 夜学校報酬       | 2  | 00 | 0 |    |    |   |        |
| 4   | 5  | 湯銭札         |    |    |   |    | 10 | 0 | 丸亀     |
| 4   | 8  | ノートブック      |    |    |   |    | 36 | 0 | 富貴堂 三冊 |
| 4   | 10 | 写真代         |    |    |   |    | 45 | 0 | 藤井     |
| 4   | 11 | 農史ノ原料       |    |    |   |    | 25 | 0 | 橋本     |
| 4   | 11 | 牛乳代         |    |    |   | 1  | 8  | 0 | 学校会計   |
| 4   | 11 | クツシタ 二足     |    |    |   |    | 60 | 0 | 越清屋    |
| 4   | 11 | 理髪代         |    |    |   |    | 17 | 0 | 鶴岡床    |
| 4   | 11 | 丸善へフルゲ子フの注文 |    |    |   | 3  | 70 | 0 |        |
| 4   | 11 | 葉書四枚        |    |    |   |    | 6  | 0 |        |
| 4   | 11 | 林檎代         |    |    |   |    | 5  | 0 | 河内氏へ   |
| 4   | 17 | 弼水倶楽部会費     |    |    |   |    | 15 | 0 |        |
| 4   | 17 | 伊藤氏へ貸ス      |    |    |   |    | 30 | 0 |        |
| 4   | 17 | 病理ト経済       |    |    |   | 3  | 55 | 0 |        |
| 4   | 17 | 夜学校茶話会費     |    |    |   |    | 5  | 0 |        |

| 月   | 日  | 摘要          | 収入 |    |   | 支出 |    |    | 備考      |      |
|-----|----|-------------|----|----|---|----|----|----|---------|------|
|     |    |             | 円  | 銭  | 厘 | 円  | 銭  | 厘  |         |      |
| 4   | 18 | テニス会費       |    |    |   |    | 10 | 0  | 四月分安部氏へ |      |
| 4   | 23 | 写真代         |    |    |   |    | 70 | 0  | 大光寺氏    |      |
| 4   | 23 | 林檎代         |    |    |   |    | 20 | 0  |         |      |
| 4   | 25 | 葉書代四枚       |    |    |   |    | 6  | 0  |         |      |
| 4   | 25 | 新聞代         |    |    |   |    | 43 | 0  | 四月分     |      |
| 4   | 30 | 角館氏ヨリ返金     | 1  | 00 | 0 |    |    |    | 荒川君より受領 |      |
| 4   | 30 | 理髪代         |    |    |   |    | 15 | 0  | 神田床     |      |
| 4   | 30 | インキ代        |    |    |   |    | 8  | 0  | 富貴堂     |      |
| 4   | 30 | ハミガキ粉代      |    |    |   |    | 6  | 0  | 共楽館     |      |
| 5月分 |    |             |    |    |   |    |    |    |         |      |
| 5   | 1  | 砂糖一斤代       |    |    |   |    | 20 | 0  |         |      |
| 5   | 4  | 牛乳代         |    |    |   |    | 64 | 0  | 田中      |      |
| 5   | 3  | 本科撰手養生代     |    |    |   |    | 15 | 0  | 素木氏へ    |      |
| 5   | 7  | 五月分学費及三学期月謝 | 22 | 00 | 0 |    |    |    |         |      |
| 5   | 7  | 四月分食費       |    |    |   |    | 9  | 10 | 0       |      |
| 5   | 7  | 洗濯代         |    |    |   |    |    | 16 | 0       |      |
| 5   | 9  | 月謝及文武会費     |    |    |   |    | 7  | 30 | 0       |      |
| 5   | 9  | 牛乳代         |    |    |   |    | 1  | 11 | 6       |      |
| 5   | 9  | 級会費         |    |    |   |    |    | 5  | 0       |      |
| 5   | 12 | 教育図書館見料     |    |    |   |    |    | 1  | 0       |      |
| 5   | 8  | 状袋二筆二本      |    |    |   |    |    | 22 | 0       |      |
| 5   | 18 | 南瓜種         |    |    |   |    |    | 20 | 0       | 興農園  |
| 5   | 20 | 理髪代         |    |    |   |    |    | 15 | 0       | 神田床  |
| 5   | 21 | ペン代         |    |    |   |    |    | 10 | 0       |      |
| 5   | 23 | 歯磨代         |    |    |   |    |    | 5  | 0       |      |
| 5   | 26 | クラフト動物篇     |    |    |   |    | 2  | 50 | 0       | 鈴木氏へ |
| 5   | 29 | 送別会費        |    |    |   |    |    | 10 | 0       |      |
| 5   | 31 | ノート一冊       |    |    |   |    |    | 12 | 0       |      |
| 6月分 |    |             |    |    |   |    |    |    |         |      |
| 6   | 1  | 六月分学費       | 15 | 00 | 0 |    |    |    |         |      |
| 6   | 1  | 五月分食費       |    |    |   |    | 9  | 00 | 0       |      |
| 6   | 1  | 五月分新聞代      |    |    |   |    |    | 43 | 0       |      |
| 6   | 1  | 洗濯代         |    |    |   |    |    | 12 | 0       |      |
| 6   | 2  | 夏服の手金       |    |    |   |    | 5  | 00 | 0       | 丸井   |
| 6   | 5  | 島松遠足の菓子代    |    |    |   |    |    | 30 | 0       |      |
| 6   | 9  | 理髪料         |    |    |   |    |    | 15 | 0       |      |
| 6   | 13 | 渡辺氏送別会費     |    |    |   |    |    | 35 | 0       |      |
| 6   | 12 | ランプの心 二本    |    |    |   |    |    | 4  | 0       |      |
| 6   | 14 | 洋服の残金       |    |    |   |    | 6  | 50 | 0       |      |
| 6   | 11 | 洋服代として      | 11 | 50 | 0 |    |    |    |         |      |
| 6   | 17 | ランプのホヤ      |    |    |   |    |    | 5  | 0       |      |
| 6   | 19 | 会食代         |    |    |   |    |    | 24 | 0       |      |
| 6   | 19 | アイスクリーム     |    |    |   |    |    | 10 | 0       |      |

| 月      | 日  | 摘要                 | 収入 |    |   | 支出 |    |   | 備考     |
|--------|----|--------------------|----|----|---|----|----|---|--------|
|        |    |                    | 円  | 銭  | 厘 | 円  | 銭  | 厘 |        |
| 6      | 19 | 夜食代五人分             |    | 50 | 0 |    |    |   |        |
| 6      | 24 | ランプノホヤ             |    |    |   |    | 5  | 0 |        |
| 6      | 24 | 葉書と歯磨粉             |    |    |   |    | 8  | 5 |        |
| 6      | 18 | 足助より               |    | 15 | 0 |    |    |   |        |
| 6      | 30 | クツシタ 一足            |    |    |   |    | 53 | 0 | 南部屋    |
| 6      | 30 | ヨージとカラー            |    |    |   |    | 40 | 0 | ⊕      |
| 6      | 30 | 理髪代                |    |    |   |    | 17 | 0 | つる岡    |
| 6      | 30 | 卒業生送別会費            |    |    |   |    | 30 | 0 | 江さしかへ  |
| 6      | 30 | 牛乳代                |    |    |   |    | 75 | 0 | 足助氏へ渡す |
| 7月分出納  |    |                    |    |    |   |    |    |   |        |
| 7      | 2  | 新聞代                |    |    |   |    | 43 | 0 |        |
| 7      | 2  | 昭衛氏へ送る             |    |    |   | 1  | 00 | 0 |        |
| 7      | 3  | 七月分学費              | 15 | 00 | 0 |    |    |   |        |
| 7      | 3  | 六月分食費              |    |    |   | 10 | 5  | 0 |        |
| 7      | 2  | 火の柱                |    |    |   |    | 35 | 0 |        |
| 9月分    |    |                    |    |    |   |    |    |   |        |
| 9      | 10 | 湯銭                 |    |    |   |    | 2  | 5 |        |
| 9      | 10 | 下駄代                |    |    |   |    | 11 | 0 |        |
| 9      | 10 | 林檎代                |    |    |   |    | 9  | 0 |        |
| 9      | 11 | 旅行用残金              | 5  | 00 | 0 |    |    |   |        |
| 9      | 11 | 靴代                 |    |    |   | 2  | 30 | 0 |        |
| 9      | 11 | 巻紙                 |    |    |   | 13 | 0  |   |        |
| 9      | 11 | 画学紙                |    |    |   | 15 | 0  |   |        |
| 9      | 12 | ノート三冊              |    |    |   | 60 | 0  |   |        |
| 9      | 13 | 恵庭旅行の費用            |    |    |   | 1  | 58 | 5 | 河内氏へ   |
| 9      | 13 | セバスターボル            |    |    |   |    | 33 | 0 |        |
| 9      | 16 | 切手三枚代              |    |    |   |    | 9  | 0 |        |
| 9      | 16 | 原先生送別会費            |    |    |   |    | 25 | 0 |        |
| 9      | 16 | ハミガキ三ヶ             |    |    |   |    | 6  | 0 |        |
| 9      | 16 | シャヂ二本              |    |    |   |    | 8  | 0 |        |
| 9      | 16 | ペンヂク ノート           |    |    |   |    | 17 | 0 |        |
| 9      | 18 | 九月分学費及月謝、雑費        | 25 | 00 | 0 |    |    |   |        |
| 9      | 18 | シート、シヤボン、クツシタ、ウデドメ |    |    |   | 1  | 82 | 0 |        |
| 9      | 18 | 支那カバン              |    |    |   | 1  | 70 | 0 |        |
| 9      | 13 | 林檎代                |    |    |   |    | 12 | 0 |        |
| 9      | 19 | 日露戦争論              |    |    |   |    | 33 | 0 |        |
| 9      | 20 | わらじ代               |    |    |   |    | 3  | 0 |        |
| 9      | 25 | 理髪代                |    |    |   |    | 16 | 0 |        |
| 9      | 25 | 林檎代                |    |    |   |    | 12 | 5 |        |
| 9      | 28 | 定山溪ニテノ級会費          |    |    |   |    | 30 | 0 | 逢坂氏へ   |
| 10月分出納 |    |                    |    |    |   |    |    |   |        |

| 月      | 日  | 摘要                   | 収入 |    |   | 支出 |    |   | 備考        |
|--------|----|----------------------|----|----|---|----|----|---|-----------|
|        |    |                      | 円  | 銭  | 厘 | 円  | 銭  | 厘 |           |
| 10     | 4  | (弁) 便当かご二つ橋本分とも      |    |    |   |    | 23 | 0 |           |
| 10     |    | 九月份月謝食費及雑費           |    |    |   | 7  | 30 | 0 |           |
| 10     |    | 馬車賃 橋本分とも            |    |    |   |    | 30 | 0 |           |
| 10     | 6  | 切手代                  |    |    |   |    | 3  | 0 |           |
| 10     | 7  | エルテル、川柳              |    |    |   |    | 78 | 0 |           |
| 10     | 7  | クツシタ、ハンケチ            |    |    |   |    | 86 | 0 |           |
| 10     | 7  | 帽子一ツ                 |    |    |   |    | 93 | 0 |           |
| 10     | 7  | 切手 葉書代               |    |    |   |    | 30 | 0 |           |
| 10     | 9  | スリパ 一足               |    |    |   |    | 45 | 0 |           |
| 10     | 7  | 十月分学費                | 15 | 00 | 0 |    |    |   |           |
| 10     | 10 | 実習細菌学、分析彙集<br>ノートブック |    |    |   | 2  | 25 | 0 |           |
| 10     | 10 | 足袋、手ぬごへ、さらさ          |    |    |   |    | 62 | 5 |           |
| 10     | 12 | 製本代 三冊               |    |    |   |    | 60 | 0 |           |
| 10     |    | 畜産各論 他一冊             |    |    |   |    | 64 | 0 |           |
| 10     |    | 赤インキ代                |    |    |   |    | 6  | 0 |           |
| 10     |    | 橋本ヨリ返金               |    |    |   |    | 26 | 5 |           |
| 10     | 15 | はみがき粉                |    |    |   |    | 6  | 0 |           |
| 10     | 16 | 藤井氏へ貸し               |    |    |   |    | 50 | 0 | 返済        |
| 10     |    | 唯一教へ書籍の注文金           |    |    |   |    | 70 | 0 | 別ニ為替料3銭   |
| 10     | 17 | 藻岩登山の際ノ林檎代           |    |    |   |    | 7  | 0 |           |
| 10     |    | 畜産ノ懇親会費              |    |    |   |    | 58 | 0 |           |
| 10     |    | 洗濯代                  |    |    |   |    | 20 | 0 |           |
| 11月分出納 |    |                      |    |    |   |    |    |   |           |
| 11     | 3  | 十一月分学費               | 15 | 00 | 0 |    |    |   |           |
| 11     | 3  | 理髪代                  |    |    |   |    | 17 | 0 |           |
| 11     | 3  | 茶話会費                 |    |    |   |    | 5  | 0 |           |
| 11     | 3  | 会計へ                  |    |    |   | 5  | 00 | 0 |           |
| 11     |    | 会計へ                  |    |    |   | 3  | 00 | 0 | 先月分不足 会計へ |
| 11     | 7  | ペン、インキ、ハミガキ          |    |    |   |    | 26 | 0 |           |
| 11     | 9  | 絵ハガキ                 |    |    |   |    | 12 | 0 |           |
| 11     | 15 | 足駄代                  |    |    |   |    | 21 | 5 |           |
| 11     | 15 | ノートと書籍               |    |    |   |    | 39 | 0 |           |
| 11     | 15 | 移住手引草                |    |    |   |    | 10 | 0 |           |
| 11     | 18 | 切手代                  |    |    |   |    | 6  | 0 |           |
| 11     |    | 藤井氏のインキ              |    |    |   |    | 6  | 0 |           |
| 11     |    | 今月分費用不足分             |    |    |   | 1  | 10 | 0 |           |
| 11     |    | 藤井氏へ                 |    |    |   | 3  | 00 | 0 |           |
| 11     |    | 佐藤氏送別会費              |    |    |   |    | 30 | 0 |           |
| 12月出納  |    |                      |    |    |   |    |    |   |           |
| 12     | 1  | 理髪代                  |    |    |   |    | 17 | 0 |           |

| 月  | 日  | 摘要                   | 収入 |    |   | 支出  |    |    | 備考 |
|----|----|----------------------|----|----|---|-----|----|----|----|
|    |    |                      | 円  | 銭  | 厘 | 円   | 銭  | 厘  |    |
| 12 | 4  | 十二月分学費及靴代            | 20 | 00 | 0 |     |    |    |    |
| 12 |    | (十二月学費用として<br>橋本へ渡し) |    |    |   | (10 | 00 | 0) |    |
| 12 |    | くつした                 |    |    |   |     | 50 | 0  |    |
| 12 |    | はみがき                 |    |    |   |     | 6  | 0  |    |
| 12 |    | ヲバシユー                |    |    |   | 2   | 30 | 0  |    |
| 12 |    | 万葉集                  |    |    |   |     | 39 | 0  |    |
| 12 | 10 | 葉書 四枚                |    |    |   |     | 6  | 0  |    |
| 12 |    | 洗濯賃                  |    |    |   |     | 26 | 0  |    |
| 12 |    | 日記帳                  |    |    |   |     | 35 | 0  |    |
| 12 |    | 画葉書                  |    |    |   |     | 7  | 5  |    |
| 12 |    | 画葉書                  |    |    |   |     | 18 | 0  |    |
| 12 |    | 湯銭                   |    |    |   |     | 10 | 0  |    |
| 12 |    | 画葉書                  |    |    |   |     | 8  | 0  |    |
| 12 |    | 画葉書                  |    |    |   |     | 12 | 5  |    |
| 12 |    | 足袋、風呂敷、ビロード          |    |    |   |     | 58 | 0  |    |
| 12 |    | 菓子                   |    |    |   |     | 5  | 0  |    |
| 12 |    | 切手代                  |    |    |   |     | 6  | 0  |    |
| 12 | 24 | ノート、ブックスタンド          |    |    |   | 1   | 8  | 0  |    |
| 12 | 26 | 理髪代                  |    |    |   |     | 16 | 0  |    |
| 12 |    | 画葉書                  |    |    |   |     | 6  | 0  |    |
| 12 |    | 画葉書                  |    |    |   |     | 6  | 0  |    |
| 12 |    | 切手代                  |    |    |   |     | 15 | 0  |    |
| 12 |    | 福引物品代                |    |    |   | 1   | 40 | 0  |    |
| 12 | 30 | 画葉書                  |    |    |   |     | 18 | 0  |    |
| 12 | 30 | 切手代                  |    |    |   |     | 15 | 0  |    |
| 12 | 30 | 葉書代                  |    |    |   |     | 6  | 0  |    |
| 12 | 30 | 筆代                   |    |    |   |     | 5  | 0  |    |
| 12 | 31 | 一月分学費                | 15 | 00 | 0 |     |    |    |    |
| 12 | 31 | 丸善書籍ノ注文              |    |    |   | 10  | 00 | 0  |    |
| 12 | 31 | 切手代                  |    |    |   |     | 9  | 0  |    |

〔附録3〕明治三十六年収支一覽表

| 月   | 収入 |    |   | 支出 |    |   | 残高       |          |        | 備考                                    |
|-----|----|----|---|----|----|---|----------|----------|--------|---------------------------------------|
|     | 円  | 銭  | 厘 | 円  | 銭  | 厘 | 円        | 銭        | 厘      |                                       |
| 1月  | 38 | 20 | 0 | 20 | 60 | 4 | 17       | 59       | 6      |                                       |
| 2月  | 39 | 59 | 6 | 20 | 46 | 3 | 19       | 13       | 3      | 3円50銭ハ夜学校ヨリノ分                         |
| 3月  | 21 | 23 | 3 | 17 | 71 | 3 | 3<br>(3) | 38<br>52 | 6<br>0 | 3円50銭ハ遠友夜学校ノ分                         |
| 4月  | 19 | 00 | 0 | 14 | 36 | 4 | 1<br>(2) | 86<br>63 | 5<br>6 | 夜学校報酬ハ5円50銭                           |
| 5月  | 19 | 30 | 0 | 21 | 00 | 1 |          |          |        |                                       |
| 6月  | 19 | 55 | 0 | 14 | 83 | 7 |          |          |        |                                       |
| 9月  | 2  | 56 | 0 | 19 | 38 | 0 |          |          |        | 夜学校報酬ノ手元ノ残金7円50銭、叔母上様ヨリ戴キシ金1円50銭、残金無シ |
| 10月 | 16 | 32 | 5 | 23 | 27 | 5 | 1        | 70       | 0      | 洋服代手金トシテ10円払ヘシニヨリ残金ハ示センモノ、ミ           |
| 11月 | 37 | 00 | 0 | 30 | 89 | 0 |          |          |        |                                       |
| 12月 | 16 | 50 | 0 | 22 | 85 | 8 | 1        | 50       |        | 外二角館氏ヨリ借金20銭                          |

注 残高：上段は實際上、下段は差引上の数値

〔附録4〕明治三十七年収支一覽表

| 月  | 収入 |    |   | 支出 |    |   | 残高 |   |   | 備考                            |
|----|----|----|---|----|----|---|----|---|---|-------------------------------|
|    | 円  | 銭  | 厘 | 円  | 銭  | 厘 | 円  | 銭 | 厘 |                               |
| 1月 | 16 | 50 | 0 | 7  | 55 | 5 |    |   |   | 去年ヨリ繰越シ1円50銭                  |
| 2月 | 22 | 78 | 0 | 26 | 75 | 5 |    |   |   | 前月繰越シ9円39銭、二月分学費15円、負債3円99銭5厘 |
| 3月 | 16 | 10 | 0 | 16 | 11 | 5 |    |   |   | 前月繰越シ4円18銭、三月分学費15円           |
| 4月 | 22 | 00 | 0 | 25 | 4  | 8 |    |   |   |                               |
| 5月 | 22 | 00 | 0 | 22 | 16 | 6 |    |   |   | 前月繰越シ2円13銭                    |
| 6月 | 1  | 75 | 0 |    |    |   |    |   |   |                               |

## 鎌倉日記

この日記は、明治三十二年四月に、國分兵吉氏の紹介により脚氣療養の爲め、鎌倉円覺寺内佛日庵に滞在中之記事なり。この歳の七月、再び佛日庵ニ行き、<sup>〔管〕</sup>くわん長釋宗演師に弟子入りし參禪したり。

## 弥生日記

此記は明治卅二年四月二日鎌倉円覺寺ニ病ヲ養へてより書き起せしものにして、帰京の日迄の事を記す。

## 四月二日

頃は弥生の中ばにて都の空は桜花今を盛りなれと、吾れ國分君之其勧めに聞きて病をなほすべく四月二日円覺寺に旅立ちぬ。大船に着きしは午前十時半、此処より独り線路ニそうて進む。途上の風景、平凡記するに足るものなし。程なく一村落に達す。之れ円覺寺の在る所なり。寺は鎌倉五大寺の一にして時宗の建立せし所なる由、実には古松老杉道ヲはさんで深えんのをむきあり。山は高くして深山ニ入るの思へあり。樓門を入り石階を昇り佛日庵を尋ぬ。老僧家に在らず。待つこと少時にして帰り来る。余か願を欣諾して一室ニ導く。室は東南ニ面して広く、庭前の椿今を盛りと咲き乱れ、風景も大いに良し。東京の下宿など比すべくも非ず。昼飯後葉書を出して後、鎌倉八幡を參拜せんとて行く。今日は日曜日なればにや、途上見物の人々ニ逢ふ。左ニ見し寺は建長寺かなと想はるる巨刹あり。乞食共道ニ並びて錢を乞ふ。坂を下れば朱塗の神社あり。之れ八幡なり。社前ニ拝して暫く休む。商船学校之生徒七八人、又門内ニ休み居れり。石階を降れば銀杏樹あり。之れ僧公暁の実朝を殺せし所なれとも、此の樹なるや余り若ければ疑はし。其れより尚ほ進みて海を見んとて行く。殆と一里計り漸く海面を見る。到れば老若群をなしてたはむれ居れり。漁夫の網引、余は先めてなれば如何なる者<sup>〔物〕</sup>の取るゝかと待ち居れり。他にては大なるたこ漁れたりと云へ居れと、余か見し時は稀<sup>〔極〕</sup>めて不<sup>〔道〕</sup>り<sup>〔期〕</sup>ようなりき。期<sup>〔期〕</sup>の如きにしてはと余も一驚せり。北海道などにては流石<sup>〔期〕</sup>二期の如きものならざるべしなと思ふ中、四時ニ近け<sup>〔期〕</sup>は直ニ庵に帰る。

## 三日

早朝起すれば雲霧山を覆ふて漠々、裸足露をふんで石<sup>〔階〕</sup>楷を往来すること数回快言ふべからす。洪鐘山<sup>オオガネ</sup>に登りて巨鐘を見る。貞時かの鑄所高さ九尺、皇帝万歳重臣千秋等ノ銘を書す。土地高きを以て眺望最も良し。食後更ニ建長寺ニ向ふ人の行くにさそはれて、山後の道祖神への參詣をなさんとて登る。両側に茶屋あり。草履を並べしを見れば其のけんそ<sup>〔険阻〕</sup>なることは知られたり。進めば石<sup>〔階〕</sup>楷にして岩をはりしものにして少しく困難ををばへたり。ましてや余の如き脚氣者は中腹<sup>くたび</sup>にして芬れ所々に息みしも可笑し。や、頂上に一堂宇ありて僧侶之如きも居り、參詣人もにぎあへり。誠の社は更に頂上なりと聞きて登る。此処より<sup>〔眺〕</sup>下すれば一望千里の觀なきも、遙ニ途上に行く人は蟻の歩むか如く、建長寺は眼下ニ

見へり。連山はえんへとして前方江並び、此の山と雄を競へるか如し。実に天下の絶景にして吾れ未だ曾て期の如きの山江登りし事なし。余常ニ思ふ、我か東北は山水の景壯勇にして巨大ひぞかに大陸的風景ありとなす。然るに此山に登て関東又此の山あるかの感あり。此处よりは鉄鑽すかりて登るべからず。稍々けんにして道路なく、わづかに樹根ニよりに石階を形づくる。社は小にして恰も雪隠の如し。参詣するものあれとも余は直ニ頂上の一茶店ニ入り団子を食べて休息す。此处よりは唯た山の後のみ望み得べくして景色余り良しからず。時々微雨降りて天候悪し。山を降りて家ニ帰れば既に正午なり。午後よりは余り徒然に耐へ難くて又々洪鐘山ニ登る。山後の一芝生に座れ占めて、汽車の往復するなどを眺む。歌なども吟する様、朝鮮人めてき可笑し。然れと彼の巨鐘は如何にして此处迄挙げしかなど考ふ。昔しなればこそ北条氏の威権によりて此の巨鐘を鑄、此の巨刹を建立したれ、今時なれば一寺院の為に期の如きことは出来ましなど思ふ。山を降りて庵[に]帰り、成すこともなくてとふ然として一睡の夢を試む。

#### 四日

夜来の雨少しく霽れたれとも霧の降ること尚ホ止まず。食前又例ニ依て洪鐘山ニ昇る。嗚呼、此の山何ぞ余と親しきや。吾れは日ニ汝を訪ふは運動の為にしも非らざるより、其の石階のきくとして百余楮老樹蔚茂して途を覆へ苔なめらかにし幽すの趣なればなり。堂ニ達せば四方開闢ならずと雖も、身は高山の頂ニ在るか如く、鬚鞭たる白雲生せば吾も又羽化して登仙するの志無からむや。食後雨天と気違なから目当てもなく瓢然として江ノ島の方へとをもむく。酔狂にも程こそあれと思へたれと今更帰らんも如何なれば、鎌倉にて傘を買ひ之れあらは雨も鎗も大丈夫なりなど考へて行くに道三方に分れたり。前方は何かは知らねとも社ニして道あるべくもあらず。右の方は車の轍多ければ、之れならんと思へて行く。突き当りて石標に大仏と書せるを見たれば、直ニ門内ニ入る。右ニ奇物云々の小屋あり。見れば古道具屋の如きものなり。門内の桜花今を盛と咲き乱れたり。大仏あれと目的茲ニあらされは、石階の下にて一見し、茲を出て、前方に進む。道路泥ネイ困難を極む。之を過くれは前方猶ホ山にして、江の島街道らしくなし。道路も田舎道らしく、道を間違へし事明なれば、馬鹿へしけれと帰りて、今度は左方に行く。海近く見へて家も並び茶屋もあれば、之れなめりと思ひて進む。坂を昇りて中学の生徒十人計りに逢ふ。今日は雨天なればにや、参詣人更になし。余りの馬鹿らしさに江之島には行きたくも無ければ、或る家の裏より海上を望めは遙ニ島見ゆ。あれならんと思へて少し行くに、海岸に出でたり。烟草くゆらし居たる男、吾れを見て舟にて江の島に行かずやと問ふ。今は行く心もなければ、否な此の辺をふらづきて早や帰らんなど答ふに、又他の男来て同し事を問ふ。吾れは海岸に腰打ち掛けて、漁船の往来する様など見る。少しく風の出たればにや、岸打つ波の音高く白沫となりくだけ行く様も面白く、江の島も遙かに見ゆれと、波に道は打絶へて行き渡るべくも見えされは今は帰らんとて歩み来るに、見物の人々に行き合へり。其れより又もや鎌倉の海岸にと出で歩み来る。先日来りしよりは波荒し。砂に腰すへて漁夫の網引くを見などす。雨降らん様子なれば、急き此度は立ち出て用事もなけれと停車場へ寄

りて休み、又々八幡の明茶屋ニ腰掛く。人通り更ニ無し。其れより帰りて以前の宿屋に入りて昼飯を頼み、魚など出せと命す。之の二、三日の精進ものに比すれば、味殊に良き様なり。或るハ明<sup>[空]</sup>き腹なる故にや。

## 五日

朝は例之如く裸足露を踏みぬ。瓢然として門外ニ出で線路ニ沿ふて進むに、汽車の横須賀より来りたるにや逢へぬ。それより路ニ出で、道側の寺門らしきに宝所近在の額ありたる坂ニ入りて見る。何にも無之たゞ二三の堂宇之みなれば直ニ帰る。食後はなすことも無くてぶら〜として近傍を散歩しぬ。二時頃より鎌倉の囷ニ依りて円覚寺之前ニ五山之一寺なる某寺及び十六井ありと聞きて見ん為め行く。山之彼方なれば多分此処ハ寺より行かは宜敷からんと思て、建長寺の手前なる山道を登る。登り終れば海見へたり。線路ニ出でたる故、沿ふて行くに停車場ニ出で目的ノ場所は猶ホ山の彼方にして行くべき道なし。多分大仏の方よりならんと断念し、此度は海岸ニ歩を運ぶ。漁夫の網引先まり居れり。一組は今始めんとて船を装へ海岸ニ引き出し、二十人計りも打ち乗り、かけ声勇ましく沖ニこぎ行く。他之者砂上ニ転びなどして他方の網を見るめり。稍や一里にもやと思ふ頃ニ網を置きて帰り来る其中ニ他方之網は引き上たり。見るに長さ四尺計り銀白色之光りしたる細長き魚ニ尾と鰓など二尾計り、其他は例の雑魚のみなり。又々網を張る様子なれとも最早や夕方に近ければ八幡之前を通りて着せしは暮色蒼然の頃なりき。夜る、高等学校生某氏来遊せられ、九時頃帰る。

## 六日

朝は例之如く散歩。食後は閑ニ耐へ難くて十一時頃迄夢む。朝より寒<sup>[き日にて]</sup>さ甚たしく天気も曇りたれば出で遊ぶべくも非ず。

## 七日

今日は朝よりの雨にて例の散歩もせず、家ニありて太陽など読む。昨日よりかけて如何れなる氣候之変化にや、寒さ甚しくて又冬にもやなりぬらんと感じす。時々海の方に当りて大砲の如き音するは何にや、いぶかし。

## 八日

昨夜より霽れかゝりし雨、今朝ニ至りて朗々たる天気とはなりぬ。いでや今日こそは江ノ島を見舞ニ、日頃のおもひ霽しなむとて、朝七時半頃寓居を出立つ。道路は先日見分したれば、真一文字に停車場之裏を通り、長谷之町を突ぬけ、極楽寺坂を越へて行けば、左方に大館次郎源某之徒十一人之墓なる木標あり。南朝之忠臣戦破れて報国之為めに命を此処におとせしものか。風雨霜雪幾百年、空しく孤墳を擁して吊ふものなく、墓辺之松樹不断之音楽をなして、いさゝか其心をなぐさむ。吾れ此処を過くるに当てマサニ一掬の涙なき能はず。人生此の世ニある朝露の如し。栄華威権ニ奢りし足利氏、盛名幾千時ぞ、後世誰れか之れをにくまざるものあらんや。新田氏勤王ノ旗を翻し微々として勢振はず、恨を吞んで泉下の鬼となるも、千歳之後誰れか之れを欣慕せざるものあらんや。嗚呼、忠義之犬となるも不義之奴となるべからず。人情浮薄民ニ信なく、漸く売国之奴を生せんとするの

今日、此墓を吊<sup>[甲]</sup>ふて帝国之前途を憶へは涙ほろ<sup>ママ</sup>だとして禁すべからず。汝靈あらは此ノ困を天地長久に護れ、吾れ又ちかつて護国之鬼とならん。新田義貞の刀を龍神ニ献して潮之退かんことを祈りしは、此の辺か。潮水依然たれとも吾れニ向て旧を語らず。行きへて漸く海辺に<sup>ママ</sup>至る。濤声いさゝか以て吾か俗耳を洗ふに足る。除歩砂辺に<sup>[甲]</sup>倨して浩然之氣を養ふ。大島は烟之如く面前ニ横はり、豆相之半島共に突出して此之湾を抱く。江之島は既に俗塵あがれり。何そ言ふに足らんや。唯た龍池穴のみは奇なり。波浪<sup>[激]</sup>して洞内ニ突入してはいとうたるの状、壮快言ふべからず。鶏卵二個、さゝひ壺焼を味ひて空腹を充し、風景之絶かなるを眺めて、平生の鬱を散せし。帰路由井か浜辺<sup>[由此ヶ浜ユイガハマ]</sup>を逍遙して、和歌を詠せんと欲して得す。空しく光明寺を訪ふて寓ニ帰る。

九日

風寒けれども天気晴朗一点の雲なし。食後、鎌倉神社、安国寺等を見舞はんとて出立つ。道を八幡之下ニとり白旗神社を拝して師範学校之前を通る。日曜なればにや、生徒数名球を弄せるを見る。田甫を通りて頼朝之墓<sup>[別]</sup>ニ致る。数重之石塔苔むして、つた生し、石質弁すべからず。困いすに石垣を以てす。千古之英雄、此之内ニ眠れるかを思へは、転た悲哀之情に耐へず。実にや貴賤老少之差別なく死しれは一古墳之主となりて吊<sup>[甲]</sup>ふものもなく、空しく無名之草を肥やすに過ぎすと雖も、をしむべきは名にこそあれと、空しく古墳ニ対し英雄の末路を怨み、人生の無常を言ふ勿れ。見よや、身は草間ニ没して三代之栄華夢の如しと雖も、名は青史ニ留し千古ニ滅することなけん。道を転し山径を伝ふて大江廣元、島津忠久公之墓<sup>[甲]</sup>を吊<sup>[甲]</sup>ふ。共に巖窟の中にあり一拝して退く。傍に大江廣元公之碑文あり。文字磨滅して読むべからず。石楷<sup>[階]</sup>を下れば桜花風ニ舞へ、繽紛衣を打ちて満目雪之如し。忠久公之碑あり。之を過ぎ更に大塔宮の御窟及び鎌倉神社を参拝せんとて行く。至れば御窟を拝せんとするものは社務所ニ出づべしの札あり。逍遙すること少焉ありて、一旅人別当に導かれ拝せんとて来る。吾れも又附て願ふ。拝<sup>[一字空欄]</sup> □ 後社務所ニ来りて姓名を書すべき由言はれて諾せらる。行きて洞中を伺ひ見るに、暗黒ニして物も便<sup>[弁]</sup>すべからず。案内者之語を聞くに、穴は下方ニ曲りて上ることを得ずとか。一見人をして<sup>[一字空欄]</sup> □ 然たらしむ。御身は竹之園生ニ生長せ給ひなから、深く皇家之回復ニ志を致し、東西之落薄すること多年業因稍々その緒ニつかんとして、不幸逆賊之讒ニ遇せ給ひて此处ニ幽閉せられ遂ニ命を失へ給ふ。嗚呼、皇国ニ生れて粟を食む者、誰れか宮之御志を憶へまいらせ、悲業の御最期を悲まざるものあらんや。悪むべきは足利兄弟之反逆にして、其罪天地ニ容れず。吾れ其肉を食へ其骨を粉ニするも猶饕かす。此处を出で、遙ノ小岳を指して、淵辺伊賀守の宮之御首を葬りし処なりと又向ふの山頂の松樹の見ゆる所は僧某の宮の死骸を葬りし処なりと話して社務所ニ至る。貧書生之謝礼之錢も持たねは厚く礼して此处を立出づ。昨日通りし道へ出で妙本寺に至る。日蓮宗の寺にして中々広大なり。北条氏一族六十余人自殺の処、此の近所ニありとか言へと見ず。夫れより安国寺を尋ね道分らされと此处辺ならんと思ひ進み行くに寺院の屋根見ゆ。至れば果して松葉谷安国論寺等の石標あり。門前の老松囲り三かゝへも有らんか、高く天ニ聳ひる伏龍の雲を得て、再び去るにも似たらんか。寺

は言ふにも足らず。安国論を草し給へる巖窟は、東面して左程堅固ならず。此処かと思はるゝ程なれど、左様の議論は必用なけん。日蓮茲ニ座して九年の歳月を過して安国論を草し給ふ云々の木標あり。山上に南面巖屋ありと聞きて上り行く。日蓮之石像を安置せり。傍辺の木標に日蓮上人、此の山頂に上り、遙ニ房州を望みて、両親を思へまゐらす云々と。依りて竹藪を通りて上り見れば、房州は見へされと景色善し。山上の松の根に腰打ち掛けて暫くながめ、庵ニ帰る。午後よりは十六井戸を見んとて行く。建長寺の手前なる坂を上り、路線を超へ行くに、景清ノ土籠あり。窟内、余り広からされと少しく風流の様あり。旅人の賞し行くも興あり。或は後世の作にや。それより進めは、海蔵寺あり。門前に底ぬけの井戸あり。歌など石ニ刻しあれとも、余り古ければ読み難し。門内ニ入りて十六井戸を探すに無し。或は山の上にかと考へ上れとも、唯た雑草の生へ茂れるのみにして有るべくもなし。余り馬鹿らしさに帰らんかとは思へしかとも、ふと傍を見れば石門ありて道あり。これならんかと思へ進み行くに □ しげなる道を過て十六井戸の標あり。岩之洞にして鍵あり。銭を出したらんには見得べけれとも、困窮し場合なればこれも得ならず。たゞ首を突込みうかゞへ見るに、井戸染屋之 □ 桶之如く並び居れり。難となく物さびしければ早々此処を立出で帰路に付く。長寿寺ニ尊氏の墓あれば、一見せんとして立寄る。石標に足利尊氏公御墓所並御尊影有之の字を書せしもの路傍ニ転び居れり。何者の悪戯にや、公御などの尊称をはこと更に磨滅して漸く読み得べし。陰々たる石櫓<sup>[櫓]</sup>を上げは墓所あり。石塔乱倒して、何れか尊氏之墓たるを弁すべからず。嗚呼、逆臣之末路憑れむべき哉。天人之悪む処となりて死するも身を置くの処なり。浮世人、臣たる者、豈鑑みずして可ならにや。

十日

今日は同室之友栗原君の帰京するにぞ、余も帰らんかとは思へしかとも明日にす。午前建長寺之境内を散歩し、帰路明月院ニ立寄り、最明寺入道時頼の墓を拝せんとして行くに、何処ニ在るにや分らざれば空しく帰る。夫より少時座禅参技をなし、昼近く又々鉄道線路に添ふて歩み、一小丘之神社らしき石段之上ニ<sup>[新]</sup>居して放歌し、汽車の往来するを見る。午後よりは又もや座禅して夕暮に及ふ。悟か、迷か、大悟之行域ニ達するは何れの時ぞ。今日の夕飯には隣室之大学生二人と余とのみ残れり。吾れも又明日帰らんとす。噫、未だ別るゝに忍びすと雖も課業のあるを如何にせん。さらば佛日庵よ、健在なれ。此之夏再び又汝を訪ふの期あらん。

十一日

この行や吾れ鎌倉<sup>[幕]</sup>朝府<sup>[中]</sup>を吊ふて深く天下興亡治乱之依て来るところを察し、英雄之治績を鑑みて一掬之涙無き能はず。由井か浜辺の浪白く、鎌倉山の月清きところ感慨無量。

武士のをたけびさこそ聞ゆなり  
鎌倉やまの夜嵐の風  
ふることを憶へまはせば潮みちて

由井か浜辺に千鳥なくなり  
頼朝公の墳墓を拝して  
諸人の鑑とこそはなりぬらん  
君かつとめしそのいさほしは  
露おける君の御墓ニ苔むせど  
嶺の松風おと絶へぬなり  
大塔宮之御窟を拝みて  
時に社前の桜花爛熳たれば  
美吉野に今を盛の桜花  
手折りし人のうらめしき哉  
武夫の涙と共ニふし拝む  
鎧の袖ニ桜はな散る

鎌倉客中作

興亡真一夢      回首事何紛  
石馬賊秋草      華鯨吼暮雲  
棚潮三尺剣      吞涙数行文  
父老為前導      荒村小径分

杉聴雨

(巳亥歳四月十一日) 誌

## 明治卅五年夏 東北遊記

## 東北遊記

明治卅五年の七月ニハ秋田青森地方を旅行せんとハ未た之の歳の来らぬ先きよりの計画なりき。幸ひ学友大光寺氏の同意を得て心勇み立ち二学期の頃より用意をさへ怠らず、早々七月の来れかし。又も鍊へし健脚を青山碧水の裡ニ試みんと指折り数へしも、何時か早や日月ハ白露の如く桜の花ハ夢の間に散り時鳥鳴く青葉の頃となれハ、頭を痛めし試験も過ぎて待つニ待ちたる夏期休業となりける。<sup>〔及第〕</sup>級第して喜ふ人、落第して気の毒がらるゝ人、色々なれと気の早き人々ハ已ニ一日、二日ニ皆な帰国を急さける。吾れも初めハ七月の一、二日頃ニ出立ちの約なりしかど、学兄小島君の本年ハ是非ニ札幌ニ来るべしとの音信ありければ已むことを得じ。十日近ハ滞在して御案内のやく目をはたすことゝせり。大光寺氏ハ已ニ四日ニ出立して花輪迄行き、十二日ニ弘前ニ於テ再会することを約せり。兼て願へし旅費も九日ニ大雨ト共ニ来りけれハ親の高恩を感謝して、早く之の雨の済れよかし、吾か立つ日よりハ晴天なれと天を仰きて日々雲行きのみ眺むれと、天気となりてハ済れ、はれてハ雨と定まりなかりしか、弥々十一日ハ早朝よりの好天気ニて小島氏も一番列車ニて幌内炭山ニ行き吾れハ二番と定めたれハ荷物を齊藤氏宅へ運び下斗米様を訪問して、帰れハあやしげなる雲北より起り来りしニ暫時ニして一天ニ廣かり藻岩山を覆ふと、見る間もなく大雨沛然として降り十一時過くるも尚ホやめず、<sup>〔益〕</sup>増々急ニなれり。已むを得ず旅装をとゝのへ齊藤の妻君及びその家の御婆さんニ見をくられ、すのつく計りの大雨を物の数ともせず停車場ニ向ふ。下斗米様もいとまごへす。汽車中ハ例の如く別ニめずらしきこともなし。桂月の一簣一笠と云ふを読み行く中ニ何時の間ニか寝むりしと見へしか、室蘭の声ニて目を醒まし棧橋の方ニ向ふ時間ハ僅かなれと丸本と云ふ旅舎ニて夜食を食ふ。船賃九百幾とんの最も小なる陸奥丸なれハ気分悪しけれと乗り込む。海上ハ幸ニ風和き北海名物の<sup>〔ガス〕</sup>がすも今日だけハはれたれハ、海上無事夢の間ニ函館ニ着けり。八時迄ハ停泊なれハ人夫の荷よけするなどを見る内ニ、之の地よりの人々乗り込み出ば<sup>〔航〕</sup>んす。青森ニ着きしハ午後の五時なりしかハ停車場ニて弘前行を待ち、五時<sup>〔一字空欄〕</sup>分ニ出發す。弘前ニてハ大光寺氏待ち居るならんと思へしニ影も見へざれハ六時迄待ちして大館よりの汽車ニて大光寺来れり。共ニ弘前の齊藤ニ宿る。第一の旅館なり。

## 十三日

明くれハ空の気しき何となく悪しかりしか、はたして七時頃より降り出せり。已むべきニあらねバ八時ニ立ち出づ。先づ弘前古城、今の公園地を見ばやと西ニ向ふ。当年華美の地も今は草茂り水にごりたれど城内樓閣尚ホ有して古を忍ばしむ。<sup>〔展覧〕</sup>天守閣ニ古物てらん会あれハ二銭を投して見し、刀劍古鎧、古銭、其他の器具種々ありて君公の蔵物ニヤ中ニ尊きものあり。特別目ニ付きしハ鎧ニして新納武蔵守の着しもの及び三層楼ニハ非常ニ立派なるものありし。更ニ北方の<sup>〔墓〕</sup>基ニ昇りて眺望<sup>アジガサワ</sup>、茲より降りて大光寺氏と袂を分つ。道をあやまりて少しく迷へしか、港町の橋を渡りて鱒<sup>アジガサワ</sup>か澤街道ニ向ふ。之の時より又々雨降り

初めたれハ道中ニ悪しく、田舎の人々の往来ハ中々にあり。高松大森などハ皆な百姓のみなれハ大光寺氏来りて困るなるべしと気の毒がる。大森の少し此方ニて兵士群集して諸方の山ニ昇り旗をふり鉄砲をならせり。之れを見る程の時ニもあらねハひたすら途を急く。北海道とハ異なりて道行く人ハ稀れなれと両側ニ並木の松茂りて長く続き行けとも行けともつきることなし。大輪の花しょうぶの紫色ニ咲けるなど美しき事言ふ計りなく野生のものトハ思はれざる程なり。濱梨子はまなすの花も咲きてばらの花かと思はる、計り美しく、中々風流気なれハ雨ハ小止みもなく降りて折角の岩木山イワキサンも雲ニ閉ちられてすがたを表はさゞるこそ千秋の遺憾なれ。之の山ニ登り得すともせめて写生だけハと思へしに返へすへの不幸なりし。木造町より来る道と合ふ。少し此方の山ニて時鳥はととぎすの声を聞きしも嬉し。一首の歌トハ思へど一歌人ならねハ名吟も出づるニ由なし。両路の合せし処ニ行けハ海ハ顔前ニ表はれ鱒ヶ澤も眺め得べし。とんねるを通れハやがて□<sup>【一字空欄】</sup>町なり。之の町ハ中々賑はしく商家の軒を並べし事驚く計りなり（但た、そのきたなきハ是非もなし）。多分ハ之の地方の貨物集参地なる故なるべし。一橋を界として鱒ヶ澤と別る。共ニ海ニ浴へる一本町ニして戸数ハ千以上もあらんか、警察、裁判所などあり。宿ハ□□<sup>【二字空欄】</sup>。

十四日

午前七時ニ出発す。東北地方名物の家の屋根下をどこ迄も通り抜くれハ、海ニ浴へる砂地の街道ニ出でたり。風景左程宜しからず。平凡なれバ道を急く。長き橋を渡れハ赤石村アカイシムラニ出ヅ。一小村ニして別ニ商家などなし。北金ヶ澤村キタカナガサワムラを通り過くれハそろへ海岸ニ岩石横はりて眺め良ろしく歩を進むれハ従て風景も加わり波ニげきせらる、岩などの稍々大なるものあれハ音ニ聞く大戸瀬岩トハあれかと疑へしか、余りに小なれハ立ち止まることなくして過ぎ行くに、道ニ浴へる所ニ余程大なる奇岩ありて水の為めに侵蝕せられたれハ幾個ニも別れ、之れニ日本海の大波ノ来りて打ち当り【泡】沓沫の飛散る様など実ニ奇観にて、之れこそハ大戸瀬岩ならめと暫時海上ニ突出せる岩ニ据して眺めたり。眺めハつきねど出立ちして稍々又進めバ遙ニ一大岩石の直立するを見留めたり。而して之レニ朋ふて幾多の小峯重なり立ち海上ニ突出せる方ハ平たんニして畳の如く、方一町ニもや余るらん。色ハ淡青色なり。先ニハ已ニ大戸瀬岩を見たりと思へて意味洋々たりしもの、今又眼前ニ之の奇景を目ニして暫時ハ語なかりし。写生して之レニハ立ち寄らす、直ニ通り過く。茲より一里ならざるに弁天島あり。之の辺ニて昼飯を食はゞやと足を早む。海辺ニをり立ち弁天島を眺めながら握り飯を食ふ。やどかり、かになどの群集せるに興をもようし、例のいたづらむらへとわき立ち、竹の棒にてつゝき廻す。中ニ何とは知らず岩の間より毛の生へし五六寸計りのもの出でたるか、人の気はへ【配】ニ驚きて再び急きて之の岩影ニかくれたり。吾も一時ハ不思議かりしか何かは知らねと怪物ござんなれ、再び出で来らハ生捕りくれんと待ちかまいるトハ知らず、前の怪物再びのそへと這へ出たり。瞳を定めて良く見れハ、いとも大なる蟹ニてそありし。逃くる様なき、岩間ニ行きしを見計らへ電光石花【火】と竹棒ニてをさへ付たりける。蟹公もなかへさるもの、護身のはさみをふり上げて、こゝぞ一生の大事と竹をはさむ勢のすさまじさ、竹も切れなん計りの音を立てたりける。暫時ハをさへ

付けたれど、このまゝにてハ何時勝負の付くべかるも見へざれハ、再び傍ニありし木の棒をバ助勢ニたのみて之れにて蟹をバ無性ニつくに蟹公遂ニくるしかりて水の濁りしを幸ニ何処ともなく逃れ去りける。生捕りくれんと思へしに逃かせしこそ千秋の遺憾なれと、そこらくまなく探せとも見当らざりけれハ、古戦場ニ立ち帰りしに水ハ清まりて足二本と剪一本をぞ打ち捨て、逃れ去りける。体を得ざりしハ遺<sup>【徳】</sup>かんなれと、せめてもの戦利品として之れを取り上げ<sup>【頭カ】</sup>歌をぞ上たりける後ち、之れをくたきて肉を出し之の海辺ニ住まへるやどかり、えび、かになどに与へ食はしてにぎやかしける。それよりハ深浦迄山を登り、山を下り、或ハ砂原を行く。深浦の入口ニ又侵蝕されし岩ありて眺めもいとよし。洞門をくゝれバ深浦町なり。戸数ニ、三百もあらんか、中々にぎわし。宿ハ秋田屋。

十五日

七時半出立す。海ニハ浴はす、山を掘りて新に道とせり。中々高けれと平たん<sup>【坦】</sup>にして宜し。之の山を下りれハ岩崎に出づ。町ニ似合はざるペンキ塗の高大なる小学校あり。之の学校ニ相応せる教師あるか又卒業生を出すかなと考へつゝ、行く。中ニ正 道尻<sup>【シヨウドロジリ】</sup>を過ぎて海中ニある島の巖洞穴とか称せる岩を眺む。暫時の後ち又出立す。之の辺の景色もなかへ宜し。松神黒崎<sup>【マツカミクロサキ】</sup>を過ぎて大間越<sup>【オオ マゴシ】</sup>にて行く。案外の一小村にて旅人宿などハなく、僅ニ一商店ニ立ちよりて昼飯をすたゝむ。昨年<sup>【イワダテ】</sup>の六月頃火事ありて九十戸の村か六十戸焼失せし由なれハいとさびし。こゝよりハ岩館迄三里と聞きて一時半頃出立ちするに雨又もや肅々として降り出せり。止むべきニあらねバ坂を登りて行くに、海岸に突出せる鼻のいと高さ処より目を放ちて眺望するに奇岩るいへとして重なり、脚下ニ打ち寄する波白泡を飛ばして岩とかむ様など実ニよし。遙蒼海<sup>【はるか】</sup>びようぼうとして天ニ接し、白帆の遠きあなたを往来する様など画も及はざる好風景なり。之を下れハ砂原にして歩き悪き事甚し。山ニ掛れハ細径僅ニ通して雑草両側ニ生へ茂れハ、をりから降り出せる雨の爲めに葉面ハ露を宿して征衣を湿し、道ハ泥ねい<sup>【滞】</sup>として甚た困しむ。然れども月を放ちて遙ニ海上を眺むときハ風景の壮大得も言はれず。大間越の険も左様ニは非ず。且つ清流所々にあれば夏日と雖も困しむ事なからん。去年の夏<sup>【ナカヤマ】</sup>、中山越をせし事などを思へ出す。熊の恐れなきだけかせめてもの安心なり。頂上ニ至れハ茲ハ青森と秋田との境界線の標木たてり。何となく心勇み歴史上地理学上の事などよりして去り難く暫時やすみて眺望す。をりから下よりして歳の頃十一、二歳許の小女、一人ハ野菜を負へ、他ハ小児を負へしか、雨降りたれハ冬<sup>【露】</sup>きの葉をとりて頭ニかぶせたるも興あり。同しく茲ニ休みて過き行く。吾れも後<sup>【道】</sup>をうて出立す。之れよりハ一体ニ高原にて田などもあり、中々開けたる所あり。吾れハ之の山ニ登<sup>【登カ】</sup>りて鱒ヶ澤より岩館迄の海岸中、之の大間越を以て第一の好風景となせり。大戸瀬岩奇は奇なりと雖も、之の山の壮大なるに及はざるや遠し。之の山を下れハ乃チ岩館なり。茲ニも中々立派なる学校あり。午後四時半頃着。宿ハ〇〇、此の村戸数ハ五、六十もあらんか。宿も極めて粗末なり。

十六日

朝八時半頃ニ出立す。わらず掛<sup>【草鞋】</sup>けをぬすまれしニ腹立てども仕方なく、今日ハ能代迄七里<sup>【ノシロ】</sup>

二足らぬ道程なれハ急きもせず、初めハ風景もよろしく坂上の清水心地よけれども、それよりハ山道となり唯たをりツバキムラ海を遠望するのみ。椿村と云ふところニハ銀山ありて工場もあれと規模小にして小坂コサカを見んとする。吾れニは立ち寄らんとするの意もなく行き過く。八森村ハ稍々大なる町なり。水澤ハチモリムラと云ふところニて昼飯を食はんと思へ行きしニ茲も案外の小村ニて皆な農家のみなれハ力を落す。腹ハ増々ミズサワ減れども仕方なく益々行くと飲食店向へあへて両三軒のみありし処ありたれと、一方ニよれハ一方ニ気毒なるのみならず、余り清絜潔ニもあらねバ行き過く。次の処ニて菓子を食べ、ようやく中食とす。能代二つきしハ四時半頃。兼而の丸二とか云ふ旅店を探さん為メに市中をぐる一回りたれど見当らず。日吉神社ニ到り後チ停車場迂行かんかと思へたけども思へ止まる。又橋の方ニもどりて（地主）ニ宿る。市中繁盛のところニあれハ中々やかましけれと致し方なし。隣座敷ニ田舎者数人宿りてかまびしき事甚たし。夜ニ入れハ何処へか行き去れり。別ニ散歩ニも出づる事なく九時頃眠りニ付く。道路ニ砂利を敷きつめた事とて、往来の人の歩むに其音高く耳ニ入りて十一時頃ニ目さむ。能代ハ小なれとも港の事なれば中々繁昌ニして商家軒を並べ往来の人も多し。停車場ハ一里計りあり。此の日、大光寺と之の地ニ会する積りなりしかど、村井と云ふ旅店を忘れたれハ之の宿ニつきたるなり。後下女より聞きたれど夜ニ訪問することをせず。明日途中ニて行き会ふならんとはかなく待つ。

十七日

午前六時頃目醒む。暫時して雨ありたれば出立つの仕度もせでありけるに、七時過ぎ宿の番頭の立ち顕れて御客様ありとの知らせに誰やらんと立ち出で見れハ大光寺君旅装して来りしニぞありける。意外の事ニ勘定を早々済ませ急きて仕度し出立す。秋田街道ハ道もよく天気もはれたれば心地何となく愉快なり。大光寺氏の話アキタに秋田、能代間の汽車二十日ニ開通式ありとの事に、さらば今日一日市ニ泊して秋田ニ着くもつまらなし。及かず先づ男鹿半島を一周して後ち秋田ニ出で秋田より大館迄汽車ニて行くハ好からずやとの発議ニ直ニ同して鶴川ウカワ迂行ハチロウコ事ニ決す。三里計り此なた八郎湖の傍なる大曲と云ふ処より車夫ニ聞きて怪しげなる道を通りて行くハマダに濱田ニ出でたり。最早や昼ニも近かければと地図を広げオオクチで大口と云ふ所ニて飯を食はんとて行くに、何時の間ニか大口アシザキを通過きて芦崎ニ出でたり。大口ハまだか一と思へて行くに、はや人家たへて道ハ山間ニ出でたれハ不思議ニ思へて再び地図を見るに過ぎたるなれハ馬鹿一しけれども腹ハ中々へれり。次の駅ハ二、三里も行かされハ無きにより又々絶食かと力無げに出立す。之よりハ道数条ニ分れ細径ニして何れとも判らざれハ心ニ任せて進むと海辺ニ出でたり。遠くあなたにハ真山、寒風山を望み、天気は霽れたれと風あれば波高く岸を打ちて深藍【藍】の如き日本海特に風景壮麗なり。海辺の砂原【行】を行くなれハ道は良けれども腹ハ承知せず。大光寺氏たまり兼而漁家ニ付て魚を求めんとせしかど遂ニ得じ。中々つかれたれハ砂上ニ休むニ、余りの心地よさについとろ一と眠る。大光寺氏ニ驚されて再び進むに、道ハ又山ニ登りて【行】付き松原ニ出で、大きくなれり。人も数人往来すれハやかて村あるべしとて行くに、野石ノイシに出でたれハ茶店ニよりて菓子を求め水を呑み再び勇気を付て出立す。今日ハ北浦とせんかと途中ニて言へ

しかと途の都合にて又鵜〔鵜の木カ〕の川ニ行くことに定む。道にて空びんを荷へるものと一所〔一緒〕ニなり種々話しあへて行くに、之の男中々耳遠き方にて言葉も分らざれと余等か後〔鵜の木カ〕ニ鵜の川迄従へ来れり。之の地方にてハ然りと云ふことをナーと云ふ。之れハ佐賀の言葉と同じ。宿ニつきしハ五時半頃、一人の客来り居れり。田舎の事なれハ宿屋も粗末なれと致し方なし。之の村も八郎湖ニ近き所ニして戸数五六十位もあらんか。

十八日

午前七時半頃出立す。樽前〔樽沢カ〕と云ふ村の神社のある所を登りて小〔一字空欄〕□し後、背の小山にて寒風山を写生す。之れより松原を通りて山ニ登り初む。山ハ樹木なく草まばらに生へたれば実ニ心地よく、日ハてるにあらねど何となくむし暖ければ汗も出でん計りなり。山ニハ草荊の男ども馬を引き〔馬〕をりて盛〔馬〕ニ切りをれり。山頂迄ハ二三度休みて昇る。さして高しと云ふニハあらねど坂少しく急なれハ中々困し。山頂ニ付きしハ八時半頃なりしか、茲よりハ四方を一目ニ眼下ニ眺むべく、東ニハ八郎湖をへたて、大平山タイヘイザンを遠く望み、近くハ船越フネゴシの土埼、秋田迄莫胡〔橋〕の間ニ隠見し、西方ハ真山高く聳へて、背後ニハ日本海〔海〕し〔船越〕ょうびょうとして広々、南ニハ鳥海山チヨウカイサン煙の間に立ち翠峯雪を頂きて下ハ霞の中ニ薄らけり。実ニ画も及ばぬ好風景ニして北ニも又日本海の白浪を望むべく、雨ニ越へし大間越の険ハ遙カ海中ニ突出して容易ならぬを示せり。三十分計りも茲ニ休息して北浦キタウラニ出でんとて山を降る。之の方ハ山急ニして直立せる如く又岩石畳々として頗る険なり。石を伝ふて下ニ降るのみニ数十分を要せり。之れよりハ道路急ならずして所々ニ田畑〔がて〕あり。やかで人家も樹間ニ隠見して農夫などの往来もあり。北浦ニ出づる道にてハ老弱〔若〕男女のや、盛装せる者多く道連れとなりがやへと多人数にて行くにより又ハ市日ニもやと思へて北浦ニ行きて見れば祭礼なりし。馬を美麗ニ装へて持でる者皆な引き来るなれハ、そを見んとて又田舎人の来りしなりける。市ニハ行灯などをつるして中々にきわし。一旅店ニ付きて昼飯をすまし又立ち出つ。社ハ日枝神社とて市の上部ニあり。茲ニは郵便局もあり。其他家屋も中々田舎ニはめづらしき程大なるものありし。之の辺の教会なり。茲よりハ戸賀トガ迄二里と聞きたれハ三時迄にハ着くなるべしとて一時頃出立す。湯本ユモトニ着きしハ二時頃、温泉ありて旅宿も立派なるもの三四軒あり。茲にて道二三本ありたれハ路人ニ付て聞くに、右の大なる方を教へしかバ疑ふこともなくして行きしに道ハ海岸の上ニ付きて立派なるものありし。海辺ニ人家見へたれハ之れぞ戸賀ならめと信して喜び下ニをるれハ案外の一小村なり。舟の事など聞くに今日ハ北浦の祭礼を見に村の若者行きたれハ一人もなからん、或ハ向に見ゆる畑〔島カ〕と云ふ村ニハあるやも知れすとの事ニ再び勇をこして山ニ登りて行くに道ハ良ろし。途中にて一漁夫の道ニいこへし者と道連れとなり、聞きし所戸賀ハ之の山のあなたにて道を違へしことを聞き、戸賀は尚ほ一里もどらさるべからすとの事ニ初めて驚く〔島カ〕。畑ニハ小舟なけれハ大舟なれハ一艘五円もとるなど、の事ニ再び驚く〔島カ〕。空しく畑村〔島村カ〕を通過して山ニ中腹を通りて再び後ニ引きかへし戸賀の方ニ向ふ。此の辺よりハ南北ニ海を望むべく広漠たる高原なり。少しハ田畑などありし様あり。雨降り出だしたれハ中々明日の事か心配となりて種々話す中、戸賀も見へ初めたり。戸賀ハ湾内ニありて山上より望めハ水藍の如く

波静ニして山腹の松杉と相応ぜる様ことにうるはし。急坂を下りて村ニ入り一小童ニ教へられハ一旅宿ニ着す。時ニ五時半頃なり。此の宿ハあへて旅宿にあらず。船舶の間屋めきし所ニして女出で来り、主人のるすなれはとて首ひねりしも吾等ハ雨の益々降るにせん方なく頼む。吾等の行装を見て葉売りかと問ふも可笑し。夜ニ入りて北海道より鯁漁の人夫を乗せり船汽入港シ五六人ハ矢張り之の処ニ宿るとかにて十時頃より酒呑み初め騒々しかりしも、吾れハ日中のつかれによりて寝ニ付きぬ。十二時頃ニ至りて蚤と蚊と騒々しさに目醒むれハ大光寺もねむられぬ様子なり。雨は尚ホふり止まぬ。されハ心配なり。

十九日

今日も雨降り止まねハ一日滞在して明日の日和を待つことゝす。空しく座敷に籠城して雑談と昼寝ニ過す。主人も来りて種々の談話ありたり。午後ニ入りてハ波高く霧かゝりて細雨も肅々として降りたれハ気も気ならずしてひたすら明日の天気ならんことを祈る。

廿日

五時頃ニ目さむれハ天気ハ極めて宜しけれと波ハ尚ホをさまらざれハ如何ニかと気づかう中ニ船頭来りて今日の波ニてハ兎ても岸を伝ふて行かれまじ、沖を行くとも酔ふなるべけれハ明日ニ伸してハ如何との事ニて吾等もそう〜ハ長く滞在することを得ざれハ先づ十時頃迄待つことゝし、それニて波静らざれハ真山を越へて行く事ニ決定す。兎ても静まるべうもあらざれば八時頃立つ。宿の人々気の毒かれど吾等にハ別に成算あれバ勢良く行くに、戸賀ハさほど風なかりけれど山上ニ出でたれハ中々の大風ニて、北ニ面せる海、一昨日迷へ行き<sup>〔島カ〕</sup>鼻村、北浦の海岸ハ白波高く岸を打ちて沖も又波の為メ白沫飛びてかすりの如くなれり。一昨日迷へし道ハ湯本の<sup>〔後方〕</sup>あなたなりし事、今日ニなりて知る。北浦ニ着きしハ十時頃なりしか、郵便局ニよりて小包をして不用の本を送る。町の下にて心切気なる老人より真山への道を聞いて行くに、昨日<sup>ホンザン</sup>ハ本山の峯、今日ハ真山の祭礼なれば年若き男女などの盛装せるもの信仰深き御婆様などのよふ〜と来るに行き逢ふて往来繁し。真山神社のある所の少し此なにて息みしか後ち、門前の祭礼の為めいとにぎわへる一小店いこへて氷水を飲まんとせし時、初めて蝙蝠傘を遺失せし事をさとり、往来あれハ兎ても無からんと粟をくらへて飛び行き見るに、幸ニも未だ人目ニふれざりし<sup>〔物〕</sup>者か又ハ善男善女のみなれハ拾はで過き行きし<sup>〔物〕</sup>者か、いと都合よかりき。茲ニて昼飯を食へて坂を登り行くに神楽などを奏せるありしかど、別ニ目をふれすして行く。道ハ社殿のある所まで石を敷きつめたれど、それより上ハ唯の山道ニて山頂迄で真直なれハいと急ニして土をかまん計り。参詣人あるべけれと、僅ニ藪を切り開きしのみにて雨の時ハ谷とな[る]べけれハ掘れて細く深くなり、且ツ昨日の雨ニて途ハすべり、日光ハかゞやけバ暖きこと甚し。今ハシャツ一枚となりて汗ニまみれ、苦しさを耐へつゝ行くなれハ両三度休みて遙か登り来し方を眺むれバ山急なれハ下の村々眼下ニ見へて身ハ登仙しつゝあるに非すやと疑はる計り。山ハ樹木はへ茂りたれば既ニ涼風吹けり。一層の困しさを経て登れハ真山の頂ニ出づ。茲ニハ方ニ間計りの真山神社あり。周囲ニハ杉の大木一面ニ生へたれハ下の景風ハ更ニ見へねと冷風吹き来りて思はず衣を重ねしめたり。社殿ハいと古けれハ<sup>〔茅カ〕</sup>かたむき板破れて

荒れはて、中ニハ何にもなく唯た昨日の祭礼ニ参詣せし人あればにや、白米などの落ち散りたるもあわれなり。茲を立ち出で亦もや藪深き急坂を傘を杖とし草の葉ニ掴まりて降るに、半白の老人の酒樽をさげて来るに逢ふ。此の山を下りしとき更ニ又前方ニ高峯のソビへたるを見たれハ、之れハ本山ならめ。真山ニてハ杉の為め眺望するを得ず遣り憾しかりしか、此の山ニ登らバ男鹿の半島を一目の中ニ見渡すことを得るなるべし、北澤氏の写生せし画図も之の山ニてこそせしなるべしと思へバ急ニ勇氣も出で大光寺君をハ待つ間もなく猿の如く登る。之の山も真山ニをとらず急ニして且ツ余程高ければ苦しさ耐へ難し。山頂ニ昇りても樹木生へたれハや、失望せしかと、少しく行けば陸軍測量台のある所ニ出づ。茲ニハ樹木もなく四方の海山を座なからに目渡すことを得れば、先づ台上ニ昇る。実ニ本山は男鹿半島の富士ニして之の山ニ登るトキハ之の島の隅々見へぬ所ハなし。寒風山ハ眼下ニ見へて八郎湖をへたて、秋田の山々霞の如く、鳥海ハ今雲ニおはれたれど遙ニ山麓ハ望むを得べし。能代のあたりの海ハ北風の為めに白浪高くあかり、南の海のみハ稍々静かなり。風烈しく吹けば寒さ特ニ甚しく帽子も手ぬぐ<sup>〔拭い〕</sup>へも吹き飛ばされ、吾れも又台上ニ久しく居るべからず。をりしも吾等か来し方より遅れて登り来りし参詣男と共に急きて之の山を下る。本山を下れば茲ニ又下より上り来る道あり、之れ女道なりとか。同時ニ山麓より登り初むるに茲ニて会するなりとぞ。之れより尚ほ山を兩三度上下したれと平坦<sup>〔坦〕</sup>にして風景も余り取りわけ云ふ程ニもなし。降路ニてハ参詣人の人々ニ度々逢ふ。道ハ例ニよりにて悪しく且ツ間ニ尚ホ溪水を流せば渉り行くによりて転倒せんかと心配甚し。山腹ニ清水あり。掬して先つめてよみがへりし心地す。之れより尚ほ下れば本山神社ニ達す。社殿ハ壯麗ならず。直ニ再び下山を急く。茲よりハ石階<sup>〔階〕</sup>なれはいとよし。門前ニてハ今日も賑しく屋台店、掛茶屋など立並びて子女の雑踏せし。海辺ニ行けば五六端へだて、一小舟の客人数人乗せてこき行くあり。或は島廻りニもあらんと漁夫ニ問へばはたして然り。漁夫も吾れも手を挙げて呼ぶに満員なればと断はらる。仕方なしに二人ニて別ニ小舟を貸して見物ニ出掛く。十八九位の男船頭となりて行くに茲も中々波高し。実ニ天下の絶景と皆な人ニ言はれし程ありて、危岩海中ニ無数ニ並み各々その形を異ニして日本海の荒波之れニげきし白沫四散するの景壯大と言はんか、壯麗と言はんか、吾れ賞するの解なきをうらみす。今にして文を学ばざるを悔ゆるこし深し。門前より行けば怪岩の間ニ特ニ屹立して象起<sup>〔象〕</sup>へその形の烏帽子ニ似たるものあり。舟子ニ問へハ龍ヶ島<sup>リュウガシマ</sup>と云ふ。鷹の類ニや一峯ニ巢を作りをれり。之の側の懸涯す一瀑布懸れり。水も多くして風景先づ之の辺賞するに耐へたり。舟子尚ホ諸島を指して吾れニ語れりと雖も風の為めと言語の通せざる為め其の名を知るを得ず。然りと雖も風景ハ増々<sup>〔益々〕</sup>奇なり。巖影を通ふて風波をさけ或ハ瀬戸を通りなとするに水ハ清くして底も見へなん計り。沓沫舟の行くに従テ飛び、征衣時ならざるに湿ふて遊子の意気更ニ壮なりき。之れ等の諸岩の間に行くに一時間計り、最後ニ一洞窟ニ達す。側ニ平坦なる岩ありて女<sup>〔徒カ〕</sup>岩と云ふ。之の洞中にハ女入るを得す。後ニ言ふとぞ吾れ等ハ舳を鳴らして進み行くに、其音反響して遠雷の如く洞口ハ広くして中ニ入ること五六間水ハへきたんをなして岩石を打てる有実ニ身の神境ニ遊びたらんの如し。男鹿島中第

一の風景と称して可なり。洞中ハ暖かく水蒸気迷まうとして立てりしかと遙かに砂地を見留め得べし。舟をよせんと試みたれと波荒ければ付くる事を得ず。止まること数度舟を回らず。砂地の両方二道ありて深く未だ奥を知らずとか。江の島の洞窟の如きものなり。俗人にけがされさるだけが先づよし。舟子のさい錢を上げよとの事に一錢を舟中ニ置く。茲を立ち出で、海中の稍々平なる大なる島ニ舟を結び付て上り見るにカモの村見ゆ。をりしも、夕陽已ニ斜なれハ暮色蒼然として辺りをこめ落日の雲ニ閉ちたれハ、夕焼の赤く海上ニ輝らざるを以てうらみとせり。風はいよ一烈しく停立すべからず、帰路を急く。波ハはう□として岩ニ澱せる者更ニ吾れ等か舟ををそへきんろうせられて木の葉の如く危険言ふべからず。門前ニ付きしハ已ニ黄昏の頃なりき。宿ニ付けハ村の若者集まりて酒呑み居たりしか、何れも□酌して直ニ立ち去れり。此の家の主公ニや吾れ等を如何なる者とか見たりけん、尊敬すること甚たく四角ばりて出づ。たゞ翌日の宿賃の一人六拾錢と聞へて驚くの外なし。四角張り賃かとして苦笑するのみ。

廿日

七時頃出で立つ。道ハ海辺ニ沿ふたれハ風景の宜しき所なきにあらねど格段言ふほどの事非ず。船川ハ戸数も中々ありて一小港をなせり。金川ハ小村なれども三階の立派なる宿屋を有せり。共ニ港ニして船舶の寄港せる者多し。船越ハ之れより山道となり一直線の松原あり。茲ハ戸数も多く稍々都会の風をなせり。三百間とか聞く、彼の八郎湖と海とを連続せる所に架せる橋あり。之の辺一体ニ浅ければにや、漁夫数人ハ海の中ニ入りて網を張り、一人ハ船ニ乗りて舷を打きて魚ををへ捕へをれり。之の辺の風景ハ多分八郎湖と海とを左右ニ眺めて眺望宜しからんと想像せしに、實際ハ然らずして海の方ハ見へず、洲となりて湖よりの水曲りて流るゝのみ見へたれハ、余り賞するに足らず。此の橋を渡れハ曲ハ農ニして、茲ハ多く百姓家のみあり。或家より若者走り出で吾等ニ馬ニ乗り行かずやと勧めたれば、待てる事なり得たりかしこしと土埼迄の値を答へバ三十五錢と云ふニ三十錢と付けて行過くに後より追へかけて呼び返す。此の家ニて馬の仕度の間ニ昼飯を食ふ。やがて馬上の遊子となりて本通りにあらぬ松並木のある青草の上を行くに眺めハ良く往来の人もなければ心静ニねり行く。大光寺の馬は雄馬なれハ時々荒れるにより先行し、余か馬ハ後ニ従へり。物を充分食はせざる為めか道草のみ食へて中々進まず。叱咤の声は常ニ絶ゆることなけれどそれも後ニなりてハ慣れて余りきゝめあらず。遂ニハ馬子ニ尻を打たるに之れニハ恐るゝと見へて駆け出すに吾れハその評子に背骨を打ちつけて翌日迄もいたかりし。実ニ此の日ハいと朗なる天気にして小春日とも言へたげなり。松原の青く連なれるに時々ハ砂丘を越して海原の見ゆるなど実ニ画とも見へべし。東海道中膝栗毛の有様も思へ出されていと可笑し。之の青草の間道を通り過くれバ本道ニ出づ。砂利を敷きつめたれハ馬ニ草靴をはかす。之の街道も旧道なればにや、追分と云ふ所迄古松道の両側ニ立ち並びて旅行の憂を消さすべし。中野と云へるハ能代街道と船越街道との追分なり。茲ニ着きしハ三時頃ニもや、車夫等すきしに馬子と呼ばひ止めて返り馬の値の相談なりしか、遂ニ纏まりて吾等ハ茲より馬より下りて人力車ニ乗りて土埼迄来れり。土埼よりハ鉄道馬車ニ乗りて秋

田ニ着く。土崎ハ商港ニして秋田ハ県庁のある所なれば別段言を要せず。夜ハ市中を散歩して祭礼のかざり者を見、風呂ニ入りて帰宿す。

廿一日

朝飯すむと共、秋田公園を見に行く。市の東ニあり、旧城跡ニして堀広く城高く古松の茂れる様東北ニ類なき公園なるべし。城内も美しく樹木生へ、鳥海山、本山、寒風山をも望み得べく風景極めて宜し。一周して宿ニ帰る。出立は九時過ぎにして此度も土崎迄ハ車馬鉄道ニ乗る。今日ハ鹿渡迄と思へバ急ぎ行く。此の途も例の松並木なれば日ハてれども暖き事なし。八郎湖ニハ浴はず、稍々離れたる山ぎは二道付けり。昼飯ハ大久保と云ふ所にてなす。茲も一寸良き町なり。茲より一里計りにして下虻川あり。一日市ニ着きしハ三時過ぎなりし。若し臨時の発車もあらんかと思へて停車場ニよりしに、始ハ乗車することをこばみしかと、吾等を呼止めて、六時発の汽関車ニて吾れも用事ありて機織迄出張するなれば共ニ乗せ行かんとの事ニ喜びて停車場ニ時間の来る迄待つ。之の停車場の名ハ一日市ニあらずして五城目とあれハ不思議に思へて頭の毛の薄き人ニ尋ねしに、五城目ニハ味噌醤油の製造人ありて之れを阿仁銅山ニ売り込みて大館地方の商人と競争せんとすれども、一日市ニ停車場ありてハ五城目よりの運搬費一日市よりの汽車運賃と同額となるにより、是非之の線を五城目ニ引かんとて四五千円の運動費を散ぜし由なれと能ハざりし由にて、その代にハ名のみ停車場ニ五城目と付けしとか。待つ間程なく六時二三分頃となれば汽関車ニ皆々乗り込む。吾等も石炭の上ニ腰を掛ける。列車なれば走る事矢の如く、直ニ鹿渡ニ着く。茲ニて待つ人ありて暫時息み、能代停車場ニ着きしハ七時三分頃なりし。終列車七時五十分の者あらんかとして停車場ニて聞き合せしかと無しとの事ニ旅店村井ニ投ず。

廿二日

朝八時一分発の列車にて出発す。此の日は天気晴れて近頃になき暖き様子なり。能代川ニ沿ふて進む。別ニ風景の宜しき所なく平凡の景色なれば途中より眠り掛く。二ツ井、□□、□□、□□の三停車場を過くれハ大館なり。町ハ茲より十町計りも離れたり。本通りハ中々賑きはしく一寸せる城下の風をなせり。町ハ高低をなして家皆な古し。此の地ニ桂城とて一千年以前の古城ある由にて維新前迄ハ秋田の城代居りし由なれど見ず。此の地方より十二所扇田辺ハ維新の秋田戦争の古戦場なれば何となくなつかしき心地す。余り暖ければ町はづれにてラムネを呑む。町を出づれば地ハ稍々平坦にして、稲田遠く連なり並木もなく山影もなければ暖きこと限りなし。村落つゞけバ真ニ内地の田舎旅行たる感あり。別に見るべき所もなければ例の電信桂の番号を読みつゝ、足ハ機械的に前ニ進むのみ。扇田ハ戸数五六百もあらか、商家も立ち並み電信局などもあれば良き町なり。途中能代川ニ望める或る神社の裏手の杉の大木の陰にて息む。一人の風体あやしげなる占者の如き人も茲ニ休みて中食をなせりしかば、吾等も之の次の□□にて昼飯を食はんとて出立す。半里と聞きて急に、やがて茲に達せり。町ハ二三十戸の小村なれど、温泉わき出づる由にて一軒の少しく立派なる宿屋ありたれど、人力、馬車などの駐り場なれば歡めらるゝもわづら

はしと思へ、次の十二所にて食はんとて通り過く。十二所ハ戸数は扇田に次きてあれども、皆な百姓家のみにして商家はなし。最早や旅宿はなからんとの事ニ怪しげなる半は農にて職み居るらしき旅店ニ立ち寄りて飯を食ふ。五円の紙幣のつりなきをため近所を尋ね歩き中々はかどらず、出発ハ二時過ぎとなりたり。途中は小坂銀山より荷物運搬の荷馬車続々として隊をなして来るに行き逢へ、その度び風の為めに吹き飛ばさるゝ黄塵を汗顔の上に吹き付けらるゝ、気持ち悪さ、別に色の白き御面相にてもあらねバをしき事ハなけれどいともうるさし。能代川ニ沿ふて行く程に小坂より花輪<sup>ハナワ</sup>ニ行く街道と行き逢ふ。茲ニ橋ありて之の橋の辺より望みし景色、故郷の米澤橋より福岡<sup>フクオカ</sup>を望みしに良く似たればなづかしき<sup>懐かしき</sup>感じす。茲に立ち寄りて汗をぬぐ<sup>拭ひ</sup>へ、ラムネを飲んで大湯へと急ぐ。大光寺氏ハ知人の家茲より一里ニ足らねバ行き<sup>オオユ</sup>て荷物をあづけんかなど云つしたれと、早や五時ニもなりたれば<sup>と</sup>兎ても九時過ぎにもならざれば大湯に行き難からんと思へたれば直ニ大湯ニ向ふ。此の道ハ本道ニあらずして別の道なる由なれば余り大ならず。途中ニ田道將軍戦没の地なる木標ありて一なる社もあれば休む。茲より少し行くに道の両側ニ円く盛りし土塊ありて大光寺ハ一里塚のあととなりと説明す。古へハ道々にありし由なれと見しハ初めなれば妙らし。一休和尚の迷途の旅の一里塚とハ之れなんめりと種々戯言をはき、念仏などをとなへて行く。道ニ草苺の馬に行き逢ふ事<sup>し</sup>すきりなり。大湯ハや、低き谷の如き所ニありて川ニ沿へり。山を下れば大なる洋風の建物ありたればハ学校ならんと思へしかど、大湯の地<sup>断</sup>二期の如き大なる学校のあるべき筈なし。旅店ならんと急ぎ行くに明日見ればはたして学校なりし。茲にも外部の宏大をはこる<sup>薄</sup>軽白風吹きて、内部の精神は軽ずるに非ずやと考へ行く。此村一番の旅店ニ行きしに運悪く忌中との紙を貼りたれば他ニ探すに、旅宿らしき所ハなくして皆なむさぐるしき百姓家の旅宿のみなれば少しくあきれたれど、別ニ仕方もあらざればハ或る宿ニつく。室ハ台所と樟子<sup>障</sup>一重へだてし薄暗き天井の高き所にして、樟子一枚づゝ足らねハ<sup>閉</sup>閑づる事かなわず、通風ハ宜しかるべし。但た温泉あれば此日の労をなぐさむるに足るのみ。夜ハ蚊屋もなければ又<sup>帳</sup>シヤツ<sup>シャツ</sup>をかぶるか心配せしかど、別ニ蚊もうるさからざりし。

廿三日

朝ハ六時頃に起き出づ。湯に入りて出発せしハ八時過ぎなりし。大湯の町を通りて上の湯の下なる橋をわたりて山道になる。此日ハ朝より霧降りしか遂ニハ雨となる。昨日十二所にて悪しき物を食へし<sup>具</sup>訳か腹の工合良ろしからず。労れもあれハ道中ニはかどらず、途中ニて宝舟などを飲んでや、<sup>復</sup>氣力を回復す。十和田道ニハ出です<sup>トワダ</sup>□子滝を見んとて尚ほ登る。途中ニて立派なる洋館ありて発電所らしく滝も見へたれば、大光寺ハあれか□子滝ならんとの事に近づきて見るに、案外つまらなき者なれば腹立つに、之れでハなしとの事に更ニ登る。五六町登れば滝の音聞へたり。喜びて近づくに高さは六七丈もあらんか、水勢も強くして景色もよろしけれど、今ハ水を別ちし<sup>勢</sup>為め水製減せりとか。之の滝の向へにある一小祠に立ちよりて中飯を食ふ。発電所に立ち寄りて案内を受け茲を立ち出でしハ一時過ぎなりし。十和田迄ハ一里半と聞きたればハ安心す。途中ニ工夫らしき者ニ近道を聞いて

山ニ入る。朝よりの雨霏々として尚ホ降り止まず。道ハ溪流ニ沿ふたる細径なれば昇るに從て雜草生へ茂り、牛馬の歩みし跡はあれと泥ね<sup>[澤]</sup>へ深く、橋も絶へし所間々ありたれば徒渉して渡るに初めこそ良ニ道もよろしかりし、昇れハ昇るに從て橋弥々なく且つ道ハ溪流と相へ合して之れをこぎ行かざるべからざる冷たさ、板取ふきなどの兩側より相合なりて道も分からざる有様なれば洋服ハ露の爲めに尽くぬれて気持ち悪るし。一里の余も来りしかと思はる頃に道ハ二本に分かれたり。何に心なく上の道を取りしかと考ふれば大湯より来る道と行き逢ふとかなれば直角ニ行くこそ当然なれば、之の道ハ炭燃きの山ニ入る別の道ならぬ、下の左の道こそ正しきものならんと又もどる。行く道々ハ炭をやきし跡もあり釜も残りたれと年過きしにや道も破損して分らぬ迄危く、水ハ瀬となりて尚ホ流れ止まねど、幸ひ雨もはれて空も明るくなりたれば勇氣も倍して稍二十町計りも来らんかと思ふ頃、茲にも炭小屋ありて道ハ止絶<sup>[途]</sup>へたり。失望せしにハあらねど初めて之の道の誤にして初めの道の正しきなりしを思へたれど直に帰るも馬鹿<sup>[鹿]</sup>へしければ滝より一里半と聞きし者<sup>[物]</sup>を早や一里の余も来りしなれば、之の山の頂山に登らば或は湖水の見ゆることもやあらんかと思へて道なき藪に登る。されど、山は深く山もいと茂り向も見へざる程なれば兎ても無益なればとて茲を下り、更に又之の道に出づ。十町余もあとにもどるは馬鹿<sup>[鹿]</sup>へしけれと今ハ道も確定し時も尚ホ早やければ急きて岐路に出で、此度ハ又再び右の山道ニ入る。之れも人のあるきし跡なければ怪しかりしか、はたして五六町ニして道尽きたり。此度ハ失望すること甚だしく或は道問へし工夫の偽を教へしにあらぬかなと疑ふ。されと再び一里有余の道をもとりて滝迄出でんこともしがたければ、勇氣をこしてこの山の絶頂に登り見ん、若し十和田湖を望むを得ば倅<sup>[徳俵]</sup>なり。見当だに付かば山を越へんこと苦もなき業なりと思へしこそ無謀にも愚かなりし。之の山を越へ、あの山ニ登りしならば湖水見へんかと空しき望みを懐きて熊笹、くわん木<sup>[灌]</sup>などの密生せる獣<sup>[獣]</sup>も行ねぬ所をかきわけ、手を傷け、目をつかれ、或ハ滑りて谷底ニ転るもかまわず再び草葉ニ取りすがりて山に登り見れば、之の山ニ登りたらば向ふハ見へんと思へしかと、一層高き山ハ尚ホ前ニ横はり樹木もはてしなく生え茂りて昼尚ホ暗き有様なれど、茲迄来りしもの今更再び跡に帰らんことも流石ニ出来難く、苦しくとも又勇をこしてあの山の絶頂に登りたらばとの倅<sup>[徳]</sup>心ニいざなはれ、或ハ或はとの誘惑ニ打ち勝たれ苦しさも希望ある為め忘るゝ程なりしが、早や山を越ること四つ五つにもやなりぬらん、茲より前途を望むに山ハぼう<sup>[霧]</sup>として限りあることなく、之の林を越へ行たも今日中ハかゝるべき程広ければ、今ハ前進すべき勇氣も失せ暫時ハ呆然たりしか何時迄かくてあるべきにあらねば、大光寺氏樹ニ登りて湖水や何処と眺むれど四方皆な山ニして何処を湖水とも見分けつかねば、今更ら無謀にも深か入りせしを悔へたれど力及ばじ。磁石なりともあらば何とか方針を定めしものをと惜やしかる。日も西山ニ傾きし様なればくづ<sup>[づ]</sup>して居るときハ野宿せではかなうまじ、更らばもと来し路を帰りて炭小屋迄なりとも出でよとて再び引きかへしたれど、密生したる藪なれば再び之の道ニ出でんこと難く東西も分らざりしか、今や吾等か来りし道の左なるべきか右なるべきかさへも分らすなりたれば、行くべき方もなく呆然として四方を顧望するの

み。幼くして故郷ニありしとき十和田の山中にて道ニふみ迷へしものハ容易ニ道ニ出づること難く、時ニ百年の命を之の人知れぬ山中ニ失ふものありとは聞き知しかど、吾か身の上ニも経験せんとハ思はざりき。食物もなく、磁石もなく、東西も別らぬ。之の深山を何処を目的となく歩むとも、藪の為メ一定の方向を指し難ければ、何にを目標として道を定むべき。三日、四日は食なくとも歩まれんも、尚ホ道に出でずハ如何ニすべき。噫、吾等も又茲ニ命を失ふに非ずやと心ニ思はれたれば、何となく悲しくなり涙もようされたり。されと何時迄かくてあるべき。日のある中ハ行ける処迄行きて日暮れなば其処を今夜の宿と極めん、山を行くは目標なく藪をこぐなればとても幾計も行かれまし、むしろ谷を見付て之れを沿ふて降らバ何日かは何処の里ニか必ず出づることを得んとて谷を見付てニ之れを下る。笹も少なければ歩行も左程困難ならず。暫時して水の流るゝ音聞こへたれば水わき出でたるぞ、溪流となりしならば何れ川ニ出づべし、さらば吾等も生命ハありけりといと打ち喜ぶことかぎりなし。樹の根、草の葉の間よりわき出る流れを掬して蘇生の思へをなす。夏の日のおいと暑きに汗は滝の如く流るゝとき、山影の岩間よりも清水ハ実ニ山海の珍味ニも増してうれしく常ニ神の愛を思へて感謝せしが、之の人も通はぬ山中の溪谷にも又神の愛を顕わはし給ふて山路ニふみ迷へる之の精なる二人の旅人ニ愛の泉を別ち給ふ御心、吾等豈ニ感謝せざらんや。之れよりハ流もいよ〜増さり、谷も急ニしてしば〜転倒したれば衣服ハ全くよごれ、溪流をこぎ行くなれば足の冷たきことかきりなけれど、藪をこぎ行くにハ遙<sup>[勝]</sup>増りたれば、日のある中に出づるに良きところ迄出でんとて急に、流は更ニ合して稍々大となれり。はや黄昏となりて板取りなどの茂へれる所ハ暗く物すごけれど足も前別る所まで行かばやと急ぐ。之れよりハ滝となりし処などもありて困難なる上雨降り上なれば岩がくれて、危険なれば注意して木の根ニとりつき猿の如くなり、余は先導して下る。暗は早や足下を包み、川霧もまう〜とし立ち昇り、山頂などは早や見へざる程になりて、冷氣も身にせまりて何となく物すごかり。程なく亦も一つの滝の上ニ来れり。霧は滝つぼをこめたれば深さは分からねと、流れ急に水音高ければその高さもおし計られつ。断崖急にして取り付く樹枝も見へざるに、茲も岩石雨の爲めに分解して壊るれば危険言ふべくもあらず。暗ハ増々四辺を込めたれば一歩をふみすべらさば身は滝壺の中に葬られあたら千金の身を失なはん。君子ハ岩涯の上に立たず。及かず宿を山上ニ求めて一夜を明かさばやと相談一決し、山腹ニ向ふて進む。寝褥の用意にとて落の葉を採り集めて登る。幸にいと大なる樹ありて葉も繁りたれば之の下蔭を今夜の宿所ニ定めんとて準備を初しむ。大光寺ハ生へるゝまゝの樹枝ニ落の葉をのせ、その上ニ早や身を定めし様なりしが、吾れも近辺より多くの枝を折り取りて之れを地上ニ重ねて厚くし、その上ニ矢張り落の葉をのせけり。左の樹側ハそのまゝ明きて風いと吹き来りければ用心防禦を兼ねて之にも木の枝をフェンシー<sup>fence</sup>の如く並べ立てぬ。屋根ハ蝙蝠傘を幸へ出でたる枝の上ニ掛け、足らざる所ハ落の葉ニておぎなへぬ。先づ住所は充分なれば、カバンを開きてシャツを取り出して重ね防寒の用意をすれと、洋服ハ露の爲めしと〜ぬれて膚ニ通りし程なれば歩みし際ハさほどならざりしも、今は心持の悪き限りなし。マッチは湿らぬ爲めとて

中深く蔵め、ナイフは万一の用心ニとてカクシに入れぬ。実ニ山路ニふみ迷ふて知らぬ深山幽谷ニ一夜を明さんとする時ニ、かゝるもの、頼みニなる事大方ならぬものぞかし。夜のふけ行くまゝに寒さもいとゞ加わり、山気膚をおかして耐へ難けれハ、露の葉の或るものをバビぎのほとりに掛けをへつ、風を防かん為めにハ屋根となしける傘を横へけり。斯く寒くて眠らは必ず風邪ニかゝらん、互ニいましめて眠ることなしに之の一夜を語り明さばやと決心す。始めの内こそ元氣よく語りたれ、次第ニ大光寺氏つかれはてたりけむ、返事もなさでいびきの音や、高くなりぬ。<sup>[塵]</sup>層々呼び起しはしたれども余り度々なれば後ハ関はずそのまゝにす。吾れハ止むを得し、独り詩吟などをなせば夜蔭のことゝて木魂ニひゞきていと物すごし。浮世の中に住へる人てう者を見もし聞きもせざりし山靈草木禽獸ハ定めし見知らぬ声ニ魂や消しけん。初めの内は木の葉も通ふニ落ちる露の滴かと思へしに、後にハ弥々本降りとなりて暗を込めたる雨の音の草葉に落ちてすさまじき迄ニ音高くなりぬれば、今は一本の傘にて身を覆はん様なく、雨滴はしと〜と背を流れて身を置くに所なければ芋虫の如く丸くなりて傘の内ニ屈まりぬ。時計を出し見れハ十二時なりけり。三時ニもなれば夜は明けん、今少しぞとて互ニなぐさむ。吾れも初めの内こそ眠らじ務めたれ、昼のつかれに思はずとろ〜と眠りて折り敷ける芝と共ニ下ニ転び落ちしも可笑し。かく吾れも夢現の中ニ過せしに三時半ニもなりたりし頃、少しく明るくなれり。雨は幸ニも済れたる様子なれと、空ハ一面曇りて日光の輝くべき様もなし。そろ〜用意して四時と云ふに出立す。一夜の宿をかりし主は菩提樹なりければ、

十和田山みちふみ迷ひ日は暮れて

一夜宿りし菩提樹のかげ

(三一、一、一一)

たわむれなど言へて別れをおしむ。

廿四日

朝尚ほ良く明けねば足本ほの暗く靄立ち込めて葉末に置ける露いと繁し。此度は山を伝ふて滝を下る。昨夜見し程は高からぬ様なり。茲を下りて又川ニ沿ふて行く。稍々平端<sup>[淵]</sup>なり。昨日道にふみ迷ふて谷を求め溪川ニ沿ふて下りしより、今は十和田山の麓ニあらずとも、<sup>[鏡]</sup>□子滝のありし処などよりハ遙かに下なるべし。而して方角を考ふるに西ニ向ふて下る様なれば小坂鉾山ニ出づる川の上流ニもやあらん、チョウ子滝の上流ニはあらざるべし。さらば本道は小坂と十和田との街道なしければ何処にか行かんかなど考へなどしてはかなく行く内、ふと川沿の柳を見るに鎌にても切りしにや斜ニ切りしあとありたれば、最早や茲には浮世の人の通ふなりけり、さらば吾等も生命はあるぞと喜ふこと限りなし。実に千歳の知己ニ遇へたらんか如くなり。勇みに勇みて川を涉りて行ば、野宿せしところより十町計りにして川の傍にいぶせき炭小屋ありけり。人の気はいハせねど昨日今少し早かりしならば茲迄下り来て<sup>[暮]</sup>莫風雨ニ沐されずともよかりし者<sup>[物]</sup>をとくやむ。小屋より少しの間は草を刈りとりて路とせしかば、川より上りて茲を通り行く。されと末にハ路<sup>[物]</sup>なくなりて再び川と合し、或は河原を<sup>[物]</sup>行き川を<sup>[物]</sup>歩きて行く内に、梁の如き材木を以て組立てし者ありて、

その下には必し滝あり。如何なる故か又何の必要ありて作りし者<sup>〔物〕</sup>にや知るに便りなし。山は高く聳へて谷は深けれど途<sup>〔地〕</sup>稍々平端なれば本道に出づるも遠からずと思へる内、又滝あり。期<sup>〔所〕</sup>の如くなるこ〔と〕五六回にもや及びけん。その内大光寺氏弱ること甚だしきは首の傾斜の度によりても知らる。足の歩みの遅ければ吾れは先導となりて行くに、川に差し出でたる桑の木ありけり。をりしも桑の実みのりをりしかば、大光寺氏を呼びて吾れハ良くも食はず再び前途を急ぐに、大光寺氏更に来る様子なし。二度三度立止まり大声挙げて呼べども答へなし。然し小兒でもなければ後よりとほへ来るならんと吾れハ関はず進み行くに、又滝ありけり。此度は高さ二三丈もあらんか、樵路だになし。断岩絶壁けづれる如く、足の踏み処もなき様なれば、吾れは兎に角大光寺氏心もと無ければ、茲にて小憩す。待てとも待てども大光寺来らず。はてわ心配となりて、或は途中にて行き倒れせしに非すや、先刻の様子にては怪しきものなりと吾れも心二危ぶみつゝ呼びながら引き返す。稍々二町計りも行きし頃、大光寺氏向ふよりよるへと首を曲げて来れり。餓へつかれたればにや、釈迦出山の有様も斯くやと思はれていと可笑し。大光寺を急がして滝の上ニ来る。桑の実を食ふて少しく元気付きたりと泣き顔なれば気の毒なること甚たし。吾れハ気の張りつめたればにや、元気更ニ失せず、空腹もおぼへざれば勇をこして断崖を下る。此の滝の風景、特に良ろしからざるに非ねども、身は危急の場合ニあれば顧みるに暇なく前路を急ぐ。五町<sup>〔ばか〕</sup>迄りも下れは初めて路ありて山の左側ニ入れり。人馬の往来もあるなれば初めて安堵の思へをなす。道路にて出でたれど吾等は何処にか行くにやあらんと疑へはれねど、川ニ沿ふて下るに遙ニ<sup>〔一字空欄〕</sup>□の声を聞けり。進むに従て一瀑<sup>〔瀑〕</sup>の懸崖より降るを見る。瞳を定めて見るに、昨日吾等か訪ふたりし□<sup>〔鏡〕</sup>子滝なりければ、吾等は山を廻りて又再び同じ処に出でしなり。馬鹿らしけれど一茶店に入りて朝食をしたゝめとて立ちよる。時計を見れば八時少し過たり。炉にふみ込みてぬれしズボン<sup>〔ズボン〕</sup>、シャツ<sup>〔シャツ〕</sup>などを乾かす。上衣ハ宿ニ頼みてコタツに掛けてもらへぬ。二食なれば甘きものを食はゞやと牛の鐘詰<sup>〔一字空欄〕</sup>に土□の汁を作らせ、腹ふくるゝ迄食ふ。此の家の人々言語によれば、盛岡辺の人にや。壺二才計りのいと可愛らしき小兒の籠の中ニありて吾等を見て無心ニ笑ふ。山中にて迷へしは流石に恥ぢて言はじ。今日は十和田より大湯に行くなりとて十時頃出立す。昨日見し作り滝、荷物運搬の電線のかゝりし処を過て、大湯よりの十和田への大道に出づ。大光寺氏ハ昨日の野宿の爲め大ニ元気を失し、例のマラリヤ再発せんかとの心配より十和田には行かずに大場にて二三日<sup>〔一字空欄〕</sup>□留し花輪にて待たんとの事なれば、茲にて手を別つ。左手の山を登るときは大湯道路に出づべしと聞き、道なき山を露にぬれつゝ草をかき分け登り見るに道らしきもの更ニなし。怪しみながら再び下りて更ニ問へ正せば間違へしにはあらで此の山なれば不思議なから又上り行く。方角の違へし方より一人の百姓上り来りたれば、何れこれ道路ニならんと、その方に行くにはたして道なり。急ぎて先の百姓に逐へ付き間違へあらぬ様聞き正す。之れよりハ山は弥々深山ニ入り谷深く老樹<sup>〔鬱蒼〕</sup>翁鬱として昼尚ほ暗き有様なれど、深山幽谷には已になれし身の軽く、鳥の音面白く聞き、草の花をめで、心<sup>〔は〕</sup>のまゝに歩を運ぶ。今朝よりは小雨止むときなく降りしが、今は済れて明日は天気も良ろしかるべ

き様なり。道は連日の雨の為め泥深く、木の枝などを敷き横へたれど、一步を誤れば腰迄没する深さ、おしくもあらねど脚胖は鳥の足の如くなりぬ。程なく頂を越れば、湖水樹木の間より見へたり。唯た目の前にあるなれば急くも用なしとて徐々と下る。湖畔に一軒の家ありけれど神社は近くにあるなるべしと思へたれば、別に道も問はで行きしに、草生へ茂りて道中々悪しく十和田神社への道路としては少しく怪しければ、又取て返して家のある所迄もどり道を問ふに、矢張り同し方にして路程は一里計りありと聞き、目的少しはづれぬ。再び露いと繁き草藪をかきわけ行くなれば、折角乾かせし洋服しと、ぬる。路は湖辺に沿へり。経路にしてぬかるみなれはいとくるし。休屋と云ふところに出てしは四時過にもやああん。<sup>[ら]</sup>道湖水の砂原に出てたれば先づ本社ニ参らばやと舟子に道を問へて茲より畑を通して鳥居のある所ニ出づ。一方には人家あり、他方は松並木あれば此方ならめと進み行くに松原を出でしかど社殿らしき物も見へず。又不思議を起して立ち返り道を聞き直して更ニ進む。返へず返へずの失敗にである。今日は之れて三度目なれば自らも可笑しくなる。怪しと見てか犬迄も叫へける。噴火の為に生しし山なれば危岩怪石の累々としてあるは何処も同しけれど、茲にも岩石は天然の石階なし天岩戸など、名称を付せる洞窟二三ヶ所あり。あへて妙しとにはあらねど、俗気なければ身の引きしまる心地す。本社は湖水中にある小島ニあり、丸木の橋を架して之れと通ず。本社とても名計りにして、実は方一間にも足らぬ御宮なり。然し岩石畳々として翠松生じ、清波脚下ニ白玉を飛散し、四方の眺めも乏しからねば、暫時俗腹を払吹く風に洗はしめたり。鎧 甲嶋<sup>ヨロイカブトジマ</sup>の辺を写生し、更に某社はその方にありと標札ありたれば見てをかんと進み行く。行けども行けどもそれらしき物なし。唯た風景はいとよろし。鎧嶋の眺めらるゝいと眺望よき道側の石の上に一人の男子昼寝したりけるが、返りに見れば尚ホ心ろよげに伏たり。あわれ仙人と云ふものはかゝらんものか、山間の一正夫なりともかゝる仙境ニ来りて寝りしときのみは神も宿るなるべし。日も稍々西ニ傾きければ急き社務所ニ行かはやど道をたどる。松原にて田舎の人々にや男女十人計りの人ニ行き逢ふ。中に洋服つけし二人の美少年ありけり。歳は十四五歳計りにや、兄弟と見へ、兄は大倉の商業学校にして、弟は独逸学協会の生徒なり。社務所と云ふも実は立派なる宿屋にして、聞きしよりは中々良し。二階の座敷に案内さる。服いとよごれたれば宿に洗濯を頼む。吾れより後れて二人の中学生、隣室ニ宿る。宿の亭主来りて明日の舟の事など話す。

廿五日

明くれば天気もよろし。心勇みて朝げをしたゝむ。亭主来りて舟の同伴者あれば用意せられたしと告ぐ。中学生も乗る事に相談つきし様なり。乗り込みしは八時少し過ぎなりしが、舟子ノ用意とゝのはず稍々九時頃迄舟にて待つ内、酒、火鉢などを持ち運びたり。何のまねかと見る内ニ、昨日本社の道にて行き逢へし十人計りの見物人乗り込む。此の人等の舟にその□<sup>[実カ]</sup>なりけると知られたり。外に之れは見物ならぬ鉄砲打一人と宿のあにきと舟子二人なり。昨日見し鎧甲嶋の辺より岸づきてゾゴ森とか称る奇岩の下ニ舟を付く。余も進められて一見せばやと皆な人の後ニ従て進むに、実ニ十和田第一の奇勝にて一巖突として空

ニ聳ること四五丈もあらんか、岩を伝へ木の根にすがりて登り行くに稍々頂上ニ達する頃に鉄の<sup>〔一字空欄〕</sup>子と鉄の鑽とありて恰も屋根の上にも登るが如し。茲迄では一人の田舎女の元氣よく登り来りしが流石に恐ろしかりけん止まりける。我等は猿の如く鑽を伝ふて頂上に至る。高しとは言へ別に眺望もなけれど、見下せば断岩絶壁けづれるか如く、舟中の人実に豆人なりける。太郎様、貞次様とも登り来りしハ感心なり。中学の人々は昨日登りし事にて登らず。葉はつゝじの如くなれど、花の小さく色きあり。めづらしとて掘り行く人もありしかば、<sup>〔余〕</sup>途もその一茎を折り取る。茲を下りて又こぎ行くに、岸の景色一きわよく翠松龍の如く曲れるが岩の上に屹ち或は自然の松島をなせるなど手を入れし貴人の庭園を見るか如し。水清ければ呑むに任せ、底は千仞の深きにや青々澄みたれば奇怪の談の世ニ伝はるも実にさあるべし。鉄砲打つ人の岸の岩におり立でる鶉を舟板を打ち鳴して驚かし飛び立てる際を一発に打落して、<sup>〔一字空欄〕</sup>呼の叫び稍々しばし鳴りひゞく。之れよりは一体に風景よく、みさきを曲りて鶉の鳥の群をなせるを驚かし、或は鴨の子を逐へなどして早や昼ともなりたれば、一赤壁の下に舟を止めて飯を食ふ。元来噴火口なれば岩は焼けて赤色をなせし。花輪の人々家の土産にと小松を掘り取りなどす。之れよりハ見るべき所にもあらねど、宿の若者と鉄砲打ち人と陸に上るなれば賽銭場に舟をつくる。其よりハ又々舟を打ち返して他方面の景色を見物す。面白き岩松の有様なれど千べん一りつなれば、或る人の唯た岩に松の生へしのみ見あきたれば舟を返さんと言へしも実なり。之の島(半島)は最後の者<sup>〔物〕</sup>にて遊覧者は皆な茲より舟を返すなり。吾れ等も此の島の絶端日暮しの岬に舟を付けをりしも、風吹き出でたれば帆を張りて帰路に付く。さほどの風にあらねど波立ちて来りし時の平<sup>〔總〕</sup>隠ニは非らず、舟足遅ければいともどかし。花輪の人々は<sup>〔三字空欄〕</sup>(□□□)に着きて之れより山を越へて行くとかなれば急くこと甚たし。十和田神社、休屋の方を遙か沖より眺めて<sup>〔二字空欄〕</sup>(□□)ニ着せしハ五時頃なりしか。茲にて別れを告げて帰路ニは吾れと中学生と二人の舟子のみ。おりしも暮色蒼然として湖水の波舷頭を打ちて転た物淋しく岸辺に着きしハ稍々七時にもや、足もと暗く宿ニ入る。此の夕、又々多数の見物人来り宿して上下の室ふがり居れば、吾等は中学生と同室にせられたり。夕飯を食ふて種々談話に時を移し、札幌の高慢話しも出でし様なり。

廿六日

(之の日記は直に書くべきものありしかど都合ありて其の期を得さりければ後日誌るすことゝなれり。故に小坂鉦山の記などは今少しくわすく書きをきたけれど、学課の忙ニ逐はれて不本意ながらその概略を誌るすことゝせり)

小坂ニ出るに十和田鉦山を經りて行かんか、それとも再び大湯ニ出で、行かんとは昨夜よりの疑問なりしが、宿を出立せし後も互に遠慮すれば尚ホ決定せず。<sup>〔一字空欄〕</sup>(□)に着きて湖辺を十和田迄行くには中々困難なるべければ、再び山を越して大湯に出んとて茲より又々山ニ登る。中腹頃にて雨降り出し雷も鳴り遂には大降りとなる。道は例ニより泥深く一步を誤れば脚を没する位なれど、今日は無謀にも小坂を見物して花輪迄入るとの心組なれば急きに急く。一度通りし道なればわき目も振らざる程に十二時頃ニ大湯に着く。中飯を

食へて小坂の行程を聞くに三里なりと云ふ。唯た山道を行かは二里半位なるべしと云ふに  
 稍々絶望はせし者<sup>[もの]</sup>の急かは二時には着すべしと更ニ一農家ニ立ちよりて道をたしかめ、風  
 呂場のある所を通り過ぎて、山途にかゝる小坂のチムネ<sup>chimney</sup>の煙も見へたれと道は細径なれ  
 は、しばし道行く人に尋ねて概く本道に出づ。県道なれば道巾も広く人々の往来もあり  
 て小坂の繁昌も思へやられたり。小坂ニ着きしハ案外遅く三時過ぎになりたり。鉱山の為  
 めに此の町中々にぎわしく二三十年前迄は数戸ニ過ぎさりし由なるか、今ハ千にも余らん  
 か商家<sup>[軒]</sup>転を並べ人々の雑踏せしこと市日にも異ならず。吾等は直に鉱業事務所ニ付きて案  
 内を乞ふ。

(小坂の鉱山記ハ記せまいと一長かるべけれど、乾燥無味ニして徒らに人をあかし  
 むるのみ[な]れば唯たその概略をのみ誌して、余ハ期を得たらば別ニ記録すること  
 もあるべく、且ツ又今度は茲の地ニ遊はんと志すなれハ左のみ用なかるべし)

事務員の来りて吾等の姓名を記録し、更ニ一人の案内人を出して吾等三人を導く。工場  
 のみ見るにも三時間もかゝるべけれど、鉱坑はとも今日見物されましけれハ、工場たけも  
 急きて五時頃迄ニ見んとて出て出づ。初めハ銅の鉱炉ニて鉱石より銅を溶融して分つ所な  
 り。何れも皆な旧式ニて見るに足られと、唯た新式の大鉱炉一つありて盛ニ銅の溶鑄を流  
 しつゝあるあり。幾百人の鉱夫ハ墨の如くなりて働きつゝあり。茲よりハ木工場ニて吾等  
 か為めに木を鑿<sup>[鋸]</sup>ニて引き穴を明けなとする器械を運転して見せしむ、之れハ既に度々見し  
 ものなれば別段めづらしとにハあらねと、事務員の好意は謝するに余りあり。茲よりは器  
 械工場其他くさ一の処を案内して、最後にいと小高き丘を昇りて鉄さくニて此方よりハ  
 銅を送り彼方よりハ米塩などを受取る本に連れ行くハ之れハ山の彼方なる白澤<sup>シラサワ</sup>と云ふ停車  
 場より来るもの由、皆な電氣の応用なり。茲を立ち出で、遙ニ鉱坑を望むニ都合良き場所  
 ニ行く。茲ハ小坂の町の北方ニある小岡ニて、坑は之れより北ニあり。電氣鉄道ハ之の山  
 ニ沿ふて遙か彼方の坑ニ至る。西麓ハ坑夫の住家ニもや、小さき家の節北するを見、小坂  
 之全景は茲より眺むるを得べき適當の地なり。此の鉱山原は銀山として世ニ知られしか、  
 中途より銀ハ掘り尽くして銅の脈出たれば、食量の少なきより要なきものとして、まさに  
 廢坑の運命ニ指せんとせしか、現今の技師長なる某工学士の發明ニて採取冶工の法を工風<sup>[夫]</sup>  
 し、今ハ大坂の藤田組ニて最近式の世界ニても最大の鉱炉四五組を据へ付けて一層盛大ニ  
 なさん計画ありしとか、其の他質問せし条多けれどくだ一しけバ略す。茲を立ち出で、  
 新築中なる工場を一覧す。実ニ宏大なる器具、器械、目を驚かす程のものあれど田舎者  
 にもあらねばたまげたる風もなく目も周さじ。無事茲を出でし元来之事務所ニ歸る。事務所  
 ニて歓待する事甚だしく、是非今晚は茲ニ宿りて明朝鉱坑を一覧せられよとす、むる事い  
 と切なれば、今日中々花輪<sup>と</sup>行<sup>と</sup>積<sup>と</sup>りなりがと如何せんと思へ迷へしも懐中と相談せば僅  
 ニ七八十錢あるのみなりければ兎ても小坂ニ宿ることおぼつかなく、なさけなき有様なれ  
 ど勇を鼓して夜の十時迄かゝるとも花輪ニ行かんとりきむ。茲をいとまごへせしに五時早  
 や過ぎたり。弘前の中学生十人計り、之れも見物ニ来りし由なるが遅ければとてもどされ  
 しなりとか、門ニ行き遇へぬ太郎様等にも門前ニて来る節行き遇へり。大学生ニや一人制

服着たる人をも見る。夕暮れなれば工場の帰りの職工人夫などの各か家ニ帰る者行くものなど雑とうして中々東京の繁栄も及ばぬ有様と久しく見ぬ目にハ感せらるゝ。中学生二人ハ今晚ハ茲ニ宿りて明日も見物するとの事なれば、手を別ちて吾れのみ急ぐ。途中にて夜食の代りニパンを求む。毛馬内迄ハ二里なれば、例の健脚ニまかせて進めど、之れハ中々長し。毛馬内の町ニ入る。此方の橋の上にて日は弥々暮れかゝり、鎌の如き半月の光り頭上ニ出で、星の光りも稍々見ゆるニ到りたれば、元氣稍にそそうして暗きやみ路を十時迄も歩くの元氣なく、今日は毛馬内ニ宿りて明日ハ荒屋迄十一里を直行すべく決定すぬ。毛馬内の町ニ入りし時ハ已ニ灯を点じをりたれば良き宿もやと目を大きくして尋ねつゝ行く。之の辺ハ町家の構造も立派ならじ。田舎めきたり。左手ニある勝又と云ふ旅宿ニ着く。宿の老夫婦中々心切気ニ向ふ。毛馬内一等の旅宿ニや県令公の御定宿なる標札恭々しく今も壁間ニかゝげらる。何れ御自慢の種なるべし。夜食は田舎ニも似ず中々良ろし。鉾山ニ近ければなるべしと思へど、其れニ応して宿料も比例せずやとせん氣ニ病む。弥々明日よりハ親類の中ニ宿るなれば、むさぐろしき顔もなれまじく、何れも初見参の人多ければ髻なりともそらばやと夜理髪店ニ行く。宿より一軒先きハ床屋なれと宿の老爺の親切ニ灯燈【提灯】かしくれたればめづらしくも灯燈【提灯】と云ふものをさげて行く。中々人こみて吾れの先きニ二人計りありたれば其の中ニ風呂ニ入り長々と待ち、かり上げじハ十一時頃なりし。

廿七日

天氣霽れたり。わらじ掛けぼろへに切れたれと囊中僅ニ八九錢を余すのみなれば買ふるも出来じ。其の上困りし事ニハ便当【弁当】も氣かきにて出さゞりしかは、又今日も菓子を買はんとて昨日出しものをも少しさらへ紙ニ包ミてカバンニ入る。宿の前より西ニ行くと之の辺ハ中々繁昌なる所なり。左ニ行くべき花輪道を行き過ぎて、一農夫ニ問へて更ニ引き返す。学校通への時刻なれば生徒の往来甚たし。稍々一里半もやと思ふ所ニ有名なる錦木塚【ニシキヅカ】の碑あり。古実を調ふれば面白き話もある由にて、錦木の立ちながら云々の古歌もあり。名勝地誌などニはくわしくのせてあり。道路の側ニありて碑も近頃新しく建てたるものなればにや、感興左程起らず。之の奥ニ石の塊の如き黒きものありたれと立ち寄りても見ず。大館よりの来るさ [ひ] 大光寺とラムネ呑みし茶店ニは十時頃ニ着せり。之れより花輪迄は道路ニ砂利を敷きつめたれハ歩き悪き事甚たしく、路の側を求めて行く。人力車の困難を極むることハ尚ホ尚ほにて、反て歩行の方早き様ニ思はれたり。花輪ニ着きしハ十一時頃なりしか大光寺氏の宿所ハ之の前なるべけれど心いそげる俣尋ね求む氣もなかりしか、遂ニ大光寺と再会するを得ざりし。花輪は鉾山ニ近ければ矢張り繁昌の町なり。戸数ハ千ニも上らんか、丁度市日なりければ魚屋、野菜屋、木綿屋などの道側ニ店ニ品物を並べてひさげる様、恰も福岡などゝ異らず。田舎者の往来引きも切らず。此の日、朝よりの上天氣なりしか今はほとへ耐へ難く流汗滝の如しとも形容すべき有様となりぬ。幸ひ道ニラムネ五六本並へありし所ありしかば、之の先きにはあるまじければと思へ二本呑む。之れハ最後の錢を費かへし所にて余す所四錢計り。之れよりハ弥々山道ニかゝる。勿論山道とは云へ新ニ作りし新道なれば馬車も人力も通ふ立派なる道なり。道ハ米代川【ヨネシロガワ】の涯上ニ沿ふて

行くなれば中々景色よく山道の旅行としてハ稀に見る好風景なり。之の辺より田山、浄法寺ニ出づる迄ハ所謂中央山脈にして山又山と重なりて眼界狭く見渡す許の広野も無く、山国的気風とやら云ふものハ茲辺より出づるものかなど思はる。何とやら云ふ村に温泉のある由聞きたれば何処そと思へ行く内二十戸許の小村ノ河岸ニ沿へるあり。兼て聞ける名とは異なれば未たならんと通り過きたり。後にて聞けば此の村こそ温泉のある所なりしと。時刻は十二時を過きたり。日ハ頭上ニそり輝けば暖さも中々烈しく、例の甘露を途上ニ求むれとも山路ニ似げなく冷水ハなく皆な温し。命の親なる飯はなくとも、菓子許も食て腹を調べはやとする内、河流のげきして瀬となれる眺望のいと良き所ニ出たり。之の辺の者にや、将た旅の者にや、十四五才許の少年三四人衣をぬぎて川辺ニ遊びをれり。吾は道より下りて柳樹の影の石上ニ偃りて汗をぬぐへ、川流ニ顔を洗ふて多からぬ糧を食ふ。腹を満すニは元より足らねど、浮き世の塵の外ニある之の仙境ニ水の音を無心ニ聞きて冷風のそよ〜と膚ニ心ち良きを思へては、そゞる雲水の身も忘れて不平の気もなし、去り難き心地ぞする。秋田県と岩手県との堺は尚ホ遠からんと急ぐニ、一時半頃平地の路傍ニ一大標立てり。大間越のそれは吾れニ多大の感興を与へしが、之れは余りに事も無けニなればふり向きもせじ、足ばやニ過ぎ行く。之れより二三町許りニ何と云ふ村ニや三四軒許り家ありて、花輪の名物と聞きしあまづこと云ふ者<sup>[物]</sup>売る家もあり。代価は二三銭許りなれとも懐中<sup>only</sup>ヲンリー三四銭の淋しさに、何処の官員様ニや洋服つけしが休みてをわせし様なれども、吾れは目をつぶて通り過ぎぬ。茲よりハ我県ニして特ニ我郡かと思へば元氣も急ニ付き、犬の叫ぶもにくからざる心地す。田山迄は三里なれば我か志す荒屋へは四里許り。是非暗くならぬ内ニ着かはやとひたすら急ぐ。少しは下り坂なりし様なれと、山は尚ほ豊々として更ニ向ふ見へず。米代川とは別れて之度は東の方ニ流る川を見る。末は何れ馬淵川となるべしと思へはいと嬉し、唯だ風景の見るべきは更ニなし。田山迄の道の遠き事あきる、許り。之方は雨降りしにや道路ぬれたり。田山は新道より十町許りも入れり。わらぶきの屋根の黒きか五六十許り見ゆ。之れより急ぎニ急ぐ。種々人家も稍々ある様なれば荒屋も間近なるべしと行く手を見れば、一直線の道路の曲り目ニ二階作りの家白く見ゆ。あそこ出て弥々荒屋ならめとシャツを取り出して着用し、風儀を急ニ調ふもをかし。吾か親類の家は何処なんめり、人ニも家ニも新見参なれば□<sup>[誰カ]</sup>れニある如く少しは不安の念あり。町ニ入りて目を大きくして尋ね行く中ニ意外ニも町はづれより二三軒目ニ尋ぬる人の標札ありけり。二匹の大なる犬、門ニ<sup>[堀]</sup>偃し居たり。内ニ入りて案内を乞へば小次郎様出で来る。初対面の名乗りをあぐれば、いと喜びして内儀様を大声あげて呼び出し、吾れの来りしを知らず。湯を取りて足をそゞき上ニのぼる。いと心安く種々談話の内ニ夕飯を終へ風呂ニ入りて一日のつかれを除き、夜は新しき座敷ニ家内一同より集りて種々の物語りをなし、或は北海道話しに又三度の旅行の失敗談ニ花か咲きて、親類同志の心をく事なければ恰も家郷ニ帰りしか如き感して、旅のうさも先めて忘れぬ。

廿八日

朝ハ雲行き少し悪かりしか、折角の勤めなれば今日一日を滞留して旅のつかれを安め、荒

屋名所の不動滝をも一見せばやと思ふ。荒屋は戸数百戸もあらんか、二三年前の大火ニ尽く類焼したれば内は空なるかは知らねと皆な新しき二階作りの家を建てたれば、山間の一小村とは思はれぬ程立派な町なり。大森様も茲ニ移らんとて家を建て工事概く終り浄法寺より引きこさんとせし際焼けしとか。今の家は其の大火後ニ建てし者なる由なり。午前中ハ座敷ニ寝そべりて雑誌などを読む。之の村の巡査公来りて政治談やら農業談やら盛ニ口角泡を飛ばしつしありし様子、一しよニ昼飯を食ふ。例の滝不動を見ばやと一時頃より仕度し、小僕を案内ニ立て、家を出る。村端れより田の畔を通りて橋を渡り、山道ニさしかゝる。之の小僕中々の気まぐれ者ニて途中様々の話をなして行く。一里ありとの事なれば中々遠く、七時雨岳は眼前ニ顕れたるか、之の岳の後の方ニ廻る。余程高き山なれども見上げし様は左程高かしくとも思はれず。然し地図ニも乗て居る山ですとは小僕の自慢なりし。道ニは栗の樹多く小なる実も結べり。滝不動の入口ニ付きしかは吾れも流ニて手を洗へて身を清む。いと大なる松の道の両側に生へ茂れる中を通りて不動堂ニ着く。之の堂も先年火災ニ逢へしとかにて今ハ堂も狭小となり額なども其の際尽く焼失せしめしなりとか。曾て福岡の小学校ニ職を奉せし吾れも其の名許りは知れる佐藤源八氏頼公の鬼退治の長さ二百許の額を自ら画きて奉納せしかあり。一般の光彩を沿へし者ニして小僕も中々鼻高かりし様子なり。堂内ニ少しく休みて滝を見物ニ行く。水量も少なく高さも二丈ニ足らぬ程なれば、別段見べき値もなし。左れと後は岩山聳へて断岩絶壁巍々たるなんどの形容詞も用ふるニ足る程少しは□<sup>〔一字空欄〕</sup>なる所もあれば荒屋名所の一として指折り数ふるも無理ならぬぞかし。養老の孝子の如く小僕負へ来りしビンを取り出て、滝水をくみ入る。何れ何かの薬なるべし。之の滝の上流ニは馬も牛も居りますとなげきぬ。又堂内ニ少しく休みて帰路ニ付く。一年一度の御祭ニは之の境内も中々激しく、道の両側ニは物売り、見世物など軒を列へ、近在よりの参詣も夥しく中々雑とうするなりとか。帰路は又々談話を續く。夏なれとも之の原は秋風吹きそめし心地して秋の草花も咲けり。村の端れの橋上ニ立ちて荒屋の物語り、福岡ニ行きし物語りなど止め度もなく語りしか、日も稍々西山ニ没せん様なればいざとて橋を渡る。遙か西の方ニ雪の山を見る。之の山の麓ニ牧場あるなりとか。此度は道路の裏を通りて行く。一ほう屋を指して、あれか私の生れし家ですどなづか<sup>〔懐かし〕</sup>かりて談る。家ニ帰りて風呂ニ入る。塀ニ書きし文字を読めば、小次郎様は之の村の畜産組長をなし居るなり。夜ハ例の如く家内一同と雑話ニふけりける内十時頃にもや、召し使の若者あわたゞしく裏より来りて火事ありと云ふ。すわこそと皆々驚き起き上れハ、街道を走る人、の、しりさわぐ人あれども何処に火事あるや知れず、小次郎様ハ直ニ提灯つけて出で去りしがバ、吾等は内ニ居りて<sup>〔用心〕</sup>要心す。人の語るを聞けバ町の中央位の木綿屋なりとか、吾れも<sup>〔野〕</sup>弥次馬ニ提灯つけて見物ニ行く。吾か行きし時ハ已ニ火鎮まれり。原因はランプよりなりしとか、原来不注意ノ男許りなればなるべしと説、これよりハ例の如く火事の話先まり荒屋の大火より四五日前ノ浄法寺ノ寺ノ火災ニ及びて皆なくやしがる。

此の日大光寺も茲ニ来り火事を見に行きしとか、学校ニ帰つて後聞きぬ。

(廿九日)

朝より雨降れど出立す。今日ハ浄法寺ニ宿る積りなれハ急きもせじ。六里なればゆっくり昼過ぎに付く訳なり。新道ハ未だ着手せされハ道路ことの外悪しく、石を入れ、木を投げせしなれど、泥脛をも没せん許の所あり。川ニ沿ふて下るなれと風景もなく、終日雨齊れねば【壱 陶】うつつとうしき事限りなし。道を間違へて巡查ニ聞き、尚ホ川ニ沿ふて下る。十一時頃少しく景色よき川辺の石ニ腰掛けて【弁当】便当を食ふ。午後一時頃、滝のある橋ニ来る。之れなん兼而聞く大滝ならめと思へは浄法寺も近からん。一休みせばやと橋ぎわより下ニ降る。滝は図ニ示せし如く大ならねと滝壺より下は岩石水の為めに侵蝕せられて溝をなし四五間ノ川中【もの】の者茲ニ来りて踏らば飛越れん許り一間許に狭まるなれば、水流矢よりも早く岩にげきしてハ白泡を飛ばし各々抱してハ巴をなし、実ニ【龍】龍も住まんず勢へなり。岩を伝ふて滝の傍に行き荷物を下して暫時休憩す。茲ニは田甫の伯父様か鮭を捕る所なりとか、八十に近き御歳【山女】の唯一の御慰み場と聞きてハ尚ホ良き様なり。吾か居る内ニも一尺許りある山目か二匹許り滝を上ニ飛び上りて上り得し再び元ニ下れり。茲を立ち去りて橋下ニ釣せし一老翁と談り、記念としてスケッチを画く。之の所の深さハ五六丈ニ及べる所もあるとか。稍々一時間許りも休みし後、再び行く。学校帰りの生徒ニも出逢ふ。焼残りし寺の側を通りて弥々浄法寺ニ入る。大森の内は稍々町の端れニあり。戸数ハ荒屋よりハ元より多かるべれと、何れも家旧けれハ町の外観ハ立派ならじ。足をそゝぎて上れハ茲ニも初対面の人多く、又太郎様と伯父様とのみハ対面あり。寺の焼けしなれば方々より入り込みし見舞人多く来り。福岡リユウガンジの龍岩寺の和尚など五六人許り今帰宅するなりとて立ち寄る。夜は新任の二戸郡長来りし様なりしかば、吾等ハ又太郎様と共に田甫の伯父上を訪問す。吾れを見て喜ぶ事限りなし。例ニよりて北海道の話し出で、廿年前ニ御出ニなりし懐旧談あり。我れも話ニ身を入れぬ。十時頃帰りしが郡長尚ほ居る、十一時過ても帰らじ。我れ眠き事限りなく、宅の人ニも迷惑し、はてハ手品仕へなりなど悪事にも出でぬ。郡長の品位はだん段【段々】下る許りにて、今ハ村々ニ至るも尊敬旧ノ如くならじとか、之の郡長は酒は呑まじとかにてめづらしがる。

卅日

朝より雨降りけれハ是非今日一日ハ滞在せよとの事ニ已むなく止まる。空しく朝より雑談ニふけりしが、中飯ハ田甫より招かれて御伯父様と他一人知らぬ御方と三人にて行く。鮭の御馳走ニ預る。貞次様の子供の一二歳許りなる出して見す。初孫の顔は老の楽みなるべし。家ニ帰りてもなす事なく、知らぬ人々にのみ面会す。話しは今を問ぎわの撰拳談許りなり。

卅一日

今日も雨降りなれと何日迄も逗留し難ければ出立す。新道ハ福岡を茲の中央位迄来れりとか。例の山道を昇り降り行く。山道なれば眺めとても別になし。雨降り出せば休まれもせず。或る山坂を下りしか、下より馬に乗りし廿許りの婦人二人の伴をつれて上り来りしか、ふと横顔を見れば小学校の同し朋友なりし人なり。四五年前浄法寺ニ嫁ニ行きしか、夫なる人非命ニ死せしより実家ニ帰りしと聞きしか、何か用事ありて行くなるべし。我れは十

年月ニ行き逢へぬ。似た鳥の橋、出水の為め落ちしと聞きしか、之の辺は路特に小さく何れか本道なるか判らじ。屢々農家ニ立ち寄りて道を正す。川辺ニ行けは、はたして橋落ち舟もあらず。皆々徒渡りするとか。吾れも一農婦の教へにまかせて川下より渡る。案外水浅けれと急流なれば少しは流さる。似鳥の役場ニ撰挙ニ関しての伯父上の名の署されしを見て心も何となく勇み早や家ニ帰りし心地す。茲迄ハ新道来りたれば道も極めて良く、雨もはれたり。十二時近くに汽車の音遠くに聞く。急ニ文明の国ニ出でし様なり。福岡も近しと思ふ中ニ、川をへだて、電柱を見る。先めは何処ぞと思へけるが、大淵の傍、女神男神山の下なりける。茲ニ新道作られて風景を少しハ損したれど、如何ニ便宜ニや停車場の傍より弥々家郷ニ入る。

之の後の事ハ誌さずとも良からん。そは楽しく余りてそを誌すの筆、吾れニ無ければ。  
明治卅五年十二月三十日夜認め終る

(附記)

此の日記は大凡そ初めは皆なその日ニ誌し終りしかども、男鹿半島の記事より少しく遅れ、特ニ和田山中の彷徨よりして急ニ記事沢山ニなり、兎ても誌し難ければ何れも後ニての記録なり。旅行中ニ之れを誌し最後の所は十和田湖辺の休屋ニして其の当時は大抵秋田より大湯間の日誌なりしと覚ゆ。其の後は何れも親戚の家ニ宿りたるなれば其の期は得し、空しく帰郷せり。帰郷中ニ誌せし八十和田辺の日誌なりしと覚ゆ。十和田より小坂鉦山ノ見物日誌は帰校後に誌せしものなり。直ニ書き終るべかりしも、懶惰なると時を得ざる為めそのまゝ、放り置きしか、冬期休業中ニ是非ニ完終せしめんとて再び書き起し、花輪より福岡迄の日記を終りしは師走の卅日の雪降る夜なりける。之れを以て卅五年の旅行日誌も終了りたれば更ニ来らん年、筆と脚とを養へて天下の名山、旧蹟を訪へ青山白水の偶ニ放浪せんと欲す。書き了りて意気千秋。

十二月卅一日誌す

〔附録4〕 金銭出納録

七月十一日 雨

金壹円五拾貳銭 汽車代

〆五十銭 旅宿代

〆壹円七拾八銭五厘 汽船賃

〆十二日 雨

金三拾九銭 汽船賃

〆拾銭 パン代

〆十三日 雨

金壹円七拾銭 宿料

但し一人分八拾五銭也

金四銭 古物会ノ見料

但し一人分二銭

金三銭 わらじ代 二人分

十四日 晴天

金六十銭 鱒ヶ澤ノ宿料

金貳銭 湯銭

十五日 晴天 午後より雨

金六十一銭五<sup>厘</sup> 深浦ノ宿料

金十銭 昼飯の茶代

十六日 晴天

金四拾五銭 岩館ノ宿料

金二十二銭 たび代

金四銭 中休み代

十七日 晴天

金七十二銭 能代ノ宿料及わらじ代

金五銭 菓子代

十八日 晴天 午後微雨

○金八十銭 鶉ノ木ノ宿料

○金二銭 わらじ二足代

○金五十銭 北浦の昼飯代

十九日 雨

金十銭 菓子代

廿日 晴天、風

○壹円六拾銭 戸賀の宿料二日分

○二銭六<sup>[厘]</sup>り わらじ代

八銭 小包料

○拾八銭 氷水とそうめん代

○七拾銭 舟賃

廿一日 晴天、夜雨

○金壹円二拾銭 門前の宿料

○金四拾銭 馬乗り賃

○々二拾四銭 車代

○金拾六銭 馬車代

金四銭 ハミガキ代

々貳銭 湯銭

廿六日

金二十五銭 舟賃

金二十銭 ふき漬に画図

廿七日

金七十銭 休屋の宿料二日分

々三銭五<sup>[厘]</sup>り わらじ代

金一銭五<sup>[厘]</sup>り 茶代

金五銭 菓子代

金十銭 理髪代

金二銭 湯銭

廿八日

金五十五銭 毛馬内の宿料

金貳銭 わらじ代

金六銭 らむね代

## 恵庭登山略記

明治廿七年七月十一日 晴

午前七時迄ニ豊平橋ニ集合す。会せし人員、

高松正信、 二宮徳、 北澤小八郎

川島一郎、 湯地定武、 鈴木力治

足助素一、 森岡光信、 河内完治

嶋松シママツにて昼飯す。漁〔獲〕にて氷を飲み米菜を用意す。種畜場分場内を通り抜けて烏柵舞ウサクマイ孵化場ニ着せしは五時過ぎ。事務所ニ一泊す。

十二日 雨

支場長某氏の周旋ニて案内者として愛奴一人を傭ふ。一日五十銭。名は芦谷スカンシキ、千歳郡蘭越村の住、四十七才ニして子四人あり。細径をたどりて支笏湖畔の孵化分場ニ向ふ。雨降り出す。午後ニ入りて止む。夕景舟を艤してカバチヘボ魚及ヒ雨鱒を釣りに出掛く。多漁。

十三日 曇

川崎舟を艤して湖水を横断し恵庭山下ニ舟を泊せしむ。着岸せし八十時ニ近かりし。谷を沿ふて登山す。愛奴の早きこと驚くべし、吾等健脚のもの数人おとらず後ニつきて昇る。頂上ニ着きしハ一時頃、とても絶頂ニ昇ること能はざるかと思へしに北澤の先登ニて道を求め皆々昇る。絶頂ハ僅ニ畳数枚を敷くべし（之の下ニ冷水懸清として湧き出づ）。おしむらくは之の日、前日来の雨の為め霧立ち込めて四方を迄眺望するを得ず。愛奴まで言はく、折角之れまで来て残念だナ。帰路愛奴ニついて下く、早きこと脱兎の如し。足弱連の後るゝこと約三十分。孵化場ニ入りしハ九時ニ近し。夜食特ニ甘し。

十四日 晴

帰路に着く。烏柵舞の手前ニて北澤、二宮、高松の三氏と分る。同氏等は室蘭ムロランニ出て洞爺湖トウヤを経て倶知安原野クッチャンニ出で小樽オタルより帰札する由なり。吾等は千歳の町ニ出でゝ宿す。

十五日 雨

朝より大雨。雨をおかして出発す。月寒ツキサムより馬車ニ乗りて札幌ニ帰る。雨はれて虹立つ。半澤氏宅ニ宿す。

十五日より十九日迄札幌ニあり。十九日 旭川アサヒカワニ向て一人ニて出立す。足助氏停車場ニ見送らる。八月十八日迄旭川近文チカブミの小林氏方ニありて牧畜実習をなす。其の記事ハ別ニ記載したれば茲ニ略す。

（恵庭山旅行の費用 壱円五十八銭五厘）

## 明治廿七年孟夏 北海紀行

草枕 たびの空こそかなしけれ

野にも山にも知る人はなし

明治廿七年八月十八日、 晴天、 行程四里二十二町

午前九時頃〔小林直三郎〕小林氏宅を出立しぬ。服装ハ何時も変らぬ洋服姿にて何れも古き履歴付きの者なり。先づ新参の郎徒は足袋のみにして、帽子と脚絆イワ テハ昨年岩手登山の節より逐随し、洋傘とカバンと上衣ハ一昨年秋田旅行のとき十和田にて〔一字空欄〕□を共にし、半ズボン〔ズボン〕は特ニ磐梯山バンダイ以来常ニ旅行ニ伴はぬことなき老功の古強者なり。門を出づるや江刺家ニ行き逢う。十時三十五分の発車にて先月以来住みなれし旭川アサヒカワの市街を後に残して天塩の国ニ向ふ。蘭留ランよりハ車道の両側白カンバの密林にて人家もなく開墾地も見えねば弥々蝦夷か島根の本色を表はせしかと心細かりしか、剣淵の辺より平地表はれ人家も多くなり行けば案外なる心地す。名寄ニ着せしハ午後一時半過ぎなりし。停車場の前にて草靴を買ひニ立ちより道を聞くに、線路を横ぎり行くべし、されど汽車発せざる中ハ許さるべくも非ずとの事に二十分計り休みて茲ニ訪へ来りし袴はきし郵便局の技術員らしき者と談話す。同じ汽車にて来りし一人の若者、自れか姉の婿とかを尋ねてはる一〇来りし者の由なるか已ニ当地には居らずと聞きて失望の顔色にて立ち去りぬ。汽車も出発せしかば急き足にて側き目もふらず通り過く。幸ひ誰れの小事をも食はざりし。新に開きし道路の単調極りなきを汗を流して進む。名寄を立ち出でし際ハ人子一人通らざる山間の道路かと思ひしに一里位奥より道の両側ニ移住民尽く入りて盛ニ開墾中なり。汽車に便当〔弁〕を昼前ニ食へしのみなれば腹そろへりて足進まずなりぬ。名寄にて買ひ来りし林檎を三四度休みて食ひ僅ニ元気を付く。パンケヌカナンと云ふ駅通ニつきしは五時二十分位なりし。駅通の宿を遠くより眺みしときはつかれし足も軽くなりぬ。昨年頃建築せしもの、由なれば駅舎も新しくて心地よし。向ふの室ニ同宿せし三四人の同勢、諸国の方言など語り合へしが中ニ一人小学問のありそうな言へ振りにて良く弁ずるものあれは何者にやと思へしに後にて語るを聞けば天理教の伝道者なるに興さめぬ。夜は蚊帳なきによりシヤツ〔シャツ〕を被りて眠る。期くして我が旅行の第一日を送りぬ。

十九日、 晴、 行程十四里一町

起き出でしは五時頃なり。出立せしは五時半過ぎなりし。六時頃に霧全くはれたり。十町許の所の橋落ちたれば上手の方ニ行、川を徒渉す。今日は昨日と変して山道なれど左程困難ならず。道の両側は大木密生して景色更ニ見るべきものなく、太陽も概く頭上ニ回り来りし頃は暑気一層加はり流汗滝の如かりき。途中にて溪水を掬し呑みし事数知らず。十一時頃先めて路傍ニ湧き出でたる冷水を得、ヒシヤクにて三杯をかたむけぬ。旅人ニも数々出逢ひぬ。中興部の近辺よりト、松林と白カンバの密林ありて立派なるものなり。八九里位よりそろへ暑さと足のだるさにへこたれて一里ごとに休息しぬ。特ニ興部の二里計り手前よりハ一層疲労甚だしく豆出でし足を引きづりて駅通の門を入りしは六時二過ぎた

り。

廿日、曇、行程六里七町

昨夜は暫時雨降りし模様なりしが、今朝ハ風烈しく吹きて又雨ニもならんかと思はれしかどさはなくて止みぬ。今日ハ紋別迄と極めたれば六時頃迄床をはなれず。茲ニては蚊帳をつりたればパンケヌカナンモンベツの如き苦しみもせず単衣着しまゝ、夜具をきることなしに寝ねたれど、暖き夜なれば今朝迄寒しとも思はさりき。出立せしは八時ニ近かりき。海岸ニ出でたるに之所か北見の道路か砂原キタミのみにして道らしきもの無く、ざく〜として歩み悪きこと甚だし。あちら、こちら、さまよひて、概く道らしきものを見出だしたどり行くに、ルロチ川の川口ニ出でたり。諸君様と云ひる掲示ニ従ひて渡場に出でたり。石油の空罐かつるし置きたれば之れを鳴らせとの事ならんと打たゝくに一人の老人出で来りて舟をこぎよせたり。海岸の砂原道には最早こりたれば新道ニ出づ。之れは廿六年に開さくせしものなれば非常ニ宜し。天は曇りたれば昨日ノ如くならねと、のどかわくこと甚だしきに海岸ニ近かければ湧水ニ乏しく、稀れニ二三ヶ所あれど皆な生温にして褐色を帯び、氣持良からねど止むを得ねば飲む。川流も皆な之の辺の地質悪くして泥炭地の如き所を通りくるなれば水色褐色をなして渋味あり、とても飲めしものに非ず。沙留サルルに出でしハ十一時頃なりし。戸数二三十戸の小村なり。興部オコッベより渚滑シヨゴツニ至るまでハ道の両側森林地ニして畑地を更ニ見づ、人家も一軒もなし。近年払へ下げし放牧地二三ヶ所ありたれど地味悪しければ余り有望とも見えず。渚滑村には移住民多く入り込みて戸数も多くハッカの栽培地なる由なれど、道路ニ沿へしところニては更ニ見受けざりき。渚滑川を渡船して村の端れの小丘木蔭ノミに倨して休息す。茲よりハ遙ニ海を觀望し得て涼風そよ〜と吹き来れば得も言はれぬ心地にて三十分計り休む。紋別の村は早や一里なれば三時半には如何ニするも行かるべしとゆる〜行く。海の面に少しくもやかゝりし様なりしが急ニ冷風吹き来る。その冷さ秋吹く風の如くにて、昨今の暖氣に吹くものとも思はれず。如何ニも北見の国オホーツクかな。ヲコツクヲコツクの海より吹き来ればなるべしなど、歌を打案ずるに適當のものなし。紋別は戸数一二百もあらんか、船付きの港なれば一体ニ元氣ありてにぎわし。明治以後の新開地なるにや、家屋も皆な新しきものゝみなり。宿は冨。

父上、足助、大光寺、澤藤小太郎へ葉書差出す。

夜ニ入りて湧別ユウベツよりとか汽船一艘入る。夜の中ニ出帆せり。

廿一日、曇、行程七里拾四丁十四

六時頃ニ起き出でたり。細霧もふ〜として雨の如く降りしきりしかと七時半ニ出立す。町端れニ橋ありて茲を渡れば已ニ山道となり人家も開墾地もなし。五六町先ちて白き服着たる男の何かぶらさげ行くにぞ、眼鏡とり出し見れば牛乳配達らしきに急き逐へ付きて話しかくるに、茲より三里計り先きの藤原牧場より持ち来り紋別ノ町にて配達する由にて、配達ハ朝のみにして日ニ四升のみなりとか。町より十町位よりして已ニ牧場にして道路の両側ニ牧柵を建てたり。行けども行けども牧柵たゆることなく続けども馬は数匹を見しのみ且つ柵も已ニたい廢して多く其の用をなさじ、何の為めの柵かとあやしまるばかりな



に咽の渴きは弥々甚だしく水あれと願ひど、<sup>[斯]</sup>期の如き狭路にて水の湧き出づること出来難きことなれば思ひ切る。十二時を過ぎたれば木の下ニ腰をおろして昼飯を取り出す。されど咽かわきたればさらに咽を通らず僅ニ半分〔を〕の食ふ。ワッカ駅ニ達せしハ一時ニも近からんか。白き服きたる巡查の罪人らしき者を連れて行くにぞ、今日ノ如き風ある日ニハ<sup>[濁沸]</sup>トウフツの渡船困難なりと聞きしかば急きて逐へ付き共ニ前後して行く。之の辺より牛馬の放牧せるを所々ニ見る。一人のアイヌの百匹計りの馬を逐ひ行けるに行き逢ふ。ワッカより三里ニして<sup>[濁沸]</sup>トウフツの渡船場ニ達すべし。風も早や少しく止み植林も尽きたれば又暖さ加はりて中々急ぐ。渡船場ニ達せしハ三時なり。茲ニ入りて汲み置きて少しく温くなりたれど水を二三杯〔柄杓〕ヒシヤクニて飲む。味ひ甘露の如しか。今朝よりして八里の道程一滴の水をも得ざりし。猿澗湖サロマの海ニ入るところの広さ、や、二町もあらんか針金を引き張りぬ。此方の岸の渡船者ハアイヌニして容貌鼻下ニ八字髯を生せる風、如何ニ見ても<sup>Gorkii</sup>ゴルキーなれば、真のゴルキー労働時代を見る心地して独り楽しがりぬ。岸を上りて更ニ井水の冷きを心のまゝニ飲み、アイヌに道を尋ねて常呂ニ向ふ。茲よりして常呂ニ至る二里の道は細径僅かに通じて道の両側は雑草繁茂し背よりも高く、虻群集し手と云はず顔と言はず攻撃すなればそのうるさきこと甚だしく始めて北海道旅行の苦しみを覚えて前途もきづかわれぬ。足は疲れ太陽も余程没したれば急ぎに急ぐ。常呂の村の見ゆる丘の上にて暫し休み、太陽の西山ニ没せし頃概く村ニ入る。村の入口ニ両三軒の宿屋ありたれど、尚ほよきものあるにかと橋を渡りて尋ねしかど反て悪しく駅通大嶋は宜しと聞きて又引き返しやどる。常呂は思ひしより粗末なる村にて戸数ハ三四十戸もあらんか。然れど夜に入りて何処の料理屋よりなるか太鼓、三味線の音を聞く。風儀宜しきところに非ず。三日目にて風呂ニ行く。

廿三日、 晴、風、 行程六里五丁<sup>[町]</sup>

昨夜は二時頃迄ねむられざりしか、今朝目醒めしハ六時なり。出立せしハ七時頃なりき。村はずれより道ハ海岸の高丘ニ通して、左ニ北海の白浪を望み景色壯絶極まりなし。何人の牧場にや、柵並みて馬群をも所々ニ見たり。期くの如くして能取湖畔<sup>[斯]</sup>ノトロコ迄続き景色も又変化なし。湖畔を沿ふて渡船場ニ至る。茲は針金にてハなく、<sup>[権]</sup>かへにてこぐ。風いたく吹きあれ水流急なればにや、此方ニ来るときハ中々困難の模様にて押し流されつゝありしか、行く時ハ五分計りにして向ふ岸ニ付きぬ。能取の村を過くれば道ハ海岸の砂原に入る。茲の景色も山上にゆづらず良ろし。所々に漁家あり、水流も今日は所々にあれば昨日ノ如くに渴ニ困しまず。海岸の懸崖の上ニ牛群を見とめしが茲より道極まりて再び丘ニ上る。之の辺にも牧場ありて馬のむらがるを見たり。巡查は異なりしかど昨日の囚人らしき者ニ逢ふ。茲よりして道は山坂となりて平坦ならず、道にて休める一人の所の漁夫と同伴し話しながら来る。郷国ハ南部久慈なりと聞けば如何ニも国ことばを聞き出しぬ。之の山坂を降れば網走アバシリを望み得べし。小湾をなして風景よろし。坂の下ニある一芦屋ニおやぢと共ニ入りて暫時休憩して立ち出づ。又少し先きの漁家ニ立ちよりしかば吾れのみ独り網走の町ニ急ぐ。之のおやぢ昨日海にて舟をひっくり返し概く命拾ひをせしなど語りぬ。網走川の架橋を渡ればやがて町なり。支庁のある所なれば中々にぎわし。宿ハ松井。夜は市中を

散歩し、原鉄二郎氏を訪問したれども不在の為め空しく帰る。

廿四日 曇、夕方半晴、 行程九里十三町

出立せしハ七時ニ近かりし。原氏を再び訪問したれどもノシップの牧場へ牧草刈りを見に行かれたりとの妻君の御話しに、幸ひ行く道ニ当りたれば面会し得らるべしと急く。道ハ今日も海岸の高丘ニ通じたり。しばしニして道の両側ニ牧柵あり。一里半計りも来りしかと思ふ頃、人のけはいして草刈の音聞へたれば茲ニおるならんと柵を入り見るに洋服着たる肥大の男手ニフォーク<sup>fork</sup>を持ちて来りしかば之れこそ原氏ならんと一礼して談話す。兼而小林氏より依頼之ありし乳牛の件を談して取調を頼む。暫時にして此所を辞し藤野牧場ニ向ふ。永田氏の案内にて畜舎を參觀しぬ。今は牛馬とも放牧中なれば舎飼せしもの僅に数匹ニして見るを得ざりし。畜舎は大なるもの三棟茲ニあり、内二棟は古るけれど中々念の入りしものにして粗末ならざれど、一ツは廿七年頃の建築の由なれば已ニ傾廢して穴明き殆んど廢屋の如き觀をなせり。他の一ツは新しく千余円を費せしとかなれば壯大なるものなり。之の他ニ乳牛所一棟ありて之の建築も中々よろし。之の他ニ事務所及所員の舎宅あるのみ。一時間ならざるに茲を辞して斜里<sup>シヤリ</sup>街道ニ向ふ。江刺家の話せし事務所裏の冷水一盃を飲む。濤沸湖を渡りしとき洋服着たる人と一所ニなりしか、根室<sup>ネムロ</sup>に行くとの事ニ互ニ良き伴れ得つと喜びつ、色々話しながら行く。郵便の方ニ関係ある人ニ幌内<sup>ホロナイ</sup>迄行き今はその帰路なりとか。フレトイに休みて昼飯を食ふ。此所の主人と渡場にて出逢ひしか妻はアイヌにて明治八九年頃ニ此所ニ来りて駅通を開きしものなる由、今は子供も沢山ありて十八九とも見ゆる娘の給事<sup>給</sup>ニ出でしハ其の間ニ出でしものなるとか。之の辺は海岸なれと砂丘の陰を通り行くなれば海を見ず、右手には牧柵を見、所々牛馬の群をなせしを見る。止別<sup>ヤンベツ</sup>ニハ藤野の放牧牛ありて道の側ニ数百群をなしおれり。種類は主にホルスタイン<sup>Holstein</sup>、短角の由なり。之の辺の放牧場は僅かに丘陵をなし或は平たんにして、楯なるべし具合良く生じ、吾等か目には心よき計り好ましき好牧場と見られぬ。茲の坂を上れば之れより斜里まで道路砂なれば歩行の困難甚だしければ海浜ニおり出つ。茲にて小休止、伴の人より林檎を分たる。余り風強からざれど波高く<sup>脚</sup>湃として岸を洗へ、時に波ニ追はれて逃げなどしつ。沓沫<sup>沓</sup>高く飛べばにや、行く手来し方ニ霧たちこめて衣は潮の為めに湿りぬ。番小屋の辺よりして再び道路に昇りて行く中ニ、今迄曇りし空や、晴れそめて斜里の村ニ入る頃ニは太陽の光りも地上をてらしぬ。斜里村は五六十戸もあらんか、駅通ニ入る。

廿五日 晴、 行程、十里三十三町

昨日入澤<sup>入澤久三郎</sup>氏と標津<sup>シベツ</sup>ニ出でんかなど、相談したれど余り難渋なるべければ糸櫛<sup>イトクシベツ</sup>別迄となしぬ。されど道ハ有名なる斜里山道なれば五時ニ出立せんと定めおきしが實際ハ六時頃なりき。郵便局の吏員ニ新道を教へられ近道を行く。国道なる由なれど往来の人更ニなく日々数人の通行あるのみなれば、細徑僅かに通じ行くに従てエゾ松のはへるなる森林左右ニ生へ茂りて昼尚ほ暗く且ツ笹密生して行く道も覆はれて見へぬ計りなり。ましてや昨夜空よく晴れたれば露結びて折角の白ツボンも黒色を呈しぬ。一里計りにして海岸よりの道と合す。之れより道や、広くなりぬ。行けどもト、松の森林にして山道は益々昇りぬ。駅

通の馬なるべし、十匹計り道にありて草を食へおりしか、吾等二逐はれて逃げて先になり行きしか、馬二乗りし者の為め再び後に逐ひ返されぬ。三里余ニして越川コシカワの駒通入澤あり。□□氏用事あれば十分間休息し水などを飲む。之の駒通より坂は弥々急となり暑さも稍々烈しくなりぬ。清き溪水の道を横きりて流れたれど気候矢張り寒き為めなるべし、咽さほど渴かねば二度計り飲みしのみ、その冷さ氷の如くなりき。峠の頂上ニ昇りつめしハ十一時頃にもや、山深くして風も寒く吹きぬ。瑞辺ルベスの駒通は之の峠をや、下りし所にあり。茲ニて昼飯を食ふ。一時半頃出立せんと外ニ出しに糸櫛別よりの郵便馬入りぬ。茲よりハ山は多く下りとなりたれど山の姿は更ニ変なる所なし。途中にて前の郵便馬、吾等に逐ひ付きたればカバンなどを駒通まで持ち行きもらう。急くことなければとてぶらへ行く。途中の休泊所に一寸立ちより茶を飲み今晚の菜にせんとて「ヤマベ」のほせしを一つら五銭ニて購ひ下げ行く。糸櫛別ニ着きしハ五時ニ近か、りき。茲も山中の一軒家なれど之の山道中最も大なる様ニ見受けぬ。夜食には旧曆の盆なればとて茶飯、赤飯を出されぬ。入澤氏と談話し床に入りしハ九時を過ぎたり。

廿六日、曇、行程、十二里

朝起き出で見れば空曇りて何となく雨ニてもあらんかと思はる計りの天候なり。之の宿の女の子癩の病強きとかにて発狂かと思はる、程泣きむづかりぬ。始めてかゝる病にかゝりしを見ぬ。入澤と二人にてぼつへ歩み出すニ、空いよへ急ニして一里計りも来りしか思ふ頃、雨かと思はる、程の霧降り出でぬ。幸ひ間もなく霽はれたれど天気とは尚ほならず。之の辺ニて森林は通り抜けたれど道殆ど一直線ニて変化なければ退屈なること甚だし。三里にして伊茶仁村イチャニニ出づ。此所より標津まで三十町あまりあるとの事ニ入澤氏ラウスハ良牛に行くなれば標津に少しく用事あれど茲ニて別れんと道側の草上に据して暫時休み別れを告ぐ。今迄知らざりしも氏ハ根室郵便局長ニして此度用事ありて幌内迄行かれし帰りなりとか。標津町ハ戸数二百もあらんか稍々繁華なり。藤野結鑛所あれど時間ノ都合悪しければ別海ベツカイのものを見んとて急く。茶志骨チャシコツより道二つニ別る。他ハ野付半島ノツケニ到るものなり。茲より道ハ山ニ入る。山道ニは已ニあきたれば早く海辺ニ出でよかしと急ぎに急げとも中々海見えず、二里余も来りしかと思ふころ木の間より海見えたり。時は已ニ一時を過ぎて腹もへりたれば昼飯を食ふ。之より海辺ニは出でたれど道ハ丘上に付きたり。遙ニ野付半島を眺め得べしと雖も砂道の困難の上ニ足も稍々疲れたれば早く別海ニ着かばやと急ぐ。春別シュンベツと思ふところは春別ならず。如何ニしても里程表よりハ實際里数多きに非ずやと思ふ。時間も大分過ぎ足も疲れたれど尚ほ二里位もあらん頃より空再び曇りて太陽もかくれたれば軍歌など唱ひて大ニ急けど砂原の為め殆ど閉口しぬ。早や半里もあるべしと思はる頃より弥々太陽も没したればにや足下暗く、霧も盛ニ降り出でぬ。人の顔もをぼろげなる頃、向ふに人家を望みたれば後より付き来れる小童ニあれは別海かと尋ぬるに別海ならねど早や間近しとの事に大急きにて砂原をこぎ行く。町ニ入りしときハ已ニ暗黒ニして入澤氏より聞きし宿ニ概概く入りてホット息をつきぬ。

廿七日、曇 行程八里三十三丁町

<sup>〔詰〕</sup>  
鐘鋳製造所を見物せんとしたれど目下休業中と聞きて落膽しぬ。已を得ざれハ七時出発、  
西別川橋を渡りて又も海岸の砂原道ニ入りぬ。ハマナスなどつみてぶらへ歩み行くニ後  
ろより二十計りの袴はきて海軍帽かぶれる若き男馬ニ乗り来ぬ。後ろより眺むれば如何ニ  
も平家の貴公子然として中々をも<sup>〔趣〕</sup>むきあれバ独り興に入りしか、暫く此の辺にて一休みせ  
んと海浜の方ニ出で、休み居る中、二三匹の馬かけ来ぬ。良く見れば馬の鞍ニ包みゆはい  
付けありしかば偕てハさきの貴公子落馬せしよなと思ふ中、袴をけたて白足袋姿にて逐ひ  
来りぬ。されど四足ニ二足なれば如何で逐ひ及ぶへき、すごすごとして再び帰り来りぬ。  
三十町計りにして<sup>フウレンコ</sup>風蓮湖の渡場ニ達す。茲ニ先きの貴公子已ニ居りて船を待つ。鼻の可笑  
しく尖りし老爺親切ニ物見ニ上りて人や来ると眺め居れと誰れも来らぬ様子。之の貴公子  
仙台に行く由にて仏教中学ノ生徒なるべし。馬ニつけし包みの中には衣、衣服、三円計り  
の金子入りをりたる由なり。やがて船つきたりとの報せニ貴公子と二人乗る。船よりハど  
やへと四五人の出稼体の者出で来りしか、水をかけられたりつつぶやけは、船頭も又何  
にかシキリに悪口をなしひぬ。何事ぞと問ふに前の者ども船ニ乗りてホラを吹きたれば打  
沈めくれんと思へたれど許すぬと、何やら分からず。船小なる上、波高ければ左右ニゆれ  
て木の葉の如くなり。茲を立ち出で、此度は海浜を沿へ行く。潮干たれば貝、ひとでなど  
陸ニ上げられ居たり。殆ど三里計りにして道は山ニかゝりぬ。湖水より海ニ連続せるニヶ  
所の長き橋を渡る。之れよりハ人家も連続し道は高台ニ通じたれば眺望特ニよく根室の町  
を遠望せしハ四時頃なりき。之の辺より各戸口に勤儉と書きし標札をかけぬ。園田長官に  
見せたらば喜ぶべし。海岸の郵便局前の宿ニ入る。夜は市中を散歩す。中々寒く単衣にて  
ハ凌がれ難かりき。郵便局ニ行きて国より送り来りし為替を受け取る。

父上、小林、足助、江刺家、石澤、大光寺ニ信書を出す。本町二丁目ニ美喜、方  
廿八日 晴、午後ニなりて曇り

八時ヲ聞きて郵便局ニ至ル、一枚ノ為替券は正誤せしあとありとて電報にて問合せ。山県  
牧場ニ行く。管理人某氏及び獣医某氏と対談数刻、牛乳の御馳走ニなり場内を案内され<sup>butter</sup>バタ  
の製造所ニ至りて<sup>cream</sup>クリームのセパレーター<sup>separator</sup>にかくるを見、郵便局ニ至らざるべからざるを  
以て十一時半ニ辞し帰る。山県牧場は有名の牧場なれば茲ニは単ニ現今の有様及び余か聞  
きたゞせしことのみを挙ぐれば、地積ハ八百余万坪にして牛数ハ四百、馬ハ二百余頭あり。  
現在ハ尽く放牧中なるを以て見るを得ざりしも乳牛及び種牝牛ハ之れを見るを得たり。共  
ニアシヤ種ニして種牛ハ牝牛二頭と共ニ英国より買ひ入れ、昨年及び本年の二月ニ入りて  
概く着せしものなり。種牛ハ運賃共千二三百円を要せりとか。乳牛ハ二十頭計りもありし  
ならんか、<sup>ayrshire</sup>尽くアシヤニして生乳の販売高ハ三斗のみ、其の他は<sup>〔製〕</sup>バタニ<sup>〔製〕</sup>勢す。バタは日々  
二斥を製し一斥のバタを製するに一斗二三升を要すとの事（根室ニ搾乳業ハ六戸計りあ  
り、七斗を販売す）。飼料としてハ牧草及び燕麦にして燕麦ハ一反歩一石を生産する由な  
れど、畑地ニあるを見れば発生極めて悪し。舎飼ハ十一月下旬ヨリ翌春ノ五月迄ニして、  
普通牛ニハ牧草及び野草ヲ給与し、乳牛ニハ燕麦のひき割を与フ。平均一頭十五円乃至二  
十円ヲ要す。畜舎は二棟ありて共ニ建築広大なれとも明治十年頃の建築なる由なれば已ニ

頽廢し且ツ通風極めて悪しければ健康上可ならず。之の外ニ尚ほ二棟之れニゆづらず大なるもの奥ニある由なれとも道遠ければ見ず。器械庫ありて茲ニ旧き西洋器具入れられあり。毎年なれば風の爲めニ燕麦隊<sup>〔倒〕</sup>として手刈とせざるべからざるも、本年ハ天氣続きて生育もよく且ツ隊<sup>〔倒〕</sup>とう少なればり<sup>reaper</sup>パーを使用せんとして器械ヲ組立て中なりとしてしきりに組立て<sup>〔屋〕</sup>をりぬ。之の外ニ事務所の裏ニ新シク建築せしバタ製造所あり。その他ハ事務員の住宅及び物置き等ありて、牧草は何れも畜舎ニ入れ置けり。其の乾燥雨少なかりしとかにて宜しきヲ認めぬ。地勢ハ根室半島ノ殆ど中央全部を占め、之れを四五ニ区画して各区ニ流水あり。現今ハ事務所ニ近き方ニ放牧し冬ハ奥ニ放つとか談られぬ。而して奥ニ至るに従て樹林地となる。土地高燥なれば蚊虻ノ害更ニなく、その他ノ流行病及び病気等多からず且つ拮校試験ニ於て不良の者更ニなかりきとか。場員及び常備ハ二十名位ありて目今ハ牧草収穫期中なるを以て臨時傭を置けり。牧草ノ収穫ハ今概<sup>〔漸〕</sup>く一番刈りなりとか。一年ノ経費ハ殆ど一万円を要し、収入又之れに同しく唯犢牛の増加の利あるのみ。本年売却すべき頭数ハ馬二十余頭及牛六十余頭あり。然れとも未た一頭も販売せず、之れより販売せんとすとて其の表を与へられたり。事務所附近ニは流水不足せるを以て水道を引けり。その他洩れたるを記せば、種牛ハ三才ニして發育極めて宜し。毛色ハ白色ニして之れニむしろ黒紫色ノ斑紋あり。種馬はパーシュロン（八才）、トロッター（三才）あり、共ニ種畜所より貸下げせしものにして以上は余が見しもの、み。根室市街牛乳代価は一合二銭ヨリ二銭五り位なり。土質ハ可ならず倭草生せるを見る。唯た土地の平坦なるを可とす。同場員ノ語るを聞けば、当牧場は土地の不便なると冬期寒冷にして放牧することを得ざるノ不便あり。バタは利益多からざるにより、練乳にてもせざるべからず。而して製造と畜牛とは両立せしめ得ざるか如しと談られぬ。標津近傍迄は胡瓜実る由なれとも当地にハ産せず。然るに本年ハ氣候宜しき為めか当地ニも実りし由。而して入澤氏の語るを聞くニ北見辺にてハ其の地ニ生せしもの、種子ハ種子用とならざる由なり。根室町ハ近年ニなりて衰退せし由なるか旭川など、は比較されず。然れとも家屋の構造ハ一体ニ宜しくして二階立ての家を多く見る。戸数三千位のものなりとか。弁天嶋<sup>ベンテンジマ</sup>ありて波をさへぎり汽船も二三町の近くニ錠泊<sup>〔錠〕</sup>し居れり。最も霧のはげしきは五、六、七月なりとか。山県牧場の搾乳ハ一日一回のみなり。午後より市街を散歩して高台に登り、それより海岸ニ歩を徒して後ち帰る。夜る亭主来りて漁業ニよれる根室の衰微を説き、将来根室の繁華は牧畜にあるべしと氣焔をはく。之の男の言によるに今年ハ十年來の暖気なる由にて例年ならば単衣を洗濯して着ることなしとぞ。近江の人間なる由にて商売は中々上手ニ従て取扱も丁寧なりき。夜ニ入りて急ニ雨降り出せしか、船ニ乗る頃ハ已ニ霽<sup>は</sup>れて朧月も出でたり。十時ニ乗り込む。船は北見丸。

八月廿九日 晴

午後四時迄は<sup>〔錠〕</sup>泊するなれば船にて之の夜を送る。夜中ニなりて寒さを感じたり。乗込客あまりなきかと思ひの外行先地あり、多数の漁夫乗込みて殆ど空席なきばかりなり。根室半島をまはる頃ニは少しくゆれたれど其の他は平穩なりき。然れど船に弱き為めか殆ど

寝通しにて飯も碌々食はず青くなりて<sup>[呻吟]</sup>伸びんしおりぬ。船中別段記すべきことなく、午後一時頃<sup>クシロ</sup>釧路港ニ着く。茲ニ下る客吾れと三人のみ。此の頃より急ニ風吹き出して舢船にては一寸困難なる程なりき。釧路の町ハ例の砂町なれば砂飛ぶこと甚だし。宿は真砂町<sup>マサゴチヨウ</sup> 厩方とし、直ニ郵便局に至りて澤藤小太郎氏ニ電報ヲ発し、それより市街を見物ニ行きたれど風強き為め後の高台に上りて直ニ帰る。

卅日 晴、 行程凡八里十町位、及汽車

午前六時発の汽車ニて釧路を出発す。線路は海ニ沿ふて平野を走る。北の方ニ阿寒岳<sup>アカンダケ</sup>を望む。所々ニ牧場らしきものを見たれど汽車なれば判然せず。何処なりしか汽笛の声しきりなれば皆々窓より顔を出し見るに十頭計りの馬汽車ニおはれて線路ニ沿ふて走るにぞある。稍々十町計りにもやトンネルのある前ニて山ニ上りぬ。之の辺の海岸は昆布の産地なれば至るところにて小舟ニ打ち乗りて採集しおれり。<sup>[厚内]</sup>□□<sup>トヨコロ</sup> 駅ニて海岸をはなれて陸地ニ入る。二三人の僧侶の乗り込めるなど稍々内地めきぬ。豊頃<sup>トヨコ</sup>ニて下車す。茲は最終の停車場ニて近來開業せしところなれば道路も良くは付かず。<sup>トカチガワ</sup> 十勝川を渡りて茂岩<sup>モイワ</sup>ニ出で帯広<sup>オビヒロ</sup>ニ急ぐ。帯広<sup>オオツ</sup>、大津ノ道路なれば人家も多からんと想像せしに案外ニして人家打絶へ更ニ北見辺に異なることなし。右ニ十勝川の川沿の平地を望み左は丘陵地なり。新しき牧場地一ツあり。雨降らざる為め砂塵深くして、きびすを没する計りなり。空腹ともなりたれば帯広ニ一里計りと思ふ頃ニて休み茶屋<sup>[立]</sup>ニ出ちより菓子<sup>[理]</sup>を食ひて立ち出づ。や、少し歩きし頃、向ふより単衣を着し大男来れり。近より見るに澤藤なりしかば大ニ喜び共ニ談話しつ、帯広ニ向ふ。今日は幸ひ非番の由にて昨日ノ電報を見て向<sup>[理]</sup>へに出でしなりとか、好意謝すべし。其の夜は澤藤氏か宿所<sup>[絶]</sup>ニ一泊し、耐へて久しき面会なればつきぬ物語りに其の夜を送りぬ。

卅一日、 曇

澤藤は局ニ出勤し、同宿者は下痢ニて臥床しおれば澤藤か懇意なる下宿に行くことゝす。一人の老母のみなればいと心易し。朝は借れ行きし雑誌を読み、午後よりは一寸市中を散歩す。雨降りたれど直にはる。

九月一日、 雨

朝より澤藤来りたれば又々談話す。夜ニ入りて西洋料理の御馳走ニなる。此の日、朝よりの雨ニて更々<sup>は</sup>霽れ間もなかりしか、夜ニ入りて霧と変じ明日ノ天気如何かと案せられしに澤藤ノ辞し去る頃にはや、月の光りも薄くかゝやきぬ。

九月二日 晴 行程八里二十四町

朝起き出で見れば風ありたれど太陽も輝きて天気となることの確しかなれば其の用意をなす中に澤藤も来れり。握り飯未だ出来ぬと云ふに澤藤のものと取りかへて七時頃ニ出立す。三四丁見送りもらへ、そこにて別を告げて大通りを真直ニ南ニ行く。前日来の降雨ニて氣候寒かりしかは、冬のシャツを着て来しかど、今日は暖かなれば夏のもの<sup>ウリカリムラ</sup>と着がへす。一里にして賣買村なり。道大きければ真直ニ行きしニ先き<sup>ヒロオ</sup>にて二ツニ別れたり。一ツを掴みて行くに怪しげなる人の家の前ニ出でたれば聞き正すに、広尾<sup>ヒロオ</sup>ニ行くならば途中より入

りて渡しをこへて行かざるべからずとの事に、如何ばかりもどるやと問へば千問計りと答へたり。シクジツタリと又々後ニ引き返す。之の村ニて今日は祭礼と見えて旗行灯などをかゞけたり。や、十四五町も来りしかと思ふ頃、路傍の農家ニ入りて渡船場の道を行くに、おりしも来りしメノコを見て、あれこそ渡船場のメノコなりとの事に一所ニなりて話しながら行く。之れより幸内道路ニ出る。之の道は間道にもや林中を迂回せし極めて狭き途にて国道ニてはあらぬなるべし。新来の旅人には気の付かぬ道なり。七八才になる男の子と五才ばかりかと思はるゝ、兎二人船を出して渡り来りぬ。茲より一里半計りにして郵便局の前より左ニ折れて山ニ登る。これよりは一望千里ノ荒原ニして道は曾て付けたりしなるべけれど、行人稀れなれば人の歩む丈け道つきて、両側は丈けよりも高くすゝきなどの雑草生へ茂れり。行けども行けども之の風景変わるることなし。西の方には十勝国境の連山模糊として南は海迄続けばなるべし其のはてを知らず、東にもやゝ低き山見えたれと之の間は極限もなき広野にして殆ど海ニ至る。雑草ハ重<sup>[主]</sup>にすゝきにして萩を見ず、樹木は櫛の粗生せるのみ。清流所々に流れたり。兎<sup>と</sup>ても農耕地とはなし難かるべければ未来の牧場地なるべけれど、土地の瘠せたと交通不便なるため容易ニ手を下し得ざるべし。山に登りし頃二人の馬ニ乗りし男ニ行き逢へしのみ稍々三里余も来りしかと思ふほど行きしかと一人の男にも逢はず。すゝき尾花の秋風ニ吹きなびく荒涼たる平原を孤影飄然と笠かたむけて行く姿は実にや昔しに聞く西行か身の有様を今に忍はるべし。何処なりしか橋を渡りしに一匹の野兎おどり出で暫し止まりて我か方を眺めおりしか、五六歩に近き頃逃げて草叢の中におどり入りぬ。あまり退屈なれば独り演説、軍歌などを声高く唱へて行くに遙かかなたニ以<sup>イタイラ</sup>平の馭通を望みぬ。時は三時半頃なりしも宿す。

九月三日 朝霧、午後曇 行程十里三十一町

昨夜迄は一天晴れ渡りて星さへ輝きをりたれば今日の晴天は疑へなしと思ひ寝ねしに、今朝起き出で、聞けば雨滴の音を聞きぬ。雨には非らねど細霧のしと、降りしきるなりけり。之の草の道を之の天気に分け行かは、頭よりぬるゝは知れしことなれど、さればとてと一溜<sup>[返]</sup>もなし難ければ七時少し前ニ出立す。草は昨日より短かけれど道路の草ハおとらず生へ茂りたれば、しばしにて水をあびたらん様ニ腰より下はなりぬ。霧はやゝはれたれど風ハ更ニなければ貫ぬきとめぬ玉ぞ散けるとはかくの如きを云うにやと思われたり。かく一日露に打たれたらば健康の爲めも如何かと案せられたれば、今更ら馬を備へばよかりしになど愚痴も出でたれば、今となりてハ後の祭り。ぬれぬさきこそ露をもいとへと糞元氣を出して進む。三里計りにして広き道ニ出でし頃は霧もはれて空模様もかはりや、青空となりたれば一層元気づきぬ。大樹<sup>タイキ</sup>ニ出でし頃はぬれし服も少しかわきたり。十時半頃なれば素通りす。学校のある此方ニて時は早かりしかど空腹となりたれば立ちながら便当<sup>[弁]</sup>を食ふ。大樹よりハ丘陵起ふくし樹林も多ければ農家已ニ入りて道の両側は開墾せられたり。茲より前後して来りし一人のおやちと道連れとなり色々談話して之の地の模様を尋ぬ。茂寄<sup>モヨリ</sup>の半里計り手前ニて別れたり。茂寄は船付き場なれど近來漁のなきと此の近村元来土地宜しからねば農産物も多からぬにより衰退せし由にて戸数百もあらんか。四時頃小

泉と云ふニ宿ス。夜食前理髮所ニ行く。汽船の函館ニ出帆するとかにてしきりに汽笛をふき鳴しおりぬ。

小林、中村氏へ葉書

四日 晴天、 行程凡八里余

如何かと思へし天気のみづらしくも晴天となりたれば直ニ浜ニ下りていそ伝へニ行く。浜は頭大の石ニして歩行ニなやむ。昨日買ひし草靴〔鞋〕の一里計りにして切れかゝりたれば音調津ツにて新しきを買ふ。猿留サルルの一里計り手前よりハ砂原道となる。猿留よりハ岩石畳々として道をさへぎり所々に洞門をうかちて旅人ニ便せり。されど其の困難シヨヤなると共ニ風景も又壯絶を極め未だ曾て見ざるの好風景なり。而して之の風景茂寄より庶野ニ至る迄連続して北見海岸の平凡なるに比すべくも非ず。之の旅行三十日唯た之の日を以て吾か心を満足せしむべし。右は万山高く聳へ北海の荒波岩ニげきして飛沫を高く上ぐる絶景、兎ても筆舌の及ぶところニ非ず。猿留にて昼飯し十二時半頃出立す。今日は庶野迄と極めたれば急かすぶら〜と行きたれど午前ニ急きし為め宿ニ着きしハ四時頃なりし。茂寄より別ニ新道ある由なれど山ニかゝりて殆と十二里余あれば旅人誰れも之れを歩むものなく皆な海岸を通るとぞ。されど海岸道の困難なる非常ニて吾れニは左ほどならねと足弱連ニは実ニ天下の難道ならんか、呵々。草鞋を取り変へしこと二度ニ及びぬ。且ツ猿留よりは海辺の岩石をとりすがりて上下し波殆ど脚下ニまで及ぶところあれば身一つならでは通り難し。要するに此の海岸は岩層と岩塊層と石礫層及び砂層よりなる。特ニ石礫層にて頭大の石の波の為めに上下せられて音を發し盛ニ洗はる、有様は他ニて見難し。而して或る辺ニては殆と他石まじを雑ゆることなしに皆なグラニットgraniteよりなれる所を見たり。之の海浜は至るところ漁家立ちならびて今は盛ニ昆布を採取し之れを砂浜ニ乾燥しつゝあり。他の魚類も漁する由なれど主なるハ昆布なりとか。猿留にて旅順リョジュン陥落ノ風説を聞きしか、庶野ホロイズミにて幌泉より来り郵便脚夫の言ニよると弥々真なるか如し。駅通ハ郵便局を兼ね海浜ニあれば終夜濤声を聞く。

五日、 晴天 行程凡五里三十三町

今日ノ行程ハ六里ニ足らねば急ぐこともなしと八時近くニ出立す。天気は極めて麗かにして一点の雲もみとめねど風強く吹きて寒きこと甚だし。今日の道は砂原なれど堅ければ歩み易く昨日よりハ余程楽なり。漁家はあまりなく一里計りにして牧場あり。馬数十頭放牧しおりたれば柵内ニ入りて見るに別段良き馬なし。休まんとすれど風吹きて砂を飛ばしけん故物もなければ砂丘の小影〔影〕ニ暫時息へしのみにて又々出掛く。幾度か細流を徒渉し小越の村を望みし頃、海辺の砂原ニ死して間もなき小馬の屍横はりて之れニ鳥十羽ばかり群りて目などをついばみ居りぬ。酸鼻の極みにこそ。灯台は見せぬとか聞けば、せめて襟裳岬頭よりの風景だけでも賞せんとて山ニ登るに突然断崖の上ニ出で脚下に白浪打よせ眼界広く三方ニ開けて壯絶極まりなく風景の大なる実ニ衣を千尋の岡ニ振ふの慨ありき。茲にて昼飯を食し菓子を平げ写生などして稍々一時頃まで絶壁頂上の草原ニねころぶ。今迄吹きし風も全く止みて暖かなれば心地良きこと限なし。帰路は電線ニ沿ふて丘山をたどるに所々

に小さき谷ありて下りてハ上り上りてハ下る故うるさくして中々つかる。遂ニ何処なりしか坂を滑りて転び指を損しぬ。再び海浜をたどりて山ニ登れば庶野より来る道路に合す。幌泉ニ入りしハ四時半頃なり。かなりの町のつもりにて宿屋なども宜しきものあるべしと町ニ入るに案外にて百戸ニ足らぬ一小村にて再び後ニもどりて怪しげなる宿屋ニ入る。

六日、 雨、 行程九里三十一町

宿のむさぐろしき上、極めて不丁<sup>〔る〕</sup>さいなれば心地悪しきことのみ多し。朝飯を食へ終りて便当<sup>〔舟〕</sup>を出せしハ七時半過ぎたり。どーせ遅くればと思へて八時迄待ちて郵便局ニ至りて為替を受け取る。朝より曇りたれど、まさか今日は降るまじと思へしに一里計り来し頃よりポツ／＼落ちぬ。海辺ニ出でし頃には篠つく計りの強雨となりぬ。漁夫等が急がしげニ昆布を取り集めし中を通り抜けて急ぐ。之の海辺の海岸も猿留ニおとらず風景よく何処なりしかフト目を挙げ見れば遙か海岸ニ突出せし高き岩山の雨ニ烟りて模湖<sup>〔湖〕</sup>とし碧海は層々白波を岸ニ送り其の間ニ漁舟の岸辺ニ向て急きこぎ行ける様、活動写真ニでもありそうな景色なりし。や、暫し廢洞ニありて雨のはる、を待ちて立ち出づ。之れよりハ海岸もや、猿留の海辺ニ似たれど此方は修膳<sup>〔繕〕</sup>を加へて立派ニ作りしなれば馬も通へ居りぬ風景も中々おとらず良ろし。様似<sup>〔小〕</sup>ニ近よりし頃又もや雨降り出し此度は風も強く吹き荒れたれば腰より下は全くぬれぬ。一時余り烈しかりし為め小屋ニ走り込みしかども、兎ても凌ぎ難かりし為め再び立ち出で小河を徒渉して様似<sup>〔小〕</sup>の村ニ入る。様似村は戸数五六十戸位のものなるべし。恰も少なる函館<sup>〔小〕</sup>とも称すべからんか、海中ニ突出したる岬にありて岬頭には高き岩山あり。或る商家ニ入りてわらじを買ひ求めしに数日前茲の海浜ニ鯨の屍体漂着せし由にて其の肉を塩漬となし販売しおりぬ。様似にて買ひし豆糖<sup>ホロベツ</sup>をかざりながら独り海辺の砂原を傘かたむけてたどる。雨も稍々小止みとなりし頃幌別川の渡場ニ着きぬ。舟のみ川辺の柳樹二つながれたれど小屋はなければ上流の方ニ尋ね行くに、をりしも一人馬ニ乗りし男子の向ふ岸を通るに聞きたづねて再び下流ニもどり之度は大声して四五度呼ぶに概くオーと声して遙かより男の子一人はせ来りぬ。丸木船にて渡る。こ、より浦河<sup>ウラカワ</sup>迄は一里半と聞きて元気を出して歩む。浦河に着きしハ五時過ぎたり。宿ハ松月館。夜は風呂ニ行き町の模様をも見物せんと思ひしに雨又々降り出して止みそうもなければ新聞など読みて眠ニ就く。

札幌ノ山崎下宿と父上へ葉書

七日 午前曇、午後晴、 行程十里三十四町

朝起き出で見れば案外天気模様となりて日光さへ輝きいたれば大ニ力を得て七時頃出發す。浦河町ハ支庁のあるところなれば戸数も三百位もあらんか。其の繁盛なるハ帯広などの及ばさるところなるべし。昨日の雨の為め道路悪くして少しく困難す。然し浦河よりハ人通りもあり道路も砂浜ニ非らずして別ニ山ぎわニ付けたれば多ニよし。元浦川<sup>モトウラカワ</sup>の橋を渡れば萩伏村<sup>〔萩〕オギフシ</sup>なり。之の辺にて昨日雨ニうたれたる為めにや脚非常ニだるくしてくるしきこと限りなく、且つ腹もへりたれば何となく鬱々として楽しからざりしかば休茶屋<sup>ケリマイガワ</sup>ニでも入りて菓子を食べんと見回したれど適当ノところなくして之の村を出づ。梟舞川の渡場よ

り二里にして<sup>オバフ</sup>姨布なり。空腹とつかれし脚を引づり氣息えんへとして砂をこぎ概く<sup>[漸]</sup>村の入口の宿屋ニ飛び込みした、か食ふ。十二時半頃茲を出立す。之の村は百戸以上もあるべし、や、繁華なり。之れより<sup>シズナイ</sup>静内郡ニ入りて<sup>ハルタチ</sup>春立、<sup>モンベツ</sup>柵別などの村あり。柵別は姨布におとらず繁盛なるところなり。浦河より<sup>シモケボウ</sup>下々方ニ至る海岸ニ殆ど相連続してアイヌ小屋あり。其の小屋の構造皆な一樣ニして方二間四方計り樹枝を以て骨子を作り屋根及び周囲の壁ハかやを覆へしに過ぎず、間々いたどりなどの葉のつきしま、並へしところなどもあり、構造や、粗末なれば之のれ等ノ間ニ空隙存じてよくも<sup>[期]</sup>期の如き家ニて冬期の寒を凌ぐものかと怪しまる。而してその中ニ総て雑居するなるべし。之の辺は有名なる馬産地なれとも平地はなくして多く海辺より直ニ丘陵地なり。而して所々殆ど六七十度ノ傾斜を有する山ニ木柵をなし放牧せるを見たり。有良のアイヌ村を過ぎて<sup>シベチヤリガワ</sup>染退川とて、いと大なる川を船にて渡る。此方ノ岸ニて船を待ち居りし若き婦人と女の子二人計り乗りてこぎ出づるに、折しも夕陽西の海ニ没せんとして赤き雲の水ニきらへときらめき、ひげ長きアイヌのさほもちてへさきニ立てる油絵などにしたき好風景なり。下々方の村ニ入りしに戦勝祝賀の爲めにや露国と日本の軍艦を作りて入り江ニ浮べ、宿の前にては山車の装飾ニいそがしかりき軒<sup>[物]</sup>相對して大なる旅店ありしかは、吾れは入りて右の者ニ昇る。久しぶりにて風呂ニ入る。

八日 午前小雨、午後晴

七時朝食を終りて宿の主人より聞けば<sup>ニイカッブ</sup>新冠牧場は茲より三里半山奥ニ入るなりと。今迄道ニ当りしところのみ考へおりしかば目的大ニはづれて一時ハ如何ニせんとまで思ひたれど見ずば千歳の遺憾をなすべし、且つ日高方面の旅行の第一目的なればカバンをあづけで身軽ニ出で立つ。中下方、<sup>ナカケボウ</sup>上下方などの諸村を過ぎてや、一里計りにして道側ニ新冠御料牧場の標木あり。茲より入るならんと思へて折りしも来か、りしアイヌに聞き正し山路に入る。丘陵ニ登りてより殆ど一直線の道路ニして両側ニは木柵をなし植林なり。往来の人ニも二三人出逢ふ。稍々行けば開墾をなして牧草地となせり。朝より曇りたりしが之の辺ニ来りて黒雲南方より油然として来り後ろよりばらへと植の葉を打ちて落ち来りぬ。一時は烈しき勢へなりしも間もなくはる。今日下々方ニ祝勝会あれば見物ニ行くなるべし牧場より婦女子ノ馬車ニのりて行くニ二三台に逢ふ。牧場の入口にて暫時休みいざ行かんと立ち上りしに、牧場より小旗をたづさへし騎馬の人々二三十人あらわれ出でぬ。祝勝会ニ行く牧場の事務員などなるべし。さては今日ノ訪問の折りの悪るさよと思ひたれど中ニ入りて案内を乞ふニ老へたる人二人おりて一人の乗馬服着けし人案内ニ立たれたれど之の人あまり馬のことに精しからぬと見へて折角牧夫を尋ねしが種馬の厩を自ら案内し小馬の方は牧夫を尋ね出して案内せしめぬ。種馬は十五六頭もありしなるべし。露国产のもの二頭、佛国大統領より<sup>[一字空欄]</sup>□せしもの一頭、其他米国产のもの二三頭あり。其の他は<sup>シモウサ</sup>當場産のもの及び下総牧場産のものなり。當場の総馬数ハ二千五六百頭ありて其の中洋種は五六十頭の由なり。本年せりに出せし頭数ハ六百頭計りにして洋種ハ尽く売れたれと和種ハ六十頭計り遺れり、総計にて三万五六千円の由。洋種ハ皆ナ舍飼なれども其の他ハ年中放飼な

り。冬期ハ為めに斃死するもの多しとぞ。十二時過ぎ辞し去る。宿屋もあると聞きたれば少しハ開けしところかと考へ行きしニ大違へにて宿屋などもなく唯た牧場ニ関係せし人の家のみなれば昼飯を食ふ所なく空腹をかゝへて元来し道をたどるに、或る古人の句に鐘淋し須磨ニ宿屋はなかりけると云ふがありしかば、馬嘶く新冠ニ宿屋なかりけるとしやれぬ。下々方の村ニ近く来りし頃、花火を挙げしなるべし爆声しきりに聞へ万才の声も聞えぬ。宿ニ着きて二階より眺むるに砲兵の服装せしもの大砲ヲひき楽隊を先導として学校生徒などぞろへとつゞき市中を行列し近村のアイヌ、メノコなど迄盛装して中々にぎわへぬ。

### 九日、晴、夜雨 行程

七時ニ出立す。天気もはれそうなれば急き行く。道ハ海辺ニ出でたり。案外ニも人家更ニなく人通りも稀れなり。□□<sup>〔二字空欄〕</sup> 駅より右手ニ入りしかば不思議ニ思へ道を間違へしニ非ずやと立ち止まり通りかゝりし所の人ニ尋ぬるニ然りとの事なれば安心して行く。新冠川ニかゝれる橋あり。之れを渡れば山ニ登る。之れより五六町山をのぼりて又海辺ニ出づ。厚別川<sup>ベツガワ</sup>を舟ニて渡りしニ間もなく厚別の村ニ入る。三四十戸もあらんか、郵便局などあり。賀張<sup>カバ</sup>りニて早けれど昼飯を食はゞやと行くニ二三戸のみ家ありてきたなげなる宿屋あり。未だ賀張りの村ニは非らざりけり行き過ぐるに行けとも一砂原道のみにして人家更らになくそろへ腹も空き来りぬ。こは吾か地図を見あやまりしにて小村落なるべしと思ひしハ賀張りニあらで厚別なりしなり。慶能舞<sup>クノマイ</sup>ニ行かは旅宿あるかと望をいたぎしも之れも空しく僅かに二三軒の家道ニのぞみてあるのみ、波恵村<sup>ハエムラ</sup>ニ入りし頃は稍々一時を過たり。岩根牧場あり、十四年ニ設置せしもの、由にて道側ニ数十頭の牛馬の群を見受たり。種牛<sup>モンベツ</sup>も二三頭はありたり。空腹なれば見る気にもならず急き坂を登りて門別の村ニ急く。門別と言は、少しは良き町かと思ひ行きしに案外の寒村にて家屋も古きもの多く旅宿なども殆ど木賃の如きもの二三軒あるのみ。概く町端れの菓子屋ニ入りて十銭代計りの菓子を食べ元気を回復して二時ニ出立す。佐瑠太<sup>サルフト</sup>迄は一里有余、殆ど途中ニ人家なく山にかゝりて道つけり。茲も稍々門別ニ似し町なり。遼陽<sup>リョウヨウ</sup>占領の祝なるべし盛装せし男女のぞろへとして北ニ歩み山車も引き行く模様なりしか、北の町端れニ会場ありて茲ニは町の若者も兵装せしもの小学生徒の看護婦を装へせしなど並び居て何にか歌へおりし様子なりし。佐瑠太橋を渡れば右手ニ<sup>ビラトリ</sup>行く道あり。平取は愛奴<sup>〔部落〕</sup>の落部ニて義経を祭りし社殿もある由なり。之れより道は又山ニ入りて檜の密林左右ニ連なり牧場となさばなされんも水ニはとほしきか如し。日高と膽振<sup>ヒダカ イブリ</sup>の国境に着きしは三時を過ぎたらんか、何処ニ行くにか和尚の足駄がけニて来るニ行き逢ふのみ人通り稀ニして淋しき山道なり。井目戸<sup>イモツベ</sup>と云ふ村ニて概く森林を出で、畑などを見る。之の時は已ニ太陽も西山ニ没せんとして暮色蒼然たる頃なりき。門別、佐瑠太など意外の寒村なりしかば今日宿る鷓川<sup>ムカワ</sup>の宿屋も如何なるにかと想像せられしが、鷓川ニ架せし長き橋を渡りて鷓川ニ入れば思へしよりも新しき宿もありて茲ニ宿す。余より前ニ二組計りの男女の客あり、特ニ二階ニ宿りし女連の騒がしきこと甚だしく十一時頃迄眠られず困却す。

十日 晴、急雨

苦小牧<sup>トマコマイ</sup>まで馬車通へおる由なれど、さる贅沢の事を夢にもされず例の健脚ニ鞭打つ。勇<sup>ユウフツ</sup>仏の停車場ニ行くにか朝より荷馬車の何台となく行きしが何れも打ち越して進む。今日よりは已ニ平原ニ出でたれば道は少々海岸ニ沿へ遙ニ<sup>エニワ</sup>恵庭、樽<sup>タルマエ</sup>前の諸山を望み得べし。道は一直線なれば電柱<sup>電柱</sup>著を並べし如く行けどもへはてしなし。途中にて左のみ速く事もなく苦小牧ニ一時半頃ニ着せば良き筈なる由、勇<sup>漸</sup>扨にて時は概く十時を過しのみなれと、或る宿ニ入りて昼飯の用意を頼みしに時の早き為め怪げんの顔して概く出す。之れよりは漁村のみにして沿道ニは更ニ人家なし。ゆるゆる道草を食へて苺、はまなすなとつみ食ふ。苦小牧の村を遠望せしは十二時頃なりし。町ニ入る五六町手前より停車場ニ入る道ありと聞きたれば町へは行かず直ニ茲より停車場ニ向ふ。今迄も時々黒雲湧き出しかど雨とはならざりしも停車場の五六町前ニて急ニ大雨となりピシヨヌレニなりて停車場ニ入る。汽車の発するころには雨霽<sup>は</sup>れたり。火山灰地の平原を過て札幌ニ入る。同列車ニて岩見沢<sup>イワミザワ</sup>より大関、中村と来たりし由なれと知らずして札幌ニて漸く知る。

忘れめや葵を草ニ  
引きむすび  
仮寝の野辺の  
露のあけぼの

〔附録5〕金銭出納録

八月十八日

|       |             |
|-------|-------------|
| 金九十銭也 | 旭川ヨリ名寄迄の汽車賃 |
| 金三銭也  | わらじ代        |
| 々五銭也  | 林檎代         |

十九日

|       |           |
|-------|-----------|
| 金五十銭也 | パンケヌカナン宿料 |
|-------|-----------|

二十日

|                       |        |
|-----------------------|--------|
| 金六十銭也                 | 興部宿料   |
| 金三銭五 <sup>〔厘〕</sup> り | わらじ代   |
| 金四銭也                  | 二度ノ渡船代 |
| 金六銭也                  | 葉書代    |

二十一日

|        |       |
|--------|-------|
| 金七十五銭也 | 紋別の宿料 |
|--------|-------|

二十二日

|                        |        |
|------------------------|--------|
| 金六十銭也                  | 湧別の宿料  |
| 々三銭五 <sup>〔厘〕</sup> り也 | わらじ代   |
| 々四銭也                   | 猿澗ノ渡船料 |
| 々二銭五 <sup>〔厘〕</sup> り  | 湯銭     |

二十三日

|       |         |
|-------|---------|
| 金六拾銭也 | 登呂ノ宿料   |
| 々四銭也  | 能取湖ノ渡船料 |

二十四日

|      |          |
|------|----------|
| 金六十銭 | 網走の宿料    |
| 々十五銭 | フレトイの昼食代 |
| 々二銭  | 渡船料      |

二十五日

|      |                         |
|------|-------------------------|
| 金七十銭 | 斜里ノ宿料                   |
| 々三銭  | わらじ代                    |
| 々二十銭 | 瑞 <sup>〔増〕</sup> 辺斯の昼食代 |

二十六日

|      |        |
|------|--------|
| 金五十銭 | 糸櫛別ノ宿料 |
|------|--------|

二十七日

|       |       |
|-------|-------|
| 金五十五銭 | 別海の宿料 |
| 々二銭   | わらじ代  |

|                       |               |
|-----------------------|---------------|
| 〆三錢五 <sup>[厘]</sup> り | 風蓮湖ノ渡船料       |
| 〆六錢                   | 葉書代           |
| 二十九日                  |               |
| 金壹円二十五錢               | 根室ノ宿料         |
| 金二十壹錢                 | 船賃            |
| 金貳円                   | 釧路行切符代        |
| 金二十錢                  | 電報料           |
| 〆十錢                   | 菓子代           |
| 三十日                   |               |
| 金壹円五錢                 | 釧路ノ宿料及船賃      |
| 金八十五錢                 | 汽車賃           |
| 〆二錢                   | 渡船代           |
| 〆三錢                   | わらじ代          |
| 〆五錢                   | 途中にて菓子代       |
| 九月二日                  |               |
| 金壹円也                  | 帯広ノ宿料及洗濯代     |
| 金二錢                   | 渡船代           |
| 三日                    |               |
| 金六十六錢                 | イタラの宿料及わらじ代   |
| 〆二錢                   | 渡船代           |
| 〆二十錢                  | モヨリ理髮代        |
| 〆九錢                   | 葉書代           |
| 四日                    |               |
| 金七十錢                  | 茂寄ノ宿料         |
| 〆拾錢                   | 菓子代           |
| 〆二錢五 <sup>[厘]</sup> り | 音調津ニテ草鞋代      |
| 〆十錢                   | 猿留ニテ昼飯ノ菜及わらじ代 |
| 五日                    |               |
| 金五十五錢                 | 庶野ノ宿料         |
| 金三錢                   | わらじ代          |
| 六日                    |               |
| 金五十五錢                 | 幌泉の宿料         |
| 〆二錢五 <sup>[厘]</sup> り | わらじ代          |
| 〆五錢                   | 豆糖代           |
| 〆三錢                   | 幌別川の渡船代       |
| 七日                    |               |

|       |                        |
|-------|------------------------|
| 金五十銭  | 浦河ノ宿料                  |
| ヾ二銭   | 鳧舞川ノ渡船料                |
| ヾ十五銭  | 三石ノ昼食代                 |
| ヾ三銭   | わらじ代                   |
| ヾ五銭   | 豆糖代                    |
| ヾ二銭   | 染退川の渡船料                |
| ヾ二銭   | ライロン一袋代                |
| ヾ七銭   | 林檎代                    |
| ヾ二銭   | 三石川の渡船料                |
| 八日    |                        |
| 金六十銭  | 下々方ノ宿料                 |
| ヾ四十五銭 | 足袋代                    |
| 九日    |                        |
| 金六十銭  | 下々方ノ宿料                 |
| ヾ二銭   | 厚別川の渡船料                |
| ヾ十三銭  | 門別ニテ菓子ト草鞋代             |
| 十日    |                        |
| 金六十銭  | 鵠川の宿料                  |
| 金弍十銭  | 勇仏ノ昼食                  |
| ヾ壹円六銭 | 苫小牧ヨリ札幌迄ノ汽車賃           |
| ヾ二銭   | 新聞代                    |
| ヾ拾銭   | 江別 <sup>エベツ</sup> まんぢう |

〔参考資料1〕川嶋一郎略年譜

|          |  |
|----------|--|
| 1880年11月 | 21日、川嶋泰作、きよ子の長男として、岩手県二戸郡福岡町に生まれる                      |
| 1887年4月  | 福岡尋常小学校入学  |
| 1894年4月  | 福岡小学校高等科卒業   |
| 1895年1月  | 仙台遊学。日進学舎に通学   |
| 1895年9月  | 仙台数学院（東京数学院宮城分院）に転学                                    |
| 1896年4月  | 東京遊学。東京数学院、国民英学会に通学                                    |
| 1896年9月  | 早稲田中学校入学   |
| 1898年3月  | 早稲田中学校退校   |
| 1898年4月  | 私立中学郁文館入学  |
| 1899年4月  | 円覚寺内佛日庵（鎌倉）にて脚気療養、「鎌倉日記」を記す                            |
| 1900年3月  | 私立中学郁文館卒業  |
| 1900年9月  | 札幌農学校予修科入学   |
| 1902年7月  | 札幌農学校予修科卒業   |
| 1902年7月  | 大光寺穀夫と共に夏期旅行（青森・秋田）、「東北遊記」を記す                          |
| 1902年9月  | 札幌農学校本科進学  |
| 1903年1月  | 「明治三十六年当用日記」を記す  |
| 1903年1月  | 遠友夜学校教師となる   |
| 1904年1月  | 「明治三十七年当用日記」を記す  |
| 1904年7月  | 農業乙科（畜産）を専攻  |
| 1904年7月  | 河内完治、足助素一等と共に恵庭岳登山、「恵庭登山略記」を記す                         |
| 1904年7月  | 小林直三郎牧場（旭川市）にて約1カ月乳牛飼養実習をする                            |
| 1904年8月  | 夏期旅行（道央・道東）、「北海紀行」を記す                                  |
| 1906年7月  | 札幌農学校本科卒業〔第23期生〕。卒業論文は「氷乳ノ状態ニ就テ」                       |
| 1906年11月 | 農商務省月寒種牛牧場勤務   |
| 1911年5月  | 農商務省畜産課勤務  |
| 1916年5月  | 千葉県庁勤務（～1922年7月）。<br>千葉県立種畜場分場長（1918）、農事試験場技師（1922）も兼務 |
| 1926年1月  | 二戸郡農会長就任（～1931年）                                       |
| 1926年3月  | 二戸郡養蚕組合長就任   |
| 1926年4月  | 福岡町会議員就任   |
| 1930年3月  | 福岡町長就任（～1946年11月）                                      |
| 1931年10月 | 養蚕実行組合二戸郡連合組合長就任                                       |
| 1933年4月  | 二戸産馬組合副組合長就任   |
| 1934年4月  | 盛岡銀行監査役、盛岡不動産会社取締役就任                                   |
| 1936年5月  | 二戸郡町村長会長就任   |
| 1952年1月  | 裁判所調停委員再任  |
| 1976年1月  | 29日、死去   |

## 〔参考資料2〕札幌農学校第23期生本科履修表

| 学年・学期                | 教科目                 | 担当教官      | 学年・学期                                       | 教科目                  | 担当教官  |       |
|----------------------|---------------------|-----------|---|----------------------|-------|-------|
| 1年目1学期<br>(~1902.12) | 農学総論                |           | 2年目3学期<br>(~1904.6)                         | 經濟原論                 | 佐藤昌介  |       |
|                      | 有機化学                | [吉井豊造]    |   | 農史                   | 佐藤昌介  |       |
|                      | 植物組織学               | 宮部金吾      |   | 農業実習                 | 南鷹次郎等 |       |
|                      | 1年目2学期<br>(~1903.3) | 動物学       | 原十太   | 3年目1学期<br>(~1904.12) | 普通作物論 | 南鷹次郎  |
|                      |                     | 英文学       | [高杉栄次郎]                                     |                      | 肥料論   | 吉井豊造  |
|                      |                     | 独逸語       | [橋本左五郎]                                     |                      | 園芸論   | 南鷹次郎  |
|                      |                     | 農業実習      | [南鷹次郎]                                      |                      | 植物病理学 | 宮部金吾  |
| 農具論                  |                     | 尾泉良太郎     | 家畜生理学                                       |                      | 橋本左五郎 |       |
| 隱花植物学                | 宮部金吾                | 昆虫学       | 松村松年  |                      |       |       |
| 1年目3学期<br>(~1903.6)  | 動物学                 | 原十太       | 3年目2学期<br>(~1905.3)                         | 細菌学                  | 橋本左五郎 |       |
|                      | 英文学                 | 高杉栄次郎     |   | 農業経済学                | 佐藤昌介  |       |
|                      | 独逸語                 | 橋本左五郎     |   | 殖民論                  | 高岡熊雄  |       |
|                      | 農業実習                | [尾泉良太郎]   |   | 特用作物論                | 南鷹次郎  |       |
|                      | 分析化学                | 吉井豊造      |   | 畜産学                  | 橋本左五郎 |       |
| 植物營養論                | 大島金太郎               | 家畜生理学及衛生学 |   | 橋本左五郎                |       |       |
| 農具論                  | 尾泉良太郎               | 家畜飼養論     |   | 大島金太郎                |       |       |
| 2年目1学期<br>(~1903.12) | 隱花植物学               | 宮部金吾      | 3年目3学期<br>(~1905.7)                         | 養蚕学                  | 須田金之助 |       |
|                      | 動物学                 | 原十太       |   | 農業経済学                | 佐藤昌介  |       |
|                      | 英文学                 | 大島金太郎     |   | 森林学                  | 新島善直  |       |
|                      | 独逸語                 | 橋本左五郎     |   | 園芸論                  | 南鷹次郎  |       |
|                      | 農業実習                | 尾泉良太郎     |   | 畜産学                  | 橋本左五郎 |       |
|                      | 2年目2学期<br>(~1904.3) | 土地改良論     | 尾泉良太郎                                       | 4年目1学期<br>(~1905.12) | 家畜飼養論 | 大島金太郎 |
|                      |                     | 土壤論       | 吉井豊造  |                      | 農業経済学 | 佐藤昌介  |
| 隱花植物学                |                     | 宮部金吾      | 殖民論   |                      | 高岡熊雄  |       |
| 植物營養論                |                     | 大島金太郎     | 森林学大意                                       |                      | 新島善直  |       |
| 動物発生学                |                     | 原十太       | 4年目2学期<br>(~1906.3)                         | 水産学大意                | 佐藤昌介  |       |
| 昆虫学                  |                     | 松村松年      |   | 畜産学                  | 橋本左五郎 |       |
| 経済学                  |                     | 佐藤昌介      |   | 獣医学大意                | 南鷹次郎  |       |
| 農業実習                 |                     | 南鷹次郎等     |   | 農産製造論                | 吉井豊造  |       |
| 2年目3学期<br>(~1904.6)  | 普通作物論               | 南鷹次郎      | 4年目3学期<br>(~1906.7)                         | 農政学                  | 高岡熊雄  |       |
|                      | 肥料論                 | 吉井豊造      |   | 畜産学                  | 橋本左五郎 |       |
|                      | 土地改良論               | 尾泉良太郎     |   | 獣医学                  | 南鷹次郎  |       |
|                      | 植物生理学               | 宮部金吾      | 農産製造論                                       | 吉井豊造                 |       |       |
|                      | 植物營養論               | 大島金太郎     | 農政学   | 高岡熊雄                 |       |       |
| 經濟原論                 | 佐藤昌介                | 畜産学       | 橋本左五郎                                       |                      |       |       |
| 昆虫学                  | 松村松年                | 農政学       | 高岡熊雄  |                      |       |       |
| 2年目3学期<br>(~1904.6)  | 動物学                 | 原十太       | 備考 『北海道大学大学文書館年報』第4号(2009年3月、154~155頁)より転載。 |                      |       |       |
|                      | 昆虫学                 | 松村松年      |   |                      |       |       |

## 〔解題〕

### 1. 川嶋一郎関係資料について

北海道大学大学文書館では、川嶋昭二氏（川嶋一郎次男）から、2007年6月11日に川嶋一郎関係資料31点を寄贈いただいたことを契機に、川嶋一郎関係資料の調査・収集を行ってきた。これまでに、川嶋家、学内部局に協力いただき大学文書館に収蔵された資料の概要は下記のとおりである。

- (1) 寄贈日 : 2007年6月11日                      寄贈者: 川嶋昭二  
寄贈資料: 日記3点、アルバム1点、写真6点、書簡15点など計31点
- (2) 寄贈日 : 2008年6月16日                      寄贈者: 川嶋昭二  
寄贈資料: 日記2点、写真(複製)12点
- (3) 寄贈日 : 2008年10月6日                      寄贈者: 川嶋貞子  
寄贈資料: 写真(複製)11点
- (4) 移管日 : 2007年10月29日                      移管部局: 農学研究院家畜生産学分野  
移管資料: 受講ノート6点(川嶋昭二氏が1976年畜産学科に寄贈した資料)
- (5) 移管日 : 2008年11月18日                      移管部局: 総合博物館  
移管資料: 受講ノート8点、乗車賃金割引証明票(1902年)、旧蔵書など36点(川嶋昭二氏が2004年総合博物館に寄贈した資料)

### 2. 川嶋一郎について

川嶋一郎(1880～1976)は1880年岩手県二戸郡福岡町に生まれ、1900年私立中学郁文館を卒業、札幌農学校予修科へ入学した。1902年には同校本科に進学し、橋本左五郎教授のもとで畜産学を専攻、卒業論文「氷乳ノ状態ニ就テ」を提出し、1906年7月第23期生として卒業した。卒業後は、1906年11月農商務省に出仕し、設立間もない農商務省月寒種牛牧場において種牛の種畜事業・共進事業に従事した。1911年農商務省畜産課に異動後は綿羊飼育奨励事業にも携わった。1916～1922年千葉県庁勤務の後、郷里の福岡町にもどり、1926年二戸郡農会長、1930年二戸郡福岡町長など同地域における重職を歴任した。

川嶋一郎が札幌農学校予修科に入学した当時、札幌農学校の教員は佐藤昌介(第1期生)、宮部金吾(第2期生)、橋本左五郎(第8期生)等の農学校卒業生が中心となって専門教育を教授していた。また、本科4年級には独自の文化活動を展開していた有島武郎、森本厚吉、蠣崎知二郎、半澤洵等の第19期生がいた。川嶋一郎はこうした学的環境の中で1902年に本科に進学し、当時の講義・試験・実習のほか、遠友夜学校教師としての活動、足助素一、逢坂信吾、半澤洵などとの交友など、学生生活を日記にしたためた。

### 3. 川嶋一郎日記の翻刻について

本稿で翻刻したのは、川嶋一郎が札幌農学校在学中の日記4点、私立中学郁文館在学中

の日記1点である。日記5点の概要は下記のとおりである。

(1) 「鎌倉日記」

1899年4月2日～同月11日、私立中学郁文館在学中、脚気療養のため鎌倉円覚寺に滞留した際の日記。療養生活に行なった寺社仏閣への参拝、登山、海岸散策などを記録している。形態は17×25.5cm、表紙・裏表紙が藁半紙各1枚、本文が罫線和紙9枚、中扉（はしがき）が無地和紙1枚、こより綴じである。筆記は墨筆で行われている。なお、日記本文には「彌生日記」と題されているが、後日綴じた際の表紙には「鎌倉日記」と記載されている。

(2) 「明治卅五年夏 東北遊記」

1902年7月、札幌農学校予修科卒業後の夏期休暇中、同級生の大光寺毅夫と共に青森・秋田地方を旅行し、その後大光寺と別れて郷里の岩手県二戸郡福岡町に帰省するまでの紀行日記。十和田湖畔の山麓遭難のほか、青森、秋田、岩手県下の街並みや風土、小坂鉦山見学などを記録している。形態は懐中手帳(8.5×12.2×0.8cm)で、筆記は鉛筆である。数ページ毎に各地の水彩スケッチが描かれている。なお、同表題は、川嶋一郎の愛読雑誌『時代思潮』の中で、川嶋一郎が傾倒した姉崎嘲風(正治)が1904年3月発表した紀行文(「東北遊記」・「東北遊記余録」)にも使用されている。

(3) 「明治三十六年当用日記」

札幌農学校本科1年級～2年級在学中、1903年1月～7月、9月～12月の当用日記。校舎新築に伴い寄宿舎が解散となったことから、寄宿舎(1～7月)、下宿(9～12月)の両生活が記録されている。形態は市販日記(博文館製、15×22.5×2.5cm)で、筆記はペン筆である。巻末に金銭収支一覧、金銭出納録の記録がある。

(4) 「明治三十七年当用日記」

札幌農学校本科2年級～3年級在学中、1904年1月～7月、9月～12月の当用日記。下宿生活のほか、同級生等と一軒家を借りた自炊共同生活(10月～)を記録している。形態は市販日記(博文館製、13×19.5×2.8cm)で、筆記はペン筆である。巻末に金銭収支一覧、金銭出納録の記録がある。

(5) 「明治廿七年孟夏 北海紀行」・「恵庭登山略記」

札幌農学校本科2年級在学中、1904年7月小林直三郎牧場(旭川市)にて約1カ月乳牛飼養実習をした後、8月～9月夏期休暇を利用して、網走、根室、釧路、帯広、日高地方を旅行した際の紀行日記。巻末に、同年7月、河内完治、足助素一等とともに恵庭岳登山をした日記が記載されている。形態は懐中手帳(9.0×14.3×1.0cm)で、筆記は主に鉛筆である。数ページ毎に各地のスケッチ(鉛筆・墨筆)が描かれている。

なお、川嶋一郎は学生時代に上記5点の日記のほか、回想『吾が半生の思い出』(川嶋一郎著・川嶋昭二編、1992年私家版)によれば、「独立日記」(1901年札幌農学校予修科生徒の際の自炊生活日記)を当時記していたと述べている。しかし、「独立日記」の現存は

確認できていない。

本稿における翻刻では、札幌農学校本科生の学期中の日常生活を記した「当用日記」2点については、人物、書名等が多数記載されているため、巻末に注記を付した。また、「北海紀行」は、川嶋昭二氏が翻刻された『北海紀行 明治三十七年八月十日—九月十日』（私家版）と照らし合わせながら翻刻を行なった。紀行日記である「東北遊記」、「北海紀行」、「恵庭登山略記」のスケッチは口絵としてすべて掲載した。

また、翻刻作業と平行して、川嶋一郎関係資料調査は、(1) 入学（入学志願動機の特徴と入学経路の類型）、(2) 学業・修学旅行、(3) 読書（ロシア文学の移入経路と生徒の傾倒）、(4) 衣食住生活（寄宿舎・下宿・共同自炊、金銭簿、学校衛生）、(5) 動揺（辞職勧告事件・大学昇格問題・日露戦争）、(6) 遠友夜学校（指導体制、授業・試験・成績、諸会活動・行事）を中心に行なってきた。これらの調査結果は、2009年6月22日開催の第5回北海道大学史研究会「札幌農学校第23期生川嶋一郎の学生生活—学業・ロシア文学・遠友夜学校—」で一部報告し、川嶋昭二氏にコメントしていただく予定である。川嶋一郎関係資料目録を付した調査報告は『北海道大学大学文書館年報』第5号（2010年3月）で発表する予定である。

※本稿は、2008年度財団法人北海道大学クラーク記念財団新渡戸基金研究助成「20世紀初頭札幌農学校生徒の生活—第23期生川嶋一郎日記を中心として—」の成果である。

〔謝辞〕川嶋一郎関係資料調査にあたり、聴き取り調査、資料提供など、多くの方々に御協力をいただきました。川嶋昭二氏、川嶋貞子氏、菅原孝平氏、二戸歴史民俗資料館、田中館愛橘記念科学館、東北大学史料館の皆様、厚く御礼を申し上げます。

[参考文献]

- 川嶋一郎「偲草 後篇」(1958～66年、個人蔵)
- 川嶋一郎『七十七年の回顧』(私家版、1956年)
- 川嶋一郎著・川嶋昭二編『吾が半生の思い出』(私家版、1992年)
- 川嶋一郎著・川嶋昭二編『北海紀行 明治三十七年八月十日—九月十日』(私家版)
- 松澤弘陽「札幌農学校・トルストイ・日露戦争——学生の日記と回想——」(『北大法学論集』第39巻、第5・6併合号下巻、1989年10月、659～678頁)
- 札幌農学校簿書(北海道大学大学文書館蔵)
- 恵迪寮関係資料(北海道大学大学文書館蔵)
- 『北大百年史 通説』(北海道大学、1982年)
- 『北大百年史 札幌農学校(二)』(北海道大学、1981年)
- 『札幌農学校一覽』(札幌農学校)
- 『職員録 明治三十七年』(印刷局)
- 『学藝会雑誌』(札幌農学校学藝会)
- 『文武会会報』(札幌農学校文武会)
- 『札幌同窓会報告』(札幌同窓会)
- 『札幌同窓会誌』(札幌同窓会)
- 『農友』(同窓農友会、札幌農学校農芸科内)
- 『同窓農友会々報』(同窓農友会、札幌農学校農芸科内)
- 『札幌博物学会会報』(札幌博物学会)
- 『北海道教育雑誌』(北海道教育会)
- 『足助素一集』(足助たつ、1931年)
- 『有島武郎全集』別巻(筑摩書房、1988年)
- 『読売新聞』(国立国会図書館蔵ほか)
- 『北海旭新聞』(東京大学大学院法政学研究センター明治新聞雑誌文庫蔵)
- 『北海タイムス』(北海道大学附属図書館蔵)
- 『六合雑誌』(北海道大学附属図書館蔵)
- 『時代思潮』(国立国会図書館蔵)
- 『太陽』(北海道大学附属図書館、国立国会図書館蔵)
- 『学燈』(丸善発行、北海道大学附属図書館蔵)
- 『丸善百年史』上巻(1980年)
- 『北海道庁学事年報 明治三十六年度』(北海道庁内務部教育課、1904年11月)
- 『北海道実業家営業案内』(北海道図書出版合資会社、1904年)
- 『札幌商工人名録』(札幌商業会議所、1911年)
- 『札幌区統計一斑 大正元年』(札幌区役所、1913年)

- 『新聞と人名録にみる明治の札幌』（札幌市教育委員会文化資料室編、札幌市・札幌教育委員会発行、1985年）
- 『大日本分県地図併地名総覧』（統正社、1957年）
- 『日本博士録』第1巻（教育行政研究所版、日本図書センター、1985年）
- 『遠友夜学校一覧』（1921年）
- 『遠友夜学校』（さっぽろ文庫18、札幌市教育委員会文化資料室編、北海道新聞社発行、1981年）
- 『農学校物語』（さっぽろ文庫61、札幌市教育委員会文化資料室編、北海道新聞社発行、1992年）
- 『札幌独立キリスト教会百年の歩み』下巻（1983年）
- 『我が北大青年寄宿舍 青年寄宿舍107年の歴史』（青年寄宿舍閉舎記念事業実行委員会・閉舎記念誌編纂委員会、2005年）
- 『壮麗にて驚くこと沢山之あり候 川嶋明八が絵葉書で伝える100年前のヨーロッパ』（二戸市立二戸歴史民俗資料館編、二戸市教育委員会発行、2008年）
- 『明治文学全集42 徳富蘆花集』（1966年、筑摩書房）
- 『明治文学全集40 高山樗牛 齋藤野の人 姉崎嘲風 登張竹風集』（1970年、筑摩書房）
- 『日本キリスト教歴史大事典』（教文館、1988年）
- 『広辞苑』（第6版、岩波書店、2008年）

北海道大学大学文書館資料叢書 3  
〈翻刻〉札幌農学校第23期生川嶋一郎日記(1899~1904年)

---

2009年6月19日発行

翻刻・編集 山本美穂子

補訂 川嶋 昭二

発行 北海道大学大学文書館

〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目

電話 011-706-2395(FAX 兼)

印刷 岩橋印刷株式会社